

福岡市
和白遺跡群

発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集



福岡市教育委員会

発刊のことば

福岡市は急速な都市化の傾向を強め、住宅地の確保は急務とされていますが、今回の市住宅供給公社の和白ニュータウン計画もこのような社会的要請にもとづくものです。

造成地域内の埋蔵文化財の発掘調査は、公社の計画に先行して、文化課の昭和45年度事業の一つとして実施されました。

下和白、上和白を含めて百萬坪を越える大規模な造成事業の代價として、埋蔵文化財の記録保存ができたことを、現代に生きる私達は古代の人々の生活を知る手がかりとして深い喜びとするものです。

従来この地域における考古学的調査は皆無の状態で不明な点ばかりでしたが、今回の調査は一つの地域研究的な側面を持ち、それらの欠を補うものとして、多くの成果をあげる結果を得ることができました。

事前調査の段階から報告書の刊行にいたるまでには、調査指導員の方々から発掘作業の人々にいたるまで数多くの人々の御協力と文化財に対する深い御理解があったことに対し、深甚の敬意を表するものです。

上和白造成地の中では一部の古墳が保存されることになりました。これは公社、調査関係者、地元各位の協力と熱意に負うところが大きく、関係機関として存び深いものがあり、今後は環境の整備、顕彰に努める所存です。

本報告書が研究資料の一つとして御活用いただければ幸いです。合せて多くの人々の手にわたり、年々失われゆく埋蔵文化財に対する一層の御理解と御協力を願ってやみません。

昭和46年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 豊 島 延 治

例　　言

1. 本書は、福岡市住宅供給公社の下和白、上和白団地造成に先行し、福岡市教育委員会文化課の昭和45年度事業として実施した造成予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 文化課に和白遺跡調査班が組織され、現地調査は昭和45年4月から11月中旬まで行い、11月～3月を発掘資料の整理にあてた。
3. 本書は発掘資料の報告を目的とするもので、できる限り多くの事実報告を織り込むことを意図したが、その結果第5章として予定した和白周辺の遺跡・遺物篇を掲載できなかった。
4. 本文は調査の記録に重点を置いて編集したが、特に問題となる点については一章をもじけて考察篇とした。その他の遺構・遺物については本文中に小結としてまとめた。
5. 調査指導員には種々の教示を受けたが、その中で建築史、冶金の二報文を収録できた。坂田先生には鉄滓の化学的分析を依頼しているが、本報告書に間に合わせることはできなかった。合わせて、佐田正男氏（和銅記念館）には現地での教示を受け、鉄滓資料の分析を依頼した。北九州郷土史研究グループのタカラ研究者にも鉄滓の分析を依頼し、将来の研究資料とすることに努めた。
6. 製鉄造構の発掘調査には坂田先生の教示と穴沢氏の協力を受けた。
7. 埋蔵文化財分布調査担当の折尾学（文化財専門員）には終始協力を受けた。特に地形測量については高田一弘氏（測量士）の尽力によった。
8. 本文の執筆者の氏名は文末に明記した。団体調査員は、2月下旬から健康を害したため、担当部分の原稿は他の3名が代って執筆した。
9. 原稿執筆の段階で十分な討議を持つ時間がなく、用語の統一を欠いた点がある。
10. 插図の作成は柳田目次にしめしたとおり、原則として執筆者の分担になる。
11. 写真撮影は柳田があたり、一部を塩屋が補った。
12. 本書は塩屋・島津・西平・柳田の4人が編集にあたり、柳田が統括した。

目 次

第1章	序説	1
1	発掘調査にいたるまで	1
2	発掘調査の経過	2
2.1.1 第2章	下和白地区の調査	4
1	立地	4
2	発掘区の設定	4
3	I 区の調査	6
4	II 区の調査	7
5	III 区の調査	8
2.1.2 第3章	飛山古墳群の調査	12
(1)	古墳の占地と配列	12
(2)	浜山1号墳	12
(3)	飛山2号墳	21
(4)	小結	21
2.1.3 第4章	上和白地区の調査	24
1	立地	24
2	発掘区の設定	24
3	包含地の調査	26
(1)	第1号遺構（製鉄址）	27
(2)	第2号遺構（製鉄址）	28
(3)	第3号遺構	32
(4)	第4号遺構（住居址）	33
(5)	第5号遺構	37
(6)	第6号遺構	37
(7)	第7号遺構（土塙墓）	38
(8)	第8号遺構（土塙墓）	40
(9)	第9号遺構（土塙墓）	41
(10)	第10号遺構	42
(11)	第11号遺構（土塙墓）	42
(12)	第12号遺構	43
(13)	集石遺構	43
(14)	その他の遺物	44

45	小結	47
4	古墳群の調査	48
<i>7016</i>	(1) 高見 0 号墳	48
	(2) 高見 1 号墳	49
	(3) 高見 2 号墳	53
	(4) 高見 3 号墳	58
	(5) 高見 4 号墳	61
	(6) 高見 5 号墳	64
<i>7018</i>	(7) 狩の櫛古墳	70
<i>7015</i>	(8) 宮前 1 号墳	88
	(9) 宮前 2 号墳	94
	(10) 宮前 3 号墳	96
5	窯跡の調査	102
第 4 章	和白遺跡をめぐる諸問題	104
1	和白地域における純文化の一様相	104
2	飛山 1 号墳の構造と年代	105
3	上和白古墳群について	107
(1)	石室構造	107
(2)	古墳の年代と群の形成	108
4	製鉄遺構について	112
(1)	製鉄遺構とその年代	112
(2)	上和白第 4 号遺構（住居址）の年代	112
(3)	鉄生産の在り方	113
5	福岡平野の製鉄遺跡	114
6	上和白第 2 号遺構（製鉄址）、第 4 号遺構（住居址）の建築学的考察	119
(1)	住居址とピット群の関係	119
(2)	第 4 号遺構（住居址）	119
(3)	第 2 号遺構（製鉄址）	120
7	和白出土の青磁について	123
第 5 章	総括	124
1	調査の成果と今後の課題	124
2	遺跡の保存	129

挿図目次

第 1 図	下和白・上和白位置図	1
第 2 図	下和白発掘風景(I区・4月)	(柳田) 4
第 3 図	下和白地区地形図	(〃) 5
第 4 図	石塚実測図	(国平) 6
第 5 図	石匙実測図	(〃) 7
第 6 図	土壠地質状態	(柳田) 7
第 7 図	I区 b 地点構造断面	(柳田) 8
第 8 図	ポイント実測図	(国平) 9
第 9 図	I区出土遺物実測図	(塙尾) 10
第 10 図	飛山古墳群地形実測図	(高田・塙尾) 13
第 11 図	第 1 号墳地形実測図	(〃・〃) 13
第 12 図	第 1 号墳埴丘断面図	(塙尾) 14
第 13 図	第 1 号墳石室実測図	(〃) 断り込み
第 14 図	第 1 号墳墓道断面図	(〃) 15
第 15 図	遺物記載図	(〃) 16
第 16 図	須恵器実測図及び拓影	(〃) 17
第 17 図	鉄器実測図	(〃) 18
第 18 図	勾玉・ガラス玉、滑石製有孔円板実測図	(〃) 19
第 19 図	鍍金実測図	(〃) 21
第 20 図	第 2 号墳石室実測図	(〃) 22
第 21 図	上和白発掘風景(包含地C地点・7月)	(柳田) 24
第 22 図	上和白地区地形図	(〃) 25
第 23 図	上和白包含地付近地形図	(〃) 26
第 24 図	包含地C地点構造配置図	(高田・坂本・塙尾) 断り込み
第 25 図	第 1 号遺構(製鉄址) 実測図	(穴沢・柳田) 27
第 26 図	第 2 号遺構(製鉄址) 実測図	(穴沢・国平・柳田) 29
第 27 図	るっぽ状製錬炉出土状態	(柳田) 30
第 28 図	遺物実測図(砾石・石縞)	(国平・柳田) 30
第 29 図	遺物実測図(ふいご羽口)	(〃・〃) 31
第 30 図	須恵器実測図及び拓影	(〃・〃) 31
第 31 図	第 3 号遺構実測図	(安達・島津) 33
第 32 図	土師器実測図	(〃) 33
第 33 図	第 4 号遺構実測図	(〃) 34
第 34 図	かまと実測図	(〃) 35

第 35 図	出土遺物実測図	(")	36
第 36 図	第 5 号・第 6 号遺構実測図	(")	37
第 37 図	第 7 号遺構実測図	(沢・柳 田)	38
第 38 図	青磁碗実測図	(")	39
第 39 図	鉄刀尖実測図	(塩 尾)	40
第 40 図	第 8 号遺構実測図	(安 速・柳 田)	40
第 41 図	第 9 号遺構(土塁墓)全景	(" + ")	41
第 42 図	土師器皿実測図	(")	41
第 43 図	青白磁碗実測図	(")	42
第 44 図	第 11 号遺構実測図(土塁墓)	(安 速 + ")	42
第 45 図	石器尖実測図	(")	43
第 46 図	集石造構出土状態	(")	43
第 47 図	石器実測図	(")	44
第 48 図	青磁碗実測図	(")	45
第 49 図	石鏡実測図	(")	46
第 50 図	高見 0 号墳全景(北から)	(")	48
第 51 図	高見 1 号墳地形実測図	(高 田・鳥 洋)	49
第 52 図	高見 1 号墳閉塞石断面図	(")	50
第 53 図	高見 1 号墳石室上面図	(")	折込み
第 54 図	高見 1 号墳石室実測図	(")	折込み
第 55 図	須恵器尖実測図	(")	51
第 56 図	玄室内出土遺物実測図	(")	52
第 57 図	葬道部出土遺物実測図	(")	52
第 58 図	高見 2 号墳地形実測図	(高 四・國 平・塙 里)	53
第 59 図	高見 2 号墳土層図	(" ")	折込み
第 60 図	高見 2 号墳石室実測図	(" ")	折込み
第 61 図	脚合付子持蓋	(進 里)	55
第 62 図	須恵器実測図	(國 平・塙 里)	56
第 63 図	鉄器・銀鏡・玉類実測図	(" ")	57
第 64 図	青磁碗・土師器皿実測図	(" ")	57
第 65 図	高見 3 号墳地形実測図	(高 田・塙 里)	58
第 66 図	高見 3 号墳土層図	(")	58
第 67 図	高見 3 号墳石室実測図	(")	59
第 68 図	高見 3 号墳出土須恵器実測図	(")	60
第 69 図	金環実測図	(")	61
第 70 図	高見 4 号墳地形実測図	(高 田・柳 田)	61
第 71 図	高見 4 号墳土層図	(安 速 + ")	62
第 72 図	高見 4 号墳石室上面図	(")	折込み

第 73 図	高見 4 号墳石室実測図	(")	折込み
第 74 図	須恵器尖測図	(脚 田・塩 尾)	63
第 75 図	金環・奈玉実測図	(" ")	64
第 76 図	高見 5 号墳地形実測図	(高 田・国 平・塩 尾)	64
第 77 図	高見 5 号墳石室実測図	(" ")	折込み
第 78 図	高見 5 号墳土層図	(国 平・塩 尾)	65
第 79 図	須恵器実測図(1)	(" ")	66
第 80 図	須志器実測図(2)	(" ")	67
第 81 図	土師器実測図	(" ")	68
第 82 図	鉄器・金環・玉類実測図	(" ")	69
第 83 図	猿の塚古墳地形実測図	(高 日・島 津)	70
第 84 図	猿の塚古墳石室実測図	(")	折込み
第 85 図	猿の塚古墳墳丘断面図	(")	72
第 86 図	猿の塚古墳床面実測図	(")	73
第 87 図	猿の塚古墳玄室内遺物配置図	(")	74
第 88 図	狭道(前室)遺物出土状態実測図	(")	75
第 89 図	盛土部遺物出土状態	(")	75
第 90 図	馬具実測図	(")	76
第 91 図	鉄器・刀子実測図	(")	77
第 92 図	土師器実測図	(")	79
第 93 図	須恵器実測図(1)	(")	81
第 94 図	盛土部出上大宍実測図	(")	83
第 95 図	須志器尖測図(2)	(")	85
第 96 図	装身具実測図	(")	86
第 97 図	宮前 1 号墳・2 号墳地形実測図	(高 田・板 村・柳 田)	88
第 98 図	宮前 1 号墳石室実測図	(国 平・島 津・ ")	折込み
第 99 図	宮前 1 号墳石室上面図	(" " " ")	89
第 100 図	玄室内遺物配置図	(" " " ")	89
第 101 図	装身具出土状態	(" " " ")	90
第 102 図	平蓋尖測図	(")	90
第 103 図	須恵器・土師器尖測図	(塩 尾・柳 田)	91
第 104 図	鉄器実測図	(塩 尾)	92
第 105 図	金環・玉類実測図	(塩 尾・柳 田)	92
第 106 図	宮前 2 号墳石室近景	(柳 田)	94
第 107 図	狭道部遺物出土状態実測図	(急 津)	94
第 108 図	出土遺物実測図	(塩 尾)	95
第 109 図	宮前 3 号墳地形実測図	(松 村・ ")	96
第 110 図	宮前 3 号墳土層図	(安 達・ ")	97

第 111 図	宮前 3 号墳石室実測図	(〃)	折込み
第 112 図	出土土器実測図	(〃)	99
第 113 図	青磁碗実測図	(〃)	100
第 114 図	窯跡地形実測図	(高田・柳田)	102
第 115 図	窯跡実測図	(安達・〃)	103
第 116 図	高見 A 群全休面	(高田・塙屋)	110
第 117 図	福岡地方月別天候割合表	(三島・島津)	115
第 118 図	九州地方鉱床分布図(原田氏に依る)	(〃〃)	116
第 119 図	福岡平野製鉄遺跡分布図(第一次)	(〃〃)	折込み
第 120 図	砂鉄集め	(原田)	117
第 121 図	第 2 号遣拂(製鉄址)推定復元図	(土田)	121
第 122 図	和白周辺遺跡分布図	(柳田)	125

第 1 表	飛山 1 号墳出土ガラス三個差表	(塙屋)	20
第 2 表	飛山 1 号墳出土ガラス玉計測表	(〃)	折込み
第 3 表	第 2 号遣拂主要ピット計測表	(柳田)	28
第 4 表	第 4 号遣拂ピット計測表	(島津)	35
第 5 表	猿の原古墳出土ガラス玉計測表	(〃)	折込み
第 6 表	宮前 1 号墳出土ガラス玉計測表	(柳田)	93
第 7 表	上和白古墳群石室構造比較一覧表	(〃)	107
第 8 表	和名抄郡名対比表(第一次)	(三島)	114
第 9 表	平均風向表(福岡気象台による)	(島津)	115
第 10 表	鉄釜寸法表	(島津・三島)	116
第 11 表	福岡平野製鉄遺跡地名表(第一次)	(三島)	折込み
第 12 表	第 2 号遣拂柱間計測表	(柳田)	120

図版目次

表紙 下和白Ⅲ区出土ポイント

- 図版1 (1) 下和白全景 (4月造成工事前) 西から見る
(2) 下和白全景 (10月造成工事中) 西から
- 図版2 (1) 下和白Ⅲ区余景 (西から)
(2) 下和白Ⅲ区a地点ポイント出土状態
- 図版3 (1) 下和白Ⅲ区a地点跡生式土器出土状態
(2) 下和白Ⅲ区c地点近景 (西から)
- 図版4 (1) 飛山古墳群遺景 (東から) 遠望は志賀の島
(2) 飛山1号墳近景 (発掘前) (西から)
- 図版5 飛山1号墳の石室と遺物出土状態
- 図版6 飛山1号墳・2号墳出土上遺物
- 図版7 (1) 飛山1号墳出土上玉類
(2) 飛山1号墳出土滑石製模造品
- 図版8 (1) 飛山2号墳石室 (西から)
(2) 同上 (南から)
- 図版9 上和白遺跡群全景 (1) 上和白全景 (南から)
(2) 包含地全景 (南から)
(3) 包含地全景 (西から)
- 図版10 (1) 上和白包含地C地点発掘開始 (7・月東から)
(2) 包含地C地点発掘進行状態 (8月・東から)
- 図版11 包含地C地点全景 (9月・北から) から
(2) 第1号遺構全景 (北から)
- 図版12 第2号遺構 (製鉄址) 全景 (西から)
(2) 第3号遺構全景 (南から)
- 図版13 (1) 第2号遺構出土状態
(2) 第4号遺構 (住居址) 全景 (南から)
- 図版14 第1号・第2号遺構 (製鉄址) 出土鉄滓
- 図版15 第2号遺構 (製鉄址) 出土遺物 (①②球状鉄滓 ③～⑥ふいご羽口)
- 図版16 (1) 第4号遺構 (住居址) 全景 (南から)
(2) 第4号遺構 (住居址) まとまど (南から)
- 図版17 (1) 第4号遺構 (住居址) 出土遺物
(2) 第6号遺構全景 (東から)
- 図版18 (1) 第7号遺構 (土塙墓) 全景 (北から)
(2) 第7号遺構 (土塙墓) 遺物出土状態 (西から)
- 図版19 (1) 第7号遺構 (土塙墓) 出土灰光石磁瓶
(2) 包含地出土青磁瓶
- 図版20 青磁瓶 (①第10号遺構出土) ②高見2号墳出土 ③宮前3号墳出土
- 図版21 (1) 第11号遺構 (土塙墓) 全景 (北から)
(2) 包含地出土石器
- 図版22 (1) 高見古墳群遺景 (0～4号墳) 南東から
(2) 高見1号墳近景 (西から)
- 図版23 (1) 高見1号墳石室全景 (南から)
(2) 高見1号墳須恵器出土状態 (東船石部)
- 図版24 (1) 高見2号墳全景 (南から)
(2) 高見2号墳出土状態
- 図版25 (1) 高見3号墳石室残存状態 (北から)
(2) 高見3号墳封土断面 (南から)
- 図版26 (1) 高見4号墳石室全景 (北から)
(2) 高見5号墳波景 (西から)
- 図版27 (1) 高見5号墳石室全景 (東から)
(2) 高見5号墳墓道遺物出土状態
- 図版28 (1) 猿の巣古墳遺景 (西から)
(2) 同近景 (南北から)
- 図版29 (1) 猿の巣古墳土壇部遺物出土状態 (東から)
(2) 同出土状態部分写真
- 図版30 (1) 猿の巣古墳羨道 (前室) 遺物出土状態 (東から)
(2) 同東袖石下遺物出土状態 (北から)
- 図版31 猿の巣古墳玄室内遺物出土状態

- 図版32 (1) 宮前1号墳全景(11月古墳保存工事完成後) 南から (2) 宮前2号墳美道部遺物出土状地
(東から)
- 図版33 (1) 宮前3号墳全景(南から) (2) 同石室近景(南から)
- 図版34 石室の構造 (1) 奥壁
- 図版35 石室の構造 (2) 閉塞石と側壁
- 図版36 石室の構造 (3) 天井石・封土・磚床・閉塞石
- 図版37 石室の構造 (4) 猿の塚古墳
- 図版38 高見1号墳・2号墳出土須恵器
- 図版39 高見2号墳出土須恵器
- 図版40 高見3号墳・4号墳出土須恵器
- 図版41 高見5号墳出土須恵器
- 図版42 高見5号墳出土土器
- 図版43 宮前1号墳・2号墳出土土器
- 図版44 宮前3号墳出土須恵器
- 図版45 猿の塚古墳出土須恵器(1)
- 図版46 猿の塚古墳出土須恵器(2)
- 図版47 猿の塚古墳出土須恵器(3)
- 図版48 猿の塚古墳出土土師器
- 図版49 鉄器(1)(高見古墳群・宮前古墳群出土)
- 図版50 鉄器(2)(猿の塚古墳出土)
- 図版51 (1) 高見古墳群出土装身具 (2) 宮前1号墳出土装身具
- 図版52 猿の塚古墳出土装身具
- 図版53 (1) 空跡全景(東から) (2) 同横断面 (3) 同縦断面

第1章 序 説

1. 発掘調査にいたるまで

九州の中核都市人口84万の福岡市は、周辺町村の中で志賀島町を合併し、政令都市化と100万都市構想のもとに次第に大都市への変貌をめざしている。それに伴なって、市内の西部、南部地域の開発、団地造成等はここ数年急速に進展し、次第に東部地域に日が向かれてきた。特に住宅地の確保は急なものがある。

このような現状と要請のもとに、福岡市住宅供給公社は市域の最も東部にあたる下和白地区に1700戸、上和白地区に1200戸の分譲住宅の造成を計画し、44年秋事前審査の対象となつた。

同市文化課は、早速造成予定地域内の埋蔵文化財分布調査を実施し、数次にわたり追跡の確認に努めた。その結果、下和白地区には縄文～弥

生時代の遺物が表露された。上和白大神社前の台地には須恵器、土師器、鉄斧、青磁片等の遺物が散在しており、古墳時代から中世にかけての遺構の発見が予想された。大神社北側の斜面、字高見の丘陵斜面には數基の古墳が確認され、猿の塚古墳とあわせて群集墳の様相を呈していると考えられたが、雑木の繁る山の傾斜面が広がっており、古墳の全容をつかむためには、更に綿密な調査が必要であり、古墳は更に発見される可能性があった。この結果をもとに遺跡の性格と発掘調査の対象となる地区的面積を割出した。

公社は造成工事によって消失する埋蔵文化財の、記録保存の重要性に理解を示し、造成地域内の埋蔵文化財は造成工事に先立ち、45年度事業として同市文化課が発掘調査とその記録保存を実施するところとなった。造成面積と調査面積は次の通りである。

(柳田純孝)

造成面積	建築戸数	発掘面積
下 和 白 617,200m ²	1,700戸	500m ²
上 和 白 429,000m ²	1,200戸	4,500m ²



第1図 下和白・上和白位置図

2. 発掘調査の経過

(1) 調査の目的

現地造成を前提とした調査という立て前から、調査終了後全ての遺跡、遺物は破壊される。従って調査はできるかぎり、多くの遺跡、遺物の記録保存に努めることを目的とした。調査は4月に開始し、10月末迄とされ、6カ月間に包含地、古墳、窯跡を含めて5000m²を発掘調査するという条件の中で計画を立案した。

更に市東部地域における初めての調査であり、埋蔵文化財分布調査の45年度事業の範囲に含まれることから、和白周辺の遺跡、遺物の分布調査を並行して進め、発掘資料との比較の材料とすることに留意した。

(2) 調査団の組織

現地の発掘調査、その後の資料の整理報告には事前調査の段階から和白遺跡に関する調査員3名の他に、45年4月から46年3月までの1年間、和白遺跡群の調査員として4名があたることになった。

調査委託者 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当係 福岡市教育委員会文化課文化財係

調査者 三島 格（文化課）

柳田純孝（文化課・調査主任）

塙豊勝利（文化課）

鳥津義明（調査員 45年4月～46年3月）

国平健二（調査員 45年4月～46年3月）

板橋旺爾（調査員 45年4月～7月）

安達 新（調査員 45年6月～10月）

高田一弘（測量士・作業主任）

岩下拓二（文化課事務担当）

岸高恵子（現場事務補助 45年7月～10月）

調査団宿舎 下和白…砂川義男宅（4月～6月）

上和白…明覚寺（7月～11月）

この内2名は発掘調査の途中で離任し、その後の調査と資料の整理報告は残り4名で進める結果となった。調査期間中、駒沢大学生松村道博（8月）、穴沢義巧（10月）の参加協力を受けた。

また、包含地から各時代の遺物、遺構が発掘されることが予想されたため、人骨の発見、花粉分析、C₁₄資料の測定、地層及び石材の同定、さらに住居址の復元等々あらゆる状況に対応できる調査指導員の体制をとった。

調査指導員として、九大・考古学研究室（文学部）、建築学・水工土木工学・冶金学各研究室（工学部）、岩石学・放射化学・古生物学・生物学各研究室（理学部）、育種学（農学部）、解

創学（医学部）の他、中村真一（西日本工大・建築史）、井上洋子（精華女子大・建築史）、西田民雄・京子（佐賀大・地質・花粉分析）の各先生方の協力をいただいた。

特に考古学の河崎 敬・森 貞次郎、建築史の土田充義、冶金学の坂田武彦の諸先生には調査の指導と教示を受けた。

(3) 調査の経過

調査は工事期間の迫っていた下和白地区から始め、上和白包含地、古墳群・窯跡の調査と進めた。

4月13日	和白調査員会議（調査員着任）
4月14日～4月26日	下和白調査の準備期間
4月27日～6月20日	下和白の発掘調査 前半 I区～III区（包含地）の調査 後半 飛山古墳群の調査
6月21日～6月24日	上和白調査の準備期間
7月	下和白地区造成工事開始
6月25日～8月12日	上和白包含地の発掘調査（包含地の要調査区約6000m ² の内製鉄遺構、住居址、土塙墓等約2000m ² を全面発掘）
8月17日～10月31日	上和白古墳群・窯跡の調査 前半 猿の塚古墳、宮前3号墳、高見5号墳、窯跡の調査 後半 高見1号～4号墳、宮前1号・2号墳の調査
11月1日～11月14日	下和白、上和白調査区（包含地・古墳群）の補足調査
11月14日	現地での発掘調査を終了
11月～3月	発掘資料の整理、報告書の準備
3月	上和白地区造成工事開始
3月	「和白遺跡群」報告書刊行

調査経過を詳述するスペースを取れなかったので、本文中に補足した。なお、調査関係者は悉くにあげた。

現地の宿舎、作業員の斡旋には地元和白公民館・町内会・高田一弘氏の配慮に負うところが多い。作業員として地元和白地区のはか三苦、奈多、雁の巣、柏原郡新宮町、古賀町の方々、九州大、福岡大、福岡教育大、九大、西南大の学生諸氏が参加した。とりわけ地元和白地区住民の全面的な協力が調査を円滑に進める大きな力となった。

（柳田）

第2章 下和白地区の調査

1. 立地

宝満山、三郡山から犬鳴山へ南北に連なる三郡山地は福岡平野の東を限る山地であるが、その支脈に属する立花山（標高367m）からは、いくつかの低丘陵が発達している。その一つで北西に延びる標高60m前後の丘陵は三苦で玄界灘に連し、南の福岡市と北の柏原郡を分ける境界を形成している。丘陵の南側が和白で、和白枚区には博多湾に面して白浜、上和白、中和白、下和白、塩浜、三苦、奈多、雁の巣と半円状に部落が点在する。

下和白は福岡市の最も東部地域にあたる地区で、東は柏原郡新宮町に隣接し、上和白地区とは国道3号線で区別される。北は三苦から奈多へ砂嘴状に海岸砂丘が連なり、志賀島へ至るネックの位置を占め、玄海灘の外洋に近い。西は博多湾に面する内湾状の入江を呈し、塩浜では近世まで塩田がいとなまれており、近年まで製塩作業がつけられていたと云う。相ノ浦池西側水田面の試掘では-20cmで砂層に達した。

塩浜と新宮町下府を結ぶ低丘陵が下和白で、水田面が少なく原野のまま残されている。この一帯には第三紀層の露頭がみられ、三つの池の周辺には珪化木が多く、石炭紀の所産とされる。丘陵面には岩盤が露出し、飛山の丘陵頂部に三基の飛山古墳群がみられるのみで、他は谷あいの池の周辺部に遺物が散見できる状態であった。
（柳田）

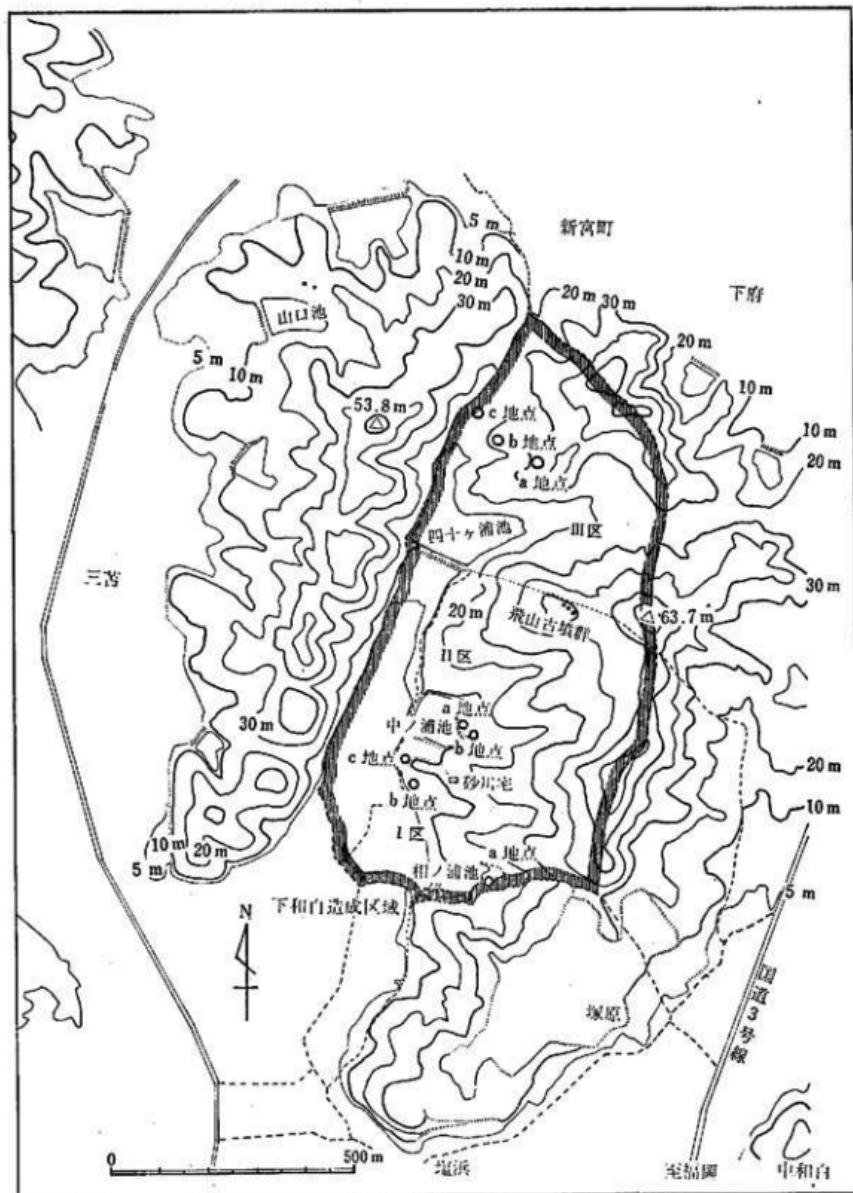
2. 発掘区の設定

造成区域は60万haに及ぶが、標高57mの丘陵上に立地する飛山古墳群（3基）を除けば、遺跡は谷あいの包含地にあり、しかも池の周辺部に限定される。造成地域内には南から相ノ浦池、中ノ浦池、四十ヶ浦池の三つの池があり、池の周辺を一つの単位として南からI・II・III区とし、飛山古墳群と合わせて4地点を発掘地区とした。

I～III区ではトレンチを設定し、遺物の包含状態を把握することに努め、遺物、遺構が確認された地点を更に拡張した。I区では石器が表採された程度で、II区では



第2図 下和白発掘風景（I区・4月）



第3図 下和白地区地形図

石器の出土をみたが、遺物の包含状態をつかむまでに至らなかった。Ⅲ区は弥生式土器の集中する地点であるが、遺構の残存状態は良好でない。飛山古墳群は古い様相を残す古墳として注目される。

レンゲが赤い絨毯のように水田をうめた4月下旬から5月中旬までの前半を、I～Ⅲ区の調査期間とした。その後6月中旬迄の後半は、飛山古墳群の調査にあて、夏も真近かな6月中旬までの約40日を下和白調査期間とした。
(羽田)

3. I区の調査

I区は造成地の南側にあたり、相ノ浦池から中ノ浦池の南岸におよぶ範囲である。東側には低丘陵が南北に連なり、相ノ浦池、中ノ浦池では丘陵から西へ延びる斜面が小さな谷を形成する。相ノ浦池は谷の出口を東西に築堤し、灌漑用水とし、中ノ浦池は西と南に堤を築いている。相ノ浦池の南は丘陵の先端部で、塩浜の部落がある。

相ノ浦池と中ノ浦池の間に小さな尾根が東から西へ延びて二つの池を南北に分ける。丘陵先端部は台地状を呈し、畑地として利用されていた。この畑の耕作土から黒曜石の石器一点が表採されたので、この畠地を含む平坦地をa地点とし、c地点の南側にのびる丘陵の先端も要発掘調査区とし、b地点とした。

(1) a 地点

相ノ浦池の東岸一帯には石屑が多く、池に面した谷頭の平坦面に遺物、遺構の出土することを想定し、谷に沿って2×2mを1単位とするトレンチを東西に設定し、西から1～20区とし全長40mを発掘区とした。中央からやや池に寄った7区から南北に直交する全長10mのトレンチを設け、土層の堆積状態に注意したが、地表から10～30cmで地山に達し、遺物、遺構の発見はみられなかった。b地点南北のトレンチでは谷の中央が深さ50cmで地山に達し、両端は次第に浅くなり地表にいたる。黄褐色の堆積土は自然地形に沿って整合な層をなすが、遺物を含まないことがわかった。

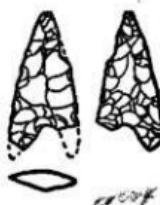
(2) b 地点

丘陵の等高線に沿って南北のトレンチを設定した。南側は以前に畑地として耕作されており、作業は北側に重点をおいた。トレンチの中央に径20cmのピットが検出され、東側へ拡張した結果、不整形なピットが数個認められた程度で、遺構としてまとまるものではなかった。

(3) c 地点

畠地から尾根を結ぶ東西線とb地点に直交するトレンチを設定して上層の堆積に注意したが、地表下10cmで地山に達し、堆積土はみられなかった。表採された石器（黒曜石）は耕作土で混乱された状態である。第4図 石器（実大）だったが、えぐりの深い二等辺三角形をなしている。（第4図）

I区a～c地点では、第三紀の地山（花崗岩バイラン土）が露頭をなし、堆積土はほとんど認められないという知見を得る結果となった。
(板橋正爾：柳田)



4. II区の調査

中ノ浦池の南側から四十ヶ浦池の南までをII区とした。造成区域の中央部にあたる。II区は中ノ浦池の東側にわずかな平坦面を残すのみで、他は丘陵地帯である。

事前調査の際、中ノ浦池の東北岸には多数の黒曜石片がみられた。北側の斜面にも須恵器の小片などがあり、遺物を包含する地区であることが予想された。本調査では中ノ浦池東側に2m巾のトレンチを南北に設定して発掘区とし、a地点と呼んだ。その東側をb地点とした。

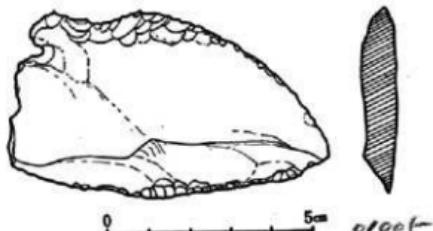
(1) a地点

全長30mのトレンチを南から1~15区とした。I区では地表下20cmで地山に達し、黄褐色土はうすく、北側へ厚く堆積する傾向にあった。5区では地表下20cmに黄褐色の堆積土層がみられた。トレンチの東側断面を清掃中に石器を認めた。分布調査による表探資料を除けば、本調査最初の出土遺物となつた。

石匙 第II層（黄褐色土）出土。7.8×4.6cm、厚さ0.8cmの横型石匙である。刃部は両面から剥離を加え、一辺に偏して小さなつまみを作っている。石匙としては大形なものであるが、簡単な刃部の調整度やつまみの作りからあまり定形化したものとはいえないが、縄文時代によくみられるものである。

(2) b地点

a地点から東へ20mの丘陵先端部は自然地形と異なり、小円



第5図 石匙実測図



第6図 トレンチ土層堆積状態

墳状の形をなし、崖面には堆積土の層序が認められた。これをb地点とし、 $\frac{1}{4}$ カットした結果地山の上に堆積土がうすく層をなして自然堆積ではないと考えられた。しかし、土層中には全く遺物がなく、どのような構造となるか不明のままであるが、後述する高見0号墳同様事実として報告することにした。

II区では石器一点を得たのみであるが、縄文時代の遺物とみられ、何らかの生活のあり方を想定しなければならないであろう。

（板橋・島津義昭：柳田）

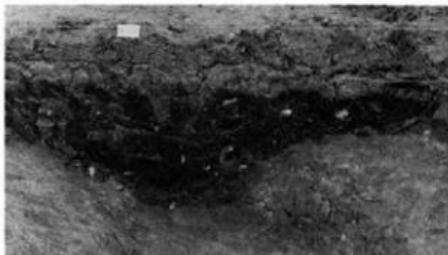
5. III区の調査

(1) a 地点

四十ヶ浦池北岸より北東に位置する段々畑の最も高い地点で、地形的には丘陵谷間にあたる。標高は35m～37mの等高線内に含まれる。調査は自然地形の傾斜に沿って南西から北東へ、すなわち畑中央の先端から奥へ巾2m、長さ38mの第1トレンチを設定し、 2×2 mを1区とし、1～19区の発掘区を設けた。さらに5区より巾2m、長さ10mの第2トレンチを直交するように設定し発掘作業を進めた。第1トレンチの土層は、厚さ20～30cmの表土下に有機質を含む黒褐色土層があり第III層が地山となる。第II層の黒褐色土層は自然傾斜に従って厚くなり、上方は表土の直下がすぐ地山となる。遺物は第II層の黒褐色土層に包含され、弥生式土器片が多量の礫石と共に認められる。ただ、8区と9区の間の畔を除去する際、地表下30cmの黒褐色土層上部にポイント（尖頭器）が出土し、第II層は弥生式時代遺物単純の包含層でないことが確認された。弥生式土器を最も多く含む調査区は5区であり、甕、壺などの破片が集中する。そこで第2トレンチの状態が注目されたが、第II層は第1トレンチに近い部分のみに認められ、両側は地山が表土の直下となる。また、第2トレンチをさらに南東へ延長し、一段高い畑地の試掘を行なったが、包含層や遺構を検出することはできなかった。

(2) b 地点

a 地点から西方に降る丘陵の段々畑が b 地点であり、トレンチは段々畑の最下段から巾2m、長さ48mにわたって、畑を縱断するように設定した。 2×2 mを1区とし、合計24区を調査区となして発掘を行なった。この地点は耕作のため削平されており、15～20cm



第7図 第III区 b 地点溝状遺構

137

の表土下はすぐ地山となり、遺物の包含は全くない。ただ、15区から20区にかけての調査区には、表土直下の地山に掘り込みが観察された。トレンチを拡張した結果、長さ10m、幅約175cmの断面がV字状を呈する遺構が検出され、北東から南西へ伸びている。深さは最深部で約70cmを測り、溝の両端は舟底状にせり上がる。内部には黒色土層が層位を細分できない状態で堆積しており、弥生式土器片を包含する。周囲の地山に竪穴や柱穴等の掘り込みが検出されないことから、性格については不明である。

(3) c 地点

b 地点北側の一段低い畑地で標高は21m～22m、地形は丘陵の谷間にあたる。調査は 2×2 mのトレンチを西から東へ、すなわち畑の中央付近を縱断するように設定して行なった。トレンチの土層は A 地点と似かよっており、自然傾斜に沿って上方から下方へ厚く黒褐色土が堆積する。

全体に礫石を多く含み、弥生式土器片も包含する。下部になるにつれ漏水が著しい。このトレンチに直交して、つまり畑地を横断するトレントを新たに設定したが、中央部を離れるに従い黒褐色土層は消滅する。これらの事実から、弥生式土器を含む黒褐色土層は、ある時期に上方から押し流されて谷間に堆積したものと思われる。

(4) 出土遺物

a. ポイント (第8図)

a 地点黒褐色土層上面出土。サスカイト製で全長11.8cm、最大巾1.6cmを計る充形品である。断面は三角形を呈し、主要断面は平凹、他の二面も両側から粗い網目を施して整形する。両端ともにわずかに一方へ偏し、長軸よりやや外弯する。旧石器時代後期に見られるポイントとは、三種を形成する形態的な特徴によって区別さるべきと考えるが、年代のへだたりはないと思われる。

b. 石斧 (第9図30)

c 地点黒褐色土層出土。石材は蛇紋岩で表面は黄褐色を呈す。刃部付近のみの破損品であるが、表面はよく研磨され、刃部先端に使用痕が認められる。弥生時代の大形始刃石斧と考えられる。

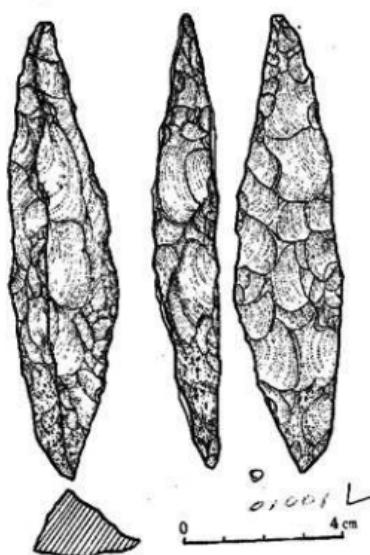
c. 石鎌 (第9図31)

c 地点黒褐色土層出土。砂岩製で長さ7.6cm、最大巾5.8cm、一方がやや広くなる。断面は厚さ1.8cmで扁平である。両端ともに刃面からの打ち欠きが認められ、石鎌であることが知られる。

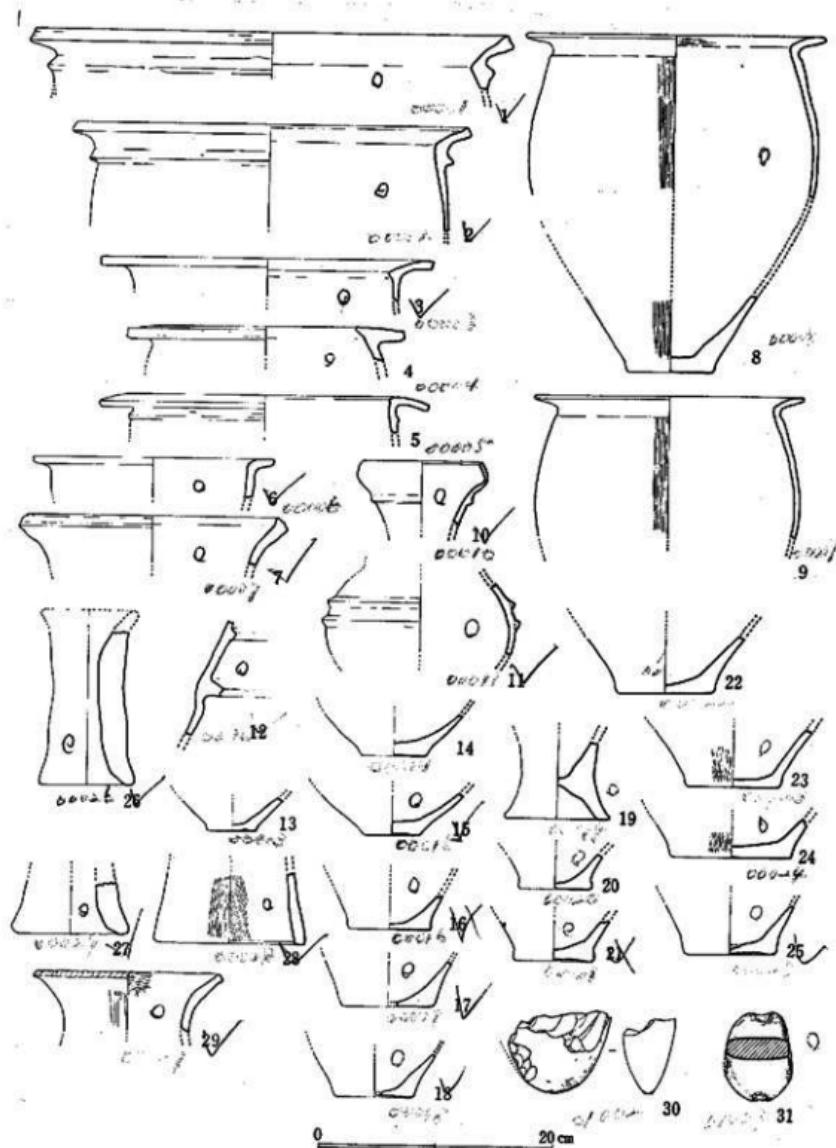
d. 弥生式土器 (第9図1~29)

a 地点(8~9、11、13、15、22、27)、b 地点(12、16~18)、c 地点(1~7、10、14、19~26、28~29)の黒褐色土層に包含されているものであるが、紙数の制限上、一括して記述する。

器形は窓が多数を占め、壺、器合が少量混じる。器表面は堅して磨滅が著しく、胎土に砂粒を多く含み旋成も粗であるものが多い。窓について見ると、口縁部がくの字形から逆L字形を呈すものとT字形を呈するものがある。1~2はくの字形口縁直下に三角突唇をめぐらし、口縁上端がやや肥厚し古い形態的特徴をもつ。3~9は同型式であり、やや外弯気味の口縁をもち、口縁直下から全面に縦方向の刷毛目を施す。10は口縁上端に平坦面を有しながら内に張り出しT字形に近い。外面は丹塗りを施しており、やや下降する時期のものである。窓の底部は19の如く極端に上げ底を呈するものがあるが、平底もしくはや上げ底気味になるものが多い(20~25)。窓は



第8図 ポイント実測図



第9圖 III區出土遺物實測圖

口縁部の破片に乏しいが、10の如く袋状口縁をもつものがあり、底部と腹部の破片は同様の型が多いことを示す。12は大形の壺の調部であろう。器合は器肉が厚く脚部中位がすぼまるもの（26～27）と、器内もうすぐ口縁に刻目を施し、内外面に粗い刷毛目を有するもの（29）の2種がある。後者は胎土、焼成とともに堅敏で弥生時代終末期に見られるものである。

以上のことから、Ⅲ区出土の弥生式土器は、中期初頭から後期まで認められるが、量的に中期前半から中期のものが多い点が指摘されよう。

（5）小結

下和白地区の調査で得られた結果は極めて貧しいといわなければならない。Ⅲ区a地点出土のポイント（尖頭器）は単独出土例で、同様な遺物の出土を予想させる可能性に乏しかった。Ⅰ区c地点から表採された石鉋、Ⅱ区a地点出土の石匙も他に共伴する遺物をみることができず、いずれも流れ込みの状態をしめしており、遺物の広がりを把握することができなかつたのは残念であった。

しかしながら、福岡周辺地域における旧石器時代の出土例はいまだ多いとはいはず、縄文時代の石器と考えられるものも資料の増加が期待されているときであり、これらの時代を考える材料がみられたことを幸いとする他はない。

上和白地区包含地には後述するとおり縄文時代の石器の出土がみられ、下和白地区の石器と合わせて縄文時代の地域研究の一つとして考察編に収めることにした。現状においては、不備な点が多いが、今後にそなえるためにあえて一項をもうけたものである。

一方弥生時代についてみると、調査の結果から得られた事実は、本調査区の丘陵上に、弥生時代中期の初めには、生活の場があったことを示している。しかしながら、その在り方や消長を具体的に実証する遺構や遺物は確認されず、発掘された結果は非常に乏しい。

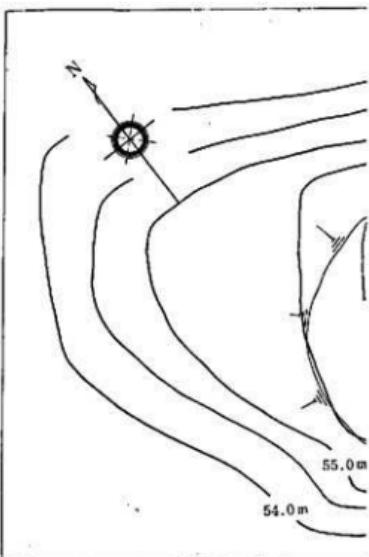
弥生時代社会発展の土台となるのが水稻農業であり、前期末の時期にはすでに沖積低地から派生する集落が山地へ拡大し、谷水田の開発が行われたことが指摘されている。けれども本調査区周囲の丘陵周辺は水田を經營できる地形的条件ではなく、四十ヶ浦池より前方に伸びる水田地帯も、近平まで塩田であったと云われる。したがって、Ⅲ区出土弥生式土器に示される時代の生活基盤を、沖積平野より派生した農業集落と同様に考えることは困難である。その点、C地点より出土した石鉋はきわめて示唆的であるが、下和白の北に位置する奈多から鷹の巣一帯の砂丘に認められる弥生式中～後期の包含層の意味を含めて、今後この地域の弥生時代社会の具体的な様相が解明される必要があろう。

（板橋・国平健三・塙屋勝利）

6. 飛山古墳群の調査

(1) 古墳の占地と配列 (第10図)

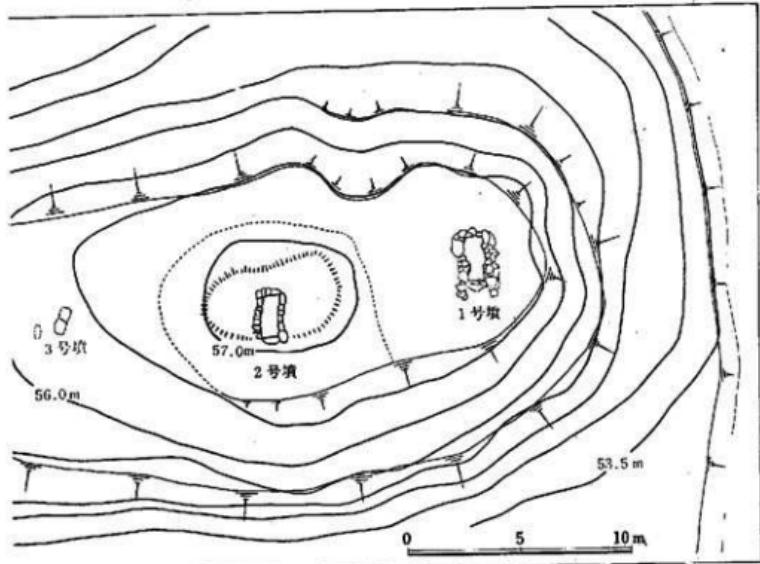
飛山古墳群は福岡市大字下和白字飛山に在り、四十ヶ浦東方から南西へ伸びる尾根の一頂部に位置している。この地点は通称一本松と呼ばれており、ここに古墳が存在することは、土地の人々の間では既知の事実であった。飛山頂部は、東西30m、南北10mの範囲でやや平坦面をつくっており、最高位においては、標高57.2mを示す。ここに立てば、西方に博多湾と玄海灘を隔てるように横たわる海の中道を眼下に収め、はるか、志賀島、相ノ島、宗像大島を臨み、玄海の大平原を見渡すことができる。さらに東方には立花山の延長を仰ぎ、北に眼を転じれば、新宮町から古賀町一帯に開ける田園地帯を俯瞰し、はるかに宗像の地までが眺望される。古墳はこの頂部に築かれており、東側傾斜面に近く第1号墳、その西方9mの地点に第2号墳があり、さらにその西方10mの地点には、第3号墳が存在したと思われる。これら3基の古墳は、狭い尾根頂部に一定の間隔を有しながら並列して築かれていることから、相互の関係を明らかにする必要があったが、第3号墳は高正塔建設によってすでに壊滅しており、石室を構築していた石材の残存を認めただけで、古墳の構造や遺物については不明であった。以下、第1号墳、第2号墳について詳述しよう。



(2) 飛山1号墳 (第11図)

本墳は飛山頂部東端の傾斜面上に築かれている。発掘着手以前の状況は、雑木の間に小規模な墳丘が認められたが、墳頂部は破壊されていた。天井石やその他の石材が陥没した状態にあり、石室内も相当な破壊を受けていることが予想された。

調査はまず、周囲の雑木の伐採、燒却に始まり、焼いて天井石の除去と石室プランの確認を行なった。この過程で須恵器破片2点と土師器細片が石室南側より捲乱された状態で検出され、副葬品に対する期待が弱められた。この作業の結果、石室の規模と主軸の方向が得られたので、焼いて墓底の露出と墳丘の断面観察のため、長さ450cm、幅100cmのAトレンチを主軸と直交して西から東へ、また長さ400cm、幅70cmのBトレンチを石室奥壁に接して南から北へ設定し発掘作業を進めた。同時に石室内部の清掃、遺物の検出を行ない、最終的には、石室構築石材すべてを



001
002

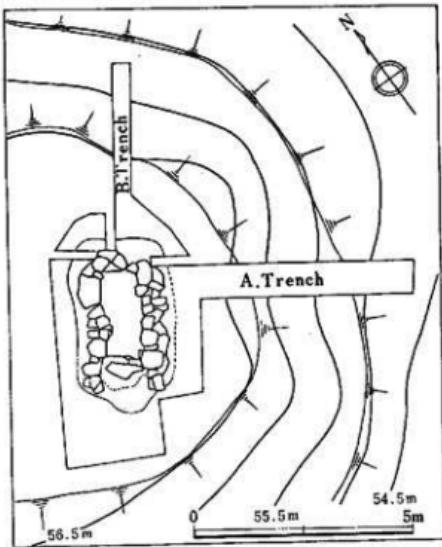
第10図 飛山古墳群地形実測図

除去して本墳の発掘調査を完了した。

a. 墓丘および墓塗

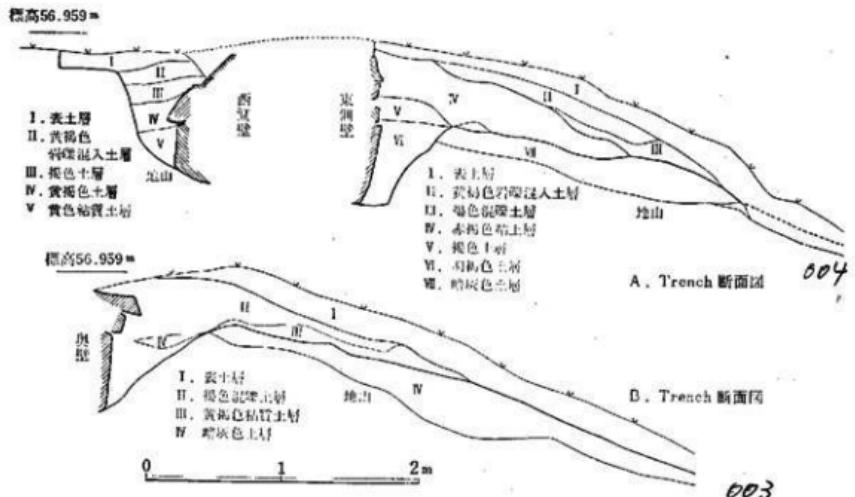
(第12図)

まずA.Trench北壁の上層によって墳丘の構造をみよう。表土の状態は、側壁付近は厚さ7cmであるが、下方へ行くにつれ厚くなり表土の流出がうかがえる。地山は黄褐色を呈する粘質土で、下部は次第に岩盤質となる。地山の上面には、有機質を含む暗灰色の土壌が厚さ20cmで覆ってお



001

第11図 第1号墳地形実測図



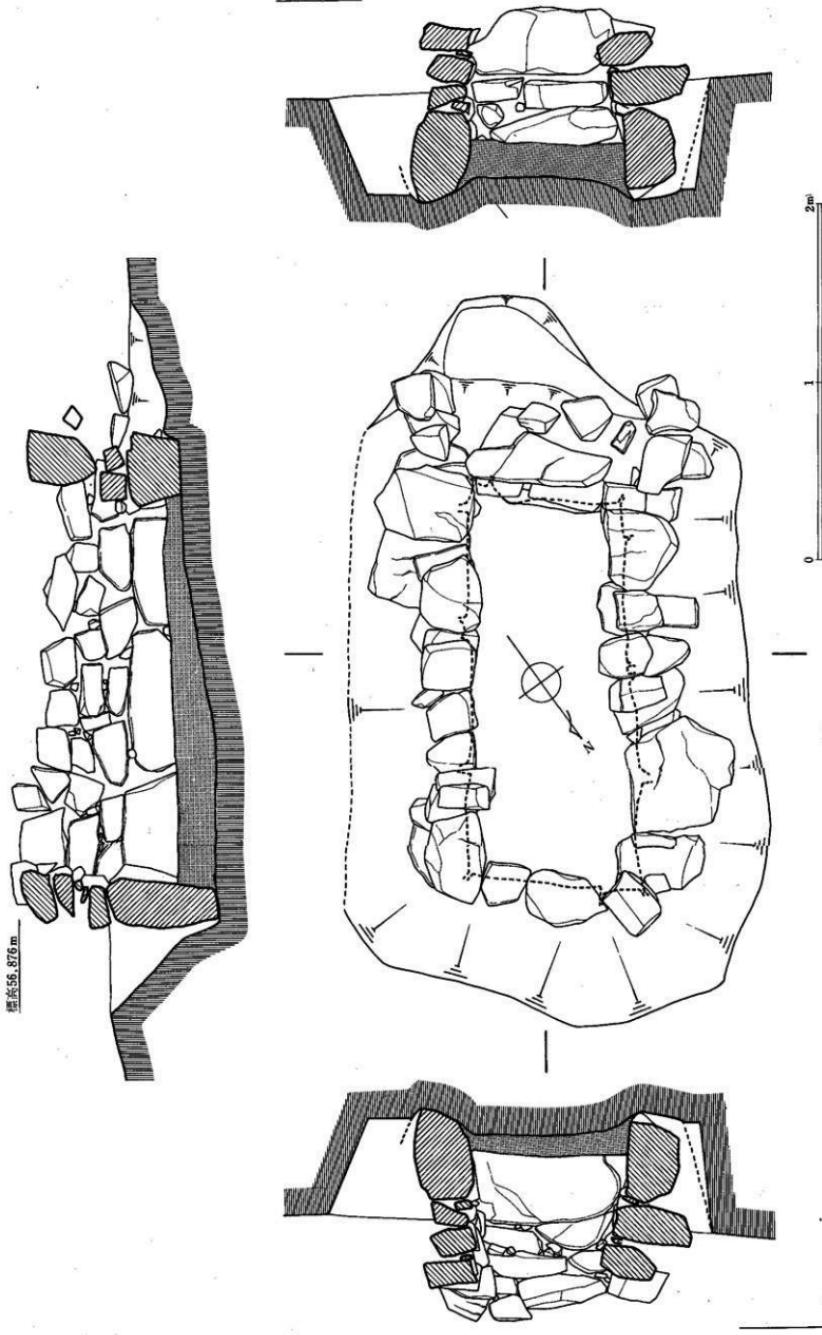
第 12 図 第 1 号 墓 墓 丘 所 面 図

り、石室構築のため掘り込まれた墓塗の断面線は、その暗灰色土と地山を切り込んだ状態で観察される。従ってこのことから、古墳築造時の墳表面は、暗灰色土層の上面であったと考えられる。側壁に近い位置の表土層の下は、赤褐色粘質土、褐色粘質土、明褐色粘質土の順に堆積しているが、いずれも土壤の質において地山の土と同じであり、それが石室主納より 250cm の地点で暗灰色土と接することから、本来の墳丘把部をその位置と考えたい。なお、表土層と赤褐色粘質土層の間の層は、おそらく培丘の流失によるものであろう。

次に B トレンチを見よう。B トレンチも A トレンチとほぼ同様の事実が観察される。すなわち、黄褐色粘質土の地山には、有機質を含む暗灰色土が堆積しており、奥壁底石より 70cm の地点から墓塗の断面線を認めることができる。墓塗と漂石との間の土層は褐色土層一であり、A トレンチのように三層に区分できない。ただ、墓塗より北側の暗灰色土の上面には、黄褐色粘質土の間層があり、奥壁底石より 260cm の地点で暗灰色土と接しており、そこが墳丘把部であろうと考えられる。なお、墳丘の褐色土には、珪化木の小礫が含まれており、それが、地山に多量埋められることから、石室構築のため掘り込まれた墓塗の排水土として使用されたことが考えられる。この両トレンチの断面観察によって、本墳の盛土は石室を中心とする北側および東側をめぐって、かなり良好な状態をとどめていることを指摘できるが、西側は顕著でなく、南側の断面部より外部は表面に露出していたものと考えられる。

次に墓塗をみると、平面形は長さ 410cm、幅 240cm の不整長方形を呈し、深さは略 50cm 前後を計る。横断面形は逆台形を呈し北側の切り込みは浅いが、南側は地山の傾斜に従い明瞭な掘り込みをつくらない。ここで注意しなければならないことは石室閉塞部付近の状態で、この部分のみ墓

標高 56,867 m



第13図 線1号坑石全素描圖
005 006

塙はいく分張り出してかつ浅い。その横断面は浅皿状を呈する。この状態は次に述べる石室構造と関係するものであり、石室とは無関係に墓塙が掘られたものではないことを示している。

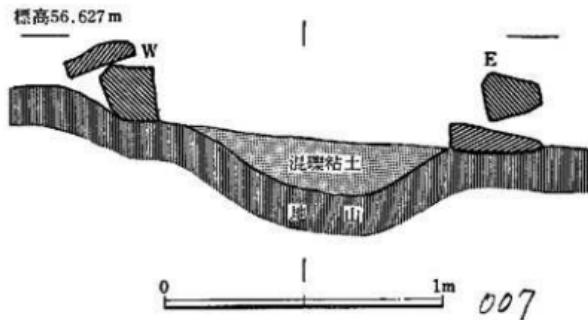
b. 石室の構造(第13図)

主軸を N $27^{\circ}E$ にとり南西に開口する小形の石室である。石室平面は不整長方形を呈し、西側壁長220cm、東側壁長215cmを計る。幅は奥壁部において100cm、閉塞部では80cmと狭くなっている。周縁の石組みの状態は、最下段はいずれも腰石として大き目の石を置いている。そのうちでも奥壁の腰石はひとまわり大きく、上面は他より10cm程度高くなっている。すでに述べたように、墓塙床面は南から北へ、すなわち閉塞部より奥壁へ向かって傾斜しているが、両側壁腰石上面のレベルはほぼ水平となるように石の大きさを配慮している。2段目には腰石より小形の石を平積みし、順次小形の石を持ち送り気味に積み上げている。この石積みは面(つら)より奥(ひかえ)を大きく取っており、持ち送りに耐えうるような力のバランスが考慮に入れられている。また、石組みの隙間に、小砾やくさび状の石をめ込み、石積みを強固にしている。現存する石室の高さは、最高位の東側壁が奥壁に接する部分において95cmを計るが、これは後に述べる閉塞石上面の高さから考えて、当初の石室の高さと略一致するものであろう。

石室の床は小角砾を多量に混じえた黄褐色の粘土を敷いて構成されている。すなわち、奥壁腰石底部より床面までの厚さは20cm、仕切石の基部より床面までは10cmの厚さで敷かれている。従って、床面全体に礫が敷きつめられた状態ではなく、黄褐色粘土の間に礫が混じるもので、礫そのものも面を揃えてはいない。また屍床や枕石などの施設はない。

この石室構造で最も特徴づけられるのは、閉塞部分およびその外郭の構造である。閉塞部最下段は長さ80cm、幅40cm、厚さ30cmの大石と小形の石を並置して仕切石となし、その上に仕切石より小形の石を2枚並べて置き、さらにその上に大石を立てて閉塞石となしている。閉塞部より外郭は、両側壁の延長上に石組み

が存在するが、これは義道としての機能が意識されていると考えられる。しかしながら、この石組みは墓塙掘り込み部に接して置かれ、しかも石室側壁の床面よりはるかに高く、構造的に



第14図

第1号墳東道断面図

発展した形態ではないと思われる。

さて、仕切石は両側壁先端に接するように置かれており、床面から仕切石上面まで 20 cm である。袖石は設けられていない。この仕切石上面のレベルは、羨道部における墓塙上面のレベルと一致し、仕切石と墓塙の間には石室の床と同様な混練粘土が充満され、仕切石上面と墓塙上面の地山を結ぶレベルで塗地されていた。従って、追体搬入の後、仕切石の上にやや扁平な石を平積みし、さらに大石を立てて閉塞したものと考えられる。

本石室の構造は、福岡市持田ヶ浦古墳群、同今宿古墳群、筑紫郡太宰府町成原形遺跡、朝倉郡夜須町上の宿古墳群などの中に認められる小形堅穴式石室の形態を基本的には踏襲しているが、閉塞部分は追葬を意識した横口羽室であり、いわゆる堅穴系横口式石室と称されるものである。

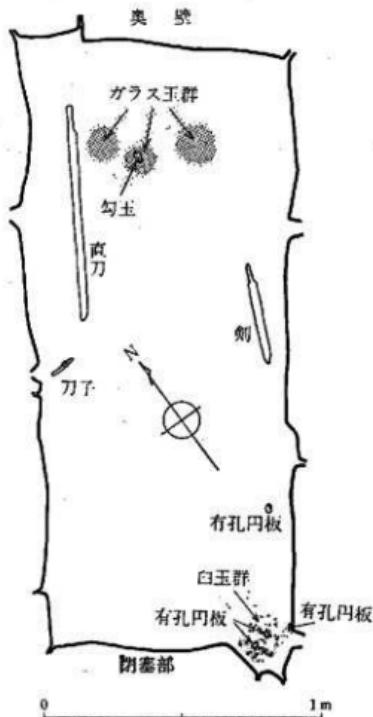
以上、本石室の構造について述べたが、他に注意されることは、奥壁内面に赤色顔料（ベンガラ）塗布の痕跡が認められたことである。両側壁には全く認められなかったが、奥壁全面に部分的な残存を観察できた。

c. 遺物出土状況（第15図）

当初の予想に反して床面は比較的良好な状態で保存されており、床面に達する以前に出土したガラス玉数個と滑石製有孔円板および白玉20数個の他に直刀、剣、刀子、勾玉、ガラス玉、滑石製有孔円板、同白玉などの副葬品を豊富に検出することができた。

直刀は鉋を南に向かって、刃を内側にして西側壁に近接した位置に側喰と並行して置かれていた。剣は東側壁寄りに鉋を北に向かって出土した。これらはいずれも床面と密着して出土しており原位置にあると思われるが、刀子は鉋を西に向かって、西側壁寄り、石室ほぼ中央の位置に出土し、原位置を離れた状態であると考えられた。

玉類は奥壁寄りの主軸を中心とする位置に集中して出土した。その状態は、床面上というよりは、むしろ粘土の中に混入しており、勾玉1個をほぼ中心として、50cm×30cmの梢円状の広がりをもって出土した。その範囲においても、特に集中して出土する部分があり、3つのブロックを認めることができる。勾玉に近い位置のものと西側壁に近いブロックのものは紫紺色を呈する丸玉が多く、東側壁に近いブロックのも



第15図 遺物配置図

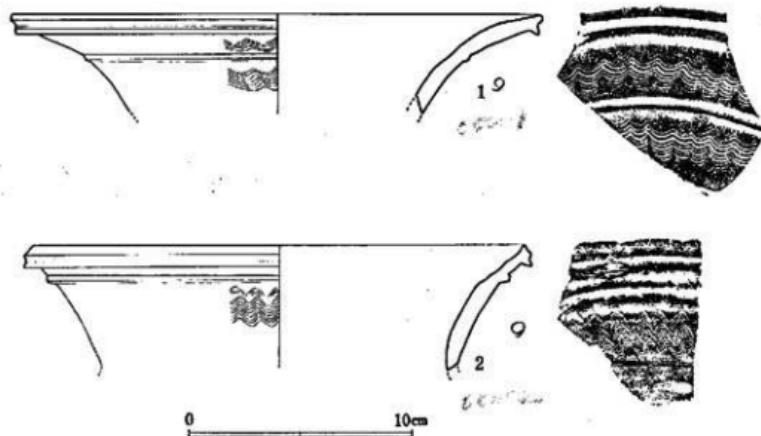
のは黄緑色を呈する小玉が多い傾向が認められた。

さて、本石室の副葬品の中で最も特色あるものとして注目されるのは、滑石製模造品が出土したことである。すでに述べたように、有孔円板1個と白玉20数個が原位置を離れて出土したが、床の構造を追求する過程において、ほぼ原位置をとどめる状態で、さらに出土数が増えたのである。すなわち有孔円板3個と白玉多数が、仕切石と東側壁が接する付近において出土した。出土状態は勾玉、ガラス玉とはほぼ同様であり、床面より5cmの間の粘土上に混入している。出土の位置は、側塗先端と仕切石がつくる隅を中心とするものであり、きわめて特殊な位置であると思われる。ところで、玉類および鉄製武器の配置から考えて、本石室の被葬者は頭を北（実際）に向けて、主軸と並行に埋葬され、しかも追葬は行われなかつたことが知られよう。

d. 出土遺物

須恵器（第16図）

壹の口頭部の破片が2点である。1は復元口径25.6cmで頭部は強く外湾する。胎土は良好で焼成もきわめて堅敏である。口唇部を沈線によって凹状にし、下端はシャープに稜をつくる。頭部は中央に一条の稜縫をめぐらして区分し、それぞれ輪描波状文を施す。波形の曲線はゆるやかであるが、深く鋭いタッチで表現されている。器の外面は自然釉が認められ色調は茶灰色を呈している。内面はナデによって仕上げている。2は復元口径22cmで、頭部は1に比較してやや立ち上がっている。口縁部は、1が丸味を帯びているのに比べ、角をつくっている。口唇部が凹むのは1と同様であるが、ややシャープさに欠けている。頭部は口縁直下に一条の突芯をめぐらし、その下に波状文を施す。波形は1に比べ著しく屈曲に富んでいるが、細くしかも浅い。胎土および焼成は普通であり、色調はねずみ色を呈す。器内面は巻き上げの跡が明瞭に残り、ナデによって



第16図

須恵器 大測図及び拓影

調整されている。

これら2点以外には、須恵器類は検出されず、従って、セットによる編年的な位置づけは困難である。けれども、上記のような諸特徴は、これらが古式須恵器の範疇に入ることを示すものである。

う。
鉄器 (第17図)

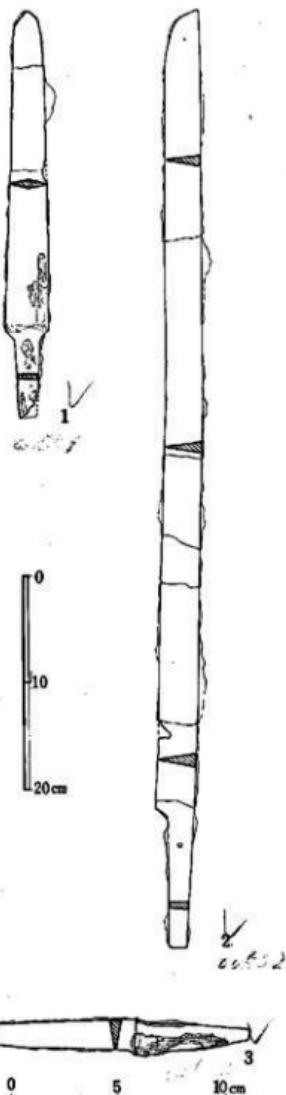
剣(1)は茎の先端を欠くが、厚さ8mm、刃幅40cm、刃わたり30.0cm、全長37.8cmを計る。鍔の付着が著しいため箟の有無は明瞭でないが、破損部の状態から推察すると、木柄は錆を有するものであったと考えられる。身および茎の部分には木質が多量に付着している。いずれも木目は縱に走行しているが、関の部分においては、幅8mmにわたって横に走っている。

直刀(2)は平棟平造りで、厚さ10mm、刃幅37mm、刃わたり74cm、全長87cmを計る。やや内反りで鋒にフクラがつき、片闊である。茎の間に近い位置に口釘孔が認められる。刀身には、部分的に鞘の木質が付着する。7片に折れているが、刃の一部を欠損するのみで、ほぼ完形の良品である。

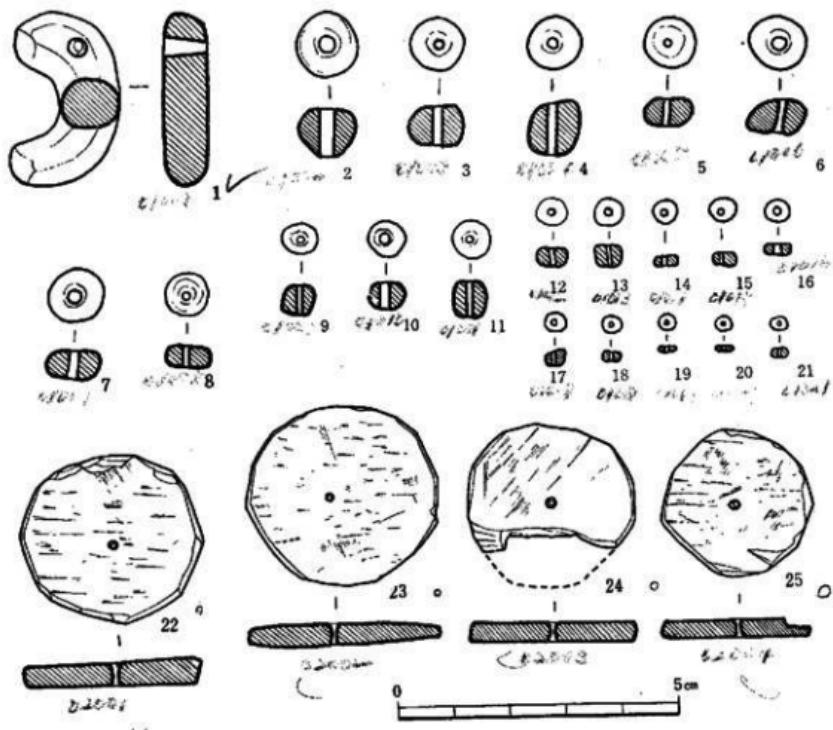
刀子(3)は鋒の部分を欠損し、現存長11.8cm、刃幅1.7cm、厚さ5mm、茎長5.3cmを計る。茎には柄の木質が厚く残存しており、関の状態は観察されない。身部は錆の付着が著しいが、直刀と剣に認めた木質の残存がなく、本來、鞘に収められていたのではないと思われる。

玉類 (第18図 1~21)

勾玉はめのう製であり、表面は淡い胎色を呈すが、頭部から尾部にかけて赤褐色の斑紋が入っている。長さ31mm、幅11mm、厚さ8mmを計り、孔は片側穿孔で径はそれぞれ3mm、2mmである。尾部先端は頭部と同じように琢磨しており、全体の形状はコの字形に近い。両面もやや平坦な感じに仕上げている。この勾玉は、材質、形ともに後期古墳副葬品中に多く類例を見出せるものである。



第17図 鉄器実測図



第18図 勾玉・ガラス玉、滑石製有孔円板実測図
(1: 勾玉、2~21: ガラス玉、22~25: 滑石製有孔円板)

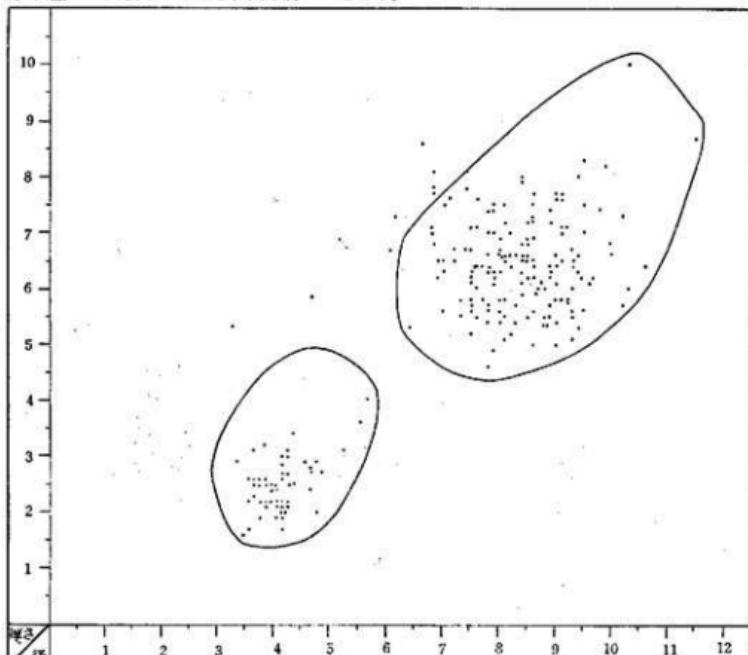
ガラス玉は丸玉、小玉あわせて230個以上が出土した。計測可能なものについて見ると、径は11.5mm~3.4mm、厚さは10.0mm~1.5mmの間にある。形は径と厚さがほぼ同じで、丸味をもつりんご形のもの(A類)、径に比して厚さが小さく、臼形に近いもの(B類)、径に比して厚さが大きく、たて長に近いもの(C類)の3つの形態に分類できるが、量的にB類が多いということができる以外は、大きさとの相関関係は認められないようである。色調については、主観的な観察であるが、紫紺色、青色、青緑色、黄緑色の4種があり、黄色や赤褐色を呈するものは認められない。紫紺色のものが最も多く、次に黄緑色が多く、青色と青緑色はきわめて少ない。次に玉の大きさと色調の相関関係をみよう(第1表)。ここで指摘されることは、第一に大きさについては、径6.4mm、厚さ4.6mm以上のグループと、径5.6mm、厚さ4.5mm以下のグループの二群に入別される。第二に色調については、紫紺色を呈するものは殆んど前者つまり大きいグループに認められ、黄緑色を呈するものは後者のグループに限られるようである。青色および青緑色は個体数が

少ないが、それぞれ両グループに認められる。また、小玉の群は黄緑色のみで、紫紺色および黄色のものが混じらないことは、後章で報告される狼の塚古墳の場合は類似を異にする。この相違は時期的な差によるものなのか、地域差によるもののか、あるいは單に被葬者の好みによるものかは曖昧ある問題である。次に、このガラス玉はいずれも風化が少なく原色が保たれていることから、光学的な検査をなしていないが、アルカリ石灰ガラスであると思われる。これらのガラス玉と勾玉を連ねた長さは約65cmで、首飾りとするに充分である。

滑石製遺品（第18図22～25）

有孔円板4個と臼玉950個以上が出土した。有孔円板は3個が完形で、1個は3分の1を欠失する。径は32.5mm～27.5mmで、厚さは4.5mm～3.2mmを計る。いずれも岸孔で、孔径はきわめて小さい。表面は灰緑色を呈し、細かい擦痕が無数に認められる。断面は中央部がやや膨るものと、平坦なものがある。全体の形は円形を呈するが、縁に棱を有しており、きわめて粗雑な感じである。

F1玉は有孔円板と同材質、同色調であり、径は5.3mm～3.6mm、厚さは3.4mm～0.8mmの間にある。全体的な大きさのバラツキは、径については4.0mm～5.0mmの間のものが圧倒的に多く、厚さについては1.5mm～2.6mmの間のものが多い。形状は膨みを有する太鼓形のものがほとんどである。出土した臼玉をつなぐと、長さ約95cmとなる。



第1表 ガラス玉編差表
008 (単位mm)

品 名	直径 mm	幅 mm	厚さ mm	形 状	色調	系 列	長径 mm	短径 mm	原石 形	色調	系 列	長径 mm	短径 mm	原石 形	色調	系 列	長径 mm	短径 mm	原石 形	色調	
1	11.5	8.7	A	鉢	8.6	8.0	6.9	A	"	93	8.2	7.9	5.2	"	139	6.8	6.6	7.0	C	"	
2	10.2	9.4	7.3	B	8.1	8.5	6.5	A	"	94	8.1	7.6	7.5	A	"	140	7.5	7.0	B	"	
3	10.3	9.7	10.0	C	8.1	7.1	7.7	C	"	95	8.0	7.2	6.7	B	"	141	7.6	7.3	5.9	A	"
4	9.5	9.0	8.3	A	8.0	8.2	7.6	B	"	96	8.0	7.5	6.9	A	"	142	7.6	6.8	5.6	B	"
5	9.9	9.0	8.2	B	8.1	8.5	5.7	"	"	97	7.8	7.4	6.6	"	"	143	7.6	6.9	6.1	"	"
6	9.1	8.5	7.6	"	8.2	8.4	7.6	C	"	98	8.1	7.7	7.2	"	"	144	7.5	7.2	5.2	B	"
7	9.5	8.8	7.5	"	8.3	9.0	8.0	A	"	99	8.0	7.6	5.4	B	"	145	7.5	7.0	6.8	C	"
8	10.6	10.0	6.4	"	8.1	8.5	5.8	"	"	100	7.9	7.4	A	"	"	146	7.0	6.8	5.6	B	"
9	10.0	9.6	6.6	"	8.7	8.1	5.5	"	"	101	7.8	7.6	7.4	C	"	147	6.9	6.3	3.8	"	"
10	9.7	8.6	6.2	"	8.6	8.4	8.0	5.5	B	102	7.9	7.0	"	"	"	148	7.8	6.6	5.4	B	"
11	9.1	8.0	7.0	"	8.7	8.6	6.0	"	"	103	8.4	8.7	7.7	B	"	149	7.0	6.6	4.1	"	"
12	9.0	8.7	6.6	"	8.9	9.2	8.7	"	"	104	7.6	7.6	7.5	C	"	150	7.1	6.8	7.6	"	"
13	10.3	9.6	6.0	"	9.4	9.0	6.2	"	"	105	8.0	5.9	5.6	B	"	151	7.4	6.7	6.7	A	"
14	10.2	9.6	5.7	"	6.0	8.5	6.6	A	"	106	7.0	6.6	6.6	A	"	152	7.2	6.6	6.6	B	"
15	9.4	8.5	8.0	"	6.1	9.0	7.8	T	"	107	8.1	7.6	6.5	B	"	153	7.0	6.6	6.6	C	"
16	9.6	8.7	6.1	"	6.2	8.3	6.2	B	"	108	8.0	7.5	5.8	"	"	154	6.8	6.8	7.6	"	"
17	8.6	7.5	7.7	"	6.3	9.5	9.0	B	"	109	7.6	7.5	5.5	"	"	155	6.9	6.7	6.5	"	"
18	9.1	8.2	7.1	A	6.4	8.6	8.4	T	"	110	7.6	6.0	6.0	A	"	156	6.4	5.6	5.3	B	"
19	8.9	8.7	7.2	"	6.5	8.9	7.9	B	"	111	7.8	6.4	6.4	"	"	157	7.0	6.5	5.0	"	暗黒色
20	9.3	9.1	6.4	B	6.6	8.8	5.5	B	"	112	8.1	6.8	6.5	B	"	158	5.5	5.2	3.6	B	青
21	8.4	7.7	6.6	"	6.7	8.8	8.1	B	"	113	7.3	7.0	5.5	"	"	159	5.6	4.9	4.2	"	"
22	8.8	8.6	7.4	"	6.8	8.4	7.9	B	"	114	8.0	7.1	6.3	A	"	160	4.8	4.1	4.1	"	"
23	9.4	8.9	5.3	"	6.9	9.4	8.2	B	"	115	7.8	7.2	7.0	"	"	161	4.8	4.2	3.1	B	"
24	9.3	9.0	6.7	"	7.0	8.7	8.0	T	"	116	7.6	7.6	5.5	B	"	162	4.8	4.5	3.8	"	"
25	9.2	8.5	7.1	A	7.1	8.3	8.5	B	"	117	7.6	7.2	6.4	A	"	163	4.6	4.5	3.4	"	"
26	9.0	8.4	7.6	"	7.2	8.5	7.9	B	"	118	7.5	7.0	7.1	A	"	164	4.8	4.4	3.6	"	"
27	9.0	8.6	5.4	B	7.3	8.3	8.2	B	"	119	8.1	7.5	5.8	B	"	165	4.5	4.0	3.3	B	青
28	9.3	8.9	6.5	"	7.4	8.2	8.0	B	"	120	7.5	7.3	6.3	C	"	166	4.2	3.9	2.8	A	"
29	9.3	8.8	5.6	"	7.5	8.6	7.4	B	"	121	7.9	7.8	6.1	A	"	167	4.1	4.0	4.5	C	青
30	9.0	8.7	6.4	"	7.6	8.0	7.7	B	"	122	7.7	6.4	6.6	"	"	168	5.6	4.8	3.9	B	青
31	8.4	7.6	6.8	A	7.7	8.6	8.4	B	"	123	7.9	7.5	6.3	"	"	169	4.2	4.5	3.4	"	"
32	8.9	8.5	6.3	B	7.9	8.9	8.4	B	"	124	7.8	7.5	5.3	"	"	170	4.5	4.3	3.8	"	"
33	8.4	7.9	8.0	A	7.9	8.5	8.5	B	"	125	7.8	7.5	4.0	B	"	171	5.5	4.4	3.5	"	"
34	8.9	8.0	7.4	B	8.0	8.6	8.0	B	"	126	7.4	7.3	7.8	C	"	172	4.7	4.6	2.8	"	"
35	8.6	7.9	7.5	A	8.1	8.7	9.6	A	"	127	7.9	7.7	4.9	B	"	173	4.8	4.4	3.7	"	"
36	9.3	9.0	5.1	B	8.2	7.9	7.7	B	"	128	7.5	7.3	6.1	"	"	174	4.2	3.9	2.9	"	"
37	9.3	8.2	5.5	"	8.3	8.4	7.7	B	"	129	8.1	7.4	5.9	A	"	175	4.2	3.7	2.9	"	"
38	9.5	8.0	5.6	"	8.4	8.6	8.0	5.0	A	130	7.5	7.3	5.8	B	"	176	4.0	3.9	2.9	"	"
39	9.4	8.6	6.8	"	8.5	9.7	9.9	G	"	131	7.7	7.1	5.8	"	"	177	4.1	2.9	2.9	"	"
40	9.0	8.4	6.1	"	8.6	8.3	8.1	6.6	A	132	7.3	6.6	5.0	B	"	178	4.6	4.1	2.6	B	青
41	8.5	8.0	6.8	A	8.7	8.6	8.6	6.5	"	133	7.5	7.3	6.2	B	"	179	4.6	4.6	2.7	B	"
42	8.4	8.6	6.6	B	8.8	7.8	7.5	A	"	134	7.6	7.4	6.8	C	"	180	3.8	4.0	2.9	B	青
43	8.9	8.8	6.2	"	8.9	8.2	7.9	6.4	"	135	7.6	7.4	5.4	B	"	181	4.8	4.2	2.6	"	"
44	8.9	7.8	6.4	"	9.0	8.3	8.0	5.4	"	136	7.3	6.9	5.8	"	"	182	4.3	4.1	3.3	"	"
45	8.5	8.6	7.2	A	9.1	8.2	8.0	7.0	B	137	7.6	5.1	5.1	"	"	183	4.0	3.8	2.5	"	"
46	9.0	8.5	5.8	B	9.2	7.9	7.5	6.5	"	138	8.6	7.3	6.2	A	"	184	4.3	4.2	2.4	"	"

(3) 飛山2号墳

本墳は第1号墳の西方10mの地点に位置している。本墳も第1号墳同様の小規模な封土を有する円墳であったと思われるが、封土はすでに失われており、石室の石材も散乱していた。このような状況であったため、本墳の調査は石室最下部の構造を追求するのみにとどまった。

a. 石室（第20図）

主軸をN38°Eにとる竪穴式石室である。石室平面は不規長方形を呈し、長さ192cm、幅は北壁において90cm、南壁では85cmを計る。石室の残存状態は不良であり、周壁の最下段の石と、部分的に二段目の石が残っているだけである。石組みの状態は、最下段は腰石として大き目の石を使用し、長側壁はそれぞれ4枚を並べ、短側壁は1枚ずつ使用している。石組みの間隙には小礫を充填し、二段目の石は小形の石を奥を大きく積んでいる。石材はいずれも礫岩である。石材および石組みの状態は、第1号墳の石室が横口式である点を除けば、第2号墳も第1号墳と共にしている。

石室内部は著しく荒らされており、床の構造は明らかにしない。北壁上面より55cmの深さで黄褐色の地山面に達するが、その間に耕土あるいは礫などの床を構成する状態は認められなかつた。

墓底の掘り込みはプランでは確認されず、地山が周壁に接している。従って本墳の墓底は、石室ぎりぎりに掘り込まれたと考えられ、1号墳の場合とは異なっている。

b. 出土遺物（第19図）

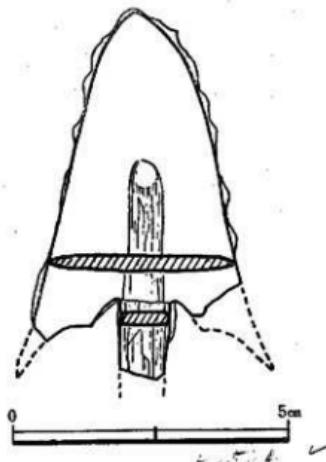
奥壁寄り東側壁に近接する位置から鉄器が一点出土したのみで、他に遺物は発見されなかった。出土のレベルは地山面より約5cmの高さであり、半ば立った状態である。原位置を保つものとは思われない。

鉄器は平根三角頭式であり、全長5.2cm、厚さ2mmを計る。逆刺はどちらも欠損するが、残存部の觀察によると、図示した如く、先端よりやや内湾しつつ、いったん刺をつくり出して茎基部へ繞くものであると思われる。茎は長さ1.4cm、幅9mmを計り、刃面に繊維質の残存が観察される。同様な痕跡は身部中央付近まで続いており、矢羽着装の跡であろうか。

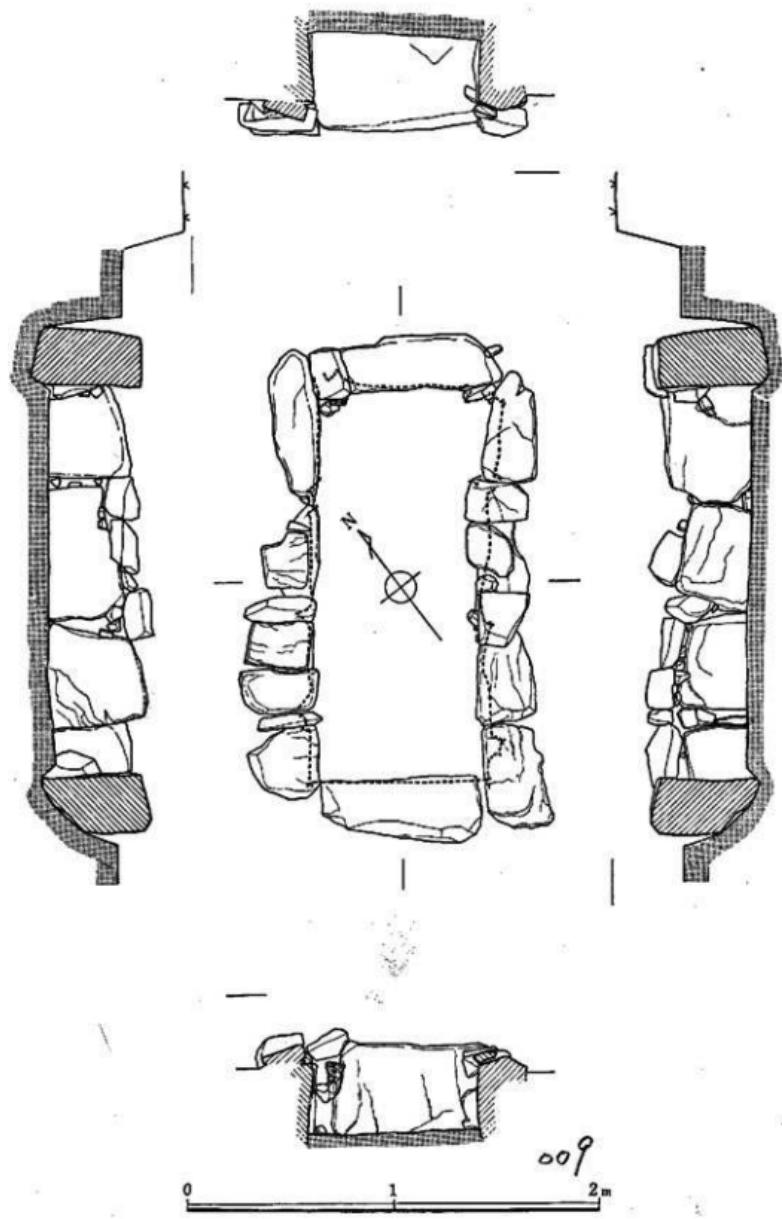
(4) 小結

以上、調査した第1号墳、第2号墳について述べたが、ここであらためて要點を整理しておこう。

まず本古墳群の構成については、標高57.2mを記す尾根頂部に、本来は3基が近接した位置興



第19図 鉄器実測図



第20図 第2号填石室実測図

係をもって築造されていたと考えられる。そして、調査にかかる以前、および調査途上においてたびたび踏査を試みたにもかかわらず、造成地内の丘陵上や斜面にただ1基の古墳も発見することはできなかった。このことは、同様な地形的条件を有する広大な造成地内には他に古墳は築造されなかつたと考えて差支えないと思われる。

次に古墳の内部構造については、第2号墳は小形竪穴式石室の形態をとるが、第1号墳は石室平面プラン、周囲の石組み状態において第1号墳と共に通しながらも、閉塞部において横口構造を有し、さらに外側に短い石積みが見られる点で特異である。すでに失われた第3号墳の内部構造を知りえないのは、きわめて残念であるが、狭い丘陵頂部に近接した位置で、竪穴式と横口式の両形態が共存する事実は注目されてよいだろう。

出土遺物については、鉄製武器・工具・装身具とともに、多量の滑石製模造品が一定の領域を占めて出土した点が注目される。九州地方においては、この種の滑石製模造品が古墳の副葬品として出土することは、きわめて稀であり、新たな類例を加えたと云える。それと同時に、畿内地方にあっては、この種の滑石製模造品は、5世紀代の古墳に多くみられるものであり、第1号墳の年代を考える上において少からぬ手がかりを与えるものとすることが可能である。しかしながら、それは作出の装身具類が、後期古墳の副葬品として普遍性をもっている点と相反する。そうした場合、この旧い様相と新しい様相の接合が、実はその特異な石室構造においても反映されているということができるのではなかろうか。ともあれ、第1号墳については、その内部構造および年代観について、さらに考察する必要があるが、それは章を改めて行ないたい。(島津・塙屋)

(註1)『福岡市持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集)福岡市教育委員会 1971年

(註2)『今宿古墳群』(福岡県文化財調査報告書第38集)福岡県教育委員会 1968年

(註3)山本嘉蔵『福岡県或星形の古墳に就て』(『史蹟』第二編)1930年

1969年2月の福岡県教委による調査においても、数基の竪穴式石室が検出されている。

(註4)『埋もれていた朝倉文化』福岡県立朝倉高等学校史学部 1969年

(註5)小川富士雄『九州』(『日本の考古学』IV)1965年

(註6)この須恵器については、羽崎政、森貞次郎、小川富士雄諸氏の御教示を得、森浩一、田中英夫氏には畿内地方古窯跡出土資料を送り頂いた。記して謝意を表します。

(註7)福岡県浮羽郡吉井町徳丸塚堂古墳の石室には、多量の武器・武具類・装身具とともに、多量の滑石製模造品が副葬されていた。出土の位置は飛山1号墳と類似しており、閉塞部寄りの東側壁近くに、防護神獸像1面、有孔円板4個、白玉720個以上が替円状の広がりをもって検出されている。吉端勇蔵『筑後國浮羽郡千年村塚堂古墳』(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第10輯』1935年)

第3章 上和白地区の調査

1. 立地

上和白は立花山の北側山麓部にあたり、立花山から三苦へ連なる低丘陵の一部をなしている。平山からゴルフ場へ延びる丘陵が上和白で、東側傾斜面の裾部に現在の集落がまとまっており、その先端部には丸山古墳がある。ゴルフ場内の丘陵面には数基の古墳があったと云われるが、現在高見5号墳と谷をはさんで対向する一基が保存されているのみである。

上和白丘陵の北側に中和白の丘陵があり、南側斜面には巨石墳があったと云われる。中和白の落部は水田面をはさんで上和白の落部と対面する。また上和白と立花山の鞍部には、香椎、平山、青柳を通り赤間にぬける旧街道があり、現在の国道三号線と南北に並列している。上和白は二つの道路で分けられる区間で、平山と上和白・中和白の間の丘陵一帯約47万m²が造成地域である。

丘陵の西側斜面の水田に面した大神社前の小台上には各時代の遺物が表採された。丘陵上及び斜面には数基の古墳が確認され、遺物の包含状態が豊富で古墳群の分布も下和白地区より密であり、今回調査の中で最も重視された地区である。
（柳田）

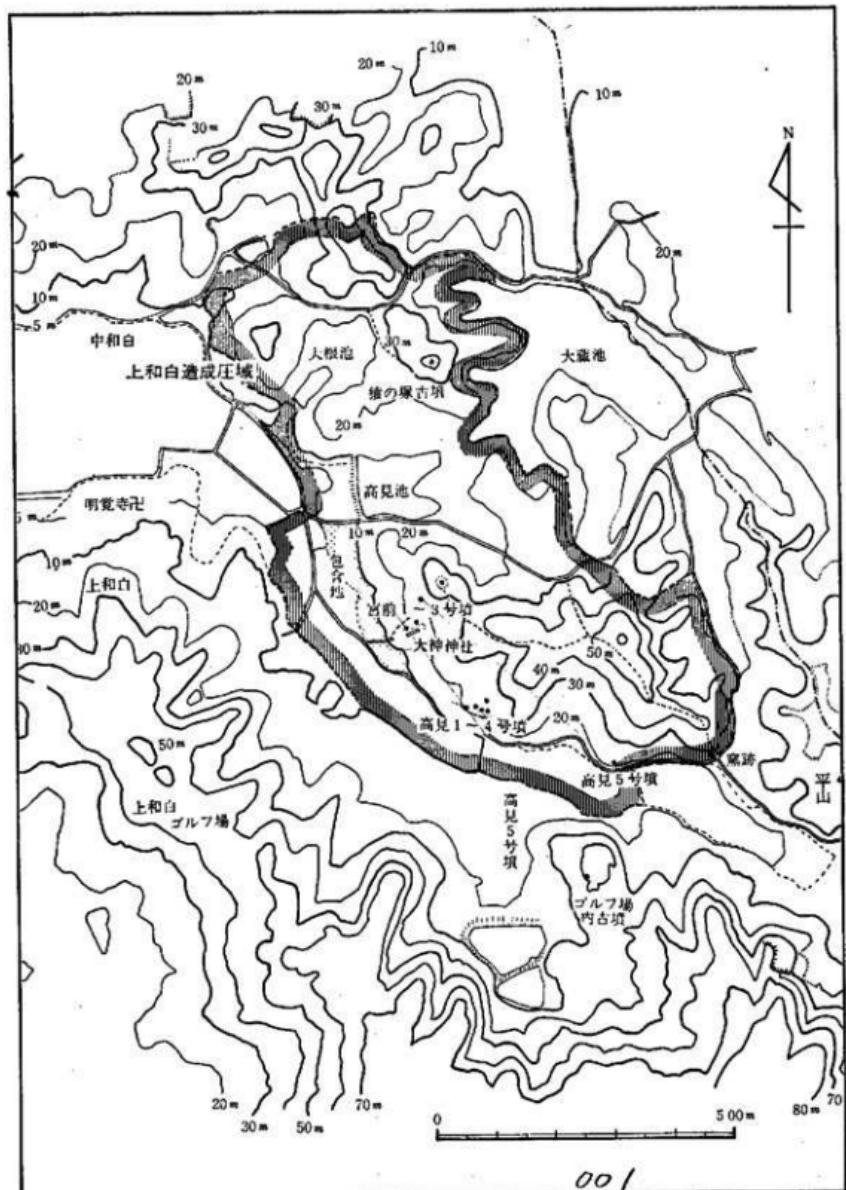
2. 発掘区の設定

上和白地区の調査は包含地の調査、古墳群の調査、窓跡の調査の三つに分けられる。 $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{2}$ までは第一期とし、包含地の調査にあてた。 $\frac{1}{1} \sim \frac{1}{2}$ の第二期は古墳群及び窓跡調査の期間とした。

包含地の調査は遺物が散布する台地全面（約6000m²）を発掘調査の対象地区とし、4×4mのグリッドを一つの単位とし、台地全面を含む発掘区を設定し遺物、遺構の包含状態をつかむことから始め次に遺物、遺構の集中するC地点の全面発掘を展開し、その後A地点に移り、C地点との



第21図 上和白発掘風景（包含地C地点・7月）



第22図 上和白地区地形図

001

関係を追及することに努めた。

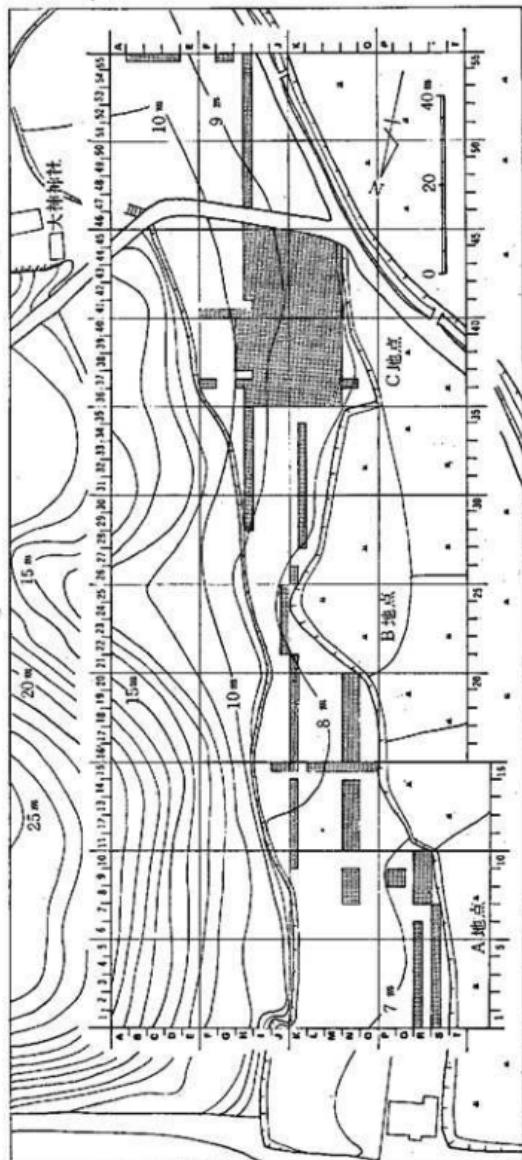
古墳は全て盗掘を受けていることから、遺物の残存状態は少ないと考えられた。調査では、特に石室の構造、墓塚と石室の関係など古墳築造技術の解明に力を注いだ。第二期の調査は猿の原古墳、宮前3号墳、高見5号墳、雲跡の4基埋成で、同時に開始した。その後（第二期後半）分散した調査員は高見1～4号墳に集結し、全員で発掘調査にあたった。最後に宮前1号墳、2号墳の調査と続いた。

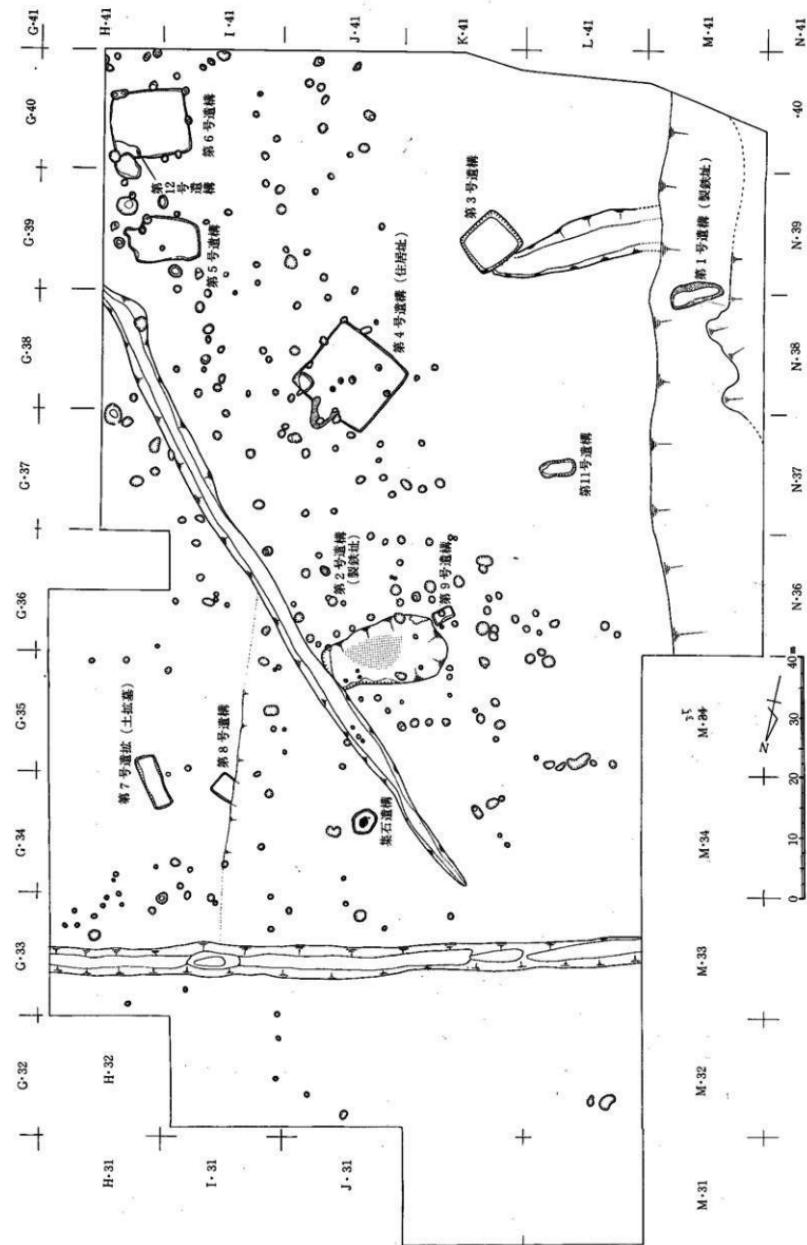
（柳田）

3. 包含地の調査

太神神社前の丘陵の西側斜面の裾部は水田に面する標高7～10mの台地状を呈する地形で、事前調査の際、古墳期から中世にいたる各時代の遺物が収集され、較富な遺物、遺構の発見が予想された。

台地全面に4×4mのグリッドを設定し、全面発掘をめざした。傾斜面に平行するほぼ南北線を北から1～55に分け、直交する東西線を東からA～Tとし、遺物、遺構の出土地点は、例えば第1号遺構はG38グリ





第24图 包含地C地点道標位置圖

003~01D

ツドのように呼ぶことにした。

台地は24~25の東西線の部分が小さな谷となり、南北二つの台地に分けられる。1~15をA地点とし、16~35をB地点、36~45をC地点、47~55をD地点と呼ぶ。

遺物、遺構はC地点に集中し、A地点がこれに次ぐ。B、D地点は遺物が少なく、遺構は発見されなかった。これは台地の最も先端部に遺物、遺構が占地することを示している。

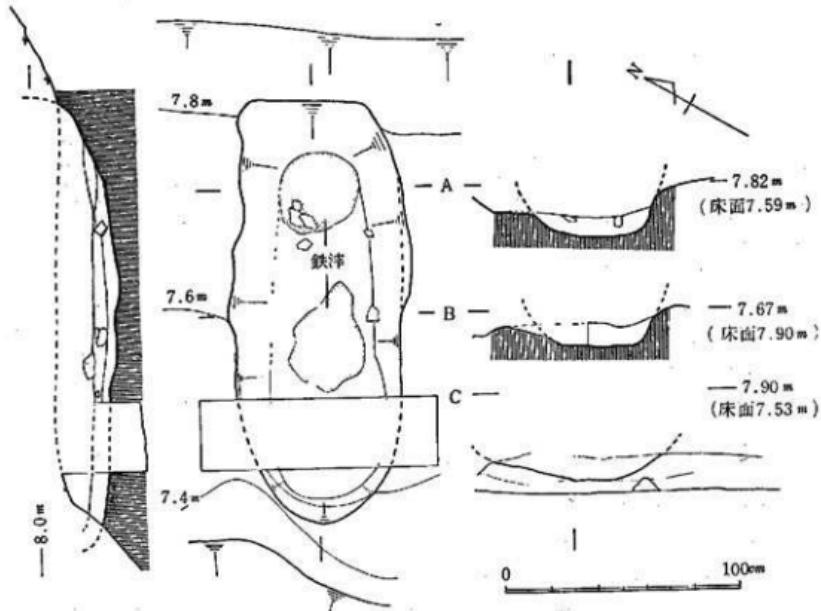
包含地は表上下に黒色土が認められるが浅く、現地表面からわずか10~20cmで地山に達する。黒色土は各時代の遺物が混在し、後世の攪乱状態をしめす。ただ地山層を掘り込んだビット・遺構が残されていた。従って本文は遺構別に記述し、遺構としてまとまらないものは一括して「その他」の他の遺物としてまとめた。

包含地の調査には7月1日~8月12日までをあて、10月・11月と補足調査を行なった。(柳出)

(1) 第1号遺構(製鉄址)

a. 構造

台地の西側斜面の最先端部に位置しており、M38とM39グリッドの間にあたる。本遺構から西は、急に落ち込み、道の下につづく深い溝をなしているが、これは人工的なものでないことを確認した。遺構の上面を検査する過程で、火を受けた小礫、多量の鉄滓、ふいご羽口が見られ、赤



第25図 第1号遺構実測図

褐色に変色した培塿の一端が露出したので、製鉄遺構であろうとの予想を持つに至った。遺構は自然地形に対し、東側を深く掘り込んでほぼ水平な床面をなす。床面はかたくしまり、床の上面は赤く焼けていた。西壁は既に搅乱されてつかめなかった。また、上面も削平されていて遺構全体の構造を知ることはできないが、半円状の断面となるかと想われる。側壁は地山の部分から上に粘土を利用して柱が立つことが予想され、全体として舟底状を呈する。（長軸はN60°E）

b. 出土状態

遺構の中央部と奥壁寄りから、鉄滓と焼け石が床面に接して多量に検出された。鉄滓は本遺構に伴うものであるが、他に遺物を欠き時期決定できる資料はない。

c. 出土遺物

鉄滓には2種類ある。すなわち、鉄分が多く重いものと、鉄分を含むが軽いものである。前者はFialiteと呼ばれるもので、後者は多孔質で、含水酸化鉄で、中に木炭質を含んでいる。前者は少なく、後者が大半を占めている。

鉄滓中に木炭質を含む現象は、鉄の原料を多量の木材で燃焼した段階で融解した鉄分が木炭質を包み込む現象によったものであろう。他は鉄分及び含有物を含むまで抽出され安定した状態を示している。

遺構の形態と鉄滓、焼け石の多量な出土は鉄の原料から、純鉄を得る鉄生産過程の一形態の炉を示すものであろう。

（穴沢義功・国平：柳田）

(2) 第2号遺構(製鉄址)

a. 遺構と出土状態(第26図)

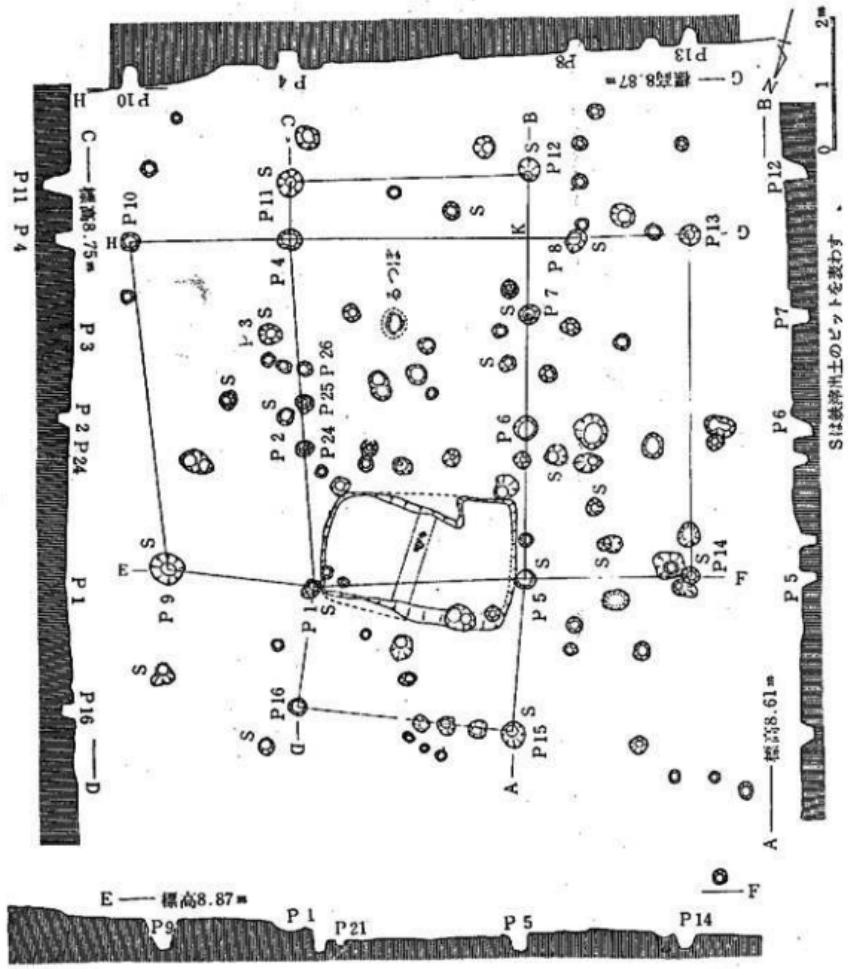
包含地C地点の中央部を占めるJ35・36、K35・36に及ぶ。表土をはがす段階で小砾、鉄滓が搅乱土中に含まれることが注目され、J36グリッドのトレント北西壁寄りから砾石が出土した。更にその東側には半円状の施設の粘土が検出され、るっぽ状製鉄炉としての機能が考えられる。更に遺構の検出に注意した結果、J35、K36グリッドにかけて南北長方形の掘り込みが認められた。その中の黒色土中に多量の鉄滓があり、そのほかふいご羽口、須恵器片が含まれ、調査の結果それらは関連ある一つの遺構であることがわかった。

ピット 第2号遺構の範囲に認められるピットは90個を越えた。長方形の掘り込み(捨場)となるっぽ状製鉄炉の他に第2号遺構に付随するピットを確認するのは困難を極めたが、ピット

ピット	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
P 1	32	22	23	鉄滓
2	26	28	19	"
3	38	32	33	"
4	38	32	28	
5	22	18	18	鉄滓
6	38	36	34	
7	26	22	27	鉄滓、石錠
8	38	30		"
9	52	44	49	"
10	22	18	37	
11	44	40	42	鉄滓
12	38	22	39	"
13	22	22	28	
14	28	26		鉄滓
15	40	36	23	"
16	30	26	23	
24	30	22	16	

の形、深さ、方向、ピット中の遺物を類別して

第3表 主要ピット計測表



第26図 第2号造橋製鉄址実測図 014

第2号造橋との関連性を求めた。そのためにはまず小ビットを除き、ビットの大きさ、深さの類似した比較的大きな主要柱穴となるものを抽出することに努めた。更に鉄岸の認められるビットを選び出した。こうして得られたビットが主柱穴（第3表）であり、第26図のP1～P16にあたる。東辺5.33m、西辺5.14m、北辺3.25m、南辺3.50mのはば長方形が造橋の主要部分を占め、つば状製錬炉、捨場、砥石、およびほとんどの鉄岸はこの中に含まれることが注意される。主

要ピット間の計測値は、造構復元との関係で第12表 (P120) にまとめた。

捨場は主柱穴の北側に認められた掘り込みで、長辺2.95m、東側は1.60mと狭く、西側は2.00mと広がる隅丸長方形である。断面は舟底形を呈し、床面には焼けて硬くしまった部分も認められ、ある時期の炉床をしめす可能性も残されている。床面に接して須恵器片とふいご羽口が共伴していた。その上に多量の鉄滓があることから、第2号造構の時期決定資料となる。

黒色土の水洗の結果、スケール（鍛造剝片）が検出された。径1mm内外の細片が多い。鉄滓の中には球状を呈するものがあり、他に土師器の小片が含まれていた。

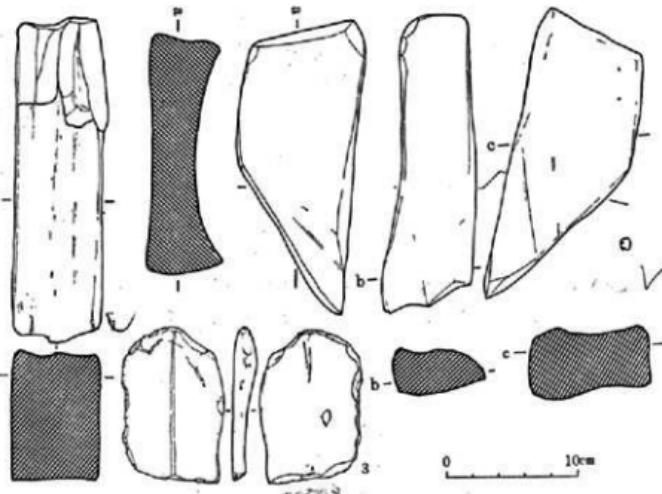
るっぽ状製錬炉 造構の主要面のはば中央に位置している。地山をわずかに掘り下げてから粘土で固め、断面は半円状を呈するが、上部は削平され全体の形態を知ることができない。底面に鉄滓、木炭が付着した痕跡が認められ、硬く焼けしまり、周辺の地山は赤褐色に焼けている。ふいご羽口を装着した部分は残存しない。全体は円筒形をなし、下部にふいご羽口を装着した製錬炉と考えられよう。



第27図 るっぽ状製錬炉出土状態

b. 出土遺物 (第28図～第30図)

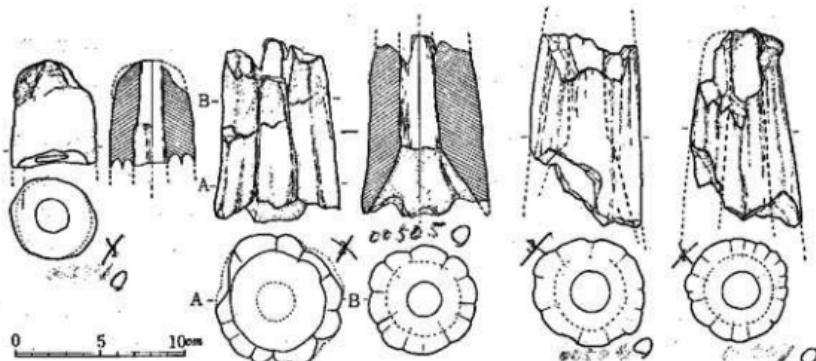
砥石 るっぽ状製錬炉の南側約1mの黒色土中にみられ、主要面の中に含まれる遺物である。



第28図 遺物実測図 (砥石、石錐)

砂岩製の二個がある。1に $24.5\text{cm} \times 7.6\text{cm}$ の長方形を呈し、二面に擦痕が見られ、断面は四面をなす。2は一部を欠失するが、一面は深い凹面をなしている。使用面はいずれも表面が消耗しているが、粒子は荒く、緻密ではない。（第28図1・2）

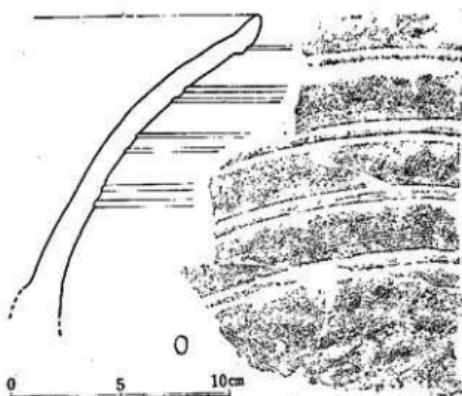
石錐 P 7 の底に認められた石器で、厚さ $1.0\sim1.7\text{cm}$ 、 $11.6 \times 7.6\text{cm}$ の平たい石の周辺に両刃から調整を行ない、長軸に沿って片面は全てを、一刃は両端のみを振り切りによって、巾 0.3cm 、深さ 0.2cm の溝を作っている。形態から一応石錐と考えられるが、漁撃具にみられる石錐とはやや形態を異にし、他の用途が考えられるかも知れない。石材は粘板岩で、鉄錆と共に山上した（第28図3）。



第29図 遺物実測図（ふいご羽口）

ふいご羽口 抱塙の黒色土に含まれていたものと床面出土のものがある。ほぼ完形なもの4個体、破片を含めると数個体分は増える。形態には2種類ある。

1は円筒状を呈する形の先端部で、外径 5.0cm 、内径は 2.0cm で最先端は 1.3cm とやや狭くなる。円く完結する部分は墨く焼け、高熱を受けて熔変し、ガラス質に変化している。2～4は底部がラッパ状に広がる形態のものである。2は底部、3は胴部、4は先端部の破片で、各部分の形態を知ることができる。2の基部外径は 7.5cm で、内径は上端が 1.9cm 、底部最大径 2.3cm を



第30図 須恵器実測図及び拓影

計り、これよりラッパ状に広がり基部に達する。胴部から先端がやや狭くなるのは3、4も同様で、胴部最大巾は3が2.5cm、4は2.8cmとなっている。4の先端部内径は1.5cmである。1同様高熱を受けた痕跡が著しく、外面はヒビ割れが日立つ。全長はわからないが、2~4による復元長は約16cm前後である。1の外面は円く整形されているが、2~4は5~7条のしづらが見える。中に芯を入れ、粘土を手でしめながら形作ったことをしめす。粘土には石英粒の混入が認められる。(第29図)

須恵器 長頸な火薬の口縁部片で、大きく外脣する。口唇部外側下端に一条の沈線をめぐらし、鈍い稜を呈す。頸部は二条の沈線文で三段に区画する。外側にはかき目整形が見られ、内側は横なぎによる。口縁を復元することはできない。(第30図)

土師器 小片が多く、完形に復元できるものはないが、口縁が外反し、底部の円くなる器形であろう。器肉の厚いものとうすいものがあり、内面になでの跡をとどめ、外面には細磨文を施すものがある。

鉄滓 鉄滓は造構全体に散在するものと捨場に含まれるものがあり、形態には次の3種類がある。(1)は鉄分を含むが軽いもので、中に木炭質を残す。(2)は鉄分が多く、表面はケロイド状を呈する重いもの、(3)は厚さ3~5mmの球状のもので、るっぽの底にたまつた鐵滓の残存したものであることがわかった。鉄分を含んで比較的重く、多孔質な鐵滓である。2個体分はほぼ完形に復元できる。(図版14・15参照)

スケール(鐵造製片) 捨場の黒色土を水洗の結果検出した。径5~7mm、厚さ1mm以下の細片が多く、肉眼での識別はむずかしい。鍛冶における鍛打の廢棄難片となって遊離するものといわれるもので、剝片は磁鐵鉱化($FeO \cdot Fe_2O_3$)しており、強磁性をしめす。鍛冶場作業を推定する有力な手がかりである(註1)。

註 (1)九州大学工学部坂田武彦氏(鐵鋼冶金学研究室)の分析・教示による。

c. 小結

造構にはるっぽ、捨場を持つ鉄生産の作業と考えられる施設があり、スケール、砥石、鉄滓等作業に付属する遺物がみられた。伴出した須恵器、土師器により、8世紀代における製鐵造構であろうと考える。かつビット群の構成を整理することにより、それらの造構・遺物の大部分が一軒の作業場の中に含まれることが判明した。鉄生産、作業場の復元については考察編でまとめた。P10~P13を主軸とすればN74°Eとなることを付記しておく。(穴沢・国平:柳田)

(3) 第3号造構

a. 造構(第31図)

K38グリッドには、方形の掘り込みが検出された。156×174cmのほぼ開丸正方形に近く、深さ40cmの堅穴状を呈し、長軸はN37°Eをさす。中央に52×42cmの炉がある。炉の底部は床面にあり、灰とともに炭が残っているが、C₁₄測定が可能な程採集できなかった。造構の東北隅壁には円錐の集石がみられた。断面をみれば、壁の上面をわずかに掘り下げて円錐を置いている状態から、本造構に付設されていたものと考えられる。長軸の東南壁側に1つのビットがある。16×

14cmの小ピットで、床面から掘り下げていることより、本遺構に伴なうピットであることがわかる。他にはピットは認められない。ただ、遺構の周囲には三つの小ピットがあるが、本遺構に付随したかどうかは不明である。また、遺構南側の浅い溝は遺構の壁を切っており、本遺構よりは新しいものと考えなければならない。

b. 出土遺物(第32図)

土師器は床面には密着していなかったが、遺構と同時期のものと考えられる。遺構の年代を決定する唯一の資料である。蓋の肩部破片であろう。肩部から口縁部にかけて、やや外反する。肩部から下半にかけてはたたき目がみられ、また、肩部の内面には、ヘラ状具によるタテの擦痕がみられ、やや渋くなるがこれは、この部分で接合したためであろう。胎土には石英粒を混じる。表面は赤褐色、内面は薄褐色を呈し、焼成不良である。

c. 小結

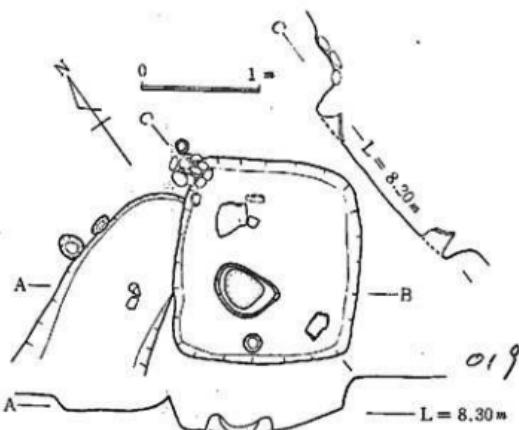
中央に炉址がある竪穴状遺構は住居址を思わせるが、規模が小さい。一方、壁の一部に円窓を意図的に置いたことがうかがわれ、祭祀的性格とみることができよう。出土土師器は第2号、第4号遺構と変わりなく、同時期のものである。

(安達 新・島津：柳田)

(4) 第4号遺構(住居址)

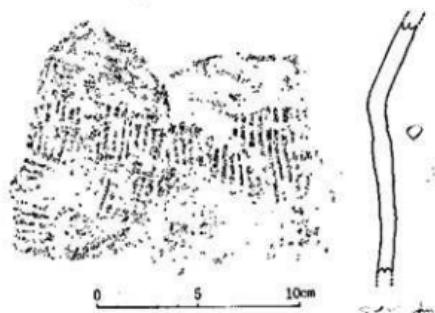
a. 遺構(第33図)

J37・J38グリットの劣土を除いた状態で方形落込みとその北東辺に焼土が見られ、かまと付の竪穴遺構である事が予想された。全体の立地は西に向う緩斜面のやや平坦部である。まず土



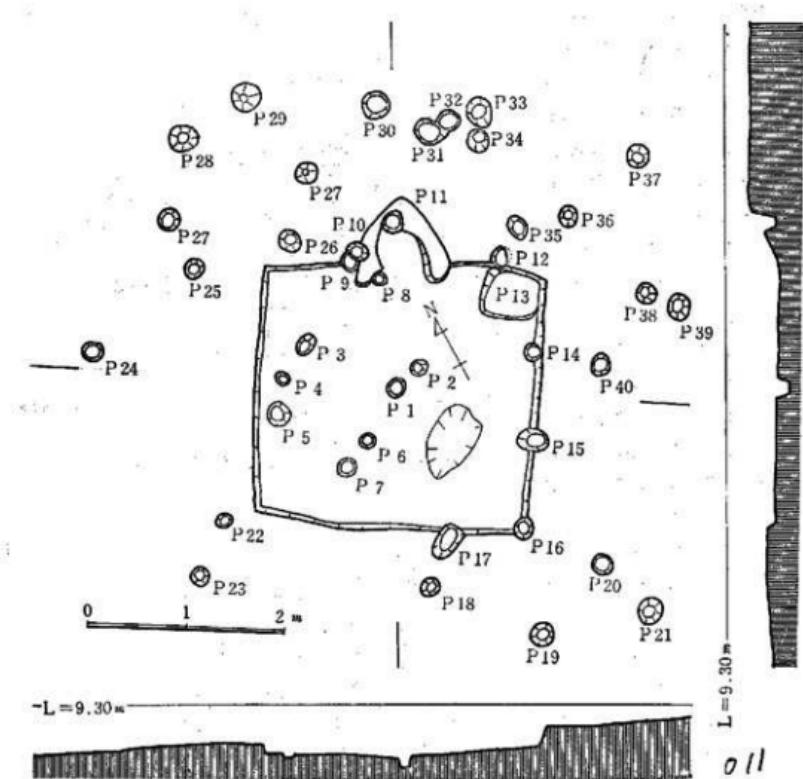
第31図

第3号遺構実測図



第32図

土師器実測図



第33図 第4号造構(住居址)実測図

手を残し、西側半分を掘り下げていくと、120cm程で床面に達した。床面は堅くしまり、しっかりしている。竪穴内の堆積土は黒色土で、層序は認められなかった。更に東側を掘り、全体の形を明らかにした。竪穴の平面形はほぼ正方形をなすが東西辺はやや短い（西辺240cm、東辺260cm、北辺270cm、南辺280cm）。壁は耕作により削平されて現在のものは本来の姿を保っているとは思えないが、東20cm、西12cmを計る。いずれも、直立せずやや外に傾斜する。床はほぼ水平である（中央部の標高8.85cm）。北半分の床には炭化物が散在している。恐らくかまどの燃焼物をかき出したものであろう。かまと中央点—南辺中央点を主軸とするとN30°Eを示す。

ピット(第4表)

遺構の内外に多くのピットが検出された(第4表)。遺構が黒色粘土層中にあるため、後世のピットをその切り込み面でとらえるのが困難であった。遺構内のものではP6、P7、P8、P

9、P10は明らかに造構の時代より後世に掘り込まれたものであった。更に周囲に見られるピットに至っては、どれが造構と関係あるのか、或いは無いのかを掘るには何ら決め手がなく、結局検出したピットの種々の組み合せから造構の家庭焼造を推定し、造構使用期に機能したピットを推定する外はない。建築学的考察は後章で述べる。

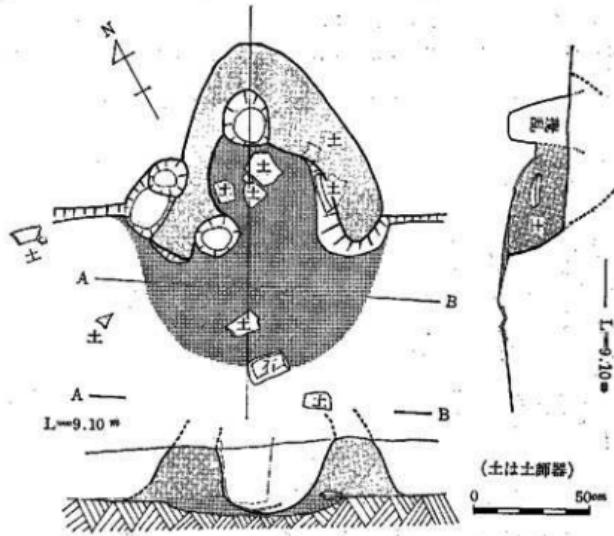
番号 (P)	大きさ	深さ	備考	番号 (P)	大きさ	深さ	備考	番号 (P)	大きさ	深さ	備考
1	23×23	-13.0		14	27×20	-18.0	底は東へ深くな る	27	22×20	-22.4	土師器片
2	18×17	-19.9		15	27×19	-23.0	底は東へ深くな る	28	28×27	-30.0	土師器片
3	28×20	-7.5	土師器片	16	19×15	-12.3		29	27×25	-29.0	
4	18×15	-10.0		17	37×20	-19.8		30	30×27	-29.0	土師器片
5	18×17	-13.8		18	15×15	-21.0		31	35×25	-33.0	土師器片
6	23×16			19	23.5×18	-16.5		32	22×22	-9.0	土師器片
7	20×17			20	20×20	-9.0		33	27×27	-28.0	須恵器片・青磁 片・土師器片
8	20×17	-4.5		21	26×23	-36.5	土師器片・須恵 器片	34	21×27	-23.5	土師器片
9	25×20	-18.5		22	16×11	-29.0	土師器片	35	24×18	-19.0	青磁片
10	16×16	-22.5		23	18×18	-24.5	土師器片	36	20×18.5	-16.0	土師器片
11	24×20	-23.5		24	21×18	-14.0		37	23×23	-13.0	土師器片
12	30×18	-27.0	底は東へ深くな る	25	20×20	-26.5	土師器片	38	21×18	-6.0	土師器片
13	57×45	-11.5		26	27×23	-21.5	土師器片	39	24×21.5	-20.0	須恵器片
								40	21×21	-23.5	土師器片

第4表 第4号造構ピット計測表 (単位 cm)

かまどの構造

(第34図)

かまどは、堅穴北壁中央部に付設する。削平されていて上部の構造は羽らかではない。この時代のかまどの例にみられる如く堅穴内側に造りつけるのではなく、大半が外に出る。平面は馬蹄形をなす(両壁間80cm)。壁は粘土で作り



第34図 かまど実測図

火を受けて赤変していた。壁面内側には土師器破片を挿入している。これは④ひび等が生じたための補強としたのかの②当初からの所作か、二通り考えられる。又燃焼部にも変形部破片数点がいずれも内側を上に出土した。意識的な所作であろう。焚口部には深さ10cm程の皿状の掘り込みがみられ、この部分には灰と炭化物が多く詰まっていた。かまどの西軸部及び燃焼部先端にみられる穴は、後世に掘り込んだもので、かまどとは直接関係はない。煙道も削平されたのか見当らなかった。

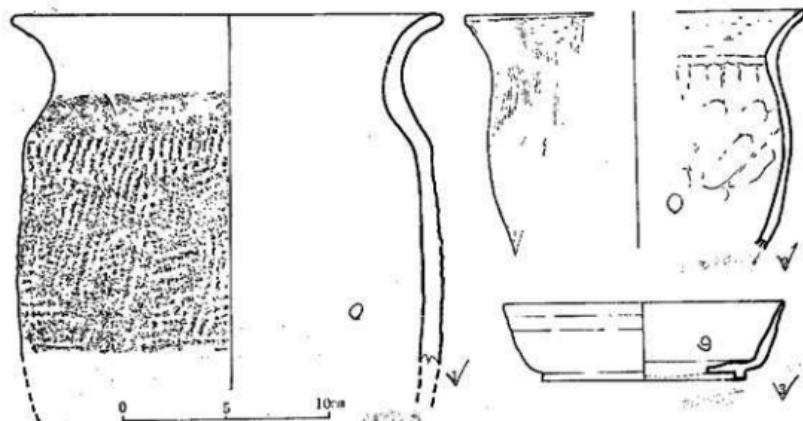
b. 遺物の出土状態

堅穴内の黒色土は、層序として分離出来ないので、遺物は①堅穴の平面形を最初に認めた時出土したもの、②床面密着のもの、③両者の間から出土したもの、の3種に分けて取り上げた。①は全て土師器片であり、この部分には小砾も若干混入している（計13片）。繩席文のあるものが4片ある。②は土師器片（計48片）須恵器壺蓋の身受けの部分1片が見られた。以上のものは、恐らく流れこんだものと考えられよう。床面からは土師器片（33片）高台のある壺片（須恵器）小角砾（2個）鐵滓（1個）が出土した。又かまと内からは土師器片が出土した（燃焼部3片、壁内2片）。2個の角砾（砂岩質）は、いずれもかまとに近くあり、何らかの用途を有したものと考えられるが具体的な機能については明らかではない。

c. 出土遺物（第35図）

1. 壺である。口縁部はゆるやかに外反し、肩部からそのまま底部へ続く。肩部から下に荒い繩席文を施す。胎土には石英粒が多く見られ、一見厚ぼったい。口縁部と下半は別れて出土した。それぞれ火を受けて赤変している。現存部は全体の5分の1。復元口径20cmを計る。

2. 壺である。最大径は口縁部にあり、肩部でややふくらむ。外面に浅いクシ目を施し、内面には斜めのヘラによる削りが見られる。胎土には石英砂粒が多く混入し、焼成不良。復元口径



第35図　出　土　遺　物　実　測　図

16.4cmを計る。黄褐色を呈す。1・2とも土師器である。

3. 高台を持つ須恵器の坏である。器面には内外共に横ナデが見られる。口縁部はやや外反する。高台は低く角ばる。焼成不良、全而青灰色を呈す。後元口径13.5cmを計る。

以上の土器は、この竪穴の時期を決定出来る資料である。1はかまと部、2、3は床面から出土した。時期の決定については第5章で述べる。
(鳥津)

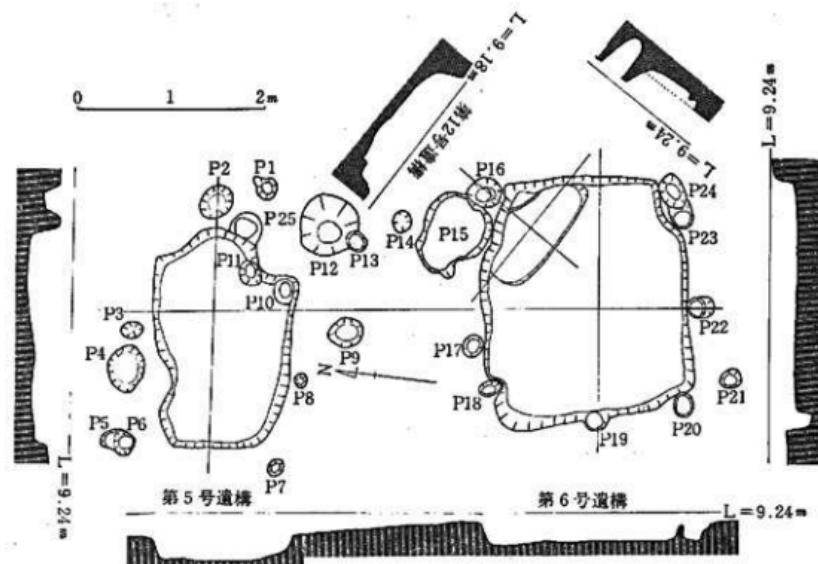
(5) 第5号遺構(第36図)

H39・I 39グリッドの遺構は、234×140cmの隅円長方形を呈する。西側の最短部幅は110cmをはかる。深さは中央で28cm、主軸はN83°Eをさす。断面は堅穴状を呈するが、周囲のピットは大小あり、遺構との切り合いから時期もいくつかに区分しなければならない。例えば、P25は遺構より古く、P11は新しい。またP2に対向するものがないというようにまとまりがみられない。

(柳田)

(6) 第6号遺構(第36図)

H40・I 40グリッドに位置する本遺構は、260×118cm、深さ20cmの隅丸長方形の堅穴状を呈し、長軸方向はN85°Eをはかり、第5号遺構方向とはほぼ一致している。土塙(第12号遺構)を切って作られており、周囲のピットの内、P16、P17、P18、P20、P22、P23は遺構の長辺上に相



第36図 第5号、第6号遺構実測図

012

対するものと考えられる。が、①長軸上のP19に対向するものがなく、②長辺のピットの並び方が不整であり、③ピットの向きが一定しない等疑問な点も多い。第5号・第6号遺構とも堅穴状をなし周囲にピットが検出されたが、遺構とピットの間には一定のまとまりを認めることができなかった。また、両遺構は時期決定の資料を欠く。結局遺構の説明に終始せざるを得ないが、長軸方向に並列していること、隅丸長方形のプランが類似することから両遺構が同時期のものであつたことをしめす手がかりとされるが、第1号～第4号遺構との関係には言及できない。

(柳田)

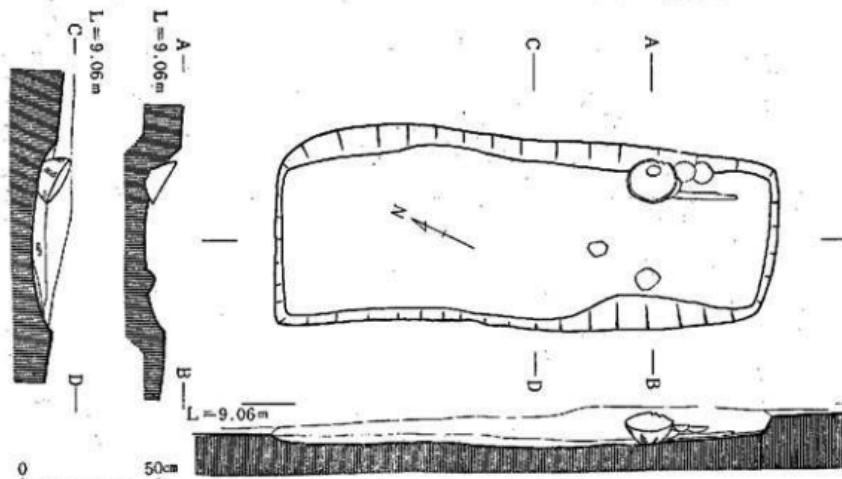
(7) 第7号遺構(土塙墓)

a. 遺構(第37図)

G34グリットから長方形の土塙が検出された。長辺186cm、短辺は北側で最大幅72cm、中央で70cm、両側で60cmの長方形を呈し、主軸はN20°Wをさす。深さは北側では地表から5cm、中央で11cm、南側では10cmで、底面はほぼ水平である。横断面は中央で11cmの深さの舟底形を呈する。すなわち、土塙の床面からわずか5～10cmまでしか確認されず、その上はカットされている。土塙の中央床面レベルは、標高8.91mで、西側に傾斜する包含地では最も高い位置にある遺構である。壁面はゆるやかな舟底形で、特に木棺を埋設したような痕跡は見あたらなかった。

b. 遺物出土状態

遺構は南側はわずかにせまくなっているが、その西壁に寄ったところから遺物は一括して出土した。床面の長辺に平行して鉄刀が鉋を北にし、刃部を東にして置かれ、その上に3枚の土師器皿がある。皿は南から順に北側へ重なっており、下の2枚は上向き、3枚目は裏返しに置かれ、



第37図

第7号遺構実測図

021

その上に青磁碗が上向きに置かれている。青磁の口縁の一端は、耕作によって欠失している。この遺物は、後世の擾乱を受けておらず、南側に頑部を置いた被葬者の右側胸部に剖葬されていた状態と考えられる。土塙底の中央部より須恵器の破片が出土したが、搅瓦土に混入していたもので、土塙墓と関係するものではない。剖葬された青磁碗及び土師器を年代の手がかりとすることができる。

c. 出土遺物

青磁碗（第38図）

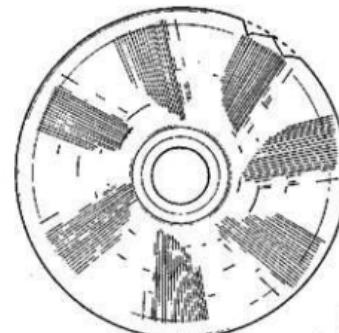
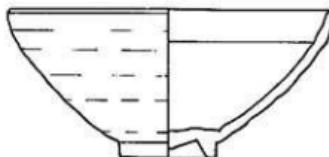
青磁は口径 17.7cm、高さ 7.7cm の高台付の碗型である。前の外側には口縁部から底部にかけて、いわゆる猫搔の手による特徴的な捺文様がほどこされる。捺目は器面の 7ヶ所に描かれて、19~21本の捺目が一つの単位となっている。

内面は花文様を刻んだ上から猫を加えるもので、ほぼ左右対称の二つの文様から構成される。作りは下手で、毛上げの痕跡がよく残っており、10mm~13mm の粘土組を左に巻き上げながら成形していることがわかり、底は箒けずりで仕上げている。良質な粘土を用いた胎土には黄緑色の釉がかかり、いわゆる枇杷色と称せられる色調を呈している。

この青磁碗は南宋福建同安窯のものと考えられている。日本では、鎌倉時代に南宋から多量に輸入されたもので、福岡周辺でも幾つかの出土例が知られている。

土師器皿（第42図 1・2・4）

低部の径が広く、口径に対して高さの低い皿である。口径は 8.2cm~9.4cm、高さは 1.0~1.3cm、底部径は 5.1~7.1cm となっている。胎土に石英などの小礫を混入し、低部は糸切りかヘラけずりがわからない程度風化しているが、第 9 号造構出土の土師器はヘラ切りであり、糸切りよりヘラ切りの可能性が考えられる。内面はなでにより仕上げがみられるものである。煤の付着したものはみられないが、第 9 号造構出土の土師器皿（第42図 5）には煤が付着しており燈明皿として使用されたものであろうか。



第38図 青磁碗実測図

鉄刀

全長26.0cm、刃わたり20.8cm、厚さ0.6cm、鋒はフクラ付き、平様平造りの短刀であるから、鏃はみられない。闇は折れているので、はっきりしないが、両闇と考えられる。茎の先端は完であると観察されるから、これで完形品である。反りはみられず、刀部、茎とも木質が多く付着しているので、口釘孔は観察できない。

d. 小結

以上記述した第7号遺構の要点をまとめて小結とする。

① 本遺構は青磁甕、土師器皿、鉄刀を同葬した長方形の土塙墓で頭部を南向きとし、被葬者の右側胸郭付近に副葬品を置いた状態と考えられる。木棺等の痕跡は認められず、直葬したものであろう。

② 青磁甕はいわゆる珠光青磁と呼ばれるもので、南宋同安窯のものと考えられている。土師器皿の時期はいくつかの調査例から、中世と考えられ、本遺構は鎌倉時代の土塙墓とみることができる。

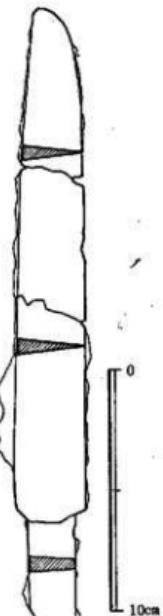
③ 青磁甕等を同葬した土塙墓の例はあまり例が知られておらず、貴重な知見をもたらす結果となったといえよう。

なお、青磁甕については第4章で一括してまとめた。(安達：前田)

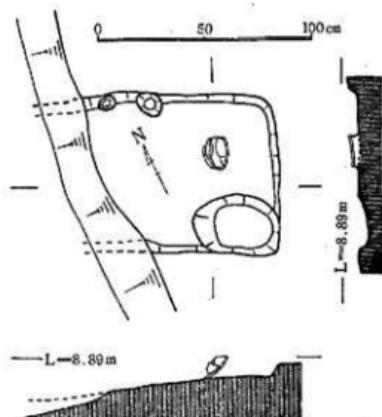
(8) 第8号遺構(土塙墓)

遺構は第7号遺構からわずか2m西に寄ったG34グリッドから位置し、幅73.0cmの四角形で主軸にN62°Wをさしている。長辺は南壁から80cmのところで南北に走る溝によってカットされ、全体のプランを確認できなかった。断面は舟底形を呈し床面から5cmの高さまでしかわからない。しかも東南壁には後壁のピットの掘り込みが見られるが南壁に寄った床面からは土師器皿が出土した。

土師器皿(第42図3)は赤褐色を呈しており、ヘラ切りと思われ、口径9.5cmと第7号遺構のものとかわりない。土師器皿は反軸の断面に接しており、木遺構に伴う遺物と考えられる。第7号遺構と同様中世の土塙墓とみることができよう。(柳田)



第39図 鉄刀実測図



第40図 第8号遺構実測図

(9) 第9号遺構(土塙墓)

a. 遺構(第41図)

本遺構はK36グリッドで発掘されたもので
70×30cm、深さ5cmの
隅丸長方形プランをな
している。長軸はN67°
Eをさし、断面は舟底
形を呈し、床面はほぼ
水平である。

東壁寄りのほぼ中央
から土師器皿が出土し
た。中央にはピットが
掘り込まれているが、
この遺構に付属するも
のではなく、後世の掘

り込みである。第2号遺構(製鉄址)の直上に位置する遺構である。



第41図 第9号遺構全景(土塙墓)

b. 遺物出土状態(第41図)

東壁寄りの床中央部から土師器皿が出土し
た。床面からわずかに浮いた状態をしめすが
、底部を下にほぼ原位置を保っていると考え
られる。

c. 出土遺物

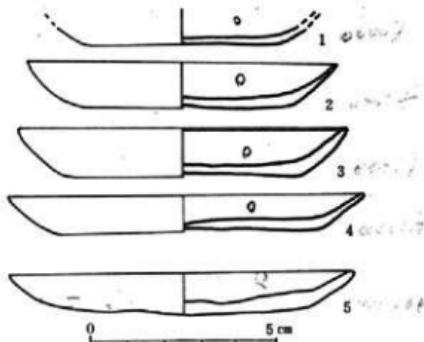
土師器皿(第42図5)

口径9.2cm、高さ1.15cmの黄褐色を呈する
皿で、焼きも良好である。内面にはなでによる
整形のあとが明瞭である。底部は矧けずり
によっている。また、一部に煤が付着してお
り、透明皿として使用されたものであろう。

遺物の出土状態は第8号遺構に一致し、出土遺物は第7号、第8号遺構の土師器皿とかわりないものである。

長軸の方位が異なり、遺構の大きさは著しく小さいが、形体は類似している。遺構の上部が
削平され推測の域を出ないが、第7号、第8号遺構との類似点と年代のへだたりはなくことを重
視し、土塙墓とみなした。土師器皿は副葬品と考えられ、斜面の高い位置にある東壁を頭位とする
小児人骨か冠葬人骨の埋葬が考えられるであろう。

(安達: 柳田)



第42図 土師器皿実測図

10 第10号遺構

a. 遺構

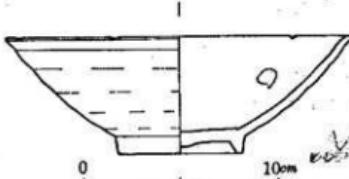
第7号～第9号遺構はC地点から発掘された例であるが、小さな谷をはさんだA地点の拡張区R10グリッドから同様な例を確認した。このグリッドは包含地の調査の中で第一期に終了できず、10月下旬に持ち越されたところで、遺構の状態を明確にするに至らなかった。しかしR10グリッドや隣接するグリッドにも土師器皿は出土しており、遺物の出土状態はC地点とかわるところがないので第7号遺構に類似した土塙墓の可能性を考慮して遺構として取り上げた。



b. 出土遺物

青磁碗 (第43図)

口唇に5つの刻みを付し、五花形をなす。口縁部の外反する碗形の青磁で、見込みに沈線を施し、口唇の間を細い樹描の草花文をうめる。高台は浅く、抜け目りで、器壁がうすく、白色の良質な粘土を用い、焼きは硬く、高台までは全面に釉がかかる。色調は青白磁に近いがやや褐色を帯びており越州窯系統のものと考えられ南宋のものに比定されるものであろう。第7号遺構の青磁と同時代の中世の土塙墓と考える根拠である。



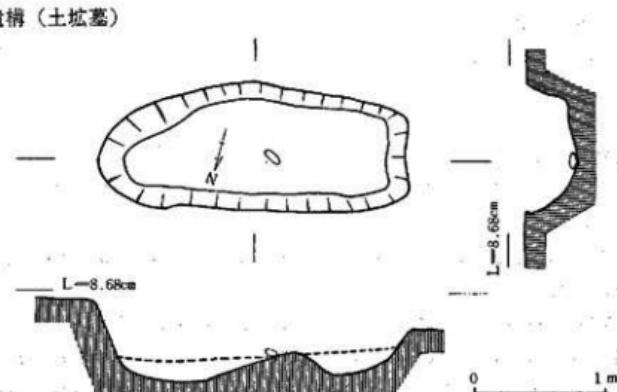
第43図 青白磁碗実測図

(島津：卯田)

11 第11号遺構（土塙墓）

G37グリッド

の遺構は、長さ
118cm、幅19cm
の長楕円形で中
央の深さ20～30
cmの断面舟底形
を呈する土塙で
ある。主軸はN
75°Eをさし他の
の遺構の方向と
異なる。中央の
床面から長さ



第44図

第11号遺構土塙墓実測図

8.9cm、厚さ1.8cmの小円錐（花崗岩）があり、そのまわりから石器1点フレーク2点が出土した。石材は全て黒曜石で、他に土塙内の土中から多くの黒曜石のチップスが出ており、土塙の上面はカットされているが、土塙内は擾乱を受けていないと考えられ、これらの遺物を副葬する土塙墓であろう。

b. 出土遺物（第45図）

石鏟（黒曜石、1点）

片面に主要剝離面を残し、周辺には両面から調整を施している。先端を欠くが、長さは約2.3cmで、えぐりは浅く、ほぼ左右対称の形状をなす。

剝片（黒曜石、2点）

2点とも主要剝離面を残し、剝片末端部には挿入部位を持ち、断面は台形状を呈する。剝離角は、110~120°である。

包含地には弥生土器はみられないから弥生時代の土塙墓と考える根拠はうすい。円形の土塙墓は縄文後期にもみられるが、長方形又は卵円形の土塙墓は縄文時代前期の出土例があり、石鏟の形、剝片の特徴は前期の石器にみられる特徴と一致する。本遺構については第4章で後述する。

（安達：柳田）

c. 第12号遺構（第36図）

本遺構はH41、I41グリッドの第6号遺構と複合している。長さ134cm、幅68cmの長方形を呈する断面舟底形の土塙で、床面から10cmの高さで第6号遺構によって切られている。全体の形を知ることはできず、出土遺物もみられないが、土塙のプランは第11号遺構に類似しており、縄文時代の土塙墓と考えられる可能性もあり、遺構として取り上げた。包含地の擾乱層から縄文時代の石器が出土していることも可能性を指摘する材料の一つである。

（柳田）

d. 集石遺構（第46図）

表土直下の黄褐色土を卵円形に掘り込んだ中央に、川原石を集積する。掘り込みは東西60cm、南北65cm、深さ約8cmを計り、集積の範囲は東西45cm南北40cmでプランは掘り込みと略一致する。石は角がとれたこぶし大の円錐ばかりで、3~5段にわたり集積する。石積みの下にも何ら遺構は検出されず、性格については全く不明である。



第46図 集石遺構出土状態

44

る。ただ第1号遺構北側壁に集石が認められており、あるいは何らかの祭祀的な意味をもつものであろうか。第4号遺構の性格とも関係するものであるかも知れない。(塙屋)

(4) その他の遺物

(1)～(3)まで遺構としてまとまったものを記述したが、包含地擾乱層には、各種の遺物が含まれていた。それらの遺物についてここで一括して取り上げる。

a. 石器

石斧 (第47図1)

V21グリッドの黒色土出土。12.3×4.9cm、厚さ2.0cmで表面は風化を受けているが、刃部の鋭い局部磨製の石斧で、安山岩を石材とする。

石匙 (第47図2)

K34グリッド黒色土上面から単独で出土した。石材はサスカイト、4.5×2.4cm、厚さ0.5cmの横形石匙で、ほぼ中央につまみを作り、両刃から削離して刃部としている。

石鑿 (第47図3・4)

3はJ33グッド、4は3号遺構付近溝のそれぞれ黒色土から出土した。いずれも風漬け石製、3は長さ1.5cm、4は長さ1.8cmと小さく、ほぼ二等辺三角形を呈する。

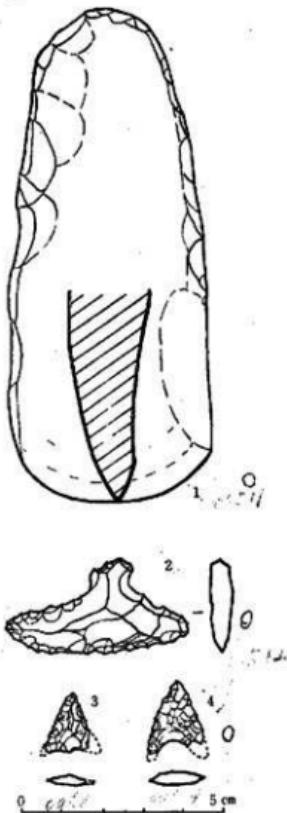
石斧、石匙、石鑿は包含地の各地点から単独出土の例で属する。其体資料の不明なものもあるが、いずれも縄文時代の石器と考えられ、これらの石器は、九州では轟式、菅原式等前期の土器に共存する例が多いことが知られている。

b. 頸窓器

殆んど細片であるが、器形を確認できるものが若干残り、甕、壺の破片が検出される。甕は肩部のみで、外面が格子状および平行たたき目を施し、内面は青海波文を施す。壺は、高台の部分が殆んどであり、高台は低く、寸ばかりで、直立する傾向にある。いずれも胎土、焼成は不良である。

c. 土師器

器形は高台付盤と平底の皿、把手の破片を検出できる。前者は、高台はうすく、外反するものが多く、焼成は良好で表面がヘラ調整されて光沢を有するものもある。皿は第7号～第9号遺構より出土したものと、胎土、焼成とともに類似するものが多い。



第47図 石器実測図

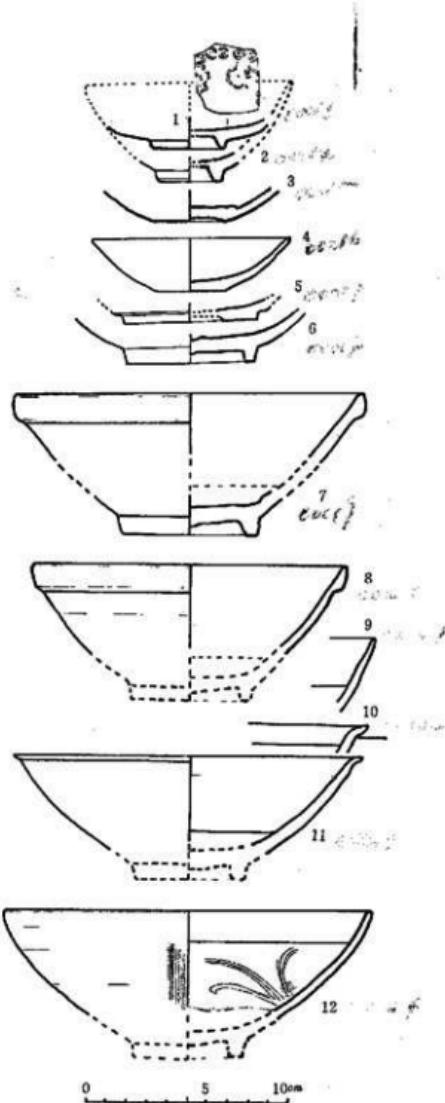
d. 瓦器

胎土、焼成とともに粗雑な高台片が出土。内外面とも灰黒色を呈し、表面は磨滅している。ごく少量である。

e. 青磁（第48図）

包含地の各グリッドから多くの青磁片が出土したが、いずれも擾乱状態である。器形、施文の特徴的なものを取り上げて記述する。

1は高台の低い小さな皿形をなし、見込みに菊花状の渦まきを充し、全面に緑釉がかかる。2は高台のけずり出しがシャープで、黒釉のかかった天目茶碗である。高台のない皿形のものには二種類ある。3は底部がやや上底になるもので、4は平底をなす。口径9.8cm、高さ2.6cm。ともに淡青色の釉がかかる。5は高台の低く厚い例として取り上げた。6は高台の立上がりが高く、暗青緑色釉のかかったもので、碗形をなす。7・8は口縁部を折り返し、見込みに沈線を入れる特徴的な碗で、7は器底の厚いもの、8は薄手のものである。7は立ちあがりの高い高台を窓で削り出す。口径15.4cm、8の口径は17.2cm、ともに白色の良質粘土を磁胎とし、淡青色の釉がかかるもの、乳褐色のもの、貫入のあるもの、施釉しないものなどがある。この他、口縁部の器形にはやや内凹し、内面に沈線を刻するもの（9）と、口縁部の外反するものがある。10は口縁内側に沈線を刻し、口縁は厚く丸味を帯び、11ほどシャープではない。口径は復元できない。11の口縁部は薄手で上面は平坦となる。口径17.0cm、見込みに沈線を刻み、内外に荒い貫入がみられる。12は口径18.7cmの内凹する碗形



第48図 青磁類実測図

帶び、11ほどシャープではない。口径は復元できない。11の口縁部は薄手で上面は平坦となる。口径17.0cm、見込みに沈線を刻み、内外に荒い貫入がみられる。12は口径18.7cmの内凹する碗形

を呈し、見込みと口縁部の沈線の間に櫛描きの上にヘラ状工具で草花文を配し、外面には垂下櫛描きを施す。巻上げの痕跡をとどめ、茶褐色の釉がかかっている。図示しなかったが、この他に口縁部がうすく平らになり、11の器形と類似するものが含まれている。これは、茶褐色の釉がみられる白磁に近い感じのものである。いわゆる珠光青磁にもいくつかの器形のものがあることがわかる。14よりは古く考えられるものではなかろうか。

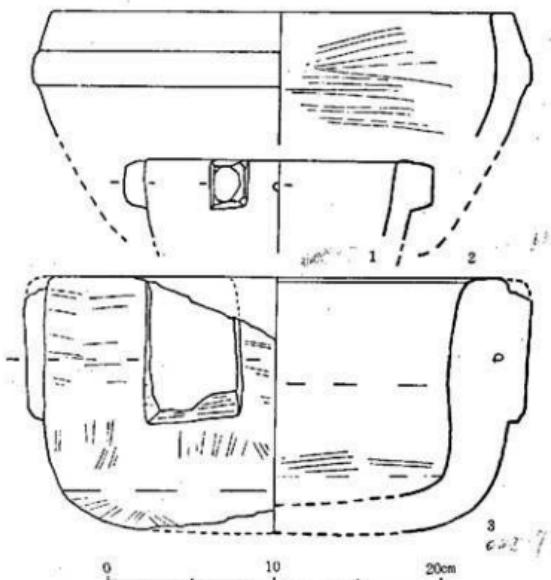
1は象嵌入りの高麗青磁、2は南宋建窯（福建省）の天目に類似し、3～5、7～11は龍泉窯（浙江省）の青磁類と考えられる。6はこの中では数少ない越州窯（浙江省）の青磁碗、12は同安窯（福建省）の珠光青磁と呼ばれているもので、南宋建窯のものが紹興されているが、7、8、11は、その中でも古い時期のものと考えられるものであろう。この他に高麗茶碗の井戸に近いものもあり、須恵器質の緑釉陶器が含まれていることが注意されるが、数は少ない。古燒龍燒に類似した磁胎のものもある。これらは中世と考えられるものであるが、土師器皿を除いて、日常雜器類は少ない。一方、古伊万里焼の茶碗、古唐津焼の鉢などの製品も含まれており、近世と考えられるものも若干含まれている。

1. 石鍋（第49図）

1はL40グリッド搜乱層からの出土品で、器壁が3.5cmと厚く、底部は2.4cmをはかる。内面はきれいに仕上げるが、外表面は荒けずりのまままで巾広い把手を持つ。口径27.6cm、高さ15.4cm、底部に煤が付着している。

2は口径12.8cm、腹が張り底がせまくなる形のもので、腹部に2.0cm巾の凸帯をめぐらす。腹部下半を欠くが、復元高は12～13cmであろう。

3は口径16.0cm、復元高は10～12cmとな



第49図 石鍋実測図

る。口縁部に2.2×3.0cm、厚さ1.2cmの把手をつけ、径0.8cmの孔をうがっている。いずれも滑石製石鍋で、中世の遺物とされているものである。

（柳川）

小 結

前述したように包含地からは各種の遺構が検出され、出土遺物はいくつかの時期に分類できる。第1号、第2号遺構は製鉄遺構であり、第4号遺構は住居址と考えられる。第2号遺構は鉄の生産過程をあらわす遺構で、第1号遺構はその前段階の鉄生産にかかわる遺構であり、第4号遺構は鉄生産、作業と密接な関連を持つ住居址であろう。

第2号遺構出土の須恵器はふいご羽口、鉢形共伴する出土状態からこの遺構の年代の手がかりとされる。第4号遺構に伴う土葬器は福岡市篠栗遺跡の出土例に類似し、関東で真間式と呼ばれるものである。また、高台付帯も年代決定の手がかりとことができる。

第3号遺構は中央にかを持つが、鉄滓はみられない。遺構の性格決定には資料不足とせざるを得ない。東北隅には集石がみられ、製鉄遺構と関連する祭祀的様相を持つ遺構との見方もできよう。同時期のそれぞれ性格を異にする三つの遺構が一つの合戸に隣接して発掘されたことは古代鉄生産のあり方を明確する上で重要であるばかりでなく、相互の関連性を求める点で、古代製鉄研究史上に新しい知見を加えることができよう。

第7号～第10号遺構は中世の上塙墓とみられるものである。擾乱層出土の青磁片、滑石製石鍋も同時期に比定されるものと考えてよいであろう。

第11号遺構は縄文時代の土塙墓とみられ、石匙、石蔵、石斧は縄文時代の様相をしめす出土品と考えられる。

これら三時期の遺構の性質、包含地からは各時代の遺物が複合して発見されたが、地山の直上まで擾乱を受けていた。地山を切り込んだ250を越えるピットはいくつかの時期のものが複合している。第2号、第4号遺構に付属するもの以外に、土塙墓を掘り込んだ中世以降のピットも含まれ、一方土塙を切る溝も走っている。これらのピット群がどのようなまとまりをもって遺構の単位を構成するかをつかむことはできなかった。従って第5号、第6号遺構の性格を決めるることは躊躇せざるを得ない。

包含地の須恵器・土師器もかなりの出土数をみた。第2号遺構出土の須恵器は製鉄遺構の年代を決める手がかりとされるもので、古墳出土の須恵器との関係が問題となる。この中で、縄文、製鉄遺構、住居址、青磁については別項をもうけて考察を試みた（第4章参照）。（柳田）

4. 古墳群の調査

上和白の古墳は事前調査の段階で猿の巣古墳、宮前1号墳、3号墳、高見5号墳の4基が確認されていたが、いずれも横穴式石室構造の後期古墳で、もっと密な古墳群を構成することが予想された。特に宮前古墳群と高見5号墳の傾斜面は雜木で足を踏み入れることができない状態だったので、伐採焼却して古墳の確認に努める作業が加わった。

お盆明けの上和白第2期は、8月17日から10月31日までを古墳の調査期間とし、石室の構築、墓域と石室の関係等古墳築造技術の把握に力を注いだ。

前半期(%)は、傾斜面に立地する他の古墳とは様相を異にする丘陵頂部の猿の巣古墳(島津)、保存良好な宮前3号墳(塙屋)、斜面に一基のみ存在する高見5号墳(匯平)、須恵窯と思えた窯跡(安達)の4班を編成し、さらに古墳の地形測量班(板橋)をもうけた。合わせて宮前3号墳付近一帯、及び高見5号墳の間の山焼きを実施した。暑い盛り、調査員、作業員は旬日の間火付けと消火の警戒にあたるという思わぬ作業に苦んだ。炎天下の雜木はたちまち天をこがし、地元消防団がかけつける一幕もあった。その結果新たに4基の古墳を確認し、高見1号～4号とした。9月中旬から全員で高見1号～4号墳の調査、その後大神社内の宮前1号墳、2号墳の調査を継続し、古墳調査の終る頃には、時折ハッと虫の音に耳をそばだてる程度は深まっていた。ここでは高見古墳群、猿の巣古墳、宮前古墳群の順に調査の結果を記述する。(柳田)

(1) 高見0号墳 [第50図]

高見2号墳の西側に位置し、円墳状の盛土をもつ。発掘の結果、内部には全く造構はなく、盛



第50図

高見0号墳全景(北から)

土はⅠ層からⅢ層まで認められる。各層とも非常にやわらかく、単に盛り上げただけのものである。造物としてはⅡ層から須恵器小破片が二点出土しただけで、構築時期を決める有力な資料は得られなかった。須恵器片の出土については、0号墳の盛土を高見2～3号墳の周辺からもってきた際に混入したものと考える。また、高見2号墳の前庭部から完形の青磁が出土していることと、高見2号墳前庭部と高見0号墳とが接近している点から考え合わせ、高見0号墳が中世の祭祀的意味をもつ造営と関係があるのではないかと考える。

(国平)

(3) 高見1号墳

a. 位置と外形

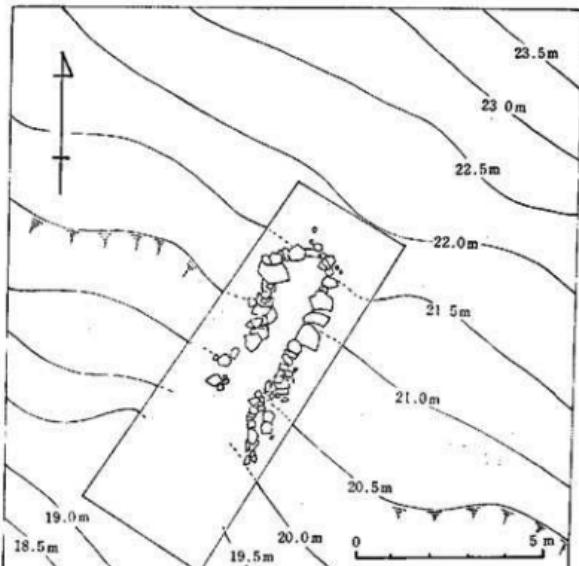
第116図の如く、1号墳は高見群のうちで最も奥の南緩傾斜面に立地する。表面からの観察では、封土はほとんど認められず、わずかに表造部の石の一部が地表に露出していた事から、本墳の存在が知られた。表土を除くとすぐ天井石と側壁の一部が表われた。かつて、耕作地に利用した事は無いということであるから、盛土は流れたのでなく元来ほとんど石室を覆うばかりの簡単なものであった事が予想される。

天井石は二石あり、奥壁上の1個は、半分が石室内に落ちこみ、さらに玄門上のものは東側がはずれ、閉塞石上に乗っていた。石室内部には、天井石の間から土砂が流れ込み、全面埋まっていた。しかし、表造時には、天井は三石あったと考えられる(第53図参照)。真中にあたるものには、恐らく盗掘時に動かし除かれたものであろう。

b. 墓塚

赤褐色の地山は表土面と同様に北東から南西へゆるやかな傾斜を示すが、その傾斜にそってL字形に墓塚を掘り込んでいる。

墓塚の深さは、北側では奥壁の下部と同一であり(120cm)、床面はほぼ水平である。奥壁の下部は墓塚の壁面に密着して掘え、安定を計っている。間には地山と同じ赤褐色土をもちいて埋めている。墓塚は奥壁部では方形をなすが、表造部へい



第51図

高見1号墳地形実測図

くにしたがって窄まり全体として三角形をなしており、羨道部まで続き消える。

c. 内部構造 (第53図・54図)

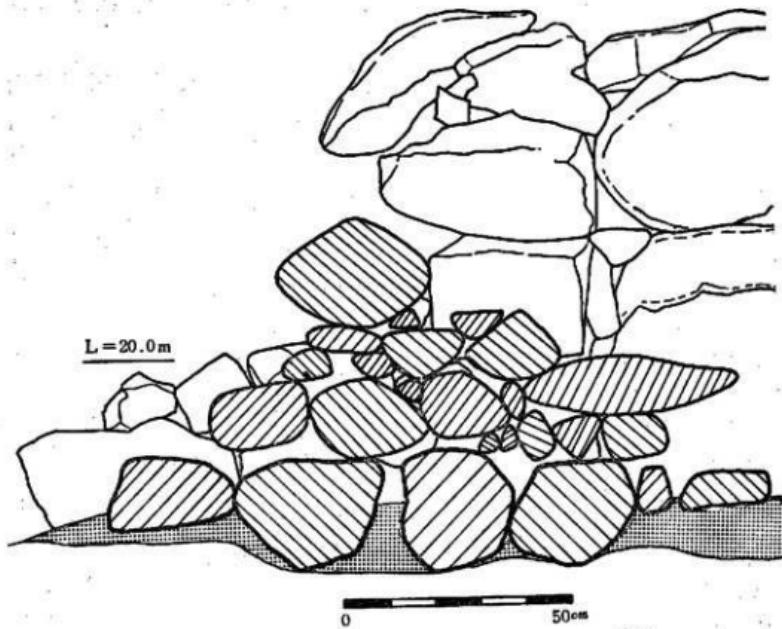
横穴式石室の両袖式である。主軸方向はN $20^{\circ}W$ を示す。

玄室

奥壁には滑丸三角形の一石 (砾石) を用い、上部に生ずる間隙を人頭大の角礫 (砾岩・砂岩) で補充している。側壁は角礫 (砾岩・砂岩) の長方形の面を合わせ築き、最下部、最上部の石は大、中位では小礫を用いている。又側壁と奥壁の接合部では、側壁の石を上にいくに従って順々に奥壁方向に石を渡すことにより側壁の内傾を計り、やや持ち送り状を呈する。床面の約半分は擾乱されており、過口の盗掘による所作であろう。残った部分は三角形や長方形の扁平礫 (砾岩・砂岩) を入念に組み合わせ、生じたすき間を小礫で補足していた。玄室は約150cm×142cmのはば正方形をなす。袖石はふぞろいで、西のものがやや玄室内に入り込む。

羨道

玄門部は大石3個 (砾岩) を重ね、袖となしている。玄門幅は81cmを計る。更に玄門の床には



第52図 高見1号墳閉塞石断面図

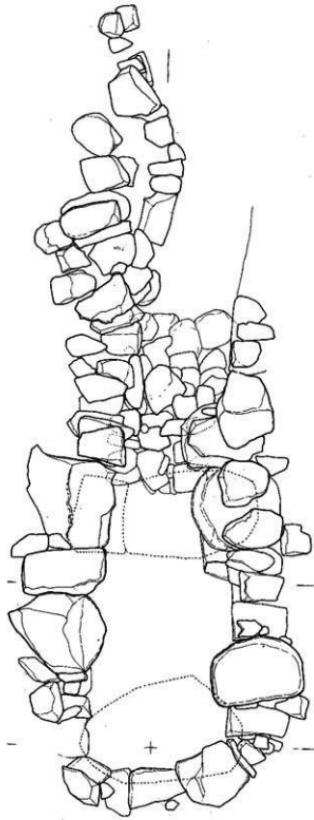
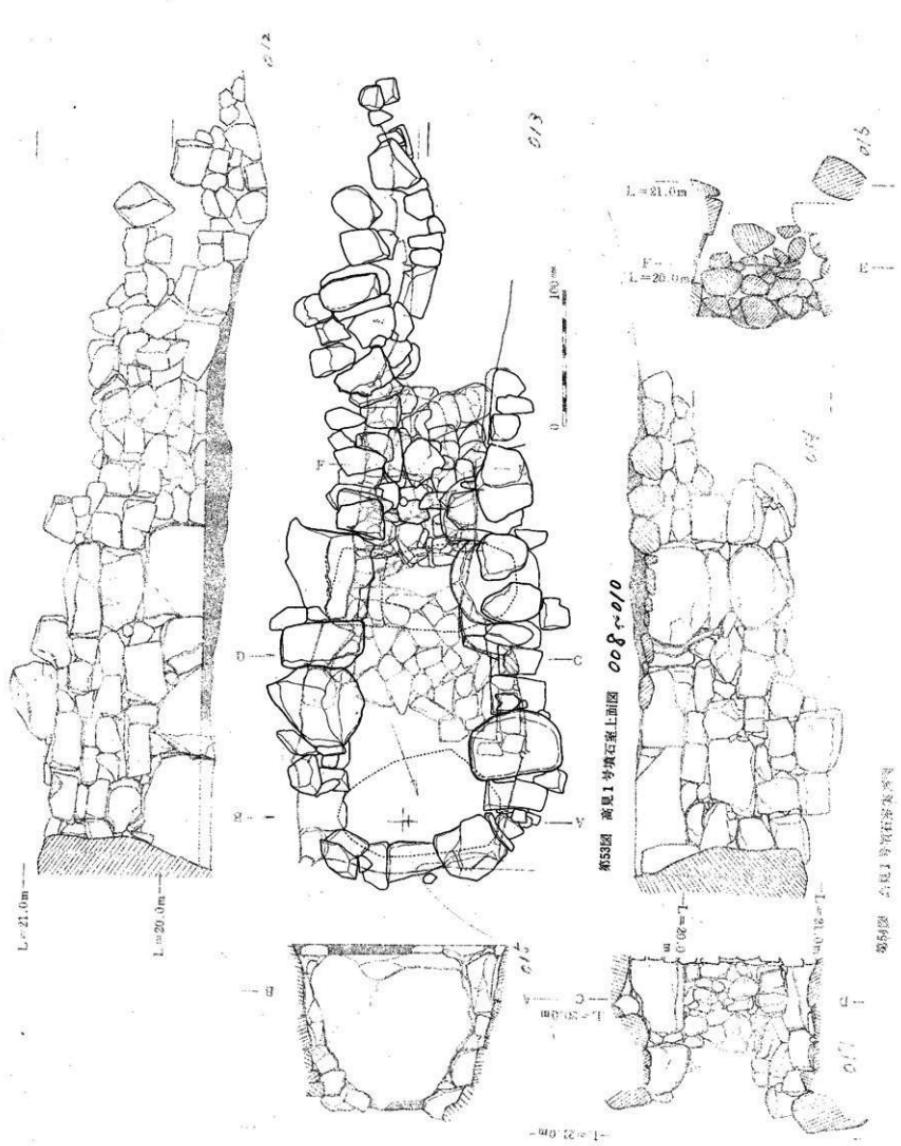


图5538 满足1号带右室上面图 $0.8 \sim 0.9$



第54图 高尧1号块石层剖面图



長方形の2石（礫岩）を横立させ、門仕切石となしている。それを境にして前方の床面はやや大きめの角礫（礫岩・砂岩・珪化木）を主軸と直交して組み、間を小角礫で補足しているが、玄室の床面と比べ凹凸が目立つ。渡道側壁は玄室周壁より小さめの礫を用いている。しかし組み方が雑である。特に前方では壁石が動き築造部に崩れ落ちていた。

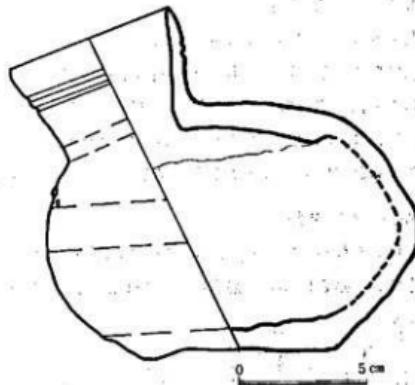
閉塞石（第52図）

門仕切石よりも前の築造部に残っている。大小の礫を都合良く組み、全体のバランスを安排している。上石の一部が動いていたのみで全体として築造時の姿を保っていた。石の間に粘土等の使用は認められなかった。

d. 出土遺物

玄室内より、金環、鉄鎌、ガラス玉、切子玉が出土したが、いずれも床面から浮いた状態であった。これは盗掘による攪乱であると思われた。西側袖石に接して平瓶が正位で出土した。又閉塞石下の礫床の間から馬具、鉄鎌が出土した。

須恵器（第55図） 平瓶である。口縁部及び胴部にはひずみが生じ、全体としていびつである。高さ（最大）12.4cmを計る。全面にかき日が著しい。色調黒灰色。口縁部に二条の沈線を認めるが全周していない。



第55図 須恵器実測図 ○

鉄鎌（第56図2・第57図1～3）

玄室から出土したものは頭と茎の先端は消失し、全長は不明である。平根の真中に三角形（4mm×7mm）の透しを持っている。頭の形状は不明である。茎には木質等は認められない（第56図2）。築道のものは二本重なったままで出土し（2が上）、頭を南に向けていた。それぞれ茎に木質等は認められない。1は全長14.8cmあり、2も一部消失しているが同大のものであろう。

門仕切石の南側、閉塞石床面から鉄鎌が出土した。先端を消失していて形式も明らかでない。断面は長方形をなす。

馬具（第57図4～6）

皆の各部分である。4は引手で、先端を環状にし、やや屈曲させている。5は鉄製鏡板である。梢円形をなし一方にL字状の立闇を持つ。6は鉄製釦金具である。全長6.7cm、巾2.5cmを計る。

刀子（第56図1）

茎を消失している。鋒はややカマス仕立に近い。断面三角形を呈し、平様である。

金環（第56図6～10）

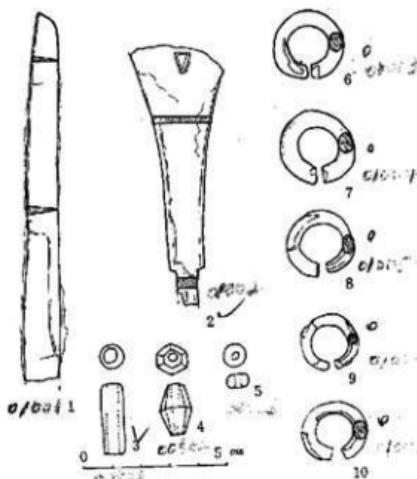
全て銅芯金張りである。7を除いて腐食が甚だしい。計測出来るものの内径を示すと、6（ $1.480\text{cm} \times 1.410\text{cm}$ ）、7（ $1.435\text{cm} \times 1.410\text{cm}$ ）9（ $1.350\text{cm} \times 1.285\text{cm}$ ）と、いずれも正確には円形をなさない。又断面も階円形であるが、これは恐らく①芯に金を張りつけ②更に、たたいて環状をなすという製作技術によって生じたものであろう。

ガラス玉（第56図3・5）

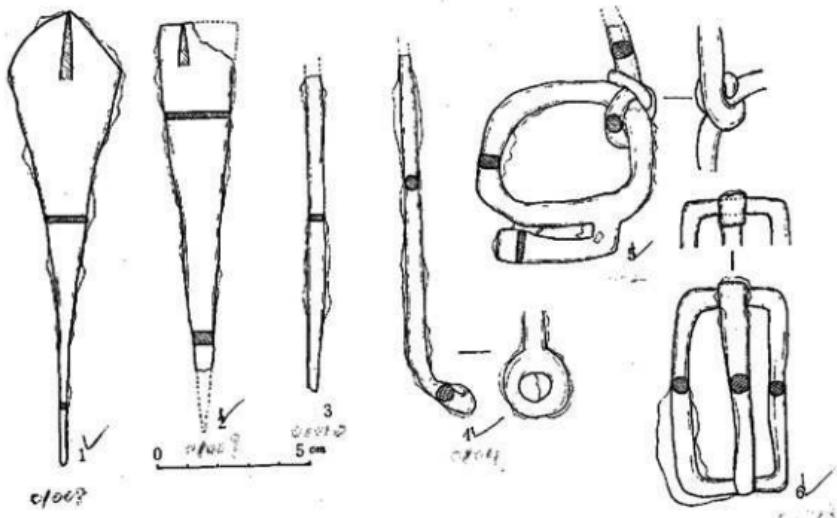
丸玉は $4.1\text{mm} \times 8.5\text{mm}$ を計る。表面は風化して白色を呈す。他に同様のものが一個出土したが著しく風化し図示出来ない。管下は緑色を呈す。長さ 22.53mm 、径 8.4mm である。穴は大きくあけられていて、端はやや丸味をなす。

切子玉（第56図4）

六角形をなし、穴は一方が大きい。端は丸味をおび表面には小さな凸凹が観察出来、仕上りは良くない。長さ 17.3mm 、最大径 11.5mm を計る。以上の遺物の他に、淡直部前方、表土層より黒唯



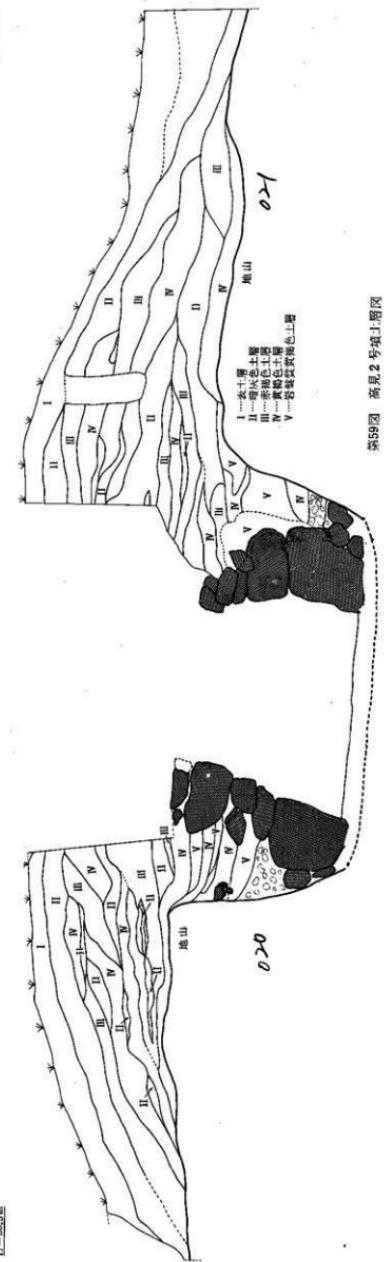
第56図 玄室内出土遺物実測図



第57図

表土層出土遺物実測図

第五圖 高見2號地圖



石の銅片鐵が出土した(図版21参照)。

e. 小結

以上述べた如く、高見1号墳は福井地方の通常の後期横穴式石室墳と何ら変る事はない。最後に高見群内に於ける問題として、以下を並記して小結としたい。
①、立地よりみると高見群の最奥部にあり、築造時間が一番新しい可能性がある。
②、石室構造は天井部が玄室幅より低いという事も①を裏付ける。
③、にもかかわらず馬具の副葬等が見られることには留意しなければならないであろう。

(島津)

(3) 高見2号墳

a. 位置と外形(第58図)

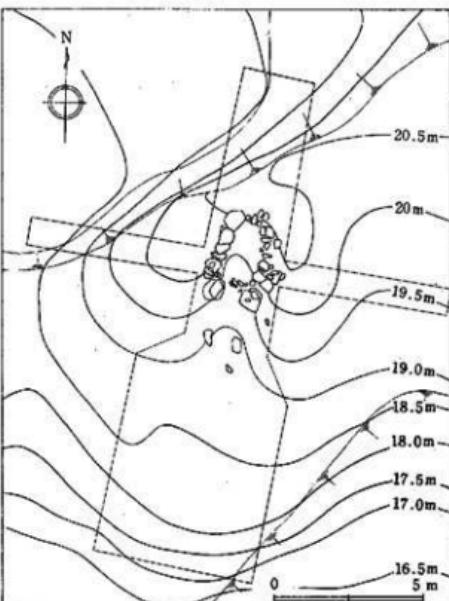
本墳は高見古墳群4基の中で最も西にあり、丘陵斜面先端に築造されている。3号墳と近接し、西方11mの位置にあり、墳頂部の標高は、20.0mを示す。外形は東西約7m、南北約8mの円墳である。墳頂部から南側にかけて凹状の陥没孔があり、石室の一部が露出し、南へ開口する横穴式石室であることが知られる。

b. 封土(第59図)

封土の土壇は、石室主軸と直交して東西へ設定した、幅2m、長さ7mのトレンチの断面によって観察した。さらにこのトレンチは東に延長し、第3号墳との切り合い関係の追求を意図した。

トレンチ北壁の土層は、地山を平坦に整地して墓塙を掘り込み、玄室側壁の構築と同時に盛土を行なっていると考えられる状態が観察された。すなわち、墓塙と側壁底部の間には人頭大の礫岩を敷き、その上に小角礫を詰めて礫石の安定を計っており、墓塙上面と側壁の間まで、黄褐色土(岩盤質土)を詰めている。墓塙掘り込み上面からの地山は、平坦に東西へ伸びており、その上に暗灰色土、黄褐色土、赤褐色土を交互に積み上げて盛土となしている。盛土の表面は表土下の暗灰色土層であると考えられるが、西側は削られているため掘の位置は不明であり、東側は第3号墳の裾と接している。墓塙床面から盛土頂部までは、推定270cmである。

c. 墓塙



第58図 高見2号墳地形実測図

022

地山を全面露出できなかったため、その全貌を記すことはできないが、東西のトレンチによれば掘り込み上面幅370cm、下面幅250cm、深さ150cmを測り、掘り込みは急傾斜でなされている。平面形は、玄室の四隅の部分を明らかにしないまでも、ほぼ石室のプランに合わせているものと考えられ、玄室の四周をめぐり、狭道先端まで掘り込まれている。この掘り込みは、さらに南側へ伸びて墓道をなすが、墓塚と墓道が同時に掘り込まれた場合と、墓道の掘り込みが、石室構築の後になされた場合の両方を考えることができよう。

d. 内部構造（第60図）

石室は両袖式の横穴式单室で、主軸をN7°Eにとり、ほぼ南に開口する。玄室の平面形は長方形に近く、長さ200cm、最大幅180cmを測る。奥壁の石積みは、腰石として2枚の石を使用しているが、1枚は高さ80cm、幅120cmの大石を東側壁先端と小口を合わせて立て、西側壁との間は小形の石を立てている。その上には大小の石を持ち送り気味に不規則に積み上げ、石組みの間隙には、角礫が詰め込まれている。側壁は、各3枚の石が腰石として立てられ、その上にやや小形の石が積み上げられている。石材や石積みの状態は尖壁と同様である。玄室の床は相当荒らされており、床石は殆んど抜き去されていた。ただ、袖石から閉塞石にかけての部分には、原位置をとどめる状態で残存しており、本米の床面はその上面であると考えられる。ここで注目すべきことは、奥壁に接する部分の状態である。奥壁より20cmの間には両側に至る掘り込みが認められ、奥壁と掘り込み部との間には15cm×15cm大の幅をもつ角礫をつめ、上面は平坦である。これは奥壁腰石の安定を意図したものとするには充分にかみ込んではいない。墓塚の掘り込みに裏して、奥壁の腰石を据えるために墓拡下面を溝状に掘ったことを想定すれば、腰石との間に石を嵌き、さらにその上に床石を置いたことが考えられる。しかしながら、側壁寄りの床にこのような状態は起業されず、きわめて特徴である。狭道は二つの袖石によって玄室と境をなし、その間は80cmを測る。床面は玄室より10cm高いが、段をなす状態でない。閉塞石は袖石のやや外側から1mの範囲でなされている。袖石の間に、幅35cm、厚さ20cmほどの石を横たえて最下段の石となし、その上に小形の石を積んで石室を閉じたと考えられるが、東側の側壁寄りにわずかに残るのみである。外側の閉塞石は、そこより1mの位置に小形の石が3枚置かれているが、中間部の石積みは破壊されている。閉塞より外側の石組みは1段を残すのみで先端は奥壁より520cmの位置である。

e. 墓道

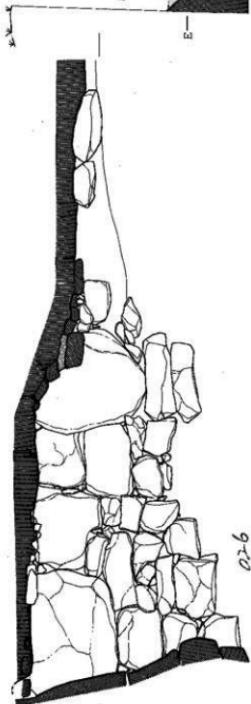
狭道石組み先端より、自然地形の傾斜に沿って南側に伸びる掘り込みが墓道であると考えられる。幅は100cm内外、深さ30cm程の断面逆台形を呈し、南側に行くにつれ西に偏する。しかしながら、その先端がどこまで続くのか、明らかにしていない。

f. 遺物出土状態

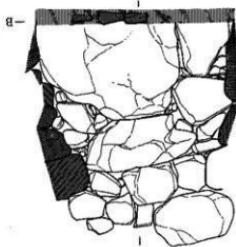
石室の露出作業の過程で、狭道石組み先端から墓道にかかる付近より、竹や稚木の根に絡み付いて土器片が出土し、その中には完形の青磁碗があった。さらに、そこより南側にかけての堆積土から床面にかけて、多くの土器片が、いずれも洗れ込みの状態で破砕されて出土した。また、墓道内には石室の石材が転がっており、これらの土器片は、本来狭道石組み先端付近の墓道に置かれていた。

高見2号坑石室測圖

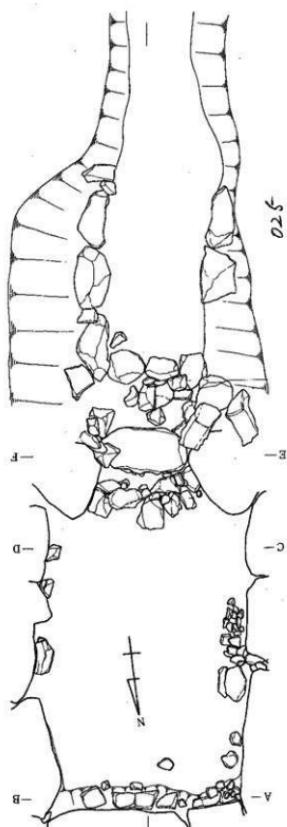
026



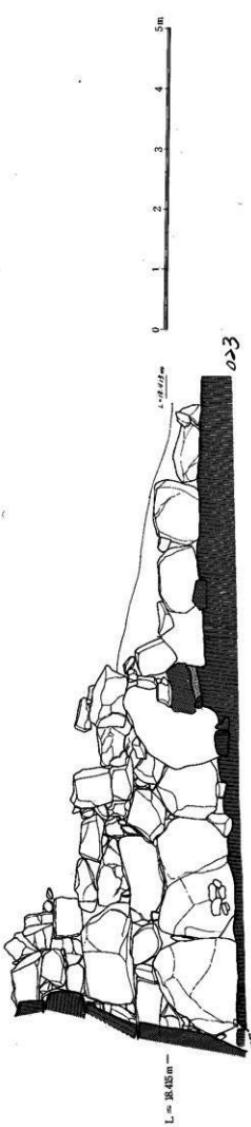
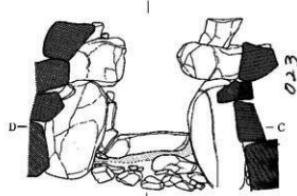
024
L = 8.65m
A



025



023



ていたものが、後世の擾乱により、墓道の傾斜に沿って、下方へ広がったものと考えられよう。また、墓道から銀環も出土した。

石室内に床面が荒らされており、閉塞石付近より、鉄器の細片が出土したが、いずれも原形をとどめるものはない。また、玄室奥壁付近の擾乱層中より、勾玉、ガラス玉、土玉などの装身具が出土した。

g. 出土遺物

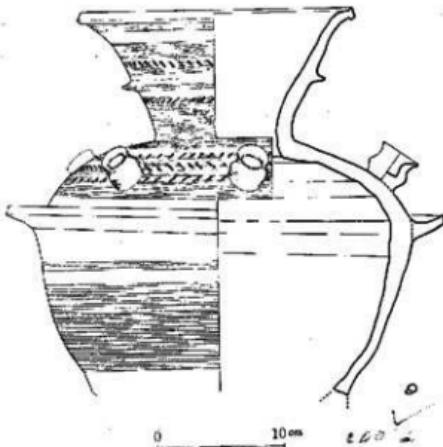
須恵器（第61図、第62図） 墓道から墓道にかけて出土した須恵器の器形は壺を主体とし、壺、平瓶が混じるが子持壺も1個体分出土した。

子持壺（第61図）は、口径21.4cm、胴部最大径34.4cm、現存高30.2cmを測る広口壺の肩部最大部につばをめぐらし、肩部に5個の小壺を配するものである。外窓して開く口頭部は中央の三角尖端によって二分され、上下に梯状施文具による斜行刺突文をめぐらす。

肩部に付けられている小壺は口径約3.2cm、高さ約2.7cmほどで、3個が残るが2個は痕跡のみである。外面はかき目調査がなされるが、底部近く斜行の平行たたき目を残す。底部は残存する先端に外寄する状態が認められ、脚台が付くものと考えられる。

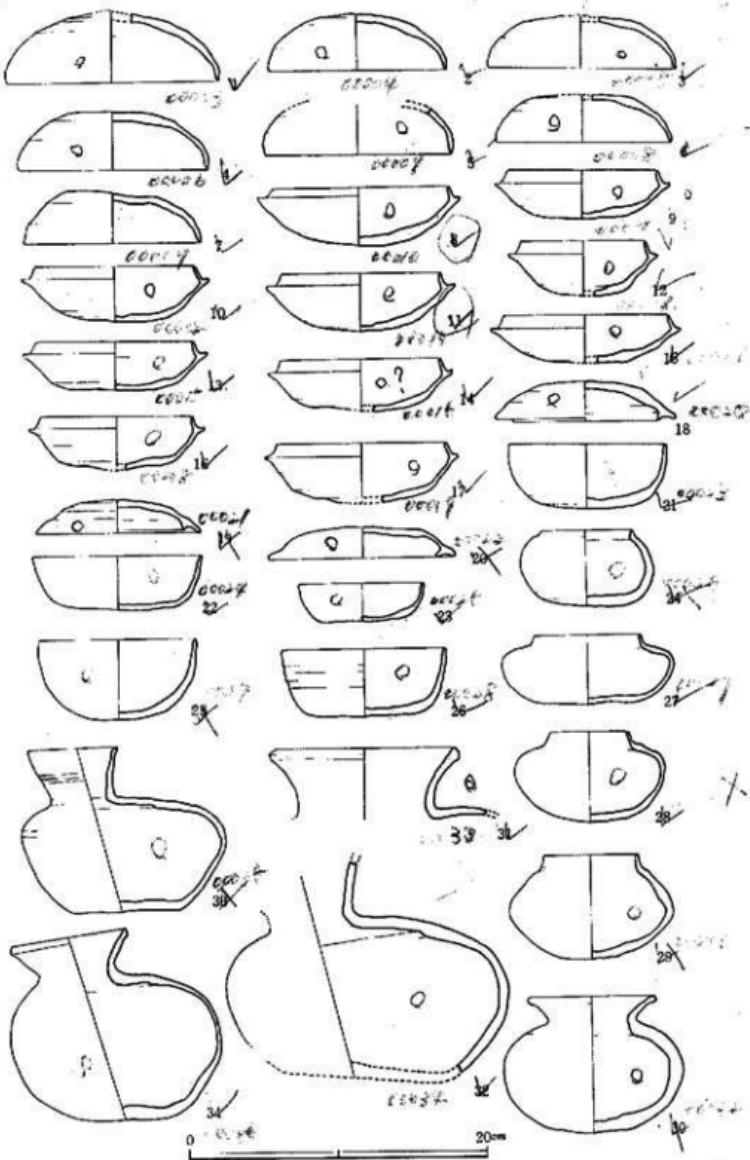
壺（第62図1～25）の蓋には、蓋受けをもつ身とセットになるもの（1～7）と、かえりのあるもの（18～20）がある。前者は口径4.5～3.0cm、口唇内側は丸味をもつ。胎土、焼成はふつうで、色調は暗灰色を呈す。18～20は、かえりは退化し口縁内側に入る。焼成は土師器に似て、色調は褐色に近い。壺身の8～17は、最大径13.4～10.0cm、深さ3.8～3.0cmで、たちあがりの高さは0.8～1.0cmに含まれる。胎土、成形、調査は蓋と共に通る。21～25は、底が平坦に近いものが多く、24のごとく丸底に近いものもある。25は体部に三条の沈線がめぐる。26～29は短頸壺で、変形する27を除けば、口径6.0～5.0cm、高さ7.0～5.0cmの小形のものである。30は短頸壺で、口径8.4cm、高さ9cmを測る。平瓶（31～34）は31、32が破片であるが、33、34は完形品である。33は、口径5.8cm、最大径13.5cm、高さ11.0cm、肩が張り、底は平底、口縁線は水平である。34の形状は32に比べ、なで肩で丸味を帯びている。

鉄器（第63図1～6） 1は片側の平刃平造り直刀で、4片に折れ鋒を失う。刃幅は2.2cmを計るが、他の形状は破損が著しくて記しがたい。2は刀子であり、現存長7.0cm、茎の部分に不質が付着する。3は半根平頭式の鉄鎌で基部を欠損する。厚さ2.5mm、幅35mmを計る。4～5は梯状の鉄器の半身である。4の一端の断面は扁平（12mm×4mm）であるが、中央より正方形（7mm×7mm）を保す。5は断面円形で径6mmである。いずれも茎元径5mm前後をなすと思われる。馬具の一部であろうと考えられるが、その詳細は不明である。6は、轡金具で、引手と鏡板の部分であると考えられるが、径が小さく（内径28mm）、あるいは遊金具の可能性もある。

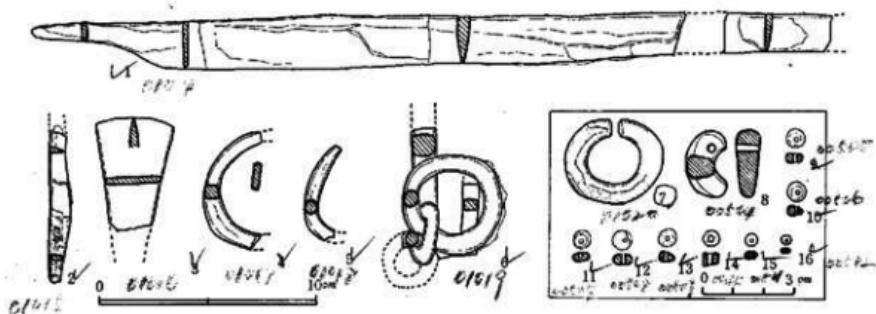


第61図 脚台付子持壺実測図

727



第62図 須恵器実測図



第63図 鉄器・銀環・玉類実測図

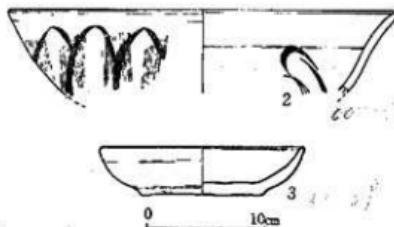
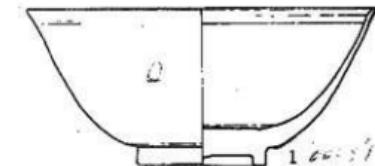
銀環（第63図7）銅芯銀張りの耳環であるが、破損が著しい。長径31mm、短径27mm、切れ目2mm、断面径6mm×8mmを計る。

勾玉（第63図8）ひすいを材質とし、表面は白緑色を呈す。全長22mm、厚さ7mm、幅9mmを測り、頭部の孔は片側穿孔。全体の形状はC字形を呈す。

小玉（第63図9～16）9～13は土玉で、黒色を呈す。14～16はガラス玉で、色調は緑色を呈す。径は6.2～2.9mm、厚さ4.5～1.6mmを計り、断面形は丸味をもつ扁平なものが多い。

青磁（第64図1、2）1は削だし高台をもつ碗の完成品で、口径16.7cm、高さ7.5cm、高台の外径6.3cmを計る。見込みには笠によって捲巻放射状花文が刻され、一つの円文を構成する。内面は連続する3個の蓮花文が配され、口縁部近くに一条の沈線がめぐる。器肉はやや厚手で、全面に釉がかかって光沢があり、色調は茶褐色を呈す。2は碗の口縁部の破片であり、復元口径は18.7cmを計る。外面にしのぎ葉の蓮弁をめぐらし、内面には草花文の一部が認められる。色調は1と同様である。これらはいずれも南宋龍泉窯系の背磁であると考えられる。

土師器皿（第64図3）口径9.8cm、高さ2.3cmで平底。胎土、焼成はふつうで、底はヘタ切りであり、色調は黄褐色を呈す。（国平・塩屋）



第64図 青磁碗・土師器皿実測図

(4) 高見 3 号墳

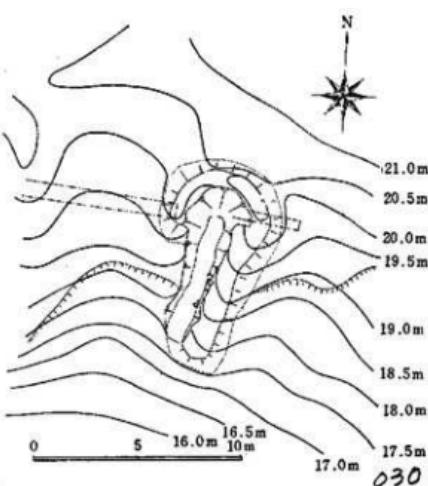
a. 位置と外形 (第65図)

丘陵斜面に占地する4基の古墳の中で、第2号墳と併行した位置にあり、第2号墳頂部より東側11mの地点である。外形は明瞭な盛土を観察できるが、墳頂部より南側に幅450cm、長さ550cm、深さ200cmの馬蹄形を呈する深い溝が認められた。

b. 封土 (第66図)

第2号墳中央から東西へ設定したトレンチの東側延長上に本墳の墳頂部は位置するため、このトレンチを延長して封土上の土層を観察した。

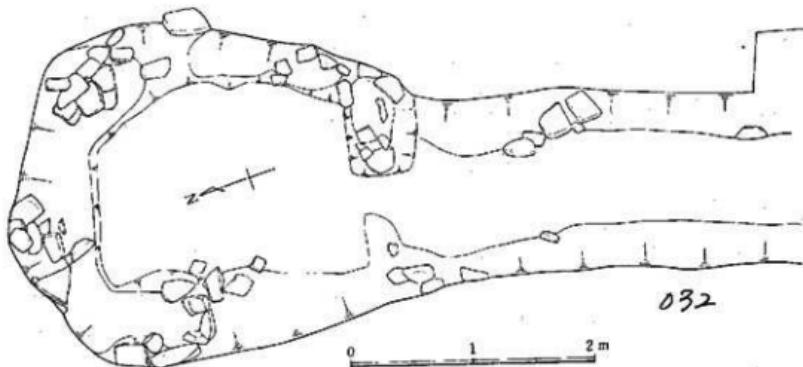
すでに述べたように墳頂部は大きく陥没しているが、その西側、東側トレンチ断面の土層は、いずれも赤土層の下に褐色土、赤褐色土、暗褐色土が状態で堆積しており、明瞭な盛土の状態を示す。墓域の掘り込みは、陥没部に近い位置でトレンチ両側ともに地山を斜めに切った状態で観察される。第2号墳と本墳の間は、両墳がつくる谷間に赤褐色粘質土が厚く堆積しており、斜面上方からの土砂の流れ込みを示している。両墳の盛土最上面である黒褐色土は、明瞭な層位関係をなさずに接しており、両墳の先後関係を層位によって知ることはできない。この黒褐色土の西側および東側挖堀の間は約950cmを測り、これは恐らく古墳築造当時の墳塗を示すものであろう。また、墓域の掘り込み上面幅は、トレンチ断面で観察する限り約600cmと広いが、床面に至るまでに階段状に段をつくり出して掘り込まれている様がうかがえ、他例とは趣きを異にするようである。



第65図 高見3号墳地形実測図



第66図 高見3号墳土層図



第67図 高見3号墳石室実測図

c. 内部構造（第67図）

陥没孔は墳頂部より深さ300cmで地山に達するが、内部を清掃する過程で、奥壁、側壁の腰石および袖石の痕跡を認めることができた。すなわち、その部分は地山が凹みを呈し、周囲に入頭大の腰平な礫が残っており、腰石を安定させるために使用されたと思われる。しかしながら、石室プランに合わせて地山を清状に掘り込み、腰石を安定させる手法は認められない。スタンプによって石室の復元を試みると、玄室長約210cm、幅約170cmの両袖单室である。

後述部は明確でないが、幅約80cmほどであろう。本墳は周囲にも陥没内にも石室を構築した石材を全く見ることはできず、本墳の破壊は石材採取を目的としたものであろう。従って次に記す遺物も原位置を保つものではないと思われる。

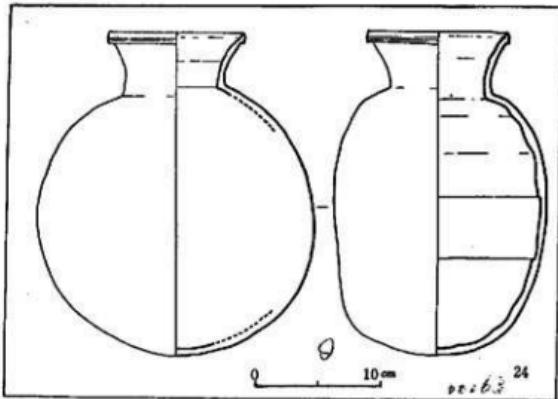
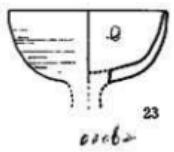
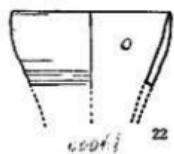
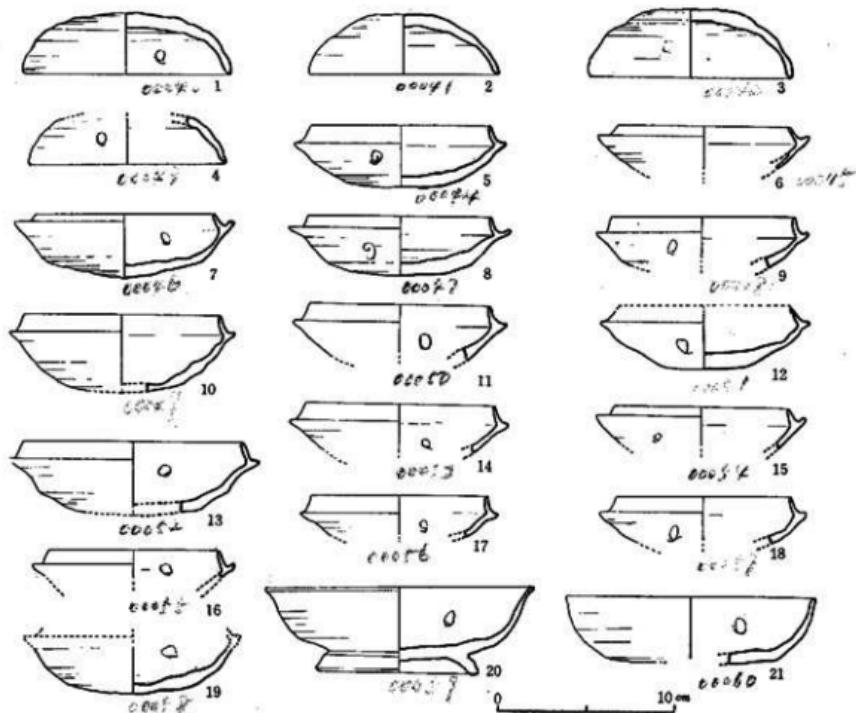
d. 出土遺物

須恵器（第68図）

後述から墓道にかけてかなりまとまった状態で出土したが、全て破碎されており、石室内よりかき出されたものも泥じっていると考えられる。器形は壺が多数を占め、高壺、壺、提瓶の破片がある。

壺の蓋（1～4）はいずれも蓋受けをもつ身とセットになるもので、口径10.5～11.2cm、高さ3～4cmである。口縁内部は稜をつくらず、調査はヘラ削り（天井部）とナデによる。壺の身は、蓋受けのあるもの（5～19）、高台のつくるもの（20）、蓋受けも高台も無いもの（21）がある。蓋受けをもつものはたちあがりが1cm内外で、やや外寄する傾向をもつ。先端内面は稜をつくらない。20は口径15cm、高さ4.7cmで、高台は高い。21は底部を欠くが、平坦に続くものである。高壺（23）は小形でワイングラス状を呈するもので、口径は8.8cm、外面はヘラによる調整がなされる。提瓶は耳を有さず、口径10.6cm、高さ25.6cm、を計る。口唇下端に一条の沈線がめぐらしく稜をつくる。外面はヘラ削りの上をナデ、内面は同心円の引き目文を施す。色調は灰色で、

2. 6. 10



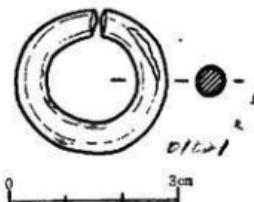
第68圖 高見3號墳出土須惠器実測図

胎土も焼成もふつうである。

金環（第69図）

銅芯金張りのもので、径は2.7cmを測り真円に近い。断面は丸く厚さは6mmである。一部分金の剥離が見られるが、完形の良品である。

(塙屋)



第69図 金環実測図

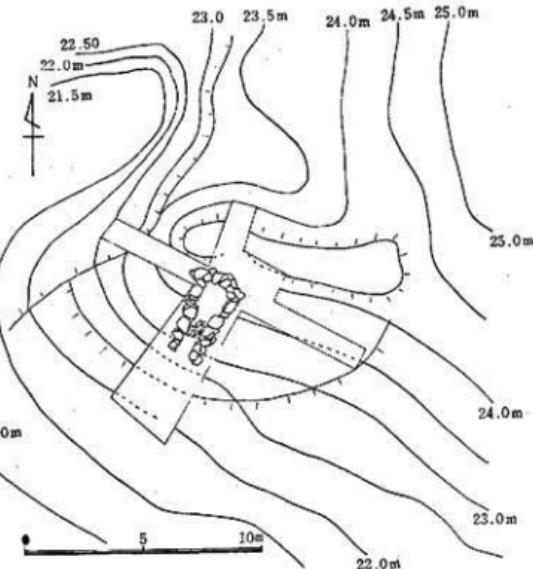
(5) 高見 4号墳

a. 位置と外形

標高45mの丘陵から南側へのびた斜面の中腹に位置する高見1号墳～3号墳が標高19～21mの斜面にあるのに對して、4号墳は標高24mの斜面の頂部に位置し、本古墳群の中では最も高い所に占地している。同地は小さな尾根の平坦面を呈しており、傾斜面に位置する他の古墳とは區別して考えることができる。

4号墳は直徑9mの円墳である。石室は等高線に直交しており、主軸はN27°Eである。

すでに盗掘をうけ、天井石はぬかれており、石室が陥没した状態で発見された。発掘作業は石室のプランを確認することに始まり、横道・前庭部に主力を注ぎ、墓道を確認した。墳丘は主軸方向と石室の中心部を東西にトレントを設定し、封土の状態を調べた。

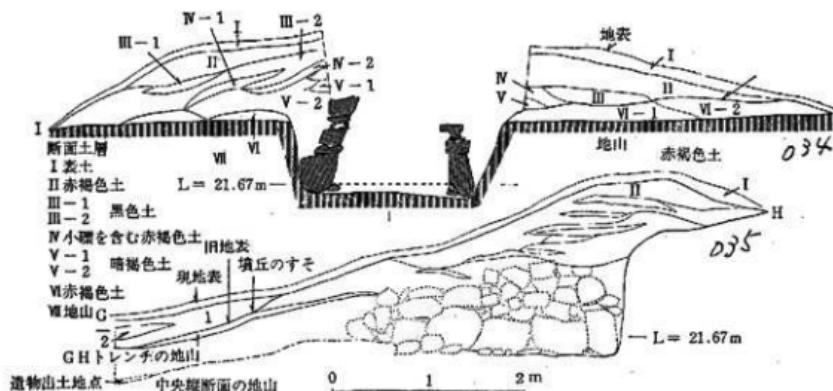


第70図 高見4号墳地形実測図

b. 封土

現地表から110cm下に赤褐色土の地山層（Ⅶ層）がある。地山の上に20～30cmの赤褐色土（VI-1、VI-2層）が堆積し、ほぼフラットな旧地表面を形成している。旧地表面の上には黒色土V、Ⅲ層）、小礫まじり赤褐色土（IV層）が20～30cmの帯状に積まれ、封土は旧地表面から80cmの高さまでしか確認されず、その上は現地表面である。以上は墳丘の東側断面（第71図参照）で

あるが、西側断面土の状態も東側とほぼ一致する。墳丘は石室の中心線から西側では360cm、東側では415cmから始まる。主軸に平行する断面をみると、地山の上に黒色土（VII層）、暗褐色土（VI層）、小礫を含む赤褐色土（IV層）、黒色土（III層）、赤褐色土（II層）と細い帯状の封土がみられ、奥壁での地山から現地表面までの高さは190cmをはかり、ほぼ古墳構築時の状態を示しているとみることができよう。



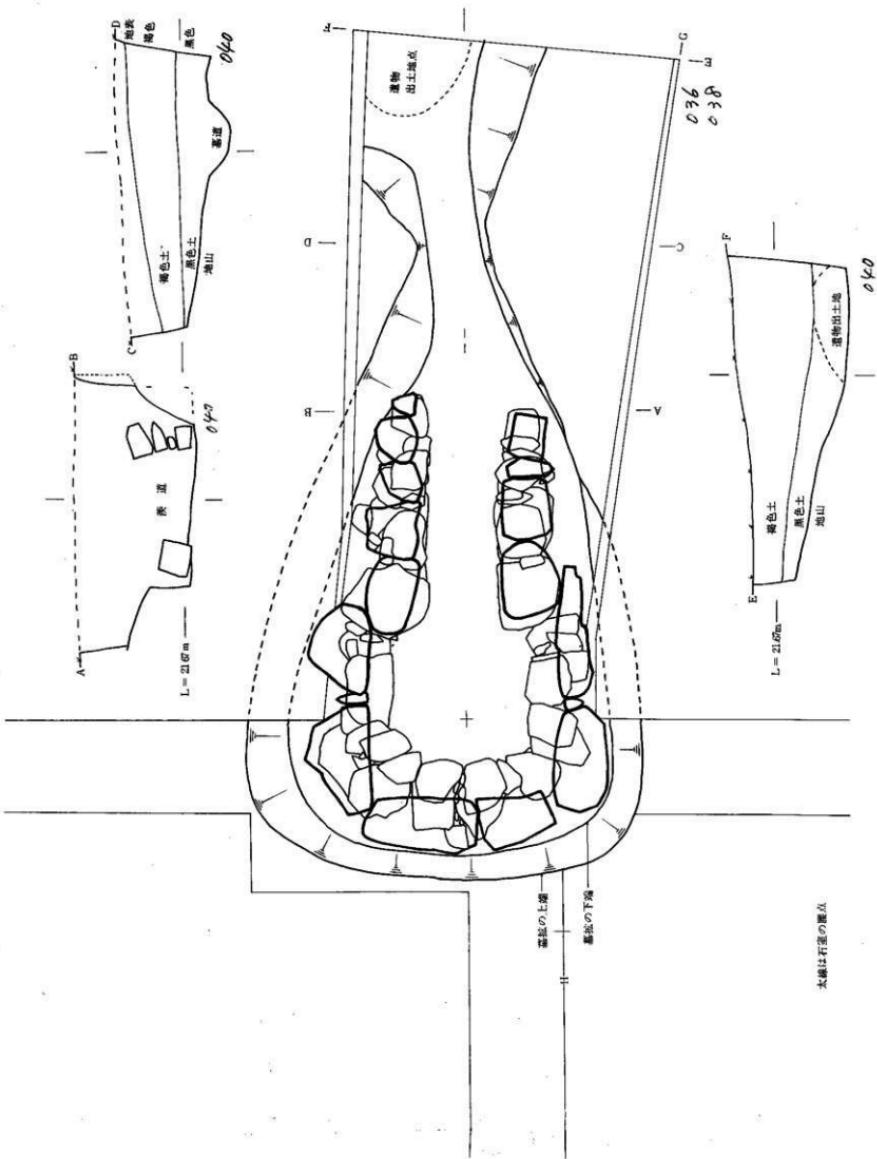
第 71 図 高見 4 号 墳 土 層 図

c. 墓域

墳丘の西側断面では石室の中心線から110cmの旧地表面から地山をはりこみ、東側では140cmの旧地表面から地山をきってそれぞれ掘り込まれている。墓塗の深さは旧地表面から80~90cmで、墓塗の上面幅（旧地表面の幅）は250cm、下面では180cmの幅となっている。すなわち墓塗の下面の幅は側壁の石がおさまるようにぎりぎりに掘り込まれている。それは蒸塗と石窓の関係を示した平面図を見れば一層明らかであり、石室及び羨道の側壁を取扱っている。奥壁が最も広く羨道が最も狭い扇形の墓塗となっている。さらに幅の最も狭い羨道部で、羨道に接続して前庭部へ続いている。遺物のほとんどはここより出土したものである。

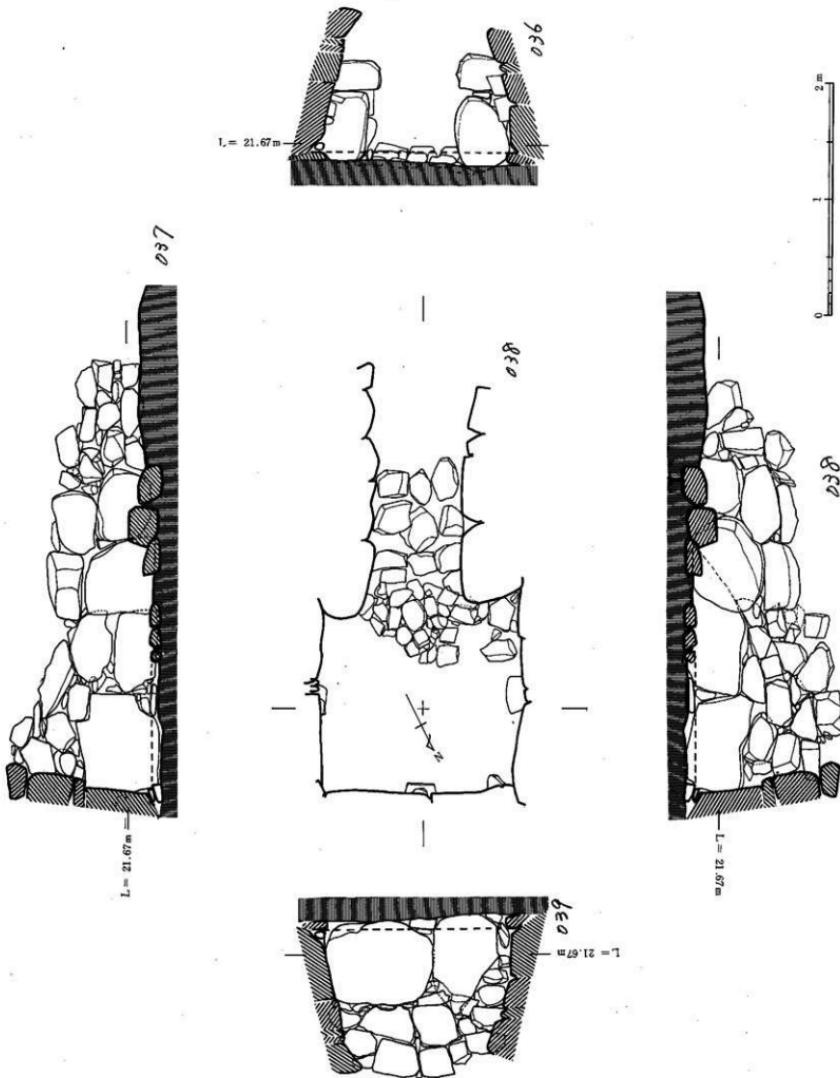
d. 内部構造

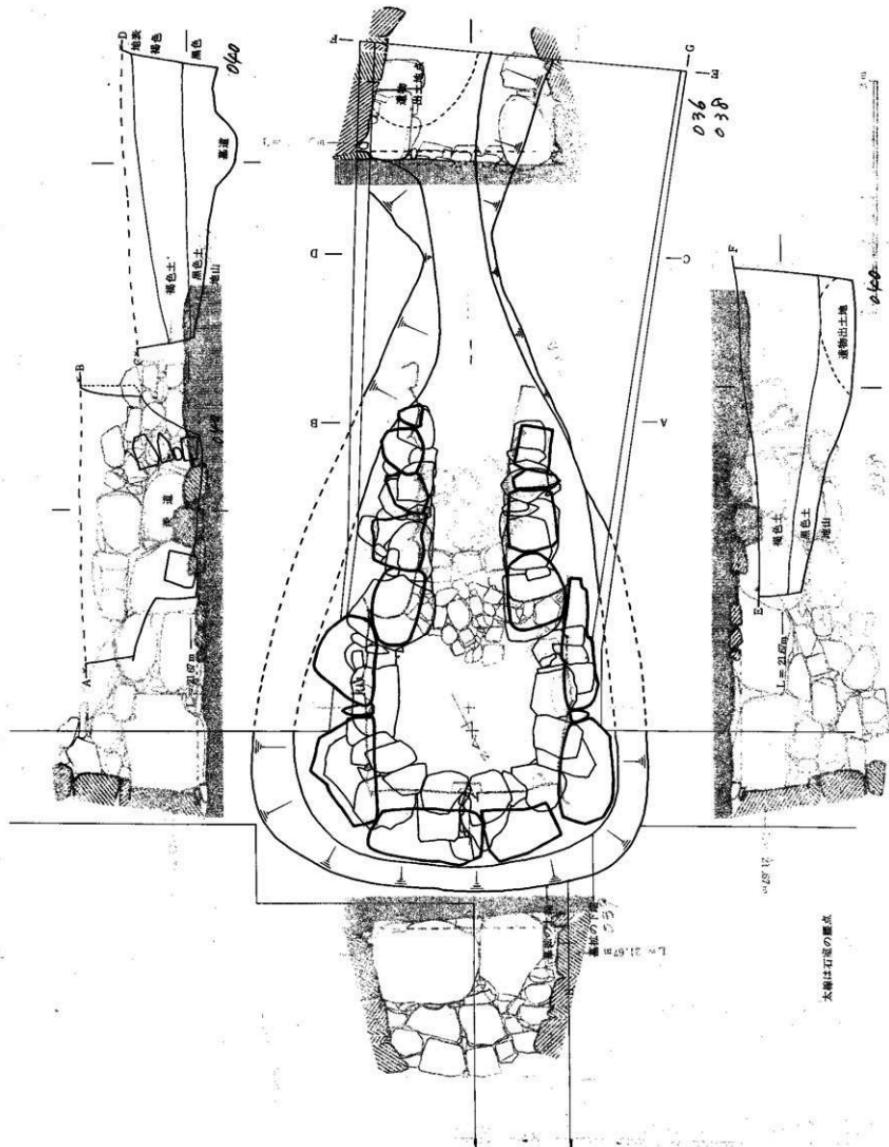
両袖式タイプで玄室の長さは165cm、奥壁での幅は168cm、玄門寄りの幅は165cmでほぼ方形に近い。羨道の長さは210cm、玄門の幅は80cm、羨道幅は90cmで、石室全長は375cmである。奥壁の腰石は二石を並列して立てることによって玄室の幅が決められる。側壁の腰石も大きな石を立てて据える。腰石の安定をはかるために楔形の小石を押込んでいる。中には床面の敷石を兼用するものがある。側壁の腰石も二石であるが袖石との関係を注意すれば、東側の袖石を置き、その長さに合せて西側の袖石を配置しているようである。西側では2番目の腰石より袖石が内側にくい込んでいるのはこのためであろう。奥壁、側壁とも二段目以上は長方形に近い石を順次上へ積上げている。奥壁では三段まで、地山から145cmの高さ、東側壁では四段135cmの高さ、西側壁で



第72図 高見4号墳石室上面図

图734 沟渠4号坑石室剖面图





第72図 稲原4号墳石室上面図
高見4号墳石室上面図

は五段140cmの高さまで確認できる。

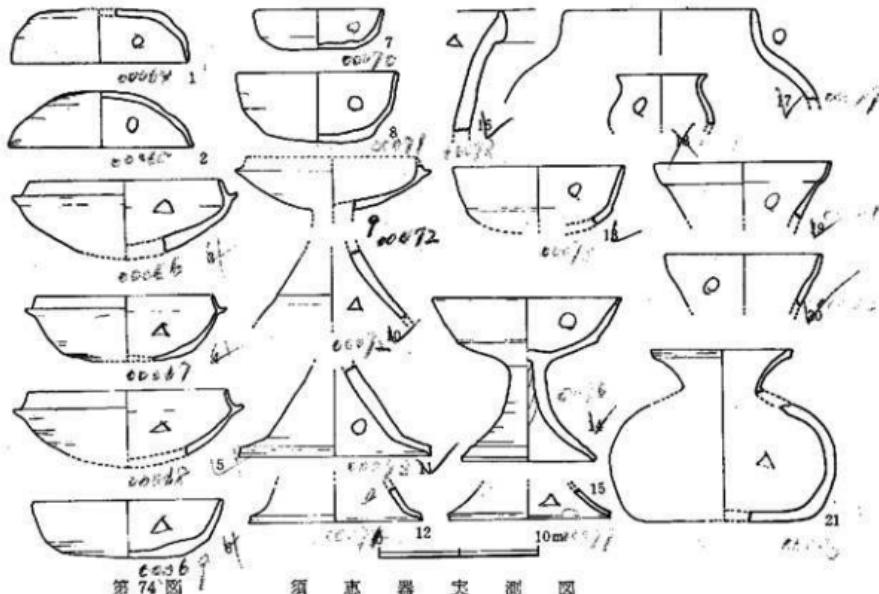
敷石は20×30cm、厚さ5～10cm以下の板状の角礫及び円礫を敷きつめている。玄門の壁は高さ90cmまでしか残っていない。狹道の側壁は2～3段、高さ70cmまで確認される。閉塞石は狹道に三つの石を並べて一列とし、これを三列並列している。幅は90cmである。一段目の石しか残っていないので、閉塞石の状態を復元することはできないが一石をもって閉塞石とする高見2号墳とは異なり、狹道いっぱいに礫を積上げていた高見1号墳と同様な状態と考えることができよう。

石と石の間には楔形の石やいわゆる詰込み石と呼ばれる小砾を入れて、構造の安定をはかっている。石室は断面図に示す通り、上に行くほど内傾して持送り状を呈する。石材は、玄室及び杯道の側壁はほとんど礫岩で、花崗岩、玄武岩、砂岩は少量みられる程度である。敷石はほとんどが砂岩である。花崗岩、玄武岩、砂岩は側壁の安定をはかるために利用されることが多い。

e. 出土遺物（第74図・第75図）

須恵器 壺（1～8）、高壺（9～15）、甕（16）、壺（17、18、20）、瓶（19、20）。

壺は蓋と身があるが、身には蓋受けのあるもの（3～5）と無いもの（6～8）がある。蓋には天井部から下縁部にかけて直下するものの（1）と、天井部からゆるやかに下縁部に続くもの（2）があり、1の復元口徑11cm、2は11.4cmを計る。2には天井部に×のヘラ記号がある。身の蓋受けのあるものは破片であるが復元口径11cm内外を計る。蓋受けのないものは、いずれも小形品である。口径は11cm以内で、特に小形品（7）は口径7.8cmを計る。高壺も14以外はいずれ



第74図

須 恵 器 実 測 図

であるが、壺部に蓋受けを有するもの（9）もある。脚部はいずれも端部に縫を有する。14は脚下縫径8.2cm、壺部口縫径11.4cm、器高10cmを計る。

壺は短頸壺（17）、小形のもの（18）といわゆる壺（21）がある。21は口唇部に縫を有し、頸部は急に狭まる。底部は平底をなす。口縫8.7cm、頸部の最大径13.8cmを計る。18は小形品で口縫部はゆるやかに外反する。口縫4.6cmを計る。あるいは脚が付く可能性もある。19、20は壺であるが、頸部から下を欠失し全体の形状は明らかにしない。いずれも焼成良好。16は壺の口縫部であるが、破片のため大きさは不明である。二条一単位の沙綿を二段に持ち、その間に不ぞろいな刺突文が施されている。

金環（第75図1）銅芯金張りの金環である。腐蝕が著しく金張りの部分の残存部はわずかである。

棗玉（第75図2）扁平な断面を持ち、穴は直ぐにあけられている。全面褐色を呈し、破口は貝殻状を呈し、材質は琥珀であろう。長さ18mm、最大径16mm、最小径9mmを計る。この外、玉類には緑色をなすもの、あざき色をなすもの（丸玉）が見られるが、風化がはげしく固形化できない。

第75図
金環・棗玉実測圖

（安達：柳田）

(6) 高見5号墳

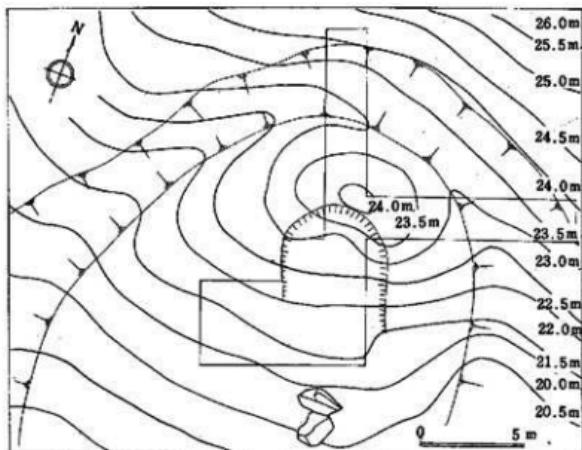
a. 位置と外形（第76図）

本墳は高見1～4号墳が占地する地点より東に谷を2つ隔てた同一丘陵斜面に、単独1基築造されており、墳頂部の標高は22.5mを示す。盃形により、墳頂部から南側へ陥没する。墳丘と北側斜面の境には、馬蹄形を呈する溝がめぐらされていけるを、表面から観察できる。

b. 封土

（第78図）

墳頂部を中心として東へ幅2m、長さ20mで設定したトレンチの上層は、石室側壁寄りに黒色土層、黄褐色土層とを交互に盛った状態が観察



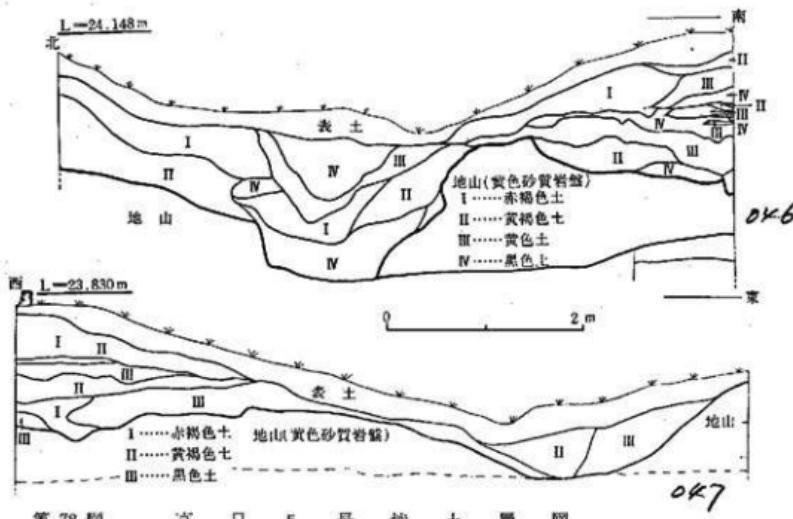
第76図

高見5号墳地形実測図

041



第76图 高儿15号坑红层剖面图



第78図 高見5号墳土層図

された。トレンチ西壁から約12m東側に黒色土が堆積する溝がある。また、幅2m、長さ8mの南北に設定したトレンチでは、北側表土上に露山する黄色砂質岩盤面を切り込んで、斜面を平坦にしたのち墓塗を掘り込み、石室尖壁と側壁の構築と同時に、赤褐色土、黄褐色土、黄色土および黒色土を交互に盛り上げている。黒色土層中には、弥生式土器片（須歎式）や木炭片が含まれているが、周辺に弥生式土器包含層は検出されず、この黒色土層は離れた場所より運ばれたことが考えられる。

c. 墓塗

斜面に築造された古墳であるためか、墓塗は柱石の部分から玄室周囲をめぐり、狭道部まではならない。掘り込みは急傾斜でなされており、腰石と墓塗掘り込み上面との間は、50~70cmを計る。その間隙には下部に入頭大の角礫を詰めて腰石の安定を計り、その上部に黄色砂岩礫がブロック状に詰め込まれている。

d. 内部構造（第77図）

石室は横穴式石室で、両袖式の単室である。石室主軸の方位はN10°Eを示す。玄室の平面形は正方形に近く、長さ215cm（京側壁）～180cm（西側壁）、幅180cmを計る。長さの違いは袖石のずれによるが、この状態は側壁腰石の大きさに左右されたものと考えられ、原位置を保つものであろう。石組みの状態は、奥壁には幅150cm、高さ100cmの礫岩の人石を一枚立て、両側壁との間隙に角礫を詰め、奥壁と両側壁先端は小口を合わせるのみで、かみ合った状態ではない。二段目の石組みは、肩平な花崗岩を多く用い、面より奥を大きくとる。裏側には角礫を下部に詰め、石積みの安定をはかっている。床の状態は30×50cm大の上面が平坦な砂岩質の石材を全面に敷き

つめて構成されている。その間隙には、珪化木の円礫を詰め込んでいる。さらに床面の四隅には、5cm大の円礫が敷かれ、床面を平坦にする配慮が加えられている。また、床と石室壁石の接する部分には、くさび状の角礫が詰められており、玄室床面と墓壇の側面から壁石の安定をはかっていると思われる。

狭道部は石組みの先端まで400cmを測り、幅広がりである。狭道の石組みは、袖石より2石目までは石材も大きく堅固であるが、それより外側は粗粒である。閉塞は玄室奥壁より260cm～330cmの位置、ちょうど西袖石先端と東袖石先端の間でなされている。閉塞石は、30×50cm大の礫石を主とし10×20cm大の小石を混じて構成されるが、石積みに整然とした規則性は認められない。床面からの現在高は、最高位で50cmである。狭道部の床面は、閉塞部まで玄室と同じ構造をとるが、外側には敷石はない。

e. 墓道

美術隔壁の2石目先端より、断面が浅いU字形を呈する掘込みが認められる。この掘込みは外側に伸びるにつれて幅広がりとなり、西側へ傾する。底は自然地形に沿って南側に傾斜するが先端までの追求を行わなかったため、全貌を記することはできない。おそらく玄室へ至る墓道であると考えられる。

f. 遺物出土状態

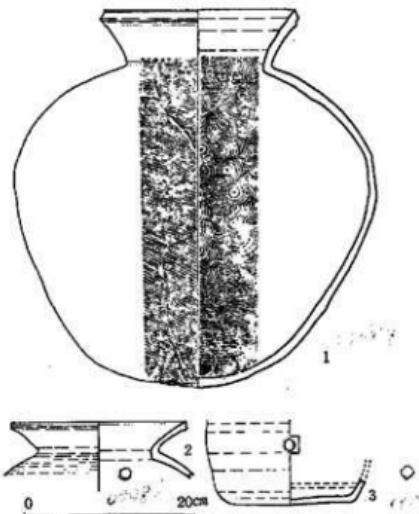
遺物は玄室内と、狭道から墓道にかけて出土した。玄室内は荒らされており、金環2、勾玉1、素玉2、管玉1、ガラス玉2個を擾乱された状態で検出したのみである。また、狭道の閉塞石内側近くに須恵器の平瓶1点が出土した。

閉塞石外側の落石に埋没して、土師器の高坏および鉄斧各1点ずつ出土し、狭道側壁先端より外側に須恵器、土師器、鉄器の破片や金環が、長さ約3mの間で出土した。これらは原位置を保つものとは考えられない状態で、下部より出土した坏の身の一つには金環が付着していた。

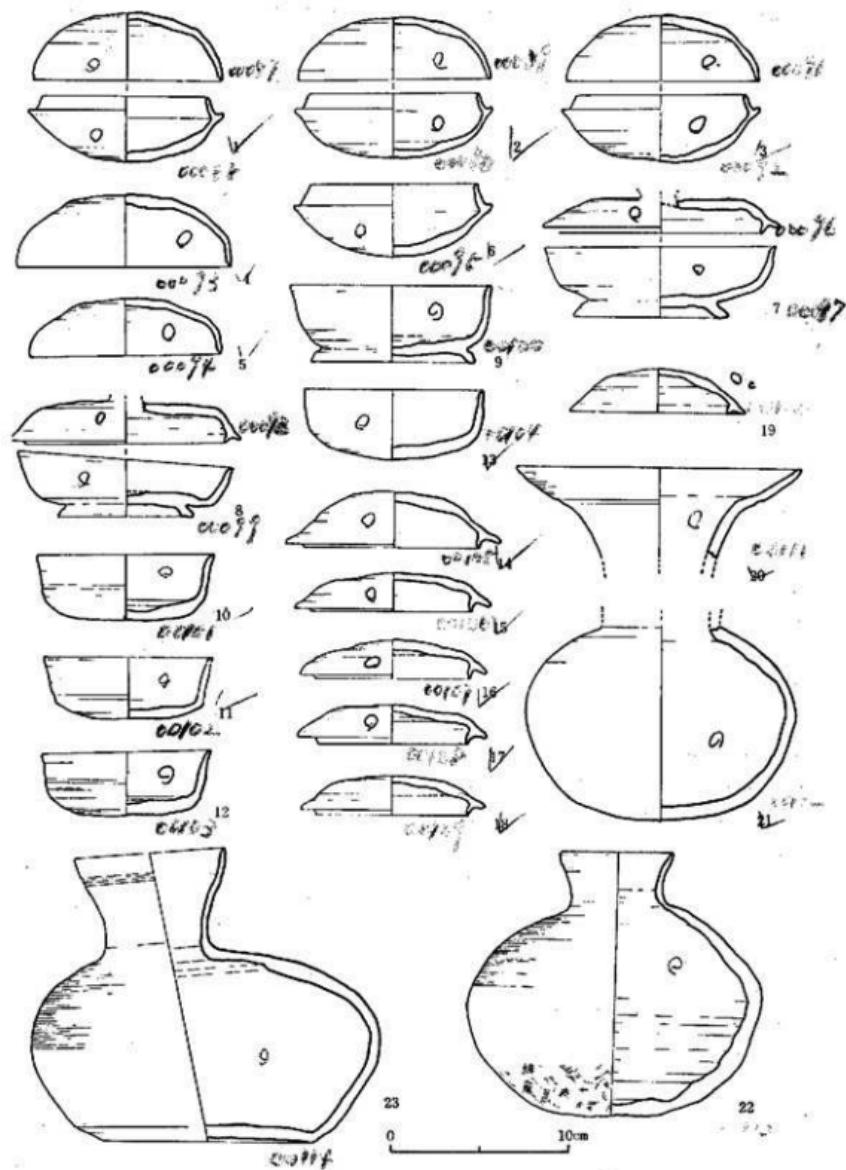
g. 出土遺物

須恵器（第79図・80図） 閉塞石付近より出土した平瓶（第80図23）の性に狭道から墓道にかけて出土した須恵器は、壺（第79図1～2）、壺の身と蓋（第80図1～19）、壺（同20）、壺（同21～22）の形態がある。

壺（第79図1～2）は、1が完形、2は口頸部の破片である。1は口径22.2cm、器高44.0cm、胸部最大径41.4cmを計る。口肩部下



第79図 須恵器実測図(1)



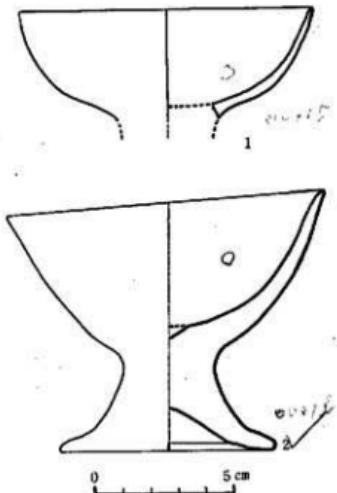
第 80 図 須恵器 実測図 (2)

端に一条の沈線がめぐり、鈍い稜を呈す。外面は平行たたき目、内面は同心円のたたき目を施し、焼成はふつうで、色調は暗灰色を呈す。2は口径22.4cmを計り、1と類似する器形であるが、外面はかき目、内面は平行たたき目を施し、胎土、焼成は粗雑である。3は径14.5cmの平底から急にたちあがる脚部の破片で、外面はかき目、内面はなでによる仕上げをみせる。胎土、焼成は良好で、色調は灰色を呈す。形は平瓶に似るが、脚部に径1.3cmの焼成前の穿孔があり、器形を明らかにしえない。

坏は1～3と7～8がセットをなすものである。蓋の1～5は、径10.5cm内外、高さ3.5cm内外、いずれも口唇内側は丸味をもち、明瞭な稜を呈しない。胎土、焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈す。天井部はヘラ調整、内面はナデによって仕上げる。7～8は天井部中央付近を欠損するが、宝珠形のつまみをもつものである。かえりを有し、先端は口縁より外に出る。胎土、焼成は不良で色調は黄灰色、表面は磨滅する。14～19は、最大径12.0～9.6cm、高さ3.1～2.2cmで、つまみをもたない形式である。いずれもかえりはやや退化している。胎土、焼成とともに不良で、色調は黄褐色を呈す。坏身の1～6は、最大径11.0cm内外、深さ3.6cm内外、蓋受けのたちあがりは0.9cm内外で、口唇内側に稜が鈍く残る。胎土、成形、焼成、色調はセットの蓋と共通する。7～9は高台を有し、体部から口縁部にかけてやや外齊気味に開く。口径12.8～11.2cm、高さ4.2～3.2cm、口唇部内側は丸味をもち、高台は外に開く。胎土、焼成はともに不良で、色調は黄灰色、表面は磨滅する。10～13は底部は平坦に近く、体部との境に沈線がめぐり、そこから急にたちあがるもので、14～19とセットをなす。轟(20)は口頭部のみの破片である。口縁部と頭部との境に一条の沈線をめぐらし稜を有す。胎土、焼成は堅緻で色調は暗灰色を呈す。轟はいずれも短頸轟であるが、21は口頭部を欠損する。22は完形で、肩部から脚部にかけてカキ目が顯著で、底部はヘラ調整、口頭部内外面はナデによって調整されている。焼成は良好であるが、色調は小豆色に近い。平瓶(23)は、高さ18.4cm、口径6.2cm、最大径19.4cmを計る。口縁に近く二条の沈線がめぐる。胎土、焼成はふつうで、表面は黄灰色を呈す。

土師器(第81図) いずれも高坏であり、坏部は底部から口縁部にかけて内齊気味である。1は脚部を欠損するが、2は接合部より同じカーブで柄を開き、寸づまりである。胎土、焼成は机く、色調は黄褐色を呈す。2の口径11.6cm、脚径8.7cm、高さは9.4cmを計る。

鉄器(第82図1～2) 鉄斧(1)と鉄鎌(2)が各1点ずつである。鉄斧は現長650mm、幅39mmを計り、袋部を欠損する。刃部付近は比較的良好に残存するが、背部は剥離の状態が著しい。鍛造



第81図 土師器実測図

の手斧である。

鐵は平造りで頭部は劍形をなす。茎を欠損し、形態は不明である。現長75mm、基部の厚さ5mm、幅7mmを計る。

勾玉（第82図3） めのう製で表面は深い藍色を呈す。全長31mm、厚さ10mmを計り、断面は円形に近い。孔は片面穿孔で、全面に琢磨が行われ、頭部と尾部先端も丸く仕上げられており、全体の形状はコの字形を呈す。

棗玉（第82図4） 長径12mm、短径10mm、長さ15mmを計り、完形である。琥珀製で表面は深い褐色を呈す。

菅玉（第82図5） 半欠品で、径10mm、現長11mm、孔径1mm、両面穿孔と複数される。碧玉製で表面は濃緑色を呈す。

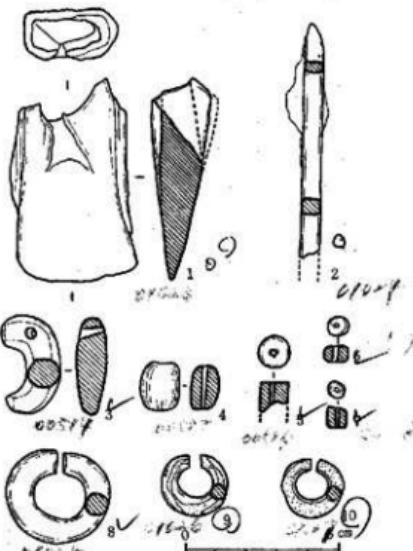
小玉（第82図6～7） ガラス製で、いずれも表面は褐色を呈す。6は径5～7mm、厚さ6mm、7は径4～5mm、厚さ6mmを計る。

金環（第82図8～10） いずれも銅芯金張りであるが、8は大形の完形品で、長径34mm、短径30mm、断面径8mm、切れ目2mm、表面は金色に輝く。3と4は小形で表面は金箔がはげ、銅芯が露出する。

b. 小結

以上報告した事実に基づき要点を整理して結びとする。

- ① 木墳は高見古墳群の中ではただ1基独立して築造されており、近接地に古墳を見ない。このことは、本墳に先行あるいは後続する古墳が築造されなかったことが考えられ、高見1～4号墳とは区別して把握する必要があろう。
- ② 石室については、玄室の平面形は正方形に近く、しかも小形化している点が指摘される。また、墓道より外側に墓道の存在を認めうるが、それがどのように伸びるかは明らかにしていない。
- ③ 遺物については、通常の後期古墳に認められるものが出土したが、著しく擾乱を受けており、それらによって被葬者の数やその性格を知るには至らなかった。



第82図 純器・金環・玉類実測図

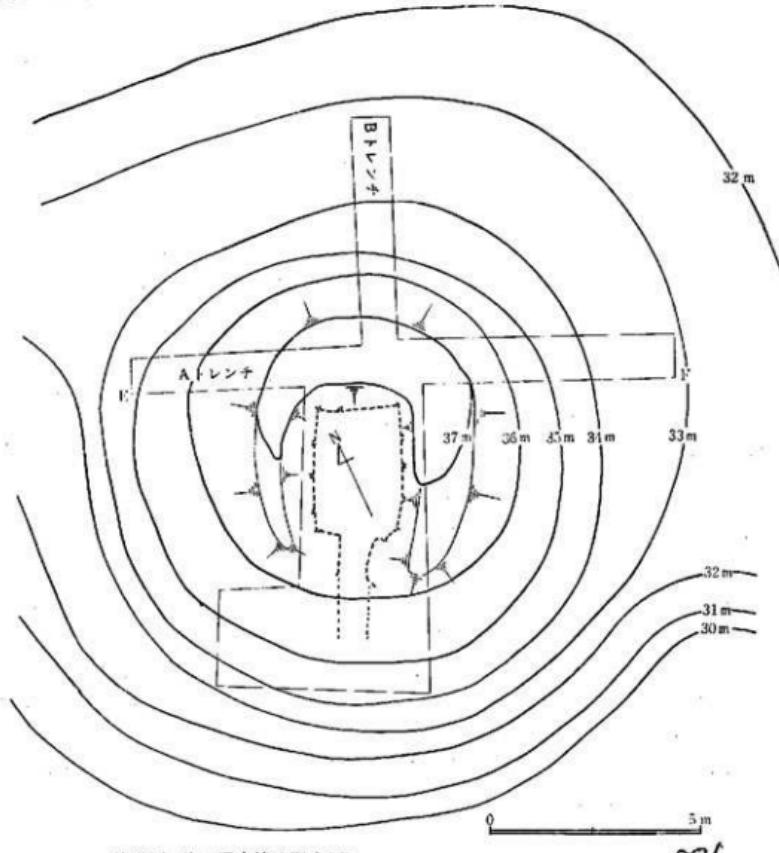
(塩屋、国平)

(7) 猿の塚古墳

a. 位置と外形（第83図）

猿の塚古墳は、下和白から中和白へ東西にのびる丘陵の尾根先端部に位置する円墳である。丘陵全体からみると中位にあるにもかかわらず、大蔵池と高見池への傾斜が急であるため、その部分は瘤状をなし、遠くから見ても盛土の様が明らかである。この古墳は名前からも察せられる如く、古来、近在の人々に聖地として知られていた。⁽²⁾

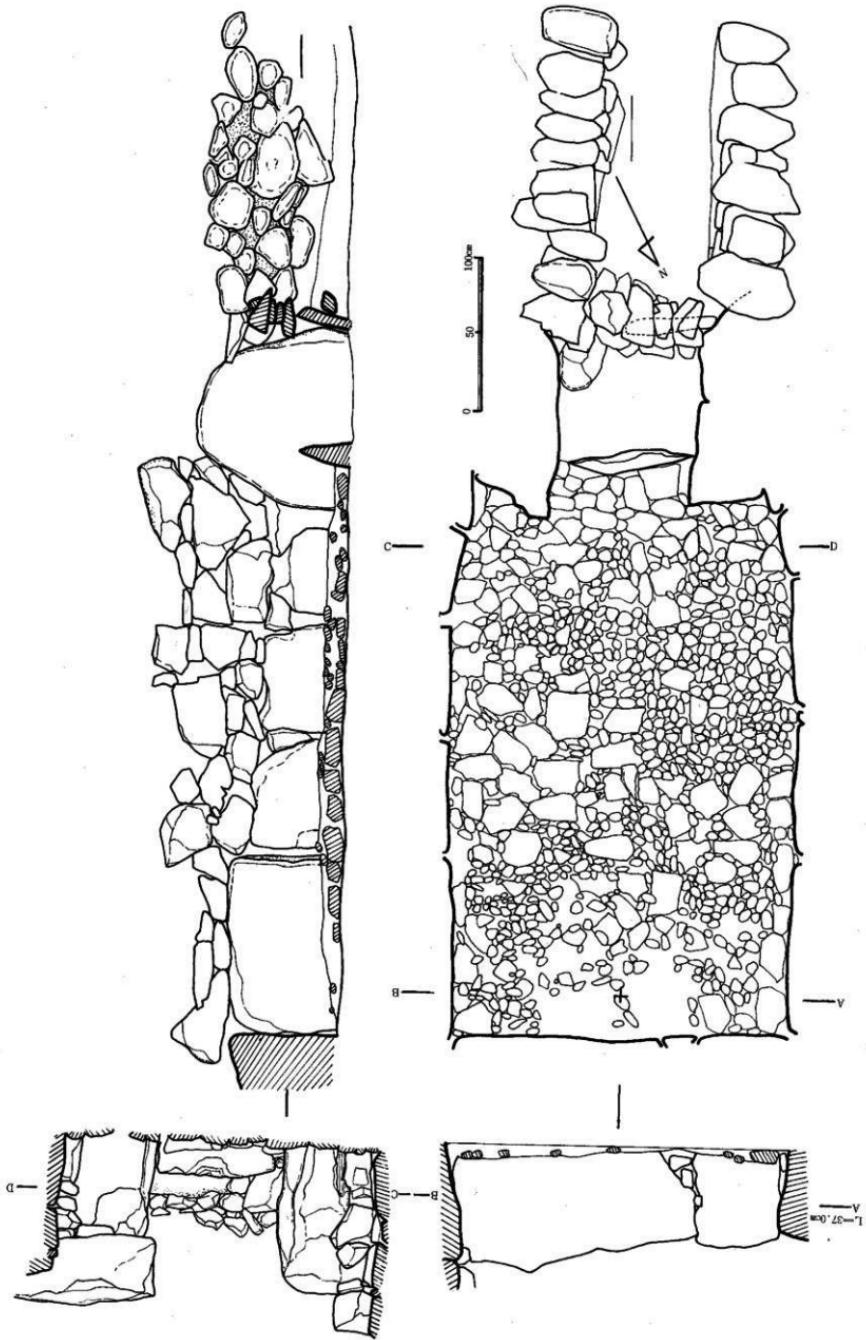
今、現状をみると、盛土全面に栗やハゼの雜木が生い繁っているが、中央部は約2m×3mの広さに、1m余陥没していて、この部分のみ何もはえていなかった。又この陥没穴の西端には、供養の為の石塔が建っている。伐採後の景観は津屋崎の海岸、東に犬鳴の連山、南西に博多湾の



第83図 猿の塚古墳地形実測図

第83図 猿の塚古墳地形実測図

図84 旗の蒙古墳石室測図



島々、さらに遠く可也山を一望に見渡す事ができる。

(注) 昔、立花山に住む鬼子狼は、日々、和白の地に遊来していた。或る日、子狼は獵師の鉄砲により殺害された。それを悲しんだ母狼は、その地を勤こうとしなかった。そこで村人は涙れんべ、子狼をこの塚に葬ったという。

b. 墓丘と溝状造構（第85図）

盛土の状態を見る為に、石塔を避けて、古墳の中央部よりやや北寄りに、路東西にAトレンチ（2m×15m）、それに直交してBトレンチ（2m×7m）を設定した。

Aトレンチ 現在の盛上高は、築造以前の地表から約130cmを測る。盛土は7層～8層から成り、縞状を呈している。しかし両裾部に於いては流合し、層位はとらえにくい。盛土は黄赤褐色粘土層を主体とし、間に黒褐色粘土層をまじえ築造している。そして、全体的に裾部に向って若干の傾斜を示す。又、A・Bトレンチ盛土下の地山に、溝状の造構を観察出来るが、Aトレンチ西側のものは一段低くなつてそのまま続いている。東側のものははっきり溝状をなす。しかも、これら溝内にも、縞状の盛土を観察出来る。

Bトレンチ 盛上の状態は、Aトレンチと同様である。盛土下の造構は、ここでは明らかな溝をなしていない。ここでもその部分に縞状の瓦層が見られ、更にその部分は、非常にかたくしまっていた。この事から①古墳築造前から、溝はあって、それを埋めた、②古墳築造に何らかの関係があり、溝を掘り、埋めたもの、と考える事が出来るが、いずれにしろ、有機質土がみられないから、長期間表面に露出していたものではないと考えられる。

A・Bトレンチを通じて、遺物の出土は無かった。

c. 墓塚

黒色土層の旧地表を切り込んで、墓塚を作っている。墓塚は、奥壁部より玄門の袖石の前方迄続くと思われる。完掘出来なかったので断言はできないが、奥壁部分の状態より推定すると、全体の形は、隅丸長方形をなすと思われる。大きさは、奥壁部の下部で、250cm×565cmを測る。深さは、旧地表から約200cmを測る。この場合、奥壁の下部にある石が墓塚の切り込みの面と駆向一になるのは注意される。奥壁と側壁は、墓塚に密接して接えてあるが、その下部には、人頭大の花崗岩礫を投入している。そして、墓塚と礫石の間は、赤褐色粘土で埋めている。特に、Aトレンチ東側に於いては、その中に地山の白灰色粘土を10cm前後の厚さで充足しているのが顕著に観察出来る。

d. 内部構造（第84図）

内部主体は、横穴式石室の單室塚である。入口方向は、東南東である（主軸方向 N25°E）。石室床面は水平であるが、間仕切石を境にして、後部は1段高くなっている。更に閉塞石から入口にかけて、なお若干高くなつて行く。

玄室（第86図）

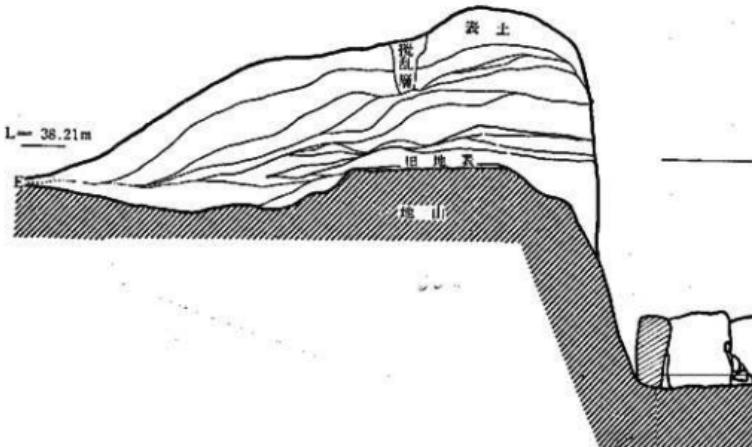
長方形プランの両袖式で幅220cm、長さ340cm（間仕切石までは365cm）を測る。石室内には、黄褐色の流入土が堆積していた。奥壁は花崗岩の2石を並べて腰石となしている。側壁の下1段目は、大きな石を用い、それらの間に小角礫をもってくさび石となし、固定させている。側壁はいずれも、直（つら）に対して、奥（ひかえ）が短い傾向である。又、石と石の間に粘土等の使用は認められなかった。奥壁、側壁とも上部の石が抜き取られ、石室高は判明しないが、現存する盛土から推定すると、3m前後あったらしい。床の構造は、断面観察によると、まず、③基壇底部の地山面に直接角礫を並べる。④その隙生ずる凹凸を白灰色の粘土を敷いて平坦となし、⑤更にその上に5cm前後の円礫を並べ、最下部の角礫にはさまざまの石材を用いている。上面の円礫はすべて石英質のもので、それによって床面が全体として、白色をなす様に着色しているのであろう。

羨道（前室）

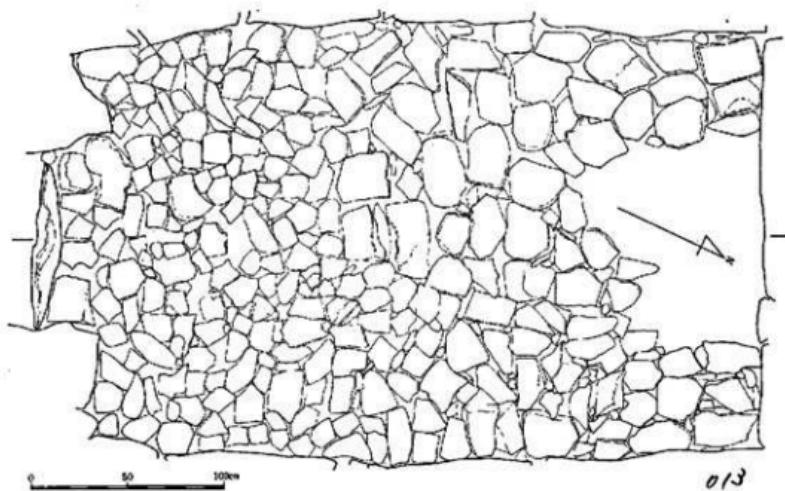
玄門には大石を用いて袖石とし、その玄室寄りのところに、肩平な石を横立せしめて、間仕切石となしている。更に、袖石の一方の端に閉塞石を築く。

閉塞石

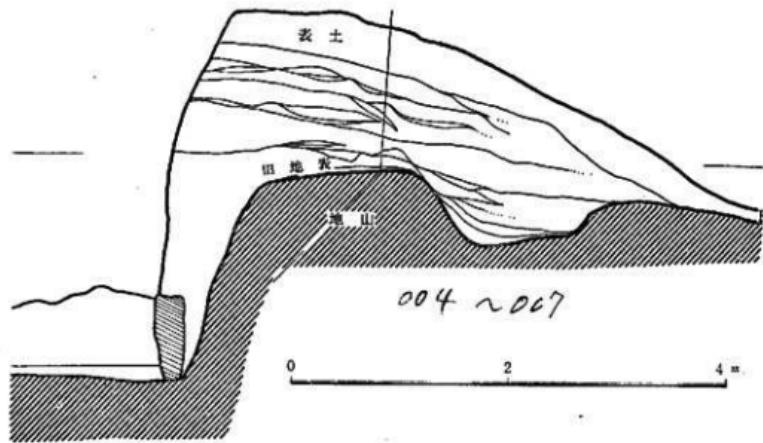
縱長の縫を用いている（安山岩、砂岩）。最下部には、間仕切石と同様扁平な石を横立せしめている。その上の石は、角礫の突端部を入口方向に、面を玄室に向けるように積んである。おそらく、入口側には土等による補強があったと考えられるが、その部分は擾乱により明らかにしえない。



第85図 猿の塚古墳墳丘断面図



第 86 図 猪の塚古墳床面実測図



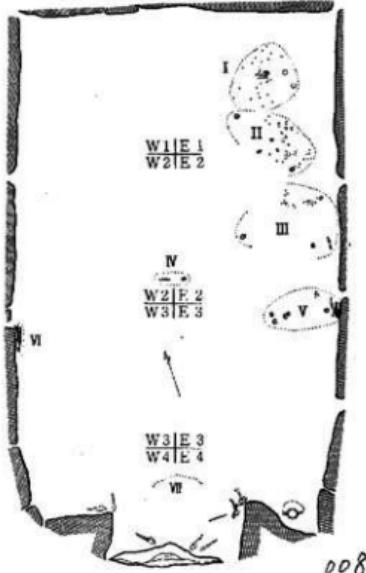
差違

閉石より前の部分は、石の面を描えたりする考證がなくなり、非常に難な組み方になる。用いられる石も全て円礫で、大小のものを不規則に積んでいる（砂岩質）。この部分の床は、入口に向ってやや高まってゆき、そのまま墳丘底部にぬけ終る。墓道は無い。

e. 遺物の出土状態（遺体の位置）

玄室（第87図）

石室は前述の如く、大半が抜き取られていたが、遺物の大半は盗掘を免れていて、多くは床石の間に落ち込んだ状態であった（以下説明の便宜上、石室をE列、W別に分け、それぞれ奥壁から1m毎にE1～E4、W1～W4の谷号で呼ぶ）。玄室の遺物は、その分布の有様から7群に分かつ事が可能である。I群はE1の中央部、II群はE1～E2、III群はE2、IV群はE2～W2、V群はE3、VI群はW3の側壁部、VII群はE4～W4である。I群は勾玉、ガラス玉、金環（紐金）があり、II群には勾玉を除いて更に切子玉、丸玉、平玉が加わり、III群にはガラス玉、金環の外に刀子が見られ、V群は練玉、勾玉、IV群ではガラス玉は少なくなるが、勾玉、金環、馬具、刀子、鐵鎌、銀環で、VII群は鐵鎌、VIII群は土器、馬具、鐵鎌で玉類は見られない。ガラス玉の中でも特殊なものである黄色のものはIII群に見られる。人骨に残存していなかったが、遺物の出土位置が、大幅に動かされていないとすれば、I群～V群は遺骸に直接着装、或いは近位に配置した副葬品と考えられる。更に毛冠（練玉を除く）金環、銀環を上半身着装の遺物であると仮定すれば、遺体は頭を東にして安置した事が考えられる。又、解剖した遺物中、装身具がそれぞれ一連のものとしてまとまるところから、被葬者数は、4人以上であった事が推定出来る。I群の玉は、金環（紐金）の位置が正しく頭側部を示しているとすれば、勾玉を親玉とし、丸玉を連ねた類跡であろう。II群では遺物が散乱した状態であったから、遺物の原位置は復元出来ないが、切子玉は比較的まとまり、その中に平玉もあるから、あるいは平玉を切子玉の親玉にした可能性もある。V群の練玉は、他の群とはやや離れているが、32個が勾玉と共に敷石の間から一括出土した。遺体の位置からすれば、腰部又は手首部と考えられ玉類の可能性もある。VII群の鐵鎌は9本が頭を北位に一括出土したが1本1本は不揃いで、全体を何らかで束縛した様には見られなかった。VIII群には馬

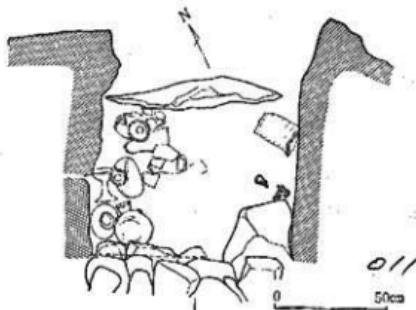


第87図 玄室内遺物配図

具、鉄器が見られたが、鉄器はいずれも頭を入口方向に向けているのが注目される。また、E 4 の植石が内寄する所に提瓶が直立して出土した。

羨道（前室）（第88図）

須恵器では、提瓶（2個）、平瓶、壺、高杯。土師器では、高杯、器台。鉄器は兵庫鎖が出土したが、器台、兵庫鎖以外は、いずれも両壁に接してある。須恵器は完形品にもかかわらず、土師器は破片で、形をなさない。



第88図 羨道（前室）遺物出土状態実測図

盛土裾部（第89図）

墳丘の南側、羨道の西側約2m平方に多くの土器がみられた。遺物が出土した面は、現表上からわずかに15cm余り下で、おそらく地表に並び並べたものであろうが、平に整地する等人工的所作は認められない。ただ西側から出土した火葬は、安定を計る為にか、約15cmの穴を掘り詰め、甕はあたかも上から落れたような状態であり、或いは意識的に壊したものとも考えられる。土器は必ずしも組合せにならず高杯蓋には、それと合う高杯ではなく、上部器は脚が付いたものが多い事も注目される。更に环の身・蓋のうち、片方しかみられないものもある。他に馬具の破片3個が出土した。

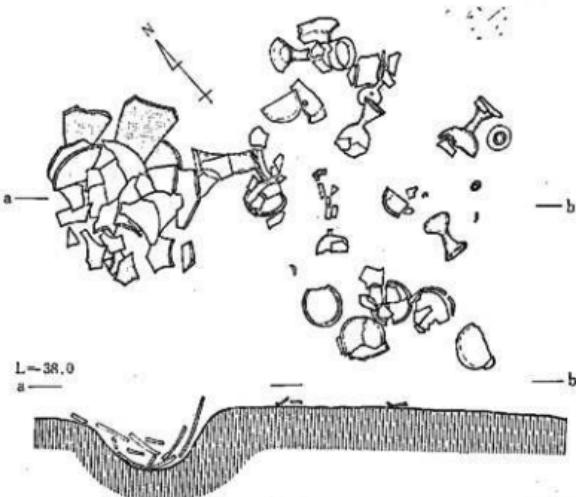
f. 出土遺物

鉄器（第90・91図）

<馬具>（第90図）

兵庫鎖（1・4）

1の環は三個あり、一つの環の長さは7cm一方に留金具を、他方には幅2cmの扁平なU字形をなす鐵帶を取り付けているが、先端は欠失して跡らかではない。4の断面は円形を



第89図 盛土裾部 遺物出土状態

なす。これにも一端に鉄帶が見られる。

革帶金具（2） 長方形をなし、端にそれぞれ突起を持つ。2個の紙付で鉄製である。縦2.9cm横2.3cmを計る。

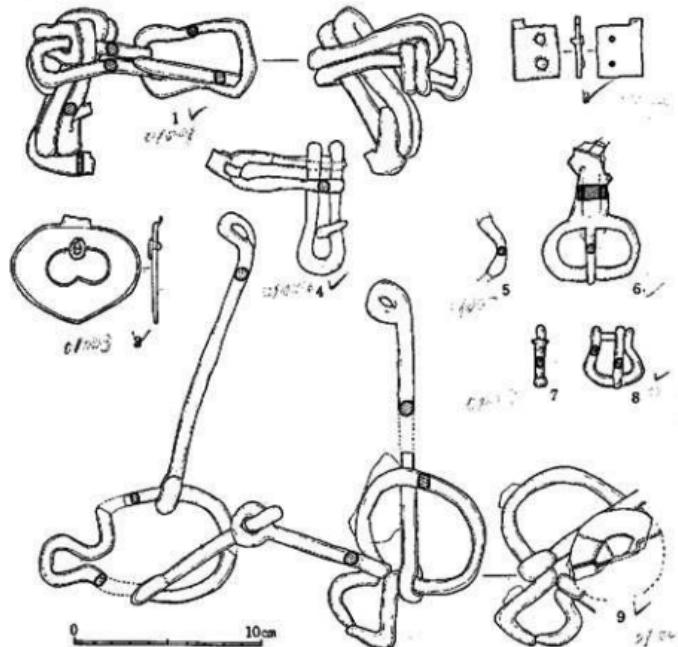
杏葉（3） ハート型をなし、上端に張り出し部があり、又その下に鋸をつけている。縦5.5cm、横7cmを計り、鉄製である。

鞍（5・6） 鉄製で梢円形をなし、それぞれ断面は円形をなす。6の鞍橋と接する部分には木質が残存しており、この部分は断面長方形をなす。

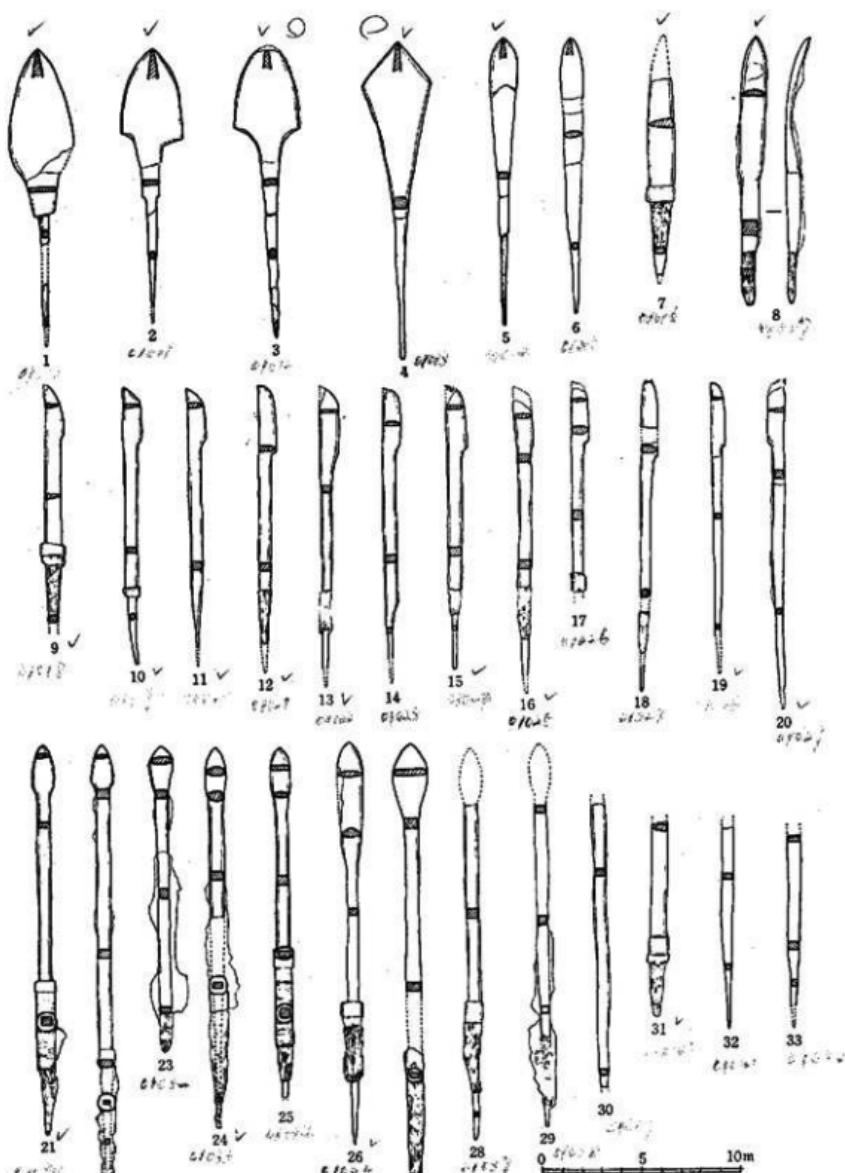
留金具（7） 鉄製で長さ3.2cmを計る。一方に張り出しを持ち、それより下には木質が横位に残っている。

銅具金具（8） 刺金のつく横棒は馬蹄形部と別作であり、刺金の基部は横棒を巻いている。それぞれ断面形は円形を呈し、鉄製である。

轡（9） 遊金具を介せず、引手と馬衡は鏡板に直接取り付けている。梢円形をなす鏡板の一端を、それぞれ外反させ、立闇とし、その部分で接合している。一方に鉄地金銅張の板状の円形金具が一部残っている。引手長さ15cm、衡は二連式であり長さ16cmを計る。全部分の断面形は梢円形をなす。



第90図 馬具実測図



第 91 図 鉄 鋼・刀 子・実 検 図

<鉄鎌> (第91図1~6、10~33)

鉄鎌は全てが有茎のものであり、平根と細根に大別できる。平根には頭が柳形をなすもの(1~3)、三角形をなすもの(4)、劍形をなすもの(5~6)があり、又細根には片刃のもの(9~20)、劍形をなすもの(21~27)がある。その他に頭の形が不明なもの6本がある。中は24の如く長さ22cm以上のものもある。鎌部には、多くのものに木質部が残存している。

<刀子> (第91図7) 鋒が欠失している。平抜つくりで、茎の部分に木質部が残存している。茎の長さ5cm、他に1本している。

<鎌> (8) 全長13.4cm、先端部で上彎し、その部分は断面半円形をなす。先又端から6.7cmで、断面が矩形($10.8\text{mm} \times 10.2\text{mm}$)になり、更に茎先端にいくに従って厚さを減じていく($5.7\text{mm} \times 7.9\text{mm}$)。尾部には木質が残存している。

・土器 (第92図~第95図)

<土師器> (第92図) (高坏5、脚付鏡2、壺1、器合1)

高坏(1、2、3、5、8) ①透しを有するもの②通常のものに分類できる。

1. 腹下部に三方の透しを持つ大型品である。脚高が脚の広がりに比して大であるところに特徴がある。長い脚部は三ヶ所に分けて製作した事が断面の様子から伺える。坏部に幅1cmのかき目が見られる。口縁部、下縁部は横ながら見られ、全体として丁寧な作りである。高さ22.4cm、坏径18.7cm、下縁径18cmを計る。全面赤褐色を呈す。

2. 脚部には一ヶ所の接合部が見られ、しばりの凹凸が表面に見られ、また底部内面にみられるしばりは頗著である。坏部下方には二条の狭い沈線、口縁部のやや外反する部分に広い二条の沈線を施すが、これは全周していない。胎土には石英粒を含む。器高18.2cm、坏径17.8cm、下縁径15cmを計る。全面黄褐色を呈す。

3. 坏部中位に棱を持ち、その部分から立ち上がる。接合は脚部と坏部のみで、この点通例のものと変らない。脚下縁にも棱を持つ。器高15.6cm、坏径16cm、下縁径12.6cmを計る。色は赤褐色を呈すが、坏部の約6分の1に黒い部分がある。

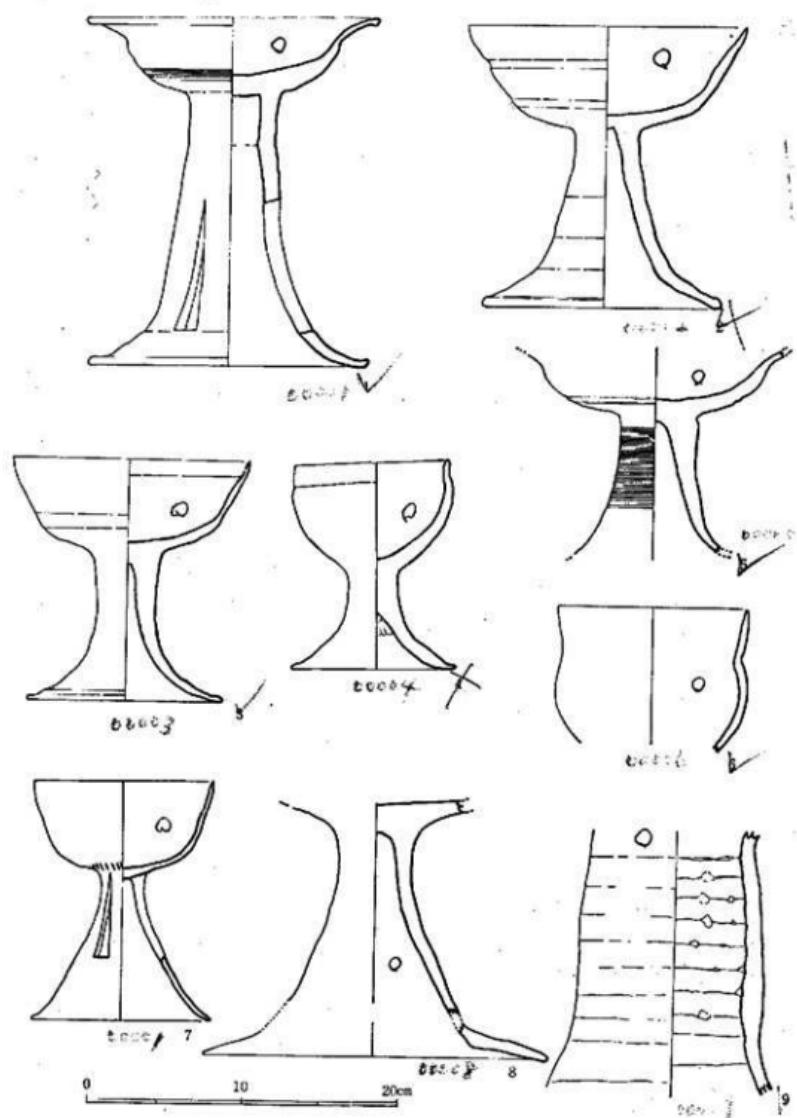
5. 口縁部、下縁部は、細片で復元できない。恐らく、1と同様であろう。脚部には、かき目が見られる。また坏部に二条の沈線が見られる。口縁部は途中から外反する。焼成悪く、全面赤褐色を呈する。

8. 脚部のみ現存する。ヘラ状具による継ぎけずりが認められる。残存坏部は平坦であるから、かなりの大型品であった事が推定される。色は赤褐色、胎土良好である。

脚付鏡 (4、7)

4. 脚部は下方で聞く形であるが、脚を作り上鏡と接合したのではなく、一塊の粘土から全体を形造り、脚内面をけずり取った様である。脚内面にはヘラでけずり取った跡が認められる。更に脚部下方にもヘラ状具によるけずりが見られる。口縁部は一段内側に入り、直立する。この部分には横ながら見られる。鏡内面も丁寧になでている。器高13.3cm、口縁径9.8cm、下縁径10.6cmを計る。口縁は水平でない。全面赤褐色を呈し、胎土は良質。

7. 脚上部に三方向の透しを持つ。器肉は非常に薄く、口縁部はするどい。鏡下部にくし状具に



第 92 図 土 器 実 測 図

よる削尖文が全周する。器高15.6cm、口縁径と下縁径は同大で11.4cmを計る。色は全面黄褐色を呈し、良質な胎土を使用している。

増（6）底部は細片のため復元し得ないが、丸底であろう。口縁はやや外反する。この部分には、内外とも横なでが見られる。口径12cmを計る。全面赤褐色を呈する。

器台（9）上縁と下縁を欠失し全体の形は不明であるが、双方とも現存部分から、それぞれ外反するようである。全体的に厚ぼったく、巻き上げの跡が凸凹を残している。内側は巻き上げの合部を指頭で押された跡があり、その上を横なでしている。外面にはかき目様のものが部分的に残っている。現存高約16cm全面黄褐色を呈し胎土は良質である。

＜須恵器＞（第93図～第95図）（坏身8個、坏蓋7個、高坏2個、高坏蓋1個、瓶4個、平瓶1個、提瓶3個、甌2個、大甌1個）

坏蓋（第93図1、2、3、7、12、13、16）

蓋は、①肩から下縁部にかけて直下するもの（1、7、12、13、16）②天井部からゆるやかに下縁部に至るもの（2、3）に分類できる。更に①には下縁部に沈線を持つもの（13）もある。

1. 全面青灰色を呈す。巻き上げの跡が表面から観察できる。又下縁部内側はややふくらむ。焼成、耐土共不良。下縁径12.8cmを計る。

2. 巷き上げの部分が、製作後も段になっている。全面に横なでを施す。胎土、焼成は1と同じ。下縁径13.2cm。

3. 天井部からゆるやかに下縁部迄続く。二条の広い沈線をもつが、下のものは全局していない。下縁部はヘラ削りが見られ、内面は巻き上げの跡を整形したのであろうが、ラセン状の凸凹が下縁部迄見られる。耐土、焼成不良。下縁径12.2cmを計る。

7. 細片化して、全体の形を復元できないが、下縁部は直立する。

12. 石英粒を多く含み胎土が非常に悪いが、焼成は良好。頂部はやや凹む。下縁へ直下する部分はややふくらむ。この部分に横なでが見られる。また頂部内側にもなでがみられ、中心よりやや片寄った所に同心円様のものが認められる。下縁径13.8cm、色調は灰色を呈す。

13. 下縁部に段を有する。頂部はヘラ削り整形をなしている。内面に3と同じラセン状の凸凹を見る。焼成良好で、青灰色を呈する。下縁径12cm。

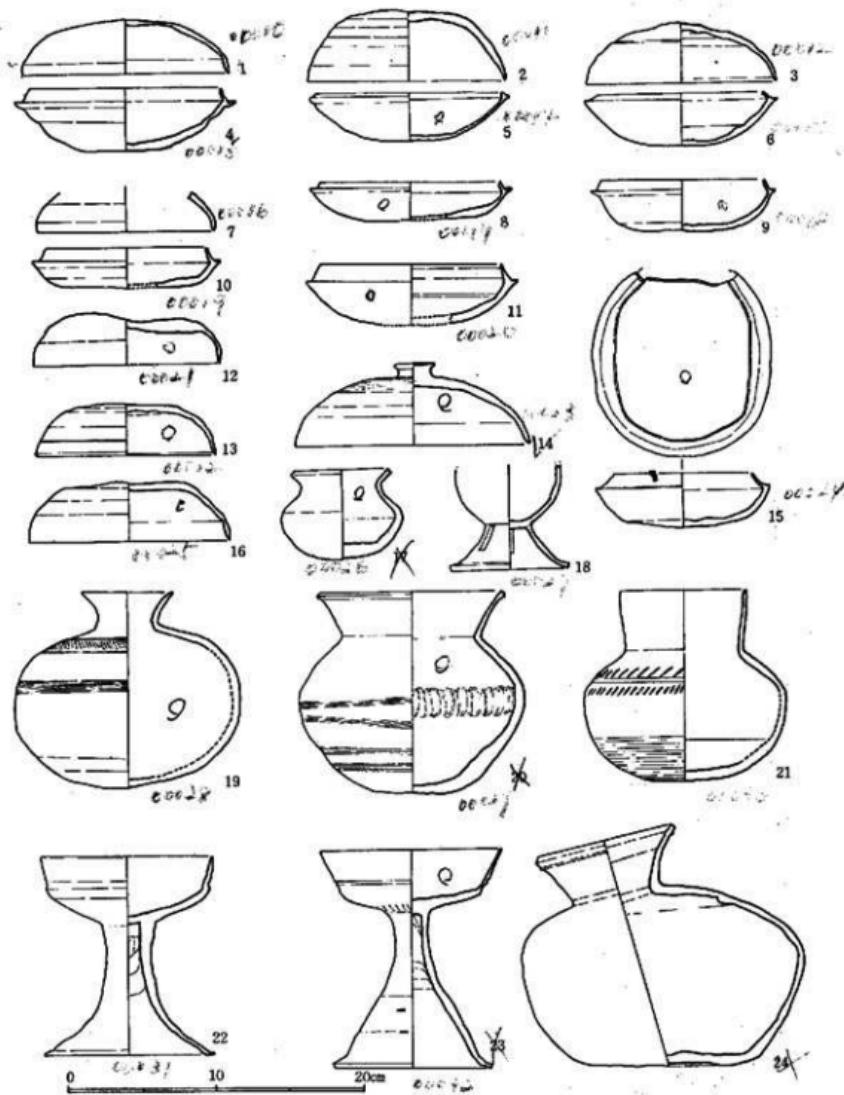
16. 頂部は平であり、中心に凸状のものを残す。下縁部は1と同じ形態を示す。青灰色を呈し、焼成は不良。下縁径13cmを計る。

坏身（第93図4、5、6、8、9、10、11、15）身は蓋受け部の立ち上りの高さにより①5mm以上のもの②5mm以下のものに分類できる。

4. 器体は凹凸をなす。蓋受け部上端には、横なでがみられる。色調は青灰色を呈し、胎土良好。径13.5cmを計り、蓋1とセットになる。

5. 器体は薄く、底部から蓋受け部に立ち上る所にヘラの跡が認められる。蓋受け部の立ち上がりが非常に低いのが特徴である。口径12.2cm。全面青灰色を呈す。蓋2とセットで出土した。

6. 身5と似るが、底部から蓋受け部にかけて、やや入り込む。底部に内側なでが認められる。口径11.4cm。全面青灰色を呈す。蓋3とセットになる。



第 93 図 須 恵 器 実 調 圖 (1)

8. 内面に横なでがみられる。現存部から復元すると底部は平になるらしい。焼成は、この身中最も良好である。灰色を呈す。復元口径12cm。胸部にヘラ記号(△)を有す。
9. 焼成は8と同様。上面形は下垂梢円形をなす。底部にはヘラけずり、また、内面底部にはなでがみられる。更に底部中央にヘラ記号を施す。色調は青灰色。
10. 底は平になりヘラ削りが見られる。色調、焼成とも4、5、6、に似る。復元口径11.5cmを計る。
11. 作りは丁寧で、蓋受けの立ち上りも高い。底部は平になるらしい。ヘラ削りが認められる。現存するには全体の三分の一、復元口径12cm、外面灰色、内面あざき色である。
15. 焼成、胎土共良好な环であるが、竺刷きの段階で、蓋受部の両方から力を加えたらしく、形が歪んでいる。底部は中央部にヘラおこしの跡が見られ、その周りはヘラ削りを行って、平底をなす。内側には、ラセン状の凹凸が残っている。
- 高坏蓋（第93図14） 中しほみのつまみを有する高坏蓋である。外面の上半に荒いかき目がみられる。内面は下緑部の横なで、天井部になでが認められる。つまみとの接の合跡が内面でやや窪みをなす。灰色を呈し、焼成良好。下緑径15.8cmを計る。
- 高坏（22、23） 22. 胸部は全面に端整なかき目が見られる。坏部には一条の沈線を持つ。下緑部は23と同じく、やや外反する。坏口径11.4cm、高さ13.3cmを計り、全面灰色を呈す。焼成良好。
23. 坏口緑部はやや外反する。脚部は途中から急に外反し、その部分に三方向に、ヘラ状具により突刺した二段の透しを持つ。更にその透しの間に、これも三方向にヘラ状具による二段の沈線が刻まれている。坏は当部へ届出する所に二条の市広い沈線を持ち、坏の下面には突刺文を施す。全面に横なでが認められ、又坏内面底部には、なでを見る。坏径12.2cm 器高14.7cmを計る。全面あざき色を呈し、焼成良好。
- 壺（第94図） ゆるやかに外反する口頭を持つ大壺である。口唇部は折り返しており下端はシャープに稜をなす。頸部には二条一単位の沈線を三段に施し、上部には櫛描き波条文をめぐらす。頸部内面にはかき目を抱す。肩部は著しく張り、外面は縦位の平山印き目、内面は同心円文をそれぞれ底部まで施す。胎土堅緻、焼成良好、黒灰色を呈す。復元口径34cm、同器高90cmを計る。
- 壺（第93図17～21、第95図6～9） 口緑部が外反するものと、直立するものに二分できるが、前者は①胸部より小さな口緑をもつもの（第93図19）、②胸部とほぼ同大の口緑をもつもの（第93図17、20）、後者は更に蓋を有しないもの（第93図21）と有するもの（第94図7、9）に分けられる。
17. 内面は、粘土ひもの継ぎ目の上を押し、凸凹をなす。胴部下半分はヘラ削りが認められる。小形にもかかわらず器壁は厚く、口緑部は稜をなす。高さ6cm、口径6.4cmを計る。全面黒灰色を呈し、焼成は良好。
18. 肩台付小壺壺。脚部と上部が分離して出土したが復元したら、同一のものである事が解った。上方に三方向に長方形の透しを有する。壺部の底部に粘土の帯突起を作り、はめこんだ様で

ある。下縁径7.8cmを計る。色は黒色を呈し、焼成良好。

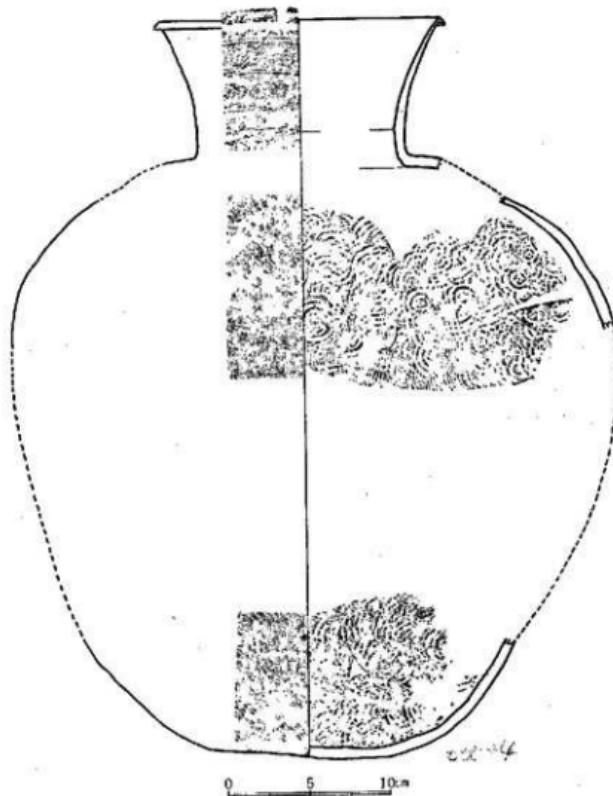
19. 球状の胴部をもち、ゆるやかに外反する口縁を持つ肩部には左方向から力を加えた梯状具による密集した刺突文が見られ。その上下をそれぞれ沈線で区画している。更に胴最大部にはかき目が見られ、それより下は回転を利用したヘラによる仕上げをなしている。高さ13cm、口径6cm（但し、この部分は焼片のため、復元推定値である）。胴部最大径15.2cmを計る。色調灰色を呈し、焼成普通。

20. 脇下部にはかき目、口縁部内外には横なでが見られる。脇下部には部分的にたたき目様のもの、また内面に円心円文が見られる。胴部の三ヶ所に他の土器の接着が見られ、1つにはたたき目（同心円文）が見られる。また内側底部には焼けふくれが生じ、土器としては失敗品であろう。三分の一程が現在している。高さ13.8cm、口径約12cmを計る。

21. 非常に丁

寧に作られた土
器である。直口
部と脇の下半部
にはかき目が見
られ、特に下の
ものは底部中心
から端整に施し
てある。器高
12.8cm、口径8.
5cmを計る。企
面黒灰色を呈し
肩部に自然強が
見られる。また
肩部には二条の
刺突があり、そ
の間を二条の沈
線がまわってい
る。

第95図6・7
(増のセット)
蓋の下縁部はや
や外反し、模を
なす。頂部には
ヘラによる沈線
がラセン状に三



第94図 盛土城出土大甕実割図

周している。下縁径9.3cmを計る。7は底部に荒いカキ目があり、その部分から肩にかけてヘラ削りが見られその上に横なでを施している。器体はややゆがんでいる。

8・9（壇のセット）蓋は天井部から下縁部に移る所に沈線を持ち、ややふくらむ。下縁部は6と同じく稜を有し、下縁は鋭い。頂部内面には横なで、及びなでが見られる。下縁径10.8cmを計る。9は端整な作りで、底部から肩部にかけてヘラ削りが認められる。頭部、及び口縁内外には横なでが見られる。器高8.4cm、口径7.2cmを計る。

翫（第95図4・5）

4. 頭部は直立し、口縁部に急に広がっていく。底部は平底氣味で安定性を持つ。全面横なで調整を行なっている。口径11.0cm、器高15.4cmを計る。全面灰色を呈し、焼成普通。

5. 頭部と口縁部との境は段をなし、沈線を有する。更にその上に櫛搔きの斜線を施している。体部は球状をなすが、肩部には、突刺文が施され、その下には上下に沈線を持つ文様帶があり、そこに一孔を穿っている。突刺文は施文方向が違い、装饰的効果を高めている。また体部内側の底部中央には、直径1cm前後の円形をした凸凹が10数ヶ所あり、それぞれ重なっている。体部と頭部との接合、成形の際、円棒を使用し生じたのであろうか。焼成良好。口径13.8cm、器高14.8cmを計る。全面黒色を呈す。

提瓶（第95図1～3）

①耳を持つもの（1・3）②耳を持たないもの（2）に分けられる。

1. 体部の片面はほぼ平らであり、両面に丁寧なかき目が見られる。口頭部の中程でわずかながら段をなし、口縁部はするどい稜をなし、段を呈す。耳は3のものに比して尖っている。口径9.2cm、器高18.6cm、体部の最大巾10.8cmを計る。全面黒色を呈し、胎土、焼成良好。

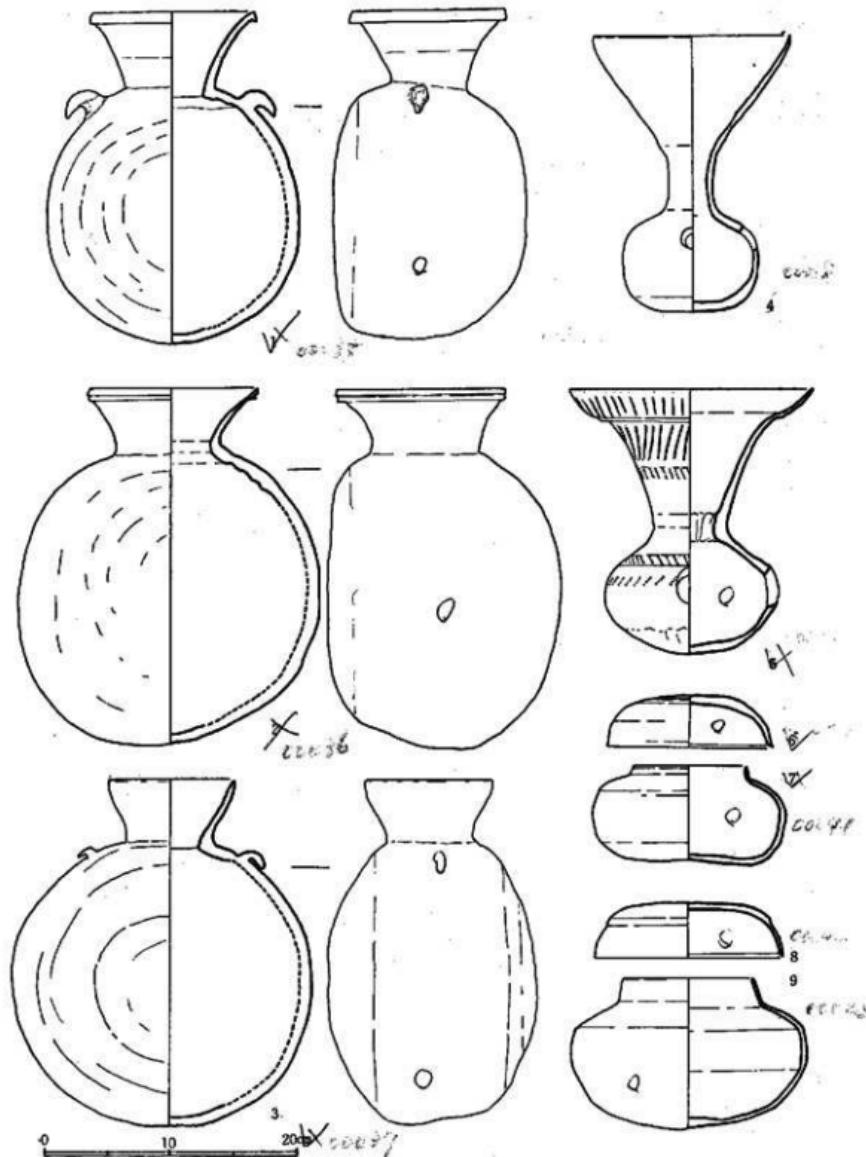
2. 体部は片面平らである。口頭部は外反し口縁部は段をなし、細い沈線を有する。口縁はするどい。体部両面にかき目を見るが、平らな面の中心部には平行叩き目文様のものが部分的に認められる。これはかき目より新しい段階で生じたものであるらしい。口頭部には↓のヘラ記号がある。口径9.4cm、器高20cm、体部最大巾13.2cmを計る。全長灰色を呈し焼成普通。

3. 前2例に比べ体部はふくらむ。体部の一面にはかき目、他面はヘラ削りをなしている。口頭部は途中からやや外反し、口縁部に至る。耳は2に比し小さく、先端は丸味をおび収縮した感じである。口径7cm、器高19.7cm、体部最大巾11.7cmを計る。体部はあざき色、上部は灰色を呈し、焼成普通。整形はいずれも副部の平坦面と球状面を接合し、更に口頭部を接合した痕跡が明瞭である。

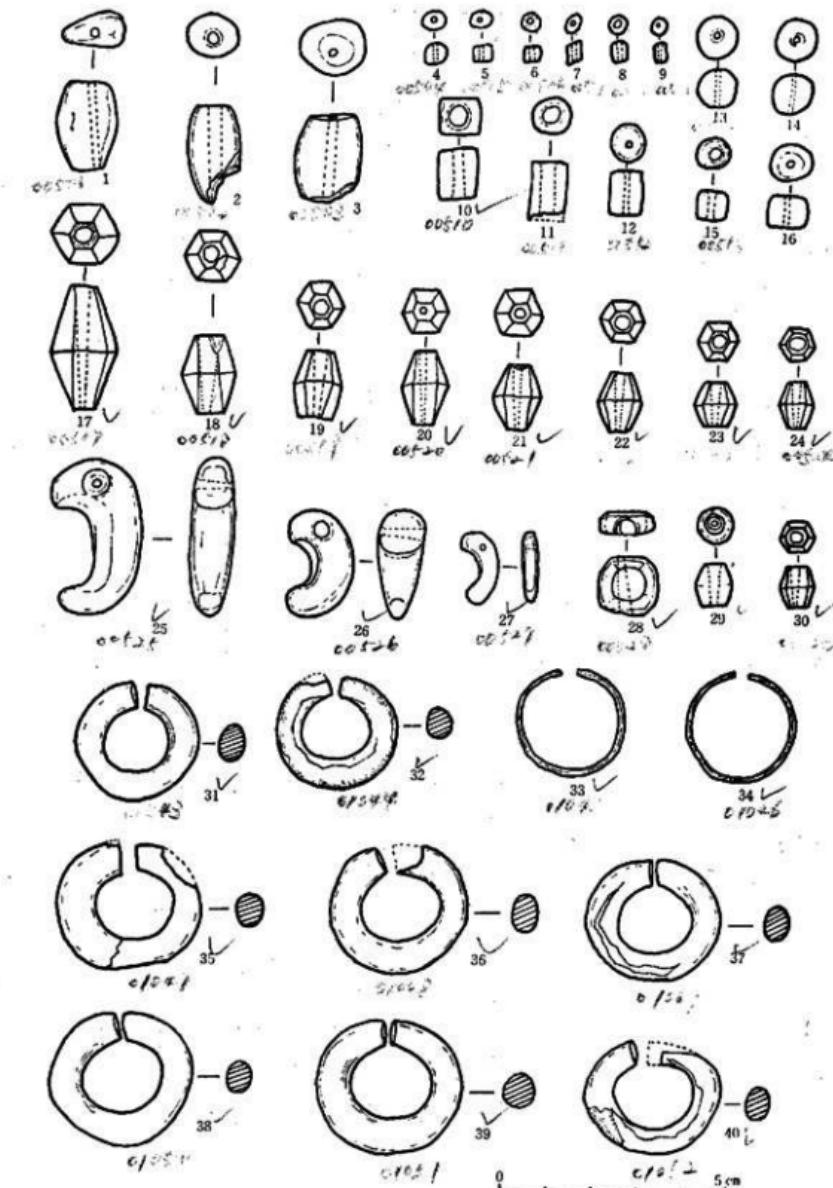
<装身具>（第96図）（丸玉・小玉・管玉131個、練玉34個、切子玉9個、金環8個、銀環2個、東玉4個、勾玉3個、平玉1個算盤玉1個出土）

東玉（1～3）琥珀製である。それぞれ形態が違う。表面は褐色を呈し、破口は貝殻状をなす。穴は細い端正な方で、穴の両端とも同大である。他に長さ8mmの全然加工の見られない粒状のものがある。

練玉（4・5）黒灰色を呈す。大きさは一定であるが長より幅の大きいもの、その逆のものがある。更に穿孔の時、粘土の余分のものが孔端に残り上ったままで、整形されず残っているものもあり、全体として粗雑な作りである。



第 95 図 火 惠 器 (2)



第 96 図

装 身 具 灰 测 図

No.	地盤の性質										地盤の性質										地盤の性質										地盤の性質									
	長径	短径	厚さ	孔径	孔深さ	孔形	偏心	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面	底面			
1	10.5	10.4	9.7	2.1	A						33	7.75	7.15	5.6	1.8	"					66	8.4	7.3	5.1	1.3	"					97	6.4	5.7	3.2	1.7	縫隙	B~C			
2	9.9	9.75	9.7	1.7	"						34	8.15	7.05	4.85	1.6	"					66	7.85	7.5	4.5	1.8	"					98	5.8	4.75	4.15	1.3	縫隙	C			
3	10.0	9.65	9.1	1.6	"						35	7.85	7.4	6.05	1.7	"	B~C					67	8.6	8.1	5.9	2.0	"					99	5.8	4.85	4.4	1.3	縫隙	C		
4	9.5	9.1	9.2	1.6	"						36	8.65	8.75	5.7	1.6	"					68	8.5	7.25	5.6	1.8	"					100	6.1	3.8	1.8	"	縫隙	C			
5	9.15	9.0	8.3	1.9	"	A~B					37	7.65	6.9	5.0	1.9	"	C					69	8.2	7.2	5.8	1.6	"	B				101	4.95	4.6	3.2	1.8	縫隙	C		
6	9.4	9.35	8.7	1.9	"						38	7.4	7.0	6.6	2.3	"	B~C					70	7.45	6.9	5.3	1.7	"	B				102	5.5	5.4	3.3	1.4	縫隙	B		
7	9.8	9.3	7.45	1.6	"	B					39	8.1	7.6	5.0	1.9	"					71	7.2	6.45	4.75	1.9	"	C				103	5.3	4.6	3.65	1.3	縫隙	C			
8	9.8	8.45	6.3	1.7	"						40	7.2	6.85	5.65	2.0	"	C					72	6.8	6.5	5.35	1.2	"	B~C				104	5.15	4.6	3.85	1.5	縫隙	C		
9	9.2	8.3	6.6	1.8	"						41	7.65	7.6	4.8	2.0	"	B~C					73	6.85	6.6	4.7	1.8	"	縫隙	B~C			105	5.2	4.95	3.85	2.0	水色	"		
10	8.05	7.5	6.3	1.6	"						42	7.45	7.0	5.75	2.1	"	C					74	6.2	5.7	3.2	1.9	"	樹	C			106	5.7	5.25	3.85	1.3	樹	B		
11	9.9	8.85	7.45	1.6	"						43	7.95	7.1	4.4	3.0	"					75	7.05	6.0	3.4	2.4	"				107	4.4	4.3	4.65	1.3	樹	C				
12	8.45	8.25	6.8	1.6	"						44	7.75	7.4	5.2	1.4	"	B~C					76	6.35	5.8	4.3	1.5	"	樹	B~C			108	8.8	7.9	5.5	1.6	樹	B		
13	9.0	6.5	6.8	1.4	"						45	7.35	7.2	5.4	1.3	"					77	6.65	6.0	4.9	1.6	"	B			109	7.8	5.05	1.9	"	樹	"				
14	8.35	7.95	6.7	2.0	"						46	7.4	7.1	4.95	2.0	"	C					78	7.4	6.7	4.4	1.4	"				110	4.05	2.0	2.0	"	樹	C			
15	8.8	8.15	5.9	1.4	"						47	7.5	6.85	5.8	2.2	"					79	6.7	6.1	5.3	2.5	"	C			111	6.6	6.45	5.1	2.2	樹	C				
16	9.2	8.5	7.2	1.2	"						48	7.4	6.4	4.9	2.1	"	B~C					80	7.3	7.4	2.0	"				112	6.1	5.3	1.7	1.4	樹	B				
17	9.4	9.0	5.6	1.7	"						49	7.2	6.9	3.7	1.5	"	C					81	6.9	6.65	4.9	1.6	"	B			113	4.6	4.5	3.15	1.4	樹	C			
18	8.5	7.7	6.2	1.7	"	B~C					50	7.3	6.3	5.75	1.4	"	B					82	5.8	5.6	4.55	1.8	"	C			114	5.7	4.8	3.5	1.5	樹	B			
19	8.0	7.3	5.75	1.6	"	B					51	7.2	6.9	6.0	2.0	"	C					83	5.9	5.3	5.1	1.7	"	B~C			115	5.05	4.8	5.0	1.4	地盤	C			
20	9.5	8.35	6.95	1.6	"						52	8.3	8.25	4.2	1.8	"	B					84	5.7	5.25	5.75	1.7	"	C			116	5.15	4.3	3.3	1.4	青	B			
21	8.65	7.4	4.65	2.2	"	B~C					53	7.0	6.6	5.8	1.7	"					85	6.2	5.6	3.75	1.9	"				117	4.7	4.6	3.05	1.3	青	C				
22	8.85	8.4	6.15	2.1	"						54	6.25	5.7	2.9	1.5	"	C					86	5.5	4.8	5.3	1.8	"				118	4.55	4.0	2.9	1.0	青	"			
23	7.9	7.15	6.65	1.3	"	B					55	7.3	7.0	4.3	1.6	"	深井					87	6.0	5.8	2.8	1.7	"				119	4.5	4.2	2.8	1.3	青	"			
24	9.0	8.65	6.65	1.5	"						56	6.85	6.85	3.6	1.9	"					88	6.1	5.7	3.4	1.8	"				120	4.55	4.35	2.75	1.4	青	B				
25	8.85	8.45	5.75	2.0	"	B~C					57	7.2	7.0	4.8	1.7	"					89	5.4	4.5	4.7	1.8	"				121	3.9	3.7	3.1	1.3	青	C				
26	8.1	7.5	5.95	1.7	"						58	9.1	8.45	7.4	1.8	"	B					90	6.85	4.3	3.7	1.7	"				122	4.9	4.5	3.25	1.4	青	B			
27	7.4	7.0	6.7	1.7	"	C					59	7.8	7.4	7.1	1.6	"	B~C					91	5.7	5.4	3.8	1.5	"				123	4.7	4.2	3.85	0.9	青	B			
28	8.8	8.0	6.65	2.1	"	B~C					60	7.75	7.3	7.7	1.4	"	B					92	5.9	5.7	2.25	1.5	"				124	5.1	4.6	3.7	1.9	青	C			
29	8.85	8.3	6.05	1.9	"						61	7.35	6.3	5.6	1.4	"	B					93	6.1	5.85	4.5	2.3	"	B			125	4.3	3.7	4.9	1.1	青	C			
30	8.2	7.5	5.9	1.9	"						62	10.95	9.1	7.6	2.0	"	B					94	5.6	5.15	4.0	1.7	"	C			126	3.35	2.4	1.7	1.2	青	B			
31	8.3	8.1	6.65	1.8	"						63	8.2	7.55	6.8	2.0	"	B~C					95	5.6	5.5	2.85	1.9	"				127	3.25	3.2	2.85	1.1	青	B~C			
32	7.8	7.25	5.4	1.7	"	C					64	8.15	7.0	4.6	1.2	"	C					96	5.5	5.0	3.7	1.6	"													

(+) は測定品を表す

ガラス玉 (6~16) 丸玉や小玉や管玉を含む。大部分が緑色を呈し、若干、黄色(6・7)、黄緑色(8・9)を含むが、これらは全て小玉である。緑色にも様々な形がある。①全体が球状をなすもの(丸玉、13・14)、②側面形が四辺形をなすもの(管玉、15・16)、③両者の中間の形のもの等に分かれる。10~12は長さが幅の1.5倍以上のもので、いわゆる管玉である。10は青色をなし透明である。穴の両端が広がり丸くなっている。11は青色をなす10と同じく穴の端は丸くなっている。12はコバルト色をなす。(計測値については第5表を参照)

切子玉 (17~24、30) 水晶製である。大きさは一定しない。穿孔は片面から行なつたらしく、両方の孔径が一致しない。また、中には19、20の如く、一方から順々に小さくならず、逆面からも穿孔に応じたらしいものもあり、一方がハの字型にひらく。

算盤玉 (29) 水晶製であり、これも19、20の如き孔のあけ方をしている。

勾玉 (25~27) 3個とも材質、形態が異なる。

25. Cの字形を成す。材質は瑪瑙製である。色は淡い黄褐色を呈し、不透明である。研磨の跡がわずかに残をなしている。孔の両端は同大でない。長さ34.6mm、胴部幅9.7mm、孔径4.1mm及び1.4mmを計る。

26. C字形をなし形態的には古式の勾玉である。石材は、翡翠である。白色が主で、部分的に翡翠色を呈する。孔は25と同様不ぞろいである。長さ25.4mm、胴部幅11.4mm、孔径3.6mm、及び2.25mmを計る。

27. C字形をなす小型の扁平な勾玉である。石質は不明。穴の周囲にだけ黒灰色の光る部分が見られ、性は黄色に変色風化して、良材とはいえないものである。長さ15.6mm、胴部幅3.85mm、孔径1.7mmを計る。

平玉 (28) 孔は平らな面に平行してあけてあり、両端は同大ではない。平面形は梢円形をなし(14.3mm×14.8mm)下は平らで、上は截頭角錐をなす。厚さ8mm、孔径3.35mm、及び、1.45mmを計る。石質は不明。

金環 (31~36・38~39) ①銅芯金張り(31、32、38、39)、②中空(35、36)、③細金(33、34)に分けられる。銅芯金張りのものは、いずれも銅の腐蝕が進んで、ボロボロのものもある。細金加工のものの表面には小さな面がいくつもみられ、打圧しながら形作った事が伺える。それぞれ同大のものを一対を見るならば、31~32、33~34、35~36、38~39はセットとなる。

銀環 (37~40) 銅芯銀張りである。形状は、金環と変わらない。両方とも同大で対になると見てよい。

g. 小結

1. 以上述べたように、猿の塚古墳からは豊富な遺物が出土したが、その中には純金製金環や、黄色ガラス玉、施等注目すべき遺物も少なくない。

2. 石室構造においても、端整な造りで、調査した例と性格を異にするものである。

3. 盛土裾部から一括して出土した土器はある種の墓前祭を行なったものと考える。

4. 被葬者の数は、副葬品等の出土位置から4体以上と推定され、かつ頭部を東に向けて安置したことが考えられる。

5. 本古墳は、後期古墳群の形成の初期のものとして位置づけることが可能で、遺物の組合せから6世紀中葉～後葉のものと年代観を与えることができる。

(馬津)

(8) 宮前1号墳

上和白大神社付近には3基の古墳が確認された。大神神社北側の斜面で、神社に近いものから順に宮前1号墳、2号墳、3号墳とした。

a. 位置と外形

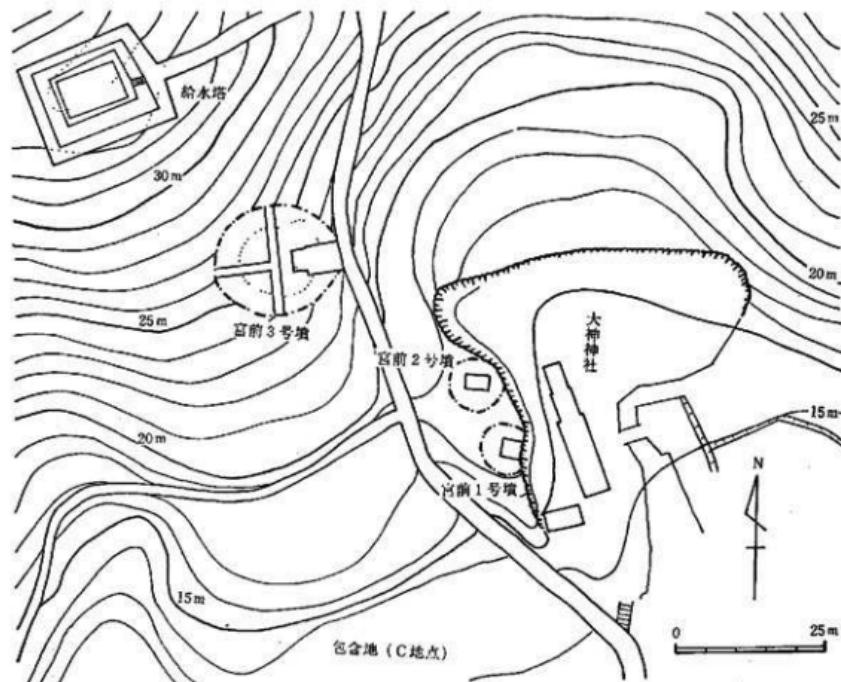
大神神社境内にあり、神社を改築する際に北側の崖面に古墳が発見された。その際に表道部はこわされ、石材は神社の基石や様石として利用されている。従って1号墳は玄門と玄室を残すのみである。天井石の一部は板落し崖面を補強する石材となっている。

標高18mの位置にある。給水塔が設けられた丘陵の頂部（標高36m）の西側斜面の先端部にあたり、本墳より一段低い畠地は住居址などの包含地である。和白古墳群の中では最も低い所にある。

本墳は調査後保存されるという前提のもとに調査が進められた。

b. 封土

自然地形がそのまま残されている北側の表面観察によれば、玄室の中心から約7mの位置から

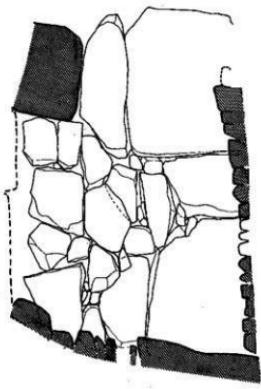
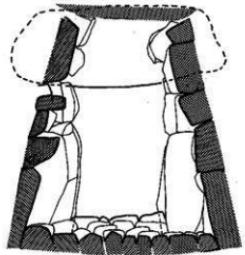


第97図

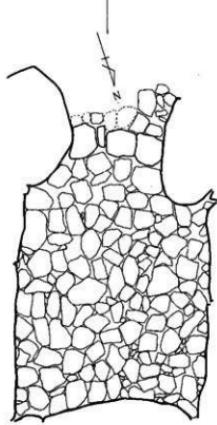
宮前1号墳・2号墳地形実測図

001 ~ 003

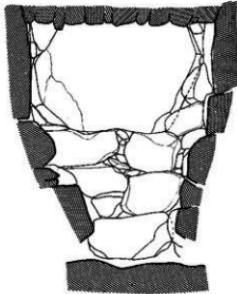
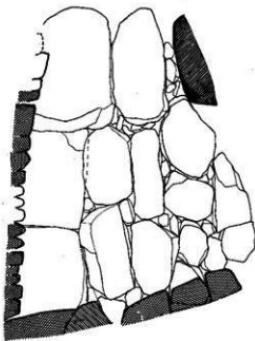
图版1 空前1号块石堆积图



L = 16.24m



L = 16.24m



周溝状の凹みがめぐっており、墳径は推定14mである。発掘調査の進行に合せて、北側崖面の補強工事が神社側で進められた。その際に玄門両側の崖面の土層を注意したが、明確な土層を確認することはできなかった。

c. 墓塚

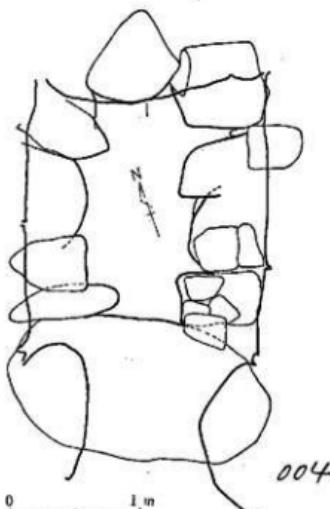
古墳を保存するために側壁の裏側を1mほど掘下げ、コンクリートによる補強工事を実施したが、墓塚の確認には至らなかった。

d. 内部構造

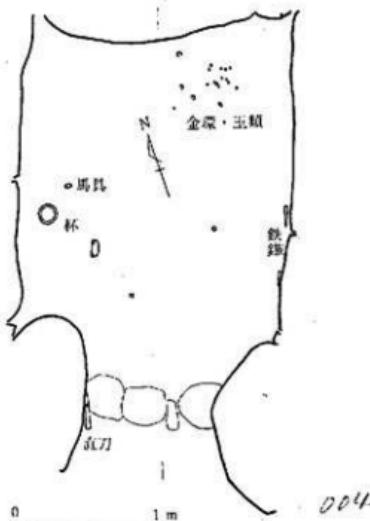
石室は主軸を N18°W にとる横穴式石室である。両袖式で玄室の長さは190cm、奥壁での玄室幅は175cm、玄門付近では175cm、中心部では185cmをはかり、いくらか胴張りとなるが、ほぼ方形とみることができる。渡道の長さは玄門から100cmしか残っておらず、全体の長さを知ることはできない。玄門幅は85cmである。奥壁の腰石は1石、側壁は2石である。いずれも腰石を立てて据えつける点は、上和白の他の古墳と共通する特徴である。奥壁は腰石の上に3段、床面よりの高さ220cmで天井に達する。側壁は腰石の上に3~5段、東側では床面から200cm、西側では170cmの高さとなっている。玄門の高さは130cmである。床面は径20cm内外、厚さ10cmほどの平たい円錐と角錐が一面に敷かれている。閉塞石は30×40cm、厚さ20cmの円錐を袖石の中央部に3個並べている。石材は奥壁側壁とも礫岩で、敷石は砂岩である。ここでも奥壁及び側壁と床面の敷石の石材とは区別されている。玄門の上には天井石がみられる。天井石の大きさは、長さ205cm、幅90cm、厚さ80cmの砂岩である。床面は奥壁から玄門に向かって次第に高くなっている。閉塞石の上面は奥壁の敷石上面より20cm高い。

e. 遺物の出土状態

玄室の天井石は転落していたので、多量の上砂がはいりこんでいた。その中から石鏡（黒曜



第99図 宮前1号墳石室上面図



第100図 玄室内遺物配置図

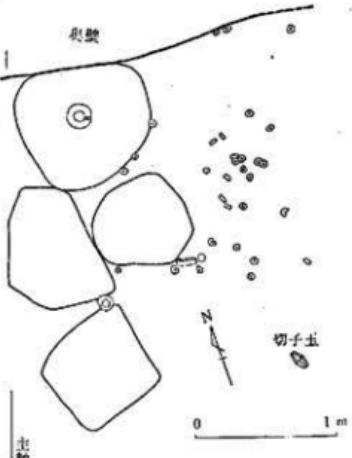
石製)と土御器片が含まれていた。

奥壁の東側側壁に寄った地点の敷石の上面及び敷石間から金環、ガラス玉、切子玉が出土した。第101図の出土状態をみると、金環3個、切子玉1個とガラス玉33個とは一つのまとまった状態であったものが、ばらついた状態とみることができるのでなかろうか。玄室の東整部に鉄鎌と刀子が敷石の上面にはりついた状態で出土している。玄門と西側側壁と閉塞石の接するところには直刀の跡がへばりついている。玄室の西壁より須恵器の壺の身、馬具の一つがあり、玄室の中央部には2個の金環が発見された。さらに閉塞石の外側から平瓶が出土している。

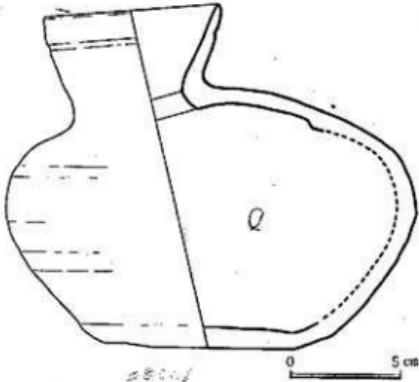
f. 遺物

須恵器(第102図・103図) 玄室内より出土した壺蓋7点(第103図1~7)と壺身4点(同8~11)、および閉塞石外溝出七の平瓶1点(第102図)である。

壺蓋はかえりのあるもの(1~5)とないもの(7)に大別され、前者は1のみに宝珠形のつまみを有す。かえりをもつ蓋は最大径11.8~9.8cm、高さ2.8~2.0cmの内に含まれる。1はかえりが口縁部よりやや外に出るもので、外部はへら調整、内面はなでによって仕上げ、胎土は堅緻、焼成も良好である。宝珠形のつまみは径1.8cm、高さ1.0cmを計る。3はかえりの立ち上がりが高いが、他はいずれも退化しており、色調も茶褐色を呈し、焼成は不良である。6はかえりをもたず、いちだんと小形であり、あるいは短頸小壺の蓋であると思われる。胎土は粗緻、焼成も不良、色調は黒灰色を呈す。7は蓋受けをもつ壺身とセットになるものと考えられるものであり、天井部から体部にかけてなだらかに傾斜する。壺身は、8~9が底部から口縁部にかけて内凹気味となり、底が深い。8には腹部中央に一条の沈線がめぐる。10は平底に近く、底が浅い。11はやや外弯気味の口縁をもち、腹部に四条の沈線をめぐらす。8~9は焼成不良で色調は内面が茶褐色を呈し、外面は黒褐色を呈す。平瓶(第102図)は口径8.3cm、腹部最大径18.5cm、基高15.6cmを計る。胎土



第101図 装身具出土状態 004



第102図 平瓶実測図

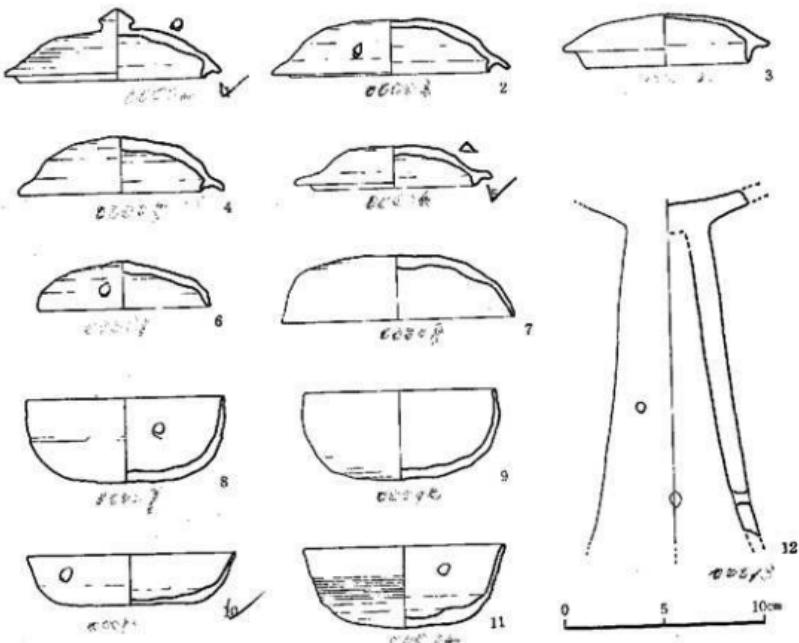
は堅致で、焼成も良好であり、色調は漆黒を呈す。頸部には一条の沈線がめぐり、肩部から脚部にかけてかき目の痕が残る。内面はなでによって生上げられており、肩部の片側に接合の痕が残る。

土師器（第103図12） 高环の脚部の底片である。接合部より馬柄に向って直伸するが、先端部は欠損して不明である。坏部も底部をわずかに残すのみで形状は不明である。脚には径 6 mm の焼成後の穿孔がある。胎土、焼成とともにふつうで、色調は黄褐色を呈す。

鉄器（第104図） 1 は大刀の柄前から刀身に至る部分の残欠であり、現長 12.9 cm、刃長 8.1 cm、刃幅 2.8 cm を計る。刃部は鍛化が著しいが、断面觀察から造込は平様の切刃造であると考えられる。西前の鉄金具は、金銅製の鎧（こじり）金具と、長さ 3.5 cm の金銅製の筒金打山具で構成される。この大刀は造込および刀装の形状より考えて、7世紀代のものと思われる。

2、3 はいずれも平根式の鉄鎧であるが、頭および茎の先端を欠損する。2 は現長 8.8 cm、厚さ 2.5 mm を計り、茎部より頭に向って撓状にのび、頭は方頭になると思われる。3 は現長 6.7 cm、厚さ 2.0 mm を計り、形式は 2 と同様である。

4 は長さ 3.4 cm、幅 2.1 cm、厚さ 2.0 mm の鉄板につけられている 3 個の鉄よりなる。一端は方形を呈し、もう一端は半円状を呈す。頭は前者に並列して 2 個、後者近くに 1 個認められ、何かに



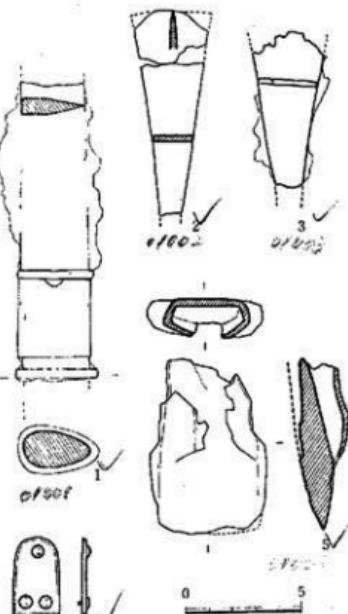
第 103 図 宮前 1 号 墳 山 土 器 夾 洞 図

打ちつけられていたと考えられる。

5は鉄斧で破損がいちじるしく、背部および袋部を大きく欠損するが、刃部は比較的良好に保存されている。現長7.5cm、幅4.6cmを計る。刃端より約3cmの位置から両端を折り返すことによって袋部を形成する。鍛造の小形品であり、手斧として使用されたものである。

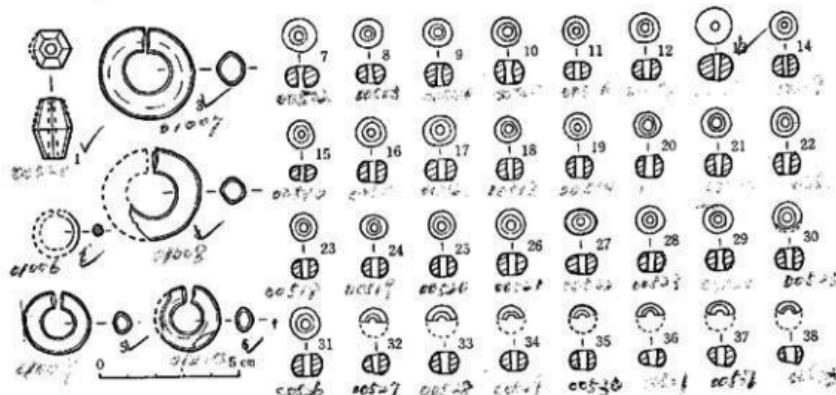
金環（第105図2～6）

2が鋼芯金張りで、他は中空の金銅環である。2は残少であるが、復元推定径1.7cm、断面径3mmを計り、非常に小さい。3と4は径3.4cm前後、断面1.2×1.0cm前後のもので、同形式のものである。5と6もまた径2.5cm、断面径0.8×0.7cm前後のもので、同形式である。これらのことから3と4および5と6が対になると考えられるが、2と対になるものは検出されなかった。



第104図 鉄器実測図

ガラス玉（第105図7～38） 計測値は第6表に示す通りであるが、長径13.7～9.1mm、短径12.8～9.0mm、厚さ10.7～6.0mmの間に含まれ、断面形は両端に棱をもつものが多い。両耳は丸味



第105図 金環・玉類実測図

をもち、径に比して厚さは小さい。表面は風化が著しく、色調は白色を呈す。しかしながら、破損品の断面内側に青色を呈するものが認められ、本来は青色を呈していたものと考えられる。これらのガラス玉は、風化が著しいことより、船ガラスであると考えられる。

切子玉（第105図1） 水晶製で一端をやや欠損するが、ほぼ完形品である。長さ2.2cm、最大径1.4cm、最小径0.8cmを計り、中央より両端に六角錐の形に琢磨して仕上げている。孔は片面穿孔で、径はそれぞれ2.0mmと3.5mmである。

g. 小結

宮前1号墳は、大神神社の境内にある。表道部はすでに失われているとは云え、石室の残存状態は良好であった。10月下旬から11月上旬にかけて、神社総代の手により保存工事が進められた。石室の石材はほとんど礫岩で、落石を防止するため石室の裏側をコンクリートによる補強を行ない、表道部屋面は石積みされた。天井石のない部分には、造成工事で姿を消す高見5号墳の天井石をブルドーザーで運び、土を盛り上げて墳形の復元につとめた。このように宮前1号墳の石室がより強固な形で保存されたのは、神社総代の文化財に対する深い理解と熱意によるものであることを明記する。

（島津・国平：柳田）

	長径	短径	厚さ	孔径	色調	備考
1	11.6	11.3	7.9	5.2		完形品
2	10.1	9.8	7.4	3.0		"
3	11.1	11.0	8.6	2.7		"
4	10.7	10.6	7.9	3.0		"
5	10.2	9.9	6.6	2.8		"
6	10.6	10.4	7.2	2.8		"
7	13.7	13.5	10.7	2.5		外皮被覆
8	11.6	10.7	8.5	2.7		"
9	10.8	10.8	7.5	2.9		"
10	10.5	10.3	7.0	2.4		"
11	10.2	9.8	7.7	3.0		"
12	10.1	10.0	7.4	3.1		"
13	13.2	12.8	10.0	2.6		"
14	11.0	10.4	8.3	2.3		表皮剥落
15	10.4	9.4	7.2	2.3		"
16	10.7	10.4	7.6	2.5		"
17	10.1	9.5	7.6	2.5		"
18	10.5	10.2	8.2	2.7		"
19	9.1	8.5	6.8	2.3		"
20	9.9	9.6	7.6	2.7		"
21	10.3	10.0	7.1	3.2		"
22	9.1	8.7	6.0	2.4		"
23	10.3	10.0	7.9	2.7		"
24	11.4	11.1	7.6	3.1		"
25	9.2	9.0	7.1	3.0		"
26	10.2	10.0	7.6	2.9		"
27	10.7	9.9	7.8	2.8	(+) 完形品	
28	11.1	9.7	8.3	2.1	(+) "	
29	11.4	10.4	8.6	2.5	(+) "	
30	—	10.0	8.1	3.0	(+) "	
31	11.0	10.3	7.5	3.0	(+) "	
32	—	—	—	—		32~38は計測不可

第6表 宮前1号墳出土ガラス玉計測表

(9) 宮前2号墳

a. 位置と外形

宮前3号墳の占地する丘陵斜面は、西にのびて包含地につづいている。この斜面に宮前1号墳、2号墳、3号墳があり、3基で一群を構成すると思われる。宮前1号墳と3号墳の間にある宮前2号墳は、封土が失われ、わずかに石材が露出していた。神社内に位置し保存される古墳であったが、古墳の時期決定ができる資料を得ることは、古墳群の構成を知る上で必要であった。このような調査上の要請から発掘されたが、古墳保存の立場から狭道部に遺物を確認した段階で調査を打ち切ることにした。

前述のような一部分の調査であるから全体を明らかにすることはできず、狭道部の遺物出土状態を知る手がかりを得たにすぎない。

b. 内部構造

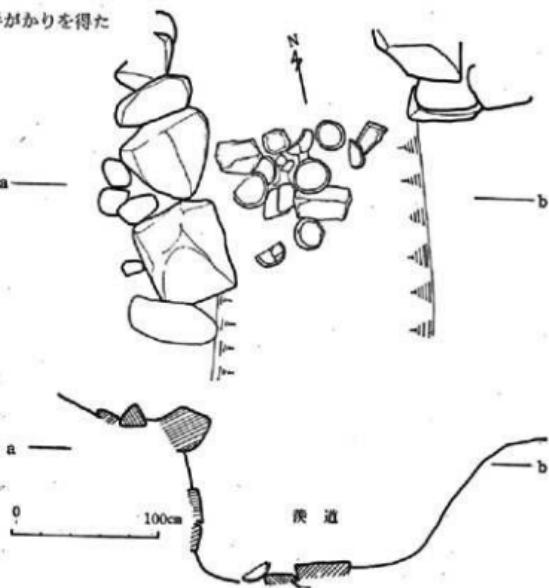
狭門（袖石）の上には天井石が残っているが、天室の天井石はすでにない。天室の上面幅は70cmと狭く、天室の石積みは横積みされており、側壁の最上段と考えられる。

主軸方向はN14°Wをさす。狭道は狭門天井石の中央から西側壁は210cm、東側壁は130cmまで石積みが確認され、狭道の入口近くに須恵器、土



第106図 宮前2号墳石室

16



第107図 狹道部遺物出土状態実測図

009

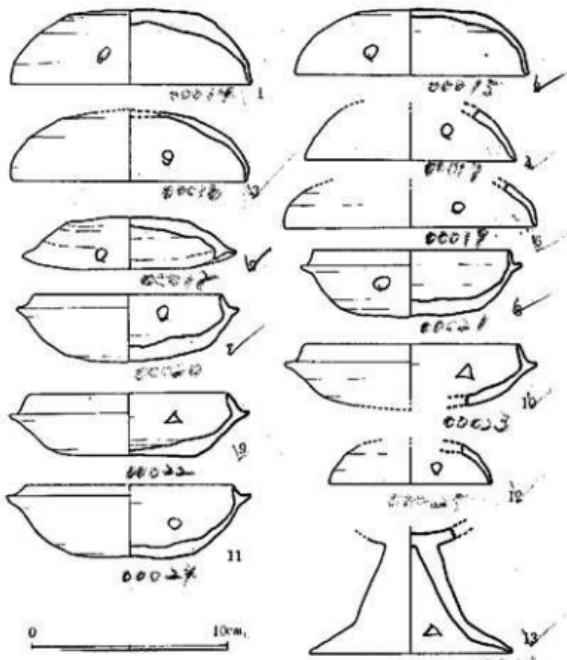
師器が出土した。

石室上面での全長は約410cm、後部部長は約210cm、横道幅は約76cmを計るが、両袖式の横穴式石室であること以外は詳細に石室の内部を知ることはできなかった。

c. 遺物出土状態

(第107図)

横道部入口には、西側壁から60cm下の横道床面に接した状態で遺物が確認された。横道の上面幅は100cm、床面は76cmである。須恵器10数点と土師器の高环1点がある。



第108図 出土遺物実測図

d. 出土遺物

須恵器 (第108図 1~12)

壺蓋6点(1~6)、壺身5点(7~11)、蓋1点(12)の他に壺蓋、壺身の細片が数点出土している。壺蓋は5を除き、すべてかえりをもたないもので、天井部から口縁にかけてゆるやかに傾斜し、天井部と体部の境に明瞭な稜をなさない。口唇内側も丸味をもっており、縫をなすものはない。外面はへら彫刻、内面はなでによる仕上げで、色調は黄灰色を呈するものが多いが、2のみ暗灰色を呈す。径は12.8~10.6cm、器高3.5cm内外である。5は変形しているが、かえりの先端は内側に入り、退化している。天井部にへら削りの痕が明瞭に残る。壺身(7~11)は蓋受けをもつものばかりで、最大径12.8~11.2cm、深さ3.5cm内外のもので、蓋受けのたちあがりは、最大1.0cm、最小0.6cmである。胎土、焼成は不良で、色調は黄灰色を呈するものと、暗灰色を呈するものがあり、いずれも器表面が磨滅している。12は小形の蓋で、胎土、焼成は不良、色調は暗灰色を呈す。短頭小壺の蓋であろう。

土師器（第108図13）

高壺の脚部で、壺部は接合部付近を残すのみである。脚高は5.5cm、接合部よりラッパ状にのび、脚端近く破をなして口を開く（径10.2cm）。胎土、焼成は不良で、色調は黄褐色を呈し、表面は磨滅している。

e. 小結

石室の内部、羨道下部をそのままの状態で埋め戻したのは、今回の調査結果が整理された段階で、なお問題となる点も残されていることを予想し、その上に立って再調査の機会を持つことを願ったからである。神社絶代の方々は古墳の完全発掘を強く望んだが、2号墳は土を盛り、古墳構築時の状態で復元保存することを宣言した。神社の縁地内に古墳が保存されたのは歴代の熱意によるものである。
（柳田）

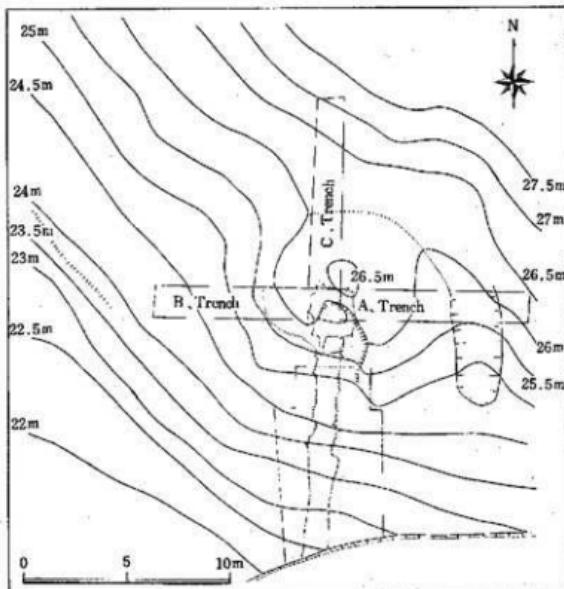
10 宮前3号墳

a. 位置と外形（第109図）

本墳は宮前古墳群3基の中でも最も高い地点に築かれており、宮前2号墳の北方約25mの位置にある。簡易水道給水塔を最高位として南側にのびる丘陵斜面に占地し、墳頂部の標高は26.5mをしめす。

墳頂部より南側の部分にわずかな陥没が認められ、玄室の天井石が一部露出している。また、玄門の天井石が抜かれ、その間隙より玄室へ降りることができる。その他の外形はかなり良好な状態で保存され、斜面に占地しているにもかかわらず明瞭な盛土が観察された。

本墳は調査の過程で保存されることが決定したので、調査はトレンチによる封土の断面観察、羨道部の露出及び遺物の検出を行なう



第109図 宮前3号墳地形実測図 011. 012-



第110図 宮前3号墳土層図 013~015

にとどめ、完掘は行わなかった。

b. 封土と溝状遺構（第110図）

封土の土層は石室奥壁を中心として東西、南北にT字形に設定したA、B、C 3本のトレンチ断面によって観察した。まず、Aトレンチ北壁では厚さ10~20cmで表土が堆積しており、頂部は天井石が露出する。表土の下はすぐ盛土となっている。すなわち、観察される土層は白色粘土、赤褐色粘土、黄褐色粘土がまだら状に層をなしており、この状態は墓塚と石室の間に特に認められる。盛土はゆるやかに傾斜しトレンチ西壁より500cmの地点で地山と接し樋となる。また東壁より600cmの地点から墓塚の掘り込みが認められるが、完掘していないために下部の状態は明らかでない。そこから盛土樋部に至る間は褐色土であるが、まだら状粘土と明瞭な境をなさず、漸次的に変化するようである。ここで指摘しなければならないことは、周溝の状態を観察できることである。トレンチ設定以前においても、封土の東から北側に統く凹みが観察できたが、トレンチ断面に幅4m、深さ50cmの複皿状を呈する状態が認められ、褐色土が堆積している。

次にBトレンチでもほぼ同様な所見が認められる。すなわち、表土直下はすぐ盛土となり、まだら状粘土が盛られている。封土樋部はトレンチ南壁より350cmの地点で地山と接し、墓塚の掘り込みは、トレンチ南壁より100cmの位置に観察された。周溝は観察されず、この部分まで周溝は伸びていないと考えられる。Cトレンチにおいても同様であり、培正中心部に顕著に認められるまだら状粘土が漸次的に褐色土となり380cmの地点で樋となる。墓塚の掘り込みはトレンチ東壁120cmの地点よりはじまる。以上3本のトレンチ断面に観察される共通点は、石室を中心とすまだら状粘土を盛土としている点であるが、裏込め石が使用されていないことから、石室の崩落を防ぐ配慮とみるとできよう。周溝については平面的な追求をなしていないため、その全貌は不明だが、斜面上部のみに認められることより、単に盛土を採取する怠慢か、墳丘を高くみせるために掘られたか、あるいはその両方を兼ねたものかもしれない。しかしながら、周溝そのも

のに特殊な意味が含まれているとするにはいさか疑問である。

c. 内部構造（第111図）

石室は主軸をN6°Wにとり、ほぼ南に開口する横穴式石室である。玄室の平面プランは長方形に近く、やや調査りを呈す。長さ240cm、奥壁寄りの幅195cm、中央部の最大幅230cmを計る。奥壁は中央に高さ130cmの三角形の巨石を立て、側壁との間隙には小形の石を積んでいる。天井に至る間にはやや小型の石を乱積みし、天井に近くなる程小さい。側壁は腰石としてそれぞれ2枚の大石を立て、その上に小形の石を持込みをもって積み上げる。石積みの罫原は小砾で充填されている。石材はいずれも礫岩であるが、腰石は径3～6cmの円錐を含む「角錐岩」であり他は比較的結晶は小さい。

床の構造はすでに荒らされていたため明確さを失くが、礫岩の底石が部分的に残存しており、礫床であったことがうかがえる。床面から天井までの高さは約200cmである。

玄室と狭道は2つの袖石によって隔てられ、幅は95cmを計る。袖石間に2枚の石を置いて仕切石となし、玄室と狭道を隔てている。

狭道は長さ490cmであり、他の調査古墳に比して著しく長い。狭道の側壁は袖石より2石目までは大石をもって腰石となし、以下狭道部先端までは小形の石を使用し、石組みの状態に顕著な差異を指摘できる。閉塞石はこの位置に認められて、長さ100cmの範囲に角錐を積み上げて閉塞となしている。従って、このことから玄門よりこの位置までが厳密な意味での狭道と考えられ、天井石もこの位置までのせられていたと思われる。腰窓より外部の石組みは、天井石に構築せず單に通道あるいは前庭としての機能を持つものではなかろうか。

玄門より腰窓までの中庭はかなり良好に保存されている。すなわち上面がやや平らな砾岩を敷いて床を構成している。床面より玄門天井石までの高さは約140cmである。

ところで、狭道部先端より南側に設定したトレンチにて組み先端よりほぼ真南に伸び給水塔へ至る道につながる梯状の造形が検出された。幅は狭道幅と均一であるが、断面は段階状を呈し深い掘り込みを作らない。底は石組みに近いほど深く自然地形に沿って次第に浅くなる。おそらく、石室へ至る通道の跡と考えられるが、その全容は不明である。

d. 遺物出土状態

玄室内は散石もはがされ遺物は須恵器、土師器の破片が少量残存していたにすぎない。狭道部は比較的良好な状態であったため遺物に期待が持たれたが、やはり若干の須恵器片が検出されたのみである。狭道部から墓道にかけて、かなりまとまった状態で須恵器、土師器が検出されたが、完形のものではなく全て破片で構成されている。またその部分より青磁片が出土した。

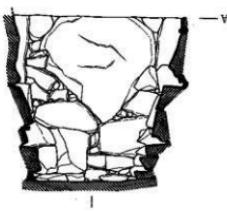
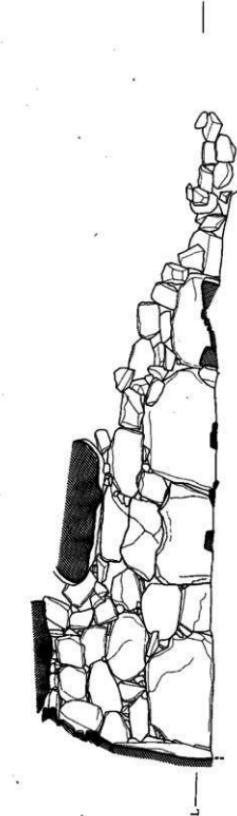
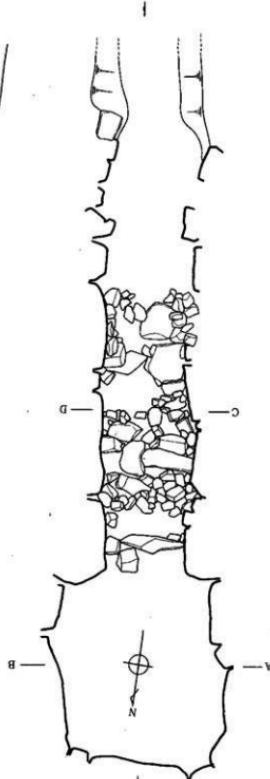
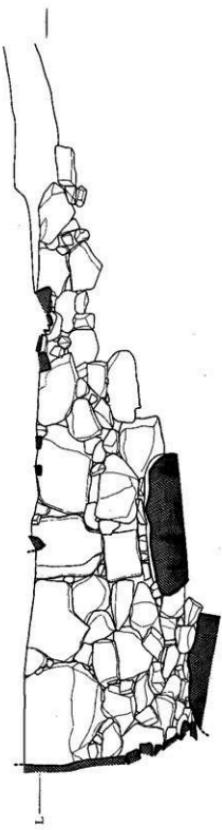
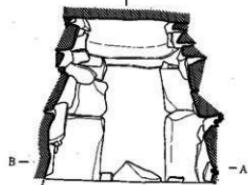
遺物の出土状態は、原位置をとどめるものではなく、整理の過程で玄室内より出土した須恵器と墓道より出土した須恵器が接合するものもあった。なお玄室内において、宮前1号墳から出土したものと同種のガラス玉が4個出土した。

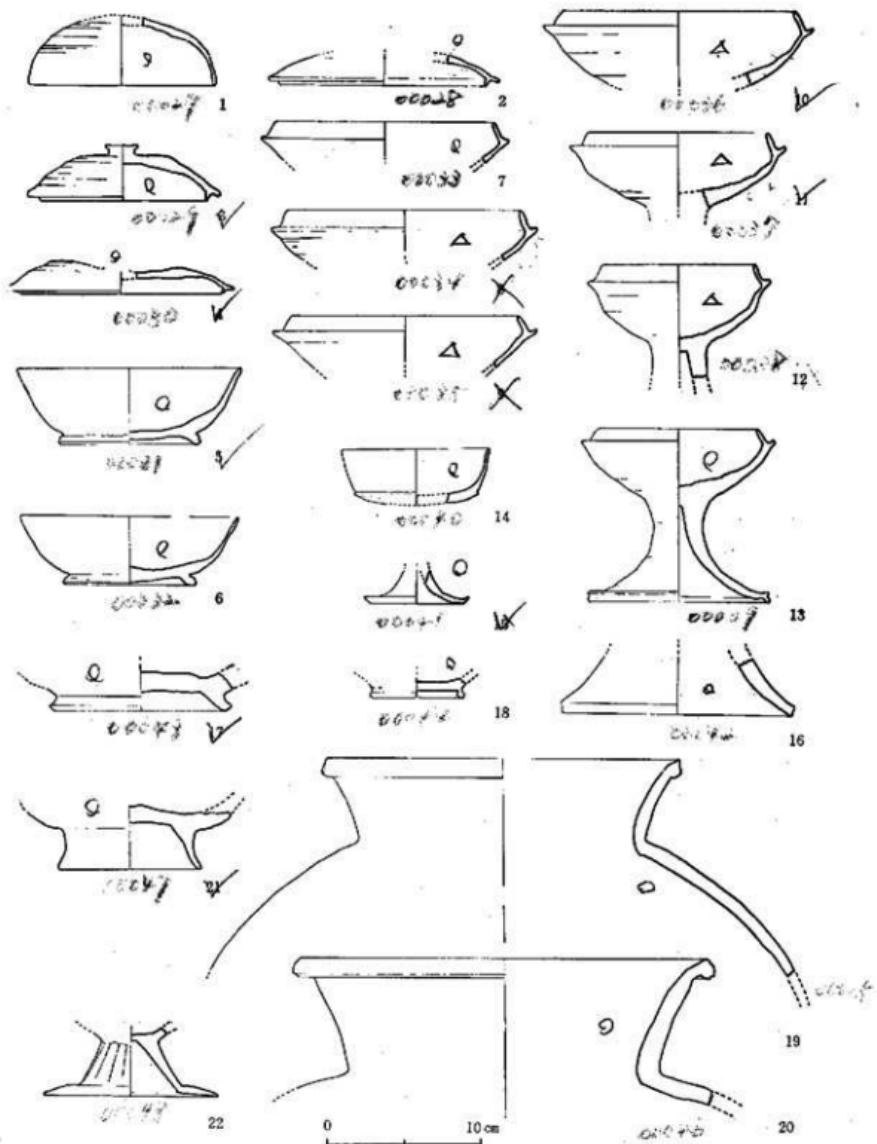
e. 出土遺物

須恵器（第112図1～20） すでに述べたような出土状態であるため、一括して記述する。器

第111圖 宮前3号墳石室案圖 016.017

0 2 4m





第 112 図 宮前 3 号 墓 出土 壺 実測 図

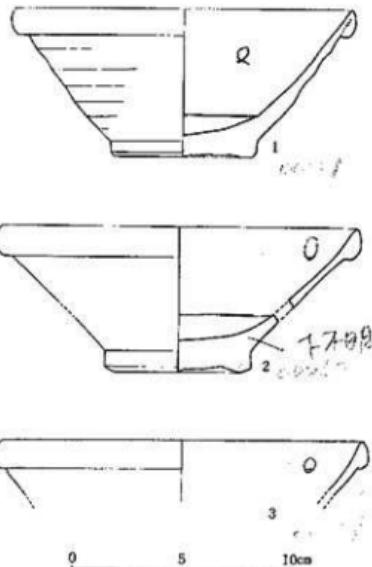
形は壊、高壊、甕を主とし、壺や瓶類は検出されなかった。

1～4は壊の蓋である。1は径12cm、高さ4.5cmで天井部は削り整形の仕上げ、体部および内面はなでによる仕上げを見せる。肩部は沈線が施されるが鈍いもので、口唇部内面も稜をつくる。2はボタン状のつまみと、内面のかえりを有するもので、かえりは口縁より外に出る。天井部の上半部はへら削り整形仕上げで、×のへら記号がある。下半部および内面はなでによる仕上げである。3～4もつまみのつく形式と考えられるが、胎土、焼成も1に比して粗く、内面のかえりも退化する傾向にある。

5～6は高台をもつ壊の身で、5は径14.4cm、高さ5cm、6は径14cm、高さ4.4cmを計り、いずれも胎土、焼成とともに普通で、器形の特徴も仕上げも同様の手法である。10は底部を欠くが壊の身であろう。胎土、焼成も悪く内外面とも黒灰色を呈す。径は9.4cmを計り下部に一条の沈線を施し、稜をつくる。7～9は蓋受けをもつ壊の身と考えられるが、底部を欠く。復元口径は15cm～14cmと大きく、高壊となる可能性もある。蓋受けのたちあがりは1.2cmほどで、やや内傾気味である。9は受部が長いが、7～8は丸く短くなる。11は10の如き壊が乗る高壊の脚で、低く幅が開く。12～15は蓋受けをもつ高壊で、壊部の形状は7～9に似る。脚部は鋸を極端に崩くもので、15の脚端内部はやや稜をもつ。16もおそらく高壊の脚部であろう。17～18は高台の部分であり、17は径7.8cmで先端が丸くなっている。18は径10.8cmで高台は高くて厚い。高台付の壺であろうか。

19～20は甕であるが、復元口径は19が22.6cm、20が26.2cmを計る。口唇部の形状は、19がやや凹みをもしながらも明瞭な稜をなさないのに比べ、20は口唇端に沈線を施し、稜をなしている。外面の仕上げについては、19は頸部以下全面に平行叩き目文の上を横なでによって調整しているが、20は破片のため頸部付近のなでのみしか観察できない。19の内面は、頸部が横なで、肩部から胴部下位まで同心円の叩き目文、底部は平行叩き目文による仕上げをみせる。20は頸部は横なで、肩部は同心円の叩き目を施すが、それ以下は不明である。色調は19が背灰色を呈し、20は黒灰色を呈す。いずれも胎土、焼成とともに良好である。

土師器（第112図21、22） 21は脚部の破片であるが、上部の器形については不明である。底径は9cmを計る。22は高壊の脚で、嵩高は低く、壊との接合部より斜めに直伸し稜は極端に開



第113図 青磁碗実測図

く。底径11cm、脚高3.5cmを計る。いずれも色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成とともに粗緻である。

青磁碗（第113図） 3個体分の破片が出土。

1は口径15.4cm、高さ6.8cmを計り、高台径6.4cm、高さ0.7cmである。口唇部は半円形の折り返しをもち、内外ともに灰緑色の釉がかかるが、外側の下半部は素地を残す。胎土は青灰色を呈する良質のものであり、焼成も良好である。外面はろくろ日が顯著であり、高台は内側の割りが浅い。内面の見込み近く一条の沈線があげぐる。

2と3も1と同様の器形である。2は口径16.2cm、復元高6.7cmを計る。胎土は両者とも黄褐色を呈する良質のものであり、焼成も良好である。2には黄緑色、3には青灰色の釉がかかり細かい貫入が認められる。2の高台内側の割りはやや深い。これらの碗は南宋代の龍州窯系のものに比定されよう。

『小結

本墳は兩袖の横穴式單室墳であり、構造において特色ある事実を指摘することはできない。遺物は相当荒らされていたため、副葬品の質と量から被葬者の問題に迫ることは困難である。石室の構造と出土した須恵器の形式から本墳の築造年代を推定するならば、6世紀末葉の年代が与えられ、7世紀にも継続しつつ使用されたと考えられる。

本墳は上和白岡地造成計画の幹線道路にかかるものであったが、福岡市住宅供給公社の立案により、一部造成計画を変更して緑地として保存されることが決定したことと付記しておこう。

(塩屋)

5. 窯跡の調査

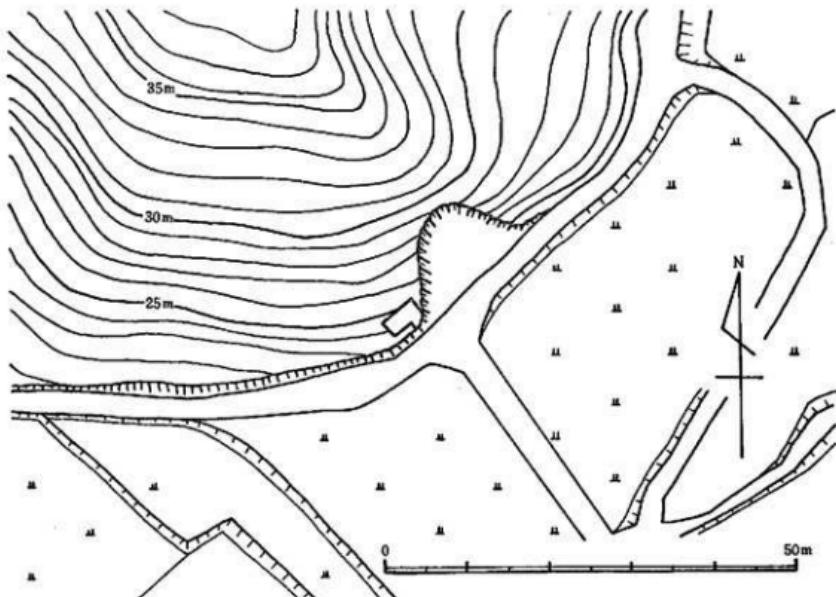
a. 位置と現状

上和白から平山へ通ずる近畿の鞍部で造成地域の東南端にあたり、高見5号坂から東側に位置する。京南へ傾斜する丘陵の先端、標高24mの等高線上に窯道部がある。

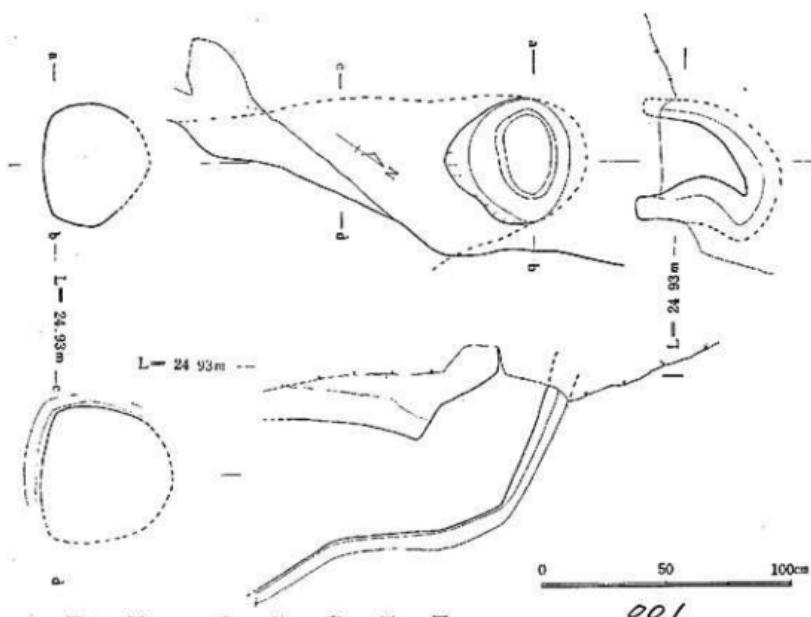
窯跡は発掘調査と平行して行われた分布調査の結果確認されたもので、等高線に直交して南から北へ築かれているが、丘陵先端部は土取りで大きくえぐられ、崖面に窯の先端部を残すのみであった。道をはさんで東側には字窯土の地名がある。窯の主軸方向はN36°Eをさす。

b. 構造

煙道から西壁は160cm、東壁は40cmを残す。煙道の内径は33×17cm、a b断面の床面幅40cm、胴張り部の最大幅50cmで、天井部が落込み高さは不明であるが、復元高は43cmとなる。c d断面の床面幅は50cmで、a b断面同様舟底状となる。壁の脚が張らず、復元高は53cm程度である。縦断面は、床面の傾斜角度は30°、c d線とa b線の間はややフラットな面となり、北側の煙出し部は急な立上がりとなって地表面に現われる。南側の床面から天井までの高さは70cmと思われる。床面は堅く焼けた花崗岩のバイラン上で、地山は赤褐色に焼け、煙道部には粘土の内張りを施す。c d線で床面の勾配が異なっており、c d断面の両側の崖面で切られた部分が焼成部で、焼成部の天井は地表面に達し、地山を切り込んだ半地下式構造の巣窯であろう。焼成部焚口は現在の道で破壊され不明であるが、窯体の床面傾斜角度から推定すると全長7～8mに達することが



第114図 窯跡地形実測図



第115図 窯跡実測図

考えられ、道の南側のみかん畑が灰原と想定されようが、ここは造成区域からはずれている。窯は焼造部の構造を残すのみで、灰原、焚口、焼成部は不明で、出土遺物は全くなく、どの時期に比定される窯であるか不明である。

c. 小結

半地下式構造の登場は須恵器の窯にみられるものが多い。最近の福岡周辺地域の調査例では塚の谷窯跡群^(註1)、中尾谷窯跡群^(註2)、野添・大浦窯跡群^(註3)がある。塚の谷1号窯、2号窯の煙道部は方形プランをなし、中尾谷1号窯、2号窯、3号窯は煙道部にかけて次第に狭くなり、勾配を急にして張出しとしている。断面は幅50cm程の半円状をなしている。野添9号窯は梢円形プランの張出しの例である。和白の窯跡は中尾谷1～3号窯の構造に類似している。隣接する柏屋群新宮町平山熊矛神社下の西向の丘陵裾部には須恵器窯があり、坏の形態からⅢ期と考えられる。平山窯跡と上和白窯跡は谷をはさんで対面している。この一帯は字盤上と呼ばれており、丘陵の先端にはいくつかの古窯跡群が立地したことが想定される。これらのことから上和白の窯跡を須恵器の窯と考えて差支えないであろう。平山にも数基の群集墳が存在したと云われ、上和白の古墳群出土の須恵器と窯跡の間には何らかの関係を想定することができるであろう。

(安達：柳田)

(註1) 「塚ノ谷窯跡群」(八女古窯跡調査報告I) 八女市教育委員会

1969年

(註2) 「中尾谷窯跡群」(八女古窯跡調査報告II) 八女市教育委員会

1970年

(註3) 「野添・大浦窯跡群」(福岡県文化財調査報告書43集) 福岡県教育委員会 1970年

第4章 和白遺跡群をめぐる諸問題

1. 和白地域における縄文文化の一様相

下和白Ⅰ区、Ⅱ区、上和白包含地出土の石器（石器、石器、局部磨製石斧）と上和白第11号遺構（石器、劍片を伴う土坑）は、いずれも縄文時代のものと考えられるが、共存する資料を欠いている。福岡周辺地域における縄文時代の出土例は単発的で、時期決定のできる資料は少ないので、周辺地域の類例を調査しよう。

九州に於ける縄文時代の土坑墓の例として、長崎県岩下洞穴（尼、前期）、大分県大恩寺洞穴（前期）、宮崎県勝江貝塚（前期）、本田遺跡（前期）、熊本県沖の原貝塚（前期）、尾田貝塚（中期）、大分県草木洞穴（後期）、鹿児島県黒川洞穴（後期）等がある。形は円形、長方形、圓丸長方形があり、石器を副葬するもの、円錐を土坑内の骨頭や頭部に近く抱石葬として注意されるものを含んでいる。各時期を通じて認められ、段丘上の遺跡、貝塚、洞穴と普普通的な出土例をみると、中でも前期の出土例が多い。上和白の長方形土坑はこれらの土坑と形状、規模が類似し、土坑内の石器及び包含地の石器は前歴的な特徴をもつ点が指摘される。また、岩下洞穴、大恩寺洞穴、本田遺跡、沖の原貝塚では石器を共存しており、いずれも前期と考えられている。石器は古くから注意され、各時期を通じてみられる石器の一つであるが、サヌカイト、哩石を石材とし、定形化したものは前期に比定される出土例が多い。局部磨製石斧も前期の特徴的な石器の一つである。

一方、福岡周辺地域についてみると、市内野多日池から表揚された石器（横形、サヌカイト）、石器があり五ヶ村池では石器（横形、サヌカイト）、石器とともに骨頭式土器がみられ、箱ヶ池では石器（横形、サヌカイト）、局部磨製石斧、石器に円形文土器が含まれている。那珂字久平、筑紫郡春日町白水池、那珂川町鳥巣四郎五郎池、筑紫野町石井、泊原町泊原町與丁池にも石器の出土が報告されている。筑紫郡大野町上大利の石器（横形、縦形、サヌカイト）には骨頭式土器を伴うと云う。いずれも丘陵先端に占地する遺跡である。縄文時代の遺跡が不少とされる福岡周辺地域においても、横形石器が前期の土器に共存することが確められ、少數の仰盤文出土地を除けば、一層前期に比定される傾向を強める結果を得る。

このような事実に基づけば、和白出土の石器は縄文時代前半に比定され、第11号遺構は石器、置石を伴う同じ時期の土坑墓と考えることができ、福岡平野における縄文時代の一様相を加えることになる。しかし、共存資料を少くなどの点で早計な結論を下すことはできず、多くは今後の研究を待たなければならない。（柳田）

- (註1) 麻生俊『岩下洞穴の発見記録』佐世保市教育委員会 1968年
(註2) ⑨ 羽立野、坂田「福寿岩陰跡認定報告」大分県大野郡朝町大恩寺福寿『大分県地方史34』1964年 ⑩ 賀川光夫「大分県大恩寺福寿岩陰」『日本の洞穴遺跡』1967年
(註3) 始木重治「宮崎県勝江貝塚の調査」(『日本考古学協会昭和40年度大会講演要旨』) 1965年
(註4) 柳田純孝「小林市本庄遺跡調査報告書」『南九州文化研究所記録3』1967年
(註5) 板木経典・経昌「天草の古代」 1971年
(註6) 四邊哲夫「熊本県玉之浦尾田貝塚」『日本考古学年報17』1966年
(註7) ⑨ 鳥飼、酒匂「草木洞穴の調査」『大分県地方史34』1964年 ⑩ 賀川光夫「大分県草木洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967年
(註8) 河口貞徳「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967年
(註9) 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集」福岡市教育委員会 1970年
(註10) 中原志外著「福岡市と周辺の縄文文化」『福岡市那珂公民館報』第5集 1970年
(註11) 沢山正秀氏の教示による

2. 飛山1号墳の構造と年代

すでに報告したように、飛山1号墳の石室構造は、周壁の石組みの状態から基本的には小形壺穴式石室の形態を踏襲しながらも、閉塞部の構造において特異性を示している。すなわち、①南側小口部は最下段に仕切石として平石を置き、その上に2段を積み、さらに扁平な大石を立てかけることによって閉塞となしている点、②さらにその外側に短かい英模状の石組みが存在する点、③墓室の平面形が南側に張り出す点などから、いわゆる壺穴系横口式石室^(註1)の範囲に入るものと考えられる。

九州地方において、木石室と類似の構造をもつ山墳の調査例は最近増加しているが、その中にあって道賀郡岡垣町片山古墳群中の第9号墳・第12号墳を最も近い構造をもつものとして挙げることができる。これら2基の石室は、馬鹿の石組みは壺穴式石室の形態をとり、閉塞部は横口構造となっている。第9号墳と第12号墳を比較した場合、横口部の構造において若干異なり、さらにその外側の構造も前者には前庭部に裾広がりの石組みが認められるのに対し、後者は認められない。形態的に前者が後出するものと考えられ、これらの年代は5世紀後半～6世紀初頭に位置づけられている。これら2基の石室相続と飛山1号墳を比較すると、横口部の構造は袖石が無い点を除けば第12号墳に近く、その外側に石組みの存在する点において第9号墳に似ると考えることができる。しかしながら飛山1号墳の閉塞部外側の石組みは、簡単で原始的な構造のものである。北側石室の最も遡る形態として注目されるのは、福岡市老司古墳である。老司古墳は福岡平野に亘る丘陵上に占地する長さ90mの前方後円墳であり、前方部に1、後円部に3基の内部主体をもつ。特に後円部の第3号石室は、長さ320cm、幅210cmの長方形プランを呈し、割石小口積みの壺穴式石室の形態をとるが南側小口部に床面より55cmの高さで壇状構造を造り、階段的機能を有している。そこより前方部西側くびれ部に開口する長さ9mの墓道が掘り込まれ、その床面の高さは閉塞部付近においては南側小口部上端に一致し、閉塞は小口部の上に扁平大石を立てかけることによってなされている。残る3基の石室は長さ222～175cm、幅95～60cmと小さいが、割石小口積みの壺穴式石室を基本としており、1・4号石室の構造が第3号石室と略共通し、2号石室は横口部外側に墓道の付設を見ない点のみ異なる。老司古墳の年代は第3号石室が最も古く5世紀初頭に比定され、最も下降するものとされる第4号石室においても5世紀中葉と考えられている。以上のことから、老司古墳第3号石室は基本的には壺穴式石室の範囲に入ると考えられるが、現在のところ最古の壺穴系横口式石室とすることができよう。また北側石室構造が形態的に下降するものとして挙げられるのは、大分県杵築市七双子古墳群第2号墳がある。七双子2号墳の石室は長さ200cm、幅100cm～90cm（横口寄り）、高さ90cmの長方形を呈し、側壁先端両端から袖石が立てられ、さらにその外側に長さ130cmの築造状の石組みがやや裾広がりに構築されており、その先端より溝状に掘り込まれた溝道が伸びる。溝道の石組みは底石として大形の石を使用しており、より発達した姿を示している。遺物の中には、年代決定の重要な手がかりとなる多数の須恵器が墓道中より出土している。これらの須恵器は第II期に近い特徴をもつものもあるが、一括して第III期に比定され、古墳の年代は6世紀中葉を下らない時期として位置づけられている。

以上概観したように此種壺穴系横口式石室構造をとる古墳の年代は、今のところ老司古墳第3号石室を最古とし、5世紀初頭から6世紀前半代の時間的な段をもつ。また、各古墳各々には構造上に多小の差異も認められるが、年代が下降するにつれてより追跡を意識した傾向を示すものとして、横口部外側の溝道・墓道の構造的な発展形態を指摘することは可能である。このように考えるならば飛山1号墳の年代については、閉塞部外側の構造が未発達な点、および溝道が実際には行われなかつたとされる点より、5世紀後半から、下っても6世紀初頭の位置づけがなされよう。さらに、副葬品中に多量の滑石製模造品が検出された事実も、飛山1号墳の年代決定に有力な示唆を与えるものであろう。この種の滑石製模造品は、畿内地方においては5世紀初頭の

時期より、それまでの磨石製品に代わり同種多量の滑石製模造品の副葬が認められるとき、大阪府堺市カトジボ山古墳は特に著名である。また、古墳より出土する滑石製模造品は、勾玉・臼玉の玉形、刀子・鎌・矛頭などの農工具を主とし、有孔円板の出土例はごく少ないとされる。比較的多量に出土した例としては、奈良市大和5号墳、岡山県総社市鹿麻古墳、広島県深安郡西成古墳などが知られるが、多くは1、2点の出土例が殆んどである。九州地方においては、筑紫郡那珂川町炭崎古墳群第5号墳より有孔円板1個、田川市セスドノ古墳より方形双孔円板1個・臼玉23個などの出土例がある。隨應古墳では被葬者の足元をめぐるような配置で数個の有孔円板が認められ、宇治市二子山古墳では、被葬者の足元に近い位置より四葉文鏡と共に臼玉多数が出土し、有孔円板を鏡に開拓づけるとすれば飛山1号墳の出土状態はこれに似る。滑石製模造品の古墳副葬は5世紀代に盛行するが、祭祀遺跡の年代記に飛山1号墳出土の滑石製模造品をあてはめるならば、その組合せからすると第Ⅲ期としての要素を有し、その実年代は5世紀後半～6世紀初頭とされる。従って、滑石製模造品に示される条記遺跡の年代記も、石室構造上の年代記とは矛盾しない。

以上述べたように、飛山1号墳の年代は5世紀後半から6世紀初頭の年代記の位置づけをなしうるが、此滑石製模造品に対する見解については、小田富士雄氏によると、「在來の堅穴式石室の側から楔穴式石室の導入に対応しようとする扱われ」であり、「南鮮と北九州で時を同じくしてあらわれた同性質の文化現象」とされる。^(註1)また石山熟氏は、九州における横口構造の石室を聚成、検討することにより、「横口を設け、前庭廊・墓道を付加するという構造上の新しい要素と、横口未使用例、追葬を行わない例の存在等から知られる葬法上の旧い要素が、相互に関連しあった過渡的様相を呈するもの」とされている。飛山1号墳においても、構造的には新しい要素とされる短かい弧曲状の石縫みの存在にもかかわらず、追葬の行われた証拠を見出せない点、および葬品中に多量の滑石製模造品が発見される点は、まさに石山氏の指摘された過渡的様相を示すものと云える。けれども、この過渡的様相は単に墳丘の構造・葬法の問題のみにとどまるものではなく、5世紀から6世紀に亘る古墳時代の社会的な諸関係を反映する側面をも捉えられねばならない。従って今後に残された問題は、古墳群に占める此種石室構造の位置づけ、同時期に並存する異なった内部構造をもつ他の古墳との比較検討を通して、各々の古墳に埋葬された被葬者層の関係を明らかにして行かねばならないだろう。(塩屋)

(註1) 追葬の意識がただちにこの構造に反映されているとすれば、個人墓を基本とする堅穴式石室よりも楔穴式石室の一並列として把握するのが妥当であろう。しかしながら、構造的に過渡期あるいは過渡的様相を具現するものであるとすれば、その本質的な内容が問題となろう。

(註2) 北部九州を中心に調査例が知られるが、「片山古墳群」(福岡県文化財調査報告書第46集1970)には、15ヶ所25例が集成されている。なお最近では、福岡県八女郡広川町広川平原古墳群第5号墳(石山熟氏の教説による、福岡県教委調査)、佐賀県小城郡小城町一本松古墳群A号墳(井上設男氏の教説による、佐賀大学考古学研究会調査)などがある。

(註3) 「片山古墳群」(福岡県文化財調査報告書第46集) 福岡県教育委員会 1970年

(註4) 「志古寺古墳」福岡市教育委員会 1969年

(註5) 「七皇子古墳群」(大分県文化財調査報告書第8集) 大分県教育委員会 1962年

(註6) 小林行進「小別古墳時代文化とその伝播」「古墳時代の研究」 1961年

(註7) 「カトシボ山古墳の研究」 古代学研究会 1953年

(註8) 小出義治「奈良」「日本の考古学V」 1966年

(註9) 「奈良縣史蹟調査抄報」第4輯 1949年

(註10) 「諸窓古墳」福岡市教育委員会 1965年

(註11) 村上正名「広島県神辺町国吉古墳の調査」(日本考古学会第31回総会研究発表要旨) 1965年

(註12) 「赤坂古墳群」(福岡県文化財調査報告書第37集) 福岡県教育委員会 1968年

(註13) 花村利彦「セスドノ古墳」「御土田川」 A27 田川市教育委員会 1969年

(註14) 「二子山古墳」 宇治市教育委員会 1968年

(註15) 児井正道「祭祀遺跡の年代」「達井山」 1966年

(註16) 小田富士雄「九州」「日本の考古学IV」 1966年

3. 上和白古墳群について

(1) 石室構造

第7表を要約すれば、石室の構造として次のような点が注意される。

1 石室の形態 上和白古墳群は全て後期古墳に属し、單室横兩式の横穴式石室構造である。

2 古墳の立地 猿の塚古墳（丘陵頂部）、高見4号墳（丘陵尾根）をのぞき、宮前群（宮前1号墳～3号墳）は丘陵の西側斜面にあり、高見群（高見1号墳～5号墳）は南側斜面に古地しているが、ほぼ同じ高さの等高線上に位置している。

3 主軸の方向 宮前3号墳を除けば全て現在の磁北よりやや東に偏しており、石室は南に開口する。

4 石室の構築法 玄室壁は持ち送り状を呈する。玄室の掘盡・奥壁の腰石を立て、2～3段目から上は石材を横に並べて積み上げ、徐々に持ち送りながら内傾させ、天井石の重量で石室全体の安定をはかる構造となっている。上に積み上げる石と石の間に小円錐、角錐をつめ（調込み石）、側壁・奥壁の安定をはかる例（猿の塚古墳、宮前3号墳、高見1号墳・5号墳）と、礫と土をつめる例（高見2号墳・4号墳）がある。

5 石室の形態 石室は猿の塚古墳を最大とし、全長5m前後を有するが、高見4号墳は特に小さいとい

	高見 1号墳	高見 2号墳	高見 3号墳	高見 4号墳	高見 5号墳	猿の塚 古墳	宮前 1号墳	宮前 2号墳	宮前 3号墳
床面の標高 (m)	19.70	17.20	約17.00	21.47	22.36	36.66	16.50	—	24.00
占 地	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵頂部	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面
主軸の方位	N20°E N7°E	NE~SSW	N27°E	N10°E	N25°E	N18°E	N14°E	N6°W	
方室の全長 (m)	5.10	5.30	—	3.75	6.15	9.90	—	—	7.30
長さ (m)	1.50	2.50	約2.10	1.65	2.15 E1.80	3.40	1.90	—	2.40
玄室	1.42	1.75	約1.70	1.68	1.80	2.20	1.80	—	2.30
床面積 (m ²)	2.13	4.38	約3.57	2.27	3.44	7.48	3.42	—	5.52
高さ (m)	1.20	1.70+?	—	1.40+?	0.90+?	1.10+?	2.20	—	2.08
奥壁の腰石	一石	二石並立	—	二石並立	一石	二石並立	一石	—	一石
敷石	角礫	円礫	—	円礫	角礫	円礫	円礫	—	角礫
室主な石材	礫岩	礫岩	—	礫岩	礫岩	花崗岩	礫岩	礫岩	礫岩
幅: 高さ	1:1.1	1:1.4	約1:1.2	1:1.0	1:1.0	1:1.6	1:1.1	—	1:1.0
幅: 高	1:0.8	約1:1	—	—	—	—	1:1.2	—	1:0.9
蓋	長さ (m)	3.60	2.80	—	2.10	4.00	6.50	—	—
	玄門高 (m)	0.83	0.70	約0.80	0.90	0.80	1.20	0.80	—
	玄門高 (m)	1.00	—	—	—	—	—	1.20	—
玄室長: 焦度	1:2.4	1:1.5	—	1:1.3	1:1.9	1:1.9	—	—	1:2.0
蓋	上面幅 (m)	約2.60	3.70	—	2.50	—	4.40	—	—
	下部幅 (m)	約2.20	2.50	—	1.80	—	2.65	—	—
基	深さ (m)	1.20	1.50	—	0.90	—	1.75	—	—

第7表 上和白古墳群石室構造比較一覧表

う点で注意される。玄室は猿の櫻古墳を除きほぼ近い計測値となっており、玄室幅と長さの比率がほぼ1対1となるものが多い。つまり、正方形に近いが、高見2号墳は長方形プランを呈し、猿の櫻古墳に類似している。高見5号墳と宮前1号墳の石室プランはほとんど同一みなされる。

❸ 玄室幅 玄室高との比は1対1に近いが、高見1号墳は石室の規模が小さく、玄室幅より、玄室高が低くなり、最も新しい石室構造の様相を持っている。

❹ 美道部 猿の櫻古墳には前室があられ、高見2号墳・宮前3号墳には仕切り石がある。閉塞の状態は高見1号墳によって知ることができる。他の古墳も円錐を乱積みして閉塞したと考えられる。

❺ 墓誌と石材 墓誌は石室の周囲にいっぽいに掘り込まれている。石材は猿の櫻古墳を除いて共通するが、高見1~4号墳は麻岩の他に砂岩を含み、宮前群はほとんど麻岩に限られる。高見5号墳は麻岩を主体しながらも花崗岩をかなり含んでいる点で、宮前群、高見群とは区別されよう。

❻ 床 玄室の床面は猿の櫻古墳、高見5号墳が敷石に粘土と小砾を埋入させる。他は須床を考えられ、側壁と敷石の石材を区別する配慮があられる。

❼ 猿の櫻古墳 玄室、美道、石材、墓誌の比較から、他の古墳構造とは又別して考えるべき要素を持つことが指摘できる。古地も一基のみ丘陵頂部にあり、出土遺物から上和古墳群の中では最も古い時期の古墳である。美道部に前室を持つのは猿の櫻古墳1基だけで、古い様相として注意される。

❽ 宮前群と高見群 高見1号~4号墳(高見群)と宮前1号~3号墳(宮前群)を比較すると、宮前群は高見群より僅して石室の規模が大きく、側壁、奥壁の石材もより大きなものが利用されている。(別出)

(2) 古墳の年代と群の形成

前述で述べられたように、立地や石室構造の面においては、本古墳群の中では猿の櫻古墳が最も古い様相を呈すと考えられるが、その他の各墳はいずれも丘陵斜面に古地するという共通性を有し、石室構造も多少の差異はあるにしろ、それをもって古墳相互通の年代的序列を与えることは不可能に近い。そこで出土遺物の組合せから各古墳の年代を知る方法が残される訳であるが、調査古墳の殆んどが盗掘などによって流落されており組合せの全てを知ることはできない。ただ、いずれの古墳からも須恵器が検出されていることより、それらの編年的位置づけを踏まえた上で古墳の年代を知る子がかりは与えられよう。この場合、各古墳より出土した須恵器を各器形ごとに、技術的かつ形態的な一定の標準をもって形式分類を行ない、それらに時間的前後関係を与えることと、出土状態による当時のセット関係が明らかにされねばならないが、猿の櫻古墳を除く全てが撲滅された状態で出土しており、セットによる編年は困難である。ここでは、各古墳より普遍的に出土した环の形態的諸特徴を中心として、それらを九州における須恵器編年による段階にあてはめる方法で、各古墳の年代を考えることとしたい。

九州における須恵器の編年は、樋口隆政氏によってまず開始され、小田富士雄氏はさらに各地域を単位とする編年の厳密化を意図され、豊前地方の須恵器編年によってその方法を提示された。これらの解説は古墳出土の須恵器を基準とするものであるが、福岡平野周辺においては、後墳古墳研究の立ちあくらから、古墳出土の須恵器を基準とする編年は未だ確立されてはいない。一方、須恵器生産の場である窯跡の製造も畿内地方に比べ著しく遅れている傾向があるが、最近では小田富士雄氏を中心として、筑後八女地方や筑前にて調査例を加えつつあり、今や、各地域単位の須恵器編年確立の機運にあるといえる。また、須恵器はその山土地から、①消費前の段階としての製品(窯跡)②日用器皿(住居付など)③供給品(墳墓)のそれぞれがあり、編年にあたってはこれらを充分に考慮された上でなされなければならない点が指摘されている。従って、上和古墳群出土須恵器の編年的位置づけも、周辺地域古墳出土須恵器の編年に対応させるべきであるが、今はその段

際ではないので、小田氏を中心とする縦年案に依頼したい。

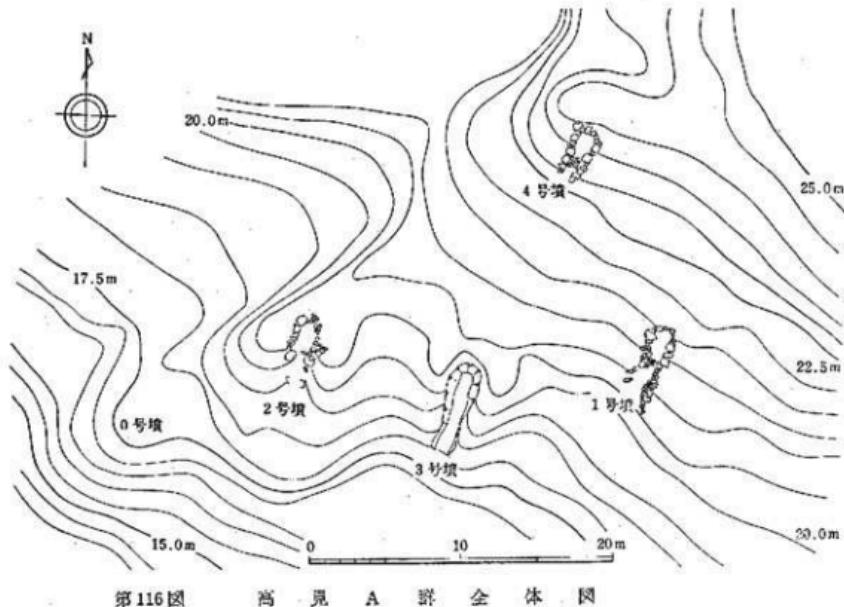
さて、上和白古墳群より出土した須恵器の個々についてはずで述べられているのでここでは網羅さないが、壺などの形態的諸特徴よりしてⅢ期を最古としⅥ期まで認められるよう。従って、このことより古墳群の開まれた年代を想定すれば、6世紀後半から7世紀前半までの時間が考えられよう。これを各古墳について見れば、猿の塚古墳出土須恵器の最古形態はⅢa期に近い特徴を有しており、他の構成要素をも考え合わせて上和白古墳群の中では最も古く出現したと考えられる。次に宮前1～3号墳、高見1～5号墳の各墳について、猿の塚古墳より一時期遅ると考えられる。宮前1～3号墳の間では、第3号墳が最も古い形態の須恵器を含んでおり(Ⅱ期)、他の2基に先行すると考えられる。また、高見1～5号墳の間では、第2号墳の壺や袋飾沙塵は古い様相と考えられ、更期をその上級とし、続くⅣ期に築造が継続されたと考えられる。

従って、上和白古墳群の年代と形成については、6世紀後半を中心とする時期に築造された猿の塚古墳の出現(第1期)、6世紀末を中心とする時期の宮前3号墳、高見2号墳の出現(第2期)が大別され、他の各古墳の出現は、7世紀前半を中心とする(第3期)ものであると理解されよう。その下限については、猿の塚古墳がいち早く終了し、その他の古墳は、7世紀の末葉まで存続したと考えられる。

次に本古墳群の構成を地形と古地の点からみると、(1)猿の塚古墳(1基)、(2)宮前群(1～3号墳3基)、(3)高見A群(1～4号墳4基)、(4)高見B群(5号墳1基)の4群に分ける事ができよう。このうち(1)と(2)は各1基であるが、群をなすものに対しても、独立した在り方があるので、1単位として設定する事が可能である。

(1) 猿の塚古墳

丘陵先端に独立しており、石室平面形は長大な両袖の单室である。石室構造、副葬品の量において他をはる



第116図 高見A群全体図

かに凌駕する。築造年代は出土した土器より考えて、6世紀後半と考えることができたが、このように古墳群にあって、①尾型突堤丘陵頂部に立地する点、②石室平面形が長大な点は、福岡地方の多く後期古墳群形成の初期に現われる様相と言える。このような例は、七隈古墳群6号墳、今宿古墳群1号墳、大牟田古墳群1号墳・35号墳などに見られる。七隈古墳群6号墳は油山山麓斜面に群集する後期古墳群の丘陵最先端に位置し、出土須恵器はⅢ期に比定できる。今宿古墳群1号墳はⅡ～Ⅲ期とされる。大牟田古墳群1号墳・35号墳はⅡ～Ⅲ期であり、須恵器の編年版よりすれば6世紀代のものと考えられる。いずれも石室平面形は長方形を呈し両袖式の单室墳である。

(a) 宮前群

丘陵斜面に築造されており、3基の古墳が近接した位置にある。石室構造においては、玄室平面形は長方形を呈しながらも、他の多くの古墳の如く端整でなく、床面積が縮小している点を指摘できる。築造時期を出土須恵器の最古形態に求めれば、群内の時間関係は3号墳→1号墳、2号墳と考えられ、群構成の開始期は6世紀末との年代観を与えるよう。

(b) 高見A群(第116図参照)

立地は宮前群と同様の丘陵斜面であり、4基の古墳が近接した位置に築造されている。石室構造はいずれも宮前群と同様であり、石室面積が更に小形化している点が注目される。本群の築造開始時期は第2号墳を最古と考えると6世紀末葉と考えられ、宮前群とは同時期である。

(c) 高見B群

丘陵斜面に占地するが、周囲に古墳は築造されず1基のみである。立地は高見A群と類似するが、石室構造の粗雑な点、出土の須恵器より考えて7世紀代のものと考えられよう。

以上述べたように、調査の古墳は上和白地区の、後期古墳群開始期、盛行期、終末期の姿を示すものと把握でき、さらに宮前群と高見群における3基・4基はこの地区の後期古墳群形成の最盛期における基本単位として考えられるが、これは他地域において指摘されている変と矛盾しない。

次に、木古墳群周辺の古墳分布について概観しよう(第122図参照)。従来、この地域における考古学的調査例は皆無であり、古墳分布の様相もはっきりしていなかった。今回の発掘調査はその点を補う意味で、周辺の分布調査をも併行して行い、ある程度の結果を得ることができた。それによれば、上和白古墳群の占地する丘陵と水田をはさんで向い合う丘陵(現在和白ゴルフ場となっている)に数基の古墳が存在したが、現在は1基のみが保存されている。また、国道よりゴルフ場に入る右手に丸山古墳がある。さらに、上和白古墳群の北方に位置する新宮町平山周辺の丘陵に古墳群が存在していたが、密樹林等の造成のため消滅し、今やその実数を知ることはできない。下和白地区においては、すでに報告された飛山古墳群周辺に時間的に先行あるいは後続する古墳群を指摘できない。図録3号線に向う丘陵斜面には(駿原という地名が残る)古墳が存在したといわれるが、実体は不明である。さらにより下和白の北に位置する三苦から奈多にかけては京塚古墳1基と山口池付近に2基の古墳を確認したにすぎない。分布調査の不備はあるにしろ、以上述べたことから指摘されることとは、和白地域においては、①飛山古墳群に先行するあるいは後続する古墳の存在が認められないこと、②分布の在り方が散在的であり、濃密な古墳群を形成しないことである。このような在り方が和白地域における古墳時代の特殊性を反映するものかいかは今後検討を要するが、特に②については福岡平野馬込の後期古墳群の在り方と比較するならば、きわめて特徴であるといえる。すなわち、これまでの分布調査あるいは発掘調査によると、早良平野周辺の山麓、油山北麓一帯および四千寺山塊から月隈丘陵にかけて、濃密な古墳群の分布が知られている。これら各地域の古墳群について、構造的な把握は行われていないにしろ、粗略的に古墳群としてみた場合、明らかに和白地域の古墳群の分布は疎である。それならば、このような理由はいかに考えられるで

あらうか。福岡周辺の古墳群の中で、油山北麓の古墳群を除けば、濃密な古墳群を形成する地域には、広大な沖積平野が前方に広がり、被葬者の経済的基盤を農業生産力に結びつけて考えることは可能である。しかしながら、これとは逆に、和白地域における後期古墳群の殊なる理由を、広大な沖積平野をもたない被葬者の生活空間の地形的条件だけに帰しることはできないようである。たとえば、油山北麓一帯に濃密に分布する後期古墳群形成の背景を農業生産力のみに求めるには、後背地としての沖積地は、あまりにも狭隘であると思われる。したがって各古墳群の被葬者の経済的背景については、さらに多様なものとして具体性にそれぞれ追求される必要があると思われる。今回の調査ではその点を窺試したにもかかわらず、それらを示す証左を見出すことはできず、被葬者の性格については不明とせざるを得ない。ただ、後節で考察される製鉄遺跡が、古墳群の近接地に存在しているのは、偶然によるものなのか、あるいはまた、この地域の古墳時代の成る段階における経済的基盤の延長上に立つものであるかは興味深い問題と云えるのではないか。^(註1) さらに、大化前代およびそれ以後における社会構造あるいは政治的な関係の内に、和白地域古墳群の被葬者がいかなる位置を占めたかは、今後の研究課題として残されよう。

(塙屋・島津)

- (註1) 水野清一・越路隆美・岡崎敬「對馬」 『京産考古学』 1953年
- (註2) 小畠富士雄「九州の須恵器序説—縄年の方法と実例(生前の場合)」 『九州考古学』 22 1964年
- (註3) 『塙谷の古窯跡群』(八女古窯跡群調査報告書Ⅰ) 八女市教育委員会 1969年
- 『中尾谷古窯跡群』(八女古窯跡群調査報告書Ⅱ) 八女市教育委員会 1970年
- 『寺添・大浦古窯跡群』(福岡県文化財調査報告書第43集) 福岡県教育委員会 1970年
- (註4) 橋崎彰一「後古代古墳時代の諸説論」『名古屋大学文学部10周年記念論集』 1959年
- (註5) (註3) の諸文獻による。
- (註6) 1969年6月、福岡市教育委員会調査。
- (註7) 宮小路寛之『今宿古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集) 1968年
- (註8) 1969年11月～1970年1月、福岡市教育委員会調査。
- (註9) 「福岡市埋蔵文化財調査地名表第1集」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第6集) 1969年
「福岡市埋蔵文化財調査地名表第2集」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第9集) 1970年
「福岡市埋蔵文化財調査地名表集録」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集) 1971年
- (註10) 油山北麓の大牟田古墳群では、第7号墳下に製鉄遺跡が検出され、早良平野西様の小松ヶ丘古墳群では、近接した地点に製鉄遺跡が検出されている。(三島格式の教示による)

4. 製鉄遺構について

(1) 製鉄遺構とその年代

上和白盆地の第1号・第2号遺構は製鉄遺構と考えられた。第3号遺構の性格はなお不明とする点が多く第4号遺構は住居址としての機能が考えられ、他に製鉄遺構と関連する遺構はない。

第1号遺構は鉄滓が出土するのみで時期決定できる資料がない。

第2号遺構の丸丸長方形の盛り込みからふいご羽口とともに須恵器が出土した。出土状態から後世の流れ込みとは考えられず、遺構に伴うものである。

長頸な縁のU字縁部で、口唇部の破は鋭くなり、頭部の沈線も丸く浅くなっている。古い時期のものとは区別される。上和白古墳群の中では高見4号墳出土の縁に形状、施文上の特徴が酷似している点が注意され、ほぼ同時期と考えられる。周辺地域における須恵器の編年は立ち遅れている点が多く、壹片を持って時期決定するのは困難であるが、塙ノ谷古窯跡、中尾谷古窯跡を参考すればVI～VII期と考えられよう。

第2号遺構出土の高台付环(須恵器)は宮前3号墳、高見2号墳出土の台付环よりも一時期下るとみられる。

第4号遺構の壁穴住居址の形狀は福岡県成屋形1号・2号住居址に類似している。住居址の中央に主柱穴があること、壁面にかまどを造り付ける点は1号住居址に類似し、かまどの西側住居外にピットがある点、貯藏穴を持つ点は2号住居址に類似している。上和白第4号遺構（住居址）のかまど西壁の基部は内凹する状態を示しており、成屋形1号住居址同様、アーチ状を呈すると考えられる。1号住居址の高台付帯はVIa期とされ、2号住居址出土の土師器も同じ時期と考えられている。1号住居址の高台付帯、2号住居址の土師器は上和白第4号遺構出土のものとはほぼ一致する形態上の特徴を持っている。1号住居址のかまどを造り付ける点、中央にピットを持つこと、2号住居址の貯藏穴のあり方は上和白の場合とはほぼ一致し、ほぼ同時期と考えて差支えないであろう。一方、福岡市笠置遺跡第1号・2号製鉄遺構には同様な高台付帯、土師器があり、VIa期と考えられている。
(註4)

第4号遺構（住居址）出土の上師器と第2号遺構出土の上師器は形態、施文上の特徴が一致し、同一時期のものである。一方、第1号遺構は第2号遺構と共に製鉄址と考えられるものであり、両者は鉄精錬設備に於ける二つの様相を示す同時期のものである。從って第1号～第4号遺構はほぼ同一時期の遺構と考える結果を得ることになる。また、有田遺跡の場合は8世紀とと考えられている。
(註5)

上和白では資料が乏しいが、以上の類例からVI～VII世纪即ち7世紀後半から8世紀代の製鉄址とすることができよう。笠置遺跡1号・2号製鉄遺構の例から上和白第1号遺構は鉄生産設備に於ける大鐵冶（精錬炉）とみられ、第2号遺構は鉄加工設備を示す小鐵冶（作業場）とみなすよりは、出土鉄滓に大差が認められないことから、むしろ鉄精錬設備に於ける作業場と考える方がよいであろう。これら製鉄遺構とは別にはほぼ同時期と考えられる住居址が隣接すること、更に祭的な様相を示す第3号遺構も共存する可能性が強く、各々性格を異なる遺構が同一平面に認められ、製鉄遺構と関連するものであることが指摘されたことは重要である。

(島津・柳井)

(註1) 『泉ノ谷窯跡群』(八女古窯跡調査報告I) 八女市教育委員会 1969年

(註2) 『中尾谷窯跡群』(八女古窯跡調査報告II) 八女市教育委員会 1970年

(註3) 『成屋形遺跡古代住居址発掘調査報告』福岡県教育委員会 1970年

(註4) 『福岡市笠置古代製鉄遺跡発掘調査報告』福岡市土地開発公社 1969年

(註5) 『福岡市有田古代遺跡発掘調査報告』福岡市教育委員会 1967年68年

(2) 上和白第4号遺構（住居址）の年代

第4号遺構（住居址）かまど内の木炭片を探索しC₁₄測定の測定を行なった。

資料番号 KURI 0029 C₁₄の年代 B.P. 1067 ± 20 (A.D. 883 ± 20)

第1号・第2号遺構出土鉄滓はX線回折にて判定を行なった結果、解析がむずかしく、いくつかの結晶を含んでいると推定される。鉄材に含まれている鉱物を検討する必要があると考えられるので、以下検討中である。(註) KURI は九州大学理学部放射線化学研究室
(九大冶金学研究室 板出武彦)

(3) 鉄生産のあり方

古代に属する生産跡から、その技術や背景などの個々の具体相を明らかにするのはなかなかむづかしい。中でも鉄が考古学的手段により取り扱われるようになったのは日が浅く、用語の不統一、調査方法、など問題が多くあるといえよう。ここに調査された和白遺跡もその例にもれず、一応前章のような事実が得られたが、つづけて、若干の可能性、問題点などを指摘して、具体化への手がかりとしようとするものである。

第2号遺構出土の火床及びその形を写して固体化した、ソロバン正形の融鉄は外見上次の理由により、原鉄からの溶解段階とは考えられない。比重が高く気泡は少ない。破面は紫黒色で炭素の結合が強い。火床は小さ

なもので環状性の雲母を必要とする製錬炉とするには構造的に不適当である。家屋内とした場合、いわゆる鍛冶の火床に形態的に類似し、配置も符合する要素を持つ。又出土したスケール（金屬）が槌打ちを作り作業の結果と考えるならば、残る鉄鉱、加工、再生のどれがより可能性を持つであろうか。どちらかといえば、加工、再生の際にそこにもたらされる鉄素材はすでに純鉄に近いものであろうが、出土した鉄鉱はまだ粗いもので純鉄に近い鉄片が土中で示す鉄化やグーサイト化は余り見られない。したがって結晶段階後半をこの遺構の性格と考えることが出来よう。

第1号遺構は振り方と焼け石、それに多量の火炭や木質をかむ小さな凹凸のある流動状のスラグで、大部分が珪藻質の為比重も低い。このスラグもやはり、製錬、加工、再生段階のものとは考えにくく、精錬の際発生されたものと考えられる。

1・2号遺構の関連及び3・4号遺構との関連について考えて見よう。土器の示す年代によれば個々の遺構の時間的隔たりは無いものと考えられるから、そこに有機的関連を認めるにすれば、1・2号の鉄遺物の差は、そこに1つの精錬段階内における工程の差としてとらえることができる。そしてさらに背伸びして見れば、非金属介在物の量の多い第1号、さらに精錬の進んだ第2号出土の鉄鉱として積極的にとらえた方がより妥当性が増すように思える。第3・4号遺構に関する資料はあまり多いとはいえないが、精錬作業がはたして2号遺構で完了したものは疑問であるといえよう。もちろん近世の例からいえば、下げ場、本場により行なわれたものであるが、果してその土器の示す年代と同じ工程で済んだかどうか疑問とせざるを得ない。むしろ一連の遺構を統一的にとらえ、作業家庭の機能分化の形として注目すべきものかもしれない。

福岡周辺の出土鉄鉱に対して、原料が周辺の浜砂鉄であった可能性を指摘した向きもあったがなかなかむずかしい問題である。一般的な砂鉄の性状からいえば、浜砂鉄が末葉などとの関連で融点が低いとはいえ、多量のチタン化合物の共生侵食が有るため時間当たりの還元率は良質の山砂鉄の半分を越える程度で概して貪欲が多く、福岡周辺も例外では無いようである。さらに都止りの悪い原鉱を使用して製錬を行なう技術があったと仮定しても、第2の精錬段階にもたらされる素材はかなり高炭素のものと推定され、鋼にする工程にはより複雑さが増すことが考えられる。したがって、鉱物組成により証明されることが必要であろう。

以上若干の可能性にふれて見たが、少なくとも、後の精錬段階に相当する作業が、土器の示す年代に一群の家庭内で行なわれたであろうことが推定され、今後の調査が期待される。（筑波大学研究生 穴沢義功）

(註1) 微量元素からなる介在物が錠打により薄片状に遊離したもの。

(註2) 鉄の水酸化物、 $(Fe_2O_3 \cdot H_2O)$ 安定している。

(註3) 地鉄を羽口前面の火床に置き鍛冶用の赤熱木炭の熱気をふきつけ半融した状態で炭素を液化分散させ、非金属介在物を遊離して除くのが左下、主に錠打によりスケールを作り灰塵や介在物を飛散するのが本場の作業。

(註4) 有田、諫訪の前、宮ノ前など各地点各遺跡。

(註5) 山本博「『ひとよ』の製錬炉と鉄鉱品」『帝釋山考古学』1 1968年

(註6) 昭和28年9月30日、柏原町和白村奈多海浜、含チタン鉄鉱 (No1497) $TiO_2\%$ 23.61 $Fe\%$ 25.20
地質研究所技術部化学課・分析試験報告 (原H)

(註7) 浜砂鉄はほとんどの粒子中に Ilmenite ($FeO \cdot TiO_2$) の格子状加熱が共生する。

5. 福岡平野の製鉄遺跡

標記についての筆者の知識は、着任後日浅いこととあいまって、極めて乏しい。第119図・第11表所収の遺跡の多くは、故深江嘉和氏の踏査によものであるが、同氏の急逝後は大場憲郎氏ら多くの各位の御示を得て作製したものである。また鉄鉱の分布地については、中山アーチュア博士による地名表がかなり早い（1918年）⁽¹⁴⁾に紹介されている。われわれが作成した地名のあるものは、中山博士のそれと成り重複するものもあると思うが、半世紀を経た現在、比定はかなり困難であるので、中山博士地名表（合併により福岡市に編入されているものもある。）はそのまま記しておいた。

43を数える遺跡の中で、発掘調査をうけたのは、宮の前E地点、大久、小松、荒栗、大牟田7号下塚、上和白などの6遺跡で、そのすべてが近年の急激な開発ブームにより発見調査されたもので、その結果について充分整理されておらず、残余の遺跡については年代などの手がかりを知ることがない現況である。またわれわれの研究も日々進み、定着したものではなく現状的な見通しがつく段階ではないが、基礎資料提示の意味で項目に従って標記する。

a 分布 現在の資料では分布にかなり偏りがあるが、これは調査が行きとどいていない点も考慮に入れる必要がある。けれども、博多湾に面する丘陵地の西部に多く、東部に少ないという大まかな傾向は認められるようで、その中でも柏原群（17～27）、今宿群（4～14）のような聚落的な詳を指摘できる。これを和名抄（923～80年）の旧郡名でいえば、早良、竹内郡に最も多く、ついで志摩、那珂、柏原郡に認められる。（第119図・第8表）

b 立地 概少例を除いては、丘陵斜面に立地する。池塘に立地するのは、後代に小谷をせきとめての蓄水によるものが多く、池をもつた円形や連弧形はできない。ただし水源となる湧泉（湧流）などはその当代から認められていたのである。

郡名	郷名	現比定名	製鉄址	備考	郡名	郷名	現比定名	製鉄址	備考
早	祇伊	鶴井川流域	篠栗・宝		那	田水			
	能解	野芥	佐野村・千葉村・大字野芥			日佐	日佐	雜納隈	
	豊田	野力	小字・中字野力8番地方	5番六町		那可	那可	11. 幸田	
良	早良				河	良人			
	平群	戸切？	9. 戸切			海部	志賀島？		
郡	田部	小田部？	有川		那	山内	博多？		
	雪我					二宅	三宅	大牟田 7号下	
	輪良	唐泊				山口			
志	久米	久米			河	板曳	板付？		
	登志	今津	コモグラ4. 今津 丘居（貝塚）			託社	高祖	今宿群 (4~14)	
	明敏					雲治	三雲		
摩	鷹永	芦屋	1. 新町		那	良人	岩本？		
	川辺					大野	石山		
	志麻	弓也？				長野	長野		

A、備考の番号は中山博士地名表を示す。第119図において×をもって成程度表示しておいた。(101~107)

B、柏原郡は必要認名のみ示す。

第8表 和名抄郷名対比表（第一次）

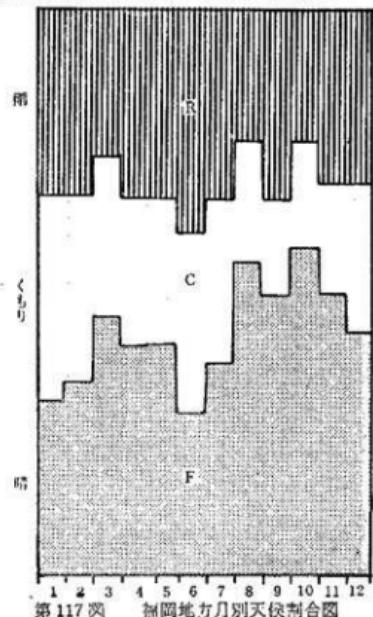
年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1958	W	N	N	N	N	N	NNW	SW	N	NNE	N	ESE
59	W	N	N	W	N	NNW	ESE	N	N	N	N	W
60	NW	ESE	N	N	N	N	NNW	N	SE	N	ESE	W
61	NW	W	N	N	N	N	N	ESE	N	N	E	ESE
62	W	W	W	W	NNW	NNW	ESE	NNE	N	N	N	NW
63	WNW	W	N	N	N	N	SE	SE	N	N	SE	W
64	N	SE	N	N	N	N	SSW	N	N	N	N	SE
65	W	NW	N	N	N	N	SSW	SE	N	N	S	SE
66	W	N	N	N	N	N	SE	SE	N	RSE	SE	NNW
67	NW	NW	SE	N	NNW	N	SSE	SE	N	N	SE	WNW
68	W	W	SE	N	N	SE	N	N	N	N	SE	SE

第9表 平均風向表 (福岡気象台による)

c 風向、風速 立地と密接な関係にあるのは、風向、風速であろう。それらの関係を如実にあらわしているのは、4~26の今宿所在の今宿洋で、その立地は素人にも季節風を利用したであろうことがわかる。^(註)少ない調査例(大牟田7号下、小松、笹原など)でも構造の中心線と風向は概ね一致する。たとえ軒があったとしても、モンステーンの利用は当然であろう。第9表は福岡地方における最近11ヶ年間(1958年~1968年)の風向を月別に表示したものであり、第117図は10ヶ年間の月別晴天、雨天を示したものである。まず風向についていえば、博多沿岸は、年間を通じて北風が吹くが、比較的一定するのは3月~6月と9月~10月である。此外の月は一定せずばらつきが多い。風力は、1・2・9月が強く、雨量では6・9月が多い。晴天が多い月は8月と10月である。11月~2月は雨量はほぼ一定しているが、降雪を考える必要があろう。

風向、風力のみを問題にすると概ね冬季がよく、天氣の上からは8月および10月が、生産に適した気象環境と一応見なされよう。^(註)

d 原料 九州における砂鉄産出地は第118図(原田經茂氏による)のごとくあるが、砂丘を形成する砂中に、砂鉄が多く含まれ、その砂鉄は背後丘陵地の花崗岩類が分解したもので、製鉄にあたってはその砂鉄(海浜純赤、浜砂鉄)が利用されたであろうことは、既にいく度か指摘されており、筆者も賛意を表すものであるが、第119図の分布図をあらためて表洞地質図と対比してみると、前述の今宿洋に、閃雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、花崗岩などの山地の谷間にすっかり包含され、さらに大牟田7号下道路をのせる地山



そのものが、花崗岩風化層であるので、山砂鉄は採取されるのではないかという印象をもったが、山地結果は九州では未発見であるので、今のところ確信できない。

また、花崗岩地帯であっても、製鉄址が多いとはからずしも言えない地帯がある。それは東部地域の丹波丘陵で、同丘陵の西麓は花崗岩類の多産地であるが、製鉄址は未発見である。将来加え得るかもわからないが、飯田氏による博多湾沿岸域の海底には、①津黒崎②和白（奈多海浜 第118回）③宿前（今作）周辺などがあり、昭和21年頃から航行されていたが、鉱石少なく現在はほとんど中止している（註）。本遺跡で発掘された製鉄址は①和白に、今宿群は③宿前周辺に、それぞれ地理的には対応する。和白砂鉄の分析成績を註記しておく。有田遺跡の鉱石について、冶金学的分析の結果、鉄錆（Slag）ではなく砂鉄を原料としたことが明らかにされている。（註）

● 考察 宮の前E地点が調査された限りでは、最も古い時期であろう。この遺跡は弥生時代終期から古墳時代初期にかけての、生居跡群である。伴出遺物は赤土器（後期末）と古式土器、石器、紡錘車、有孔器、鉄錆、錆および鉄錆5個などであるが、製鉄の炉体などは検出されていない。熊本県野辺田遺跡は、弥生時代末期の遺跡であるが、赤変した焼土および鉄錆などが検出されており、鉄錆は製鉄場であることが分析の結果確認されているので、野辺田式土器の初期には国内で鉄生産が行なわれていたことは明白である。その後野辺田期の住居跡群（筑前ノ原遺跡）の発掘において、鐵冶場跡のつよい住居址が多数確認され、鉄錆も得られている。（鍋方勉氏による）この鉄錆については、坂田武彦氏は、小代山の砂鉄である可能性が非常に強いという所見を示された。坂田武彦氏が早く示された予見が確認されたわけである。（註）

宮の前E地点においては、前述のごとく炉体などの遺構の検出はなされていないが、調査者の瀧井仁夫氏もいうごとく、発掘面積を拡大するとことにより発見される可能性はかなり高い。

問屋は、弥生時代後期における鉄生産の存否ではなく、宮の前E地点に限定していながら、至近海浜の浜砂鉄（前述の今宿、今津海浜鉱床）に地理的に対比。現海岸とは1.5Kmであるが、当代はさらに近接）を、使用したか否かである。これは鉄錆の分析により明らかにされると考えるが、その可能性はあると考える。

4、5世紀に属する遺構については、全く手がかりを尋ねないが、6世紀については、大又、大牟田7号墳（註）土下、小松などの遺構、遺構をあげることができる。大又については、第1・4・5号生居址からかなりの鉄錆が得られているが、その遺構は認められていない。副島邦弘氏は1・4号生居址にT形柱的な構造を認め、上記至近海浜の砂鉄を考慮にいれて、相互の関係を推定している。生居遺構が明らかであるのは、大牟田7号



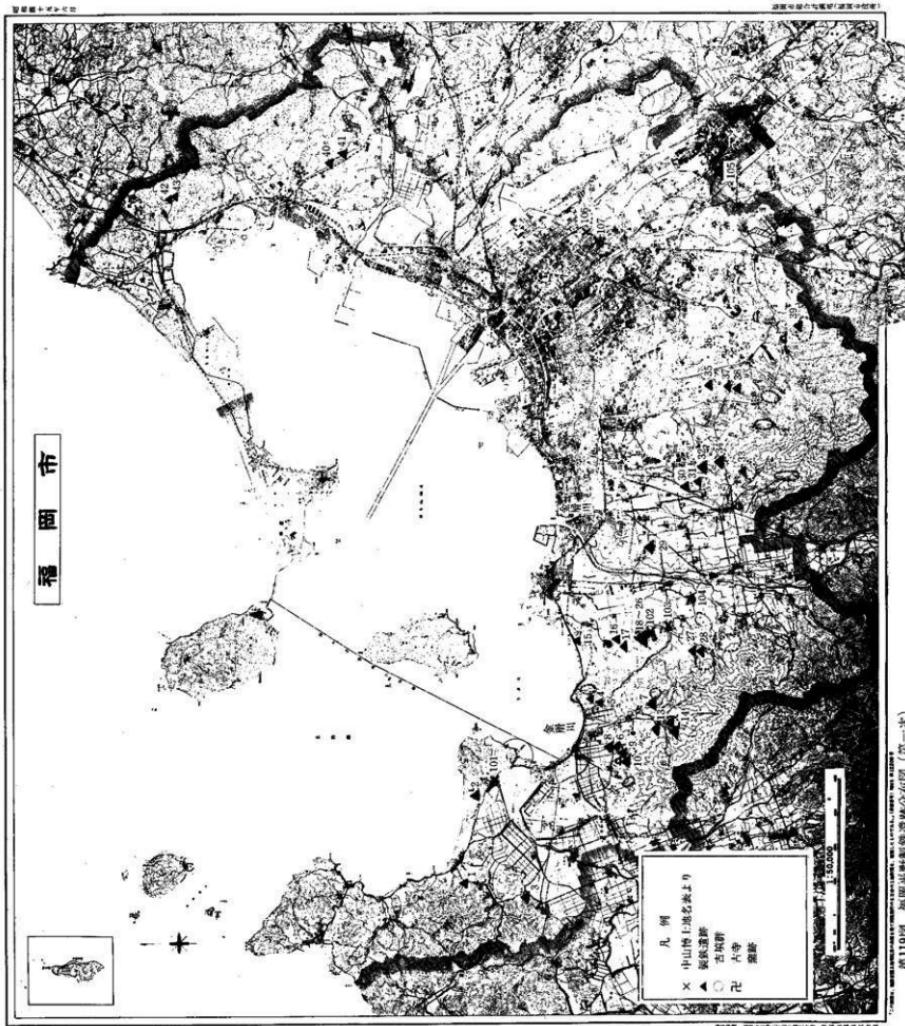
第118図 九州地方鉱床分布図（原田氏）

国名	口径	周	厚	深	備考
筑前國	5尺6寸		4寸		①
長門國	5尺8寸		5寸	1寸	②
馬防國	5尺9寸	1尺7寸			③

文献 ①前田國越世音寺資料帳 ②長門國正税帳
③周防國正税帳第11表鉄錆の寸法

第10表 鉄釜寸法表

福岡市



第119回 新開平野製鐵遺跡分布図(第一次)

第11表 福岡平野製鉄遺跡地名表(第一次)

地名	遺跡名	所在地	立地	遺構	トイゴ	出土遺物	断面	文献	備考
1	大原コモグラ遺跡	福岡市今津コモグラ	丘陵斜面		S 13ヶ	弥生土器 須恵器		石田半蔵資料、日波三島	
2	砂採東場	福岡市今津野花学園前	古砂丘		S 10余ヶ	須恵器、青磁 須恵器		1	
3	爪生道	福岡市元岡爪生	丘陵斜面		S			下条	
4	後藤山古墳	福岡市今宿の原(大谷)	同上		S			古墳群の中には後藤が東 方に至るものあり	
5	トウガ谷	福岡市大字音木トウガ谷	同上		S			深江、大場資料(6~17)	
6	スナイタ	福岡市大字上原スナイタ	同上		S	土制器片			
7	ヤキ山	福岡市大字上原焼山	同上		S				
8	吹ナクソ里	福岡市今宿谷	丘上		S				
9	駅進ノ前	福岡市大字上原駅進	同上		S				
10	ヌットマヤ	福岡市今宿谷	同上		S				
11	鍊研	福岡市大字今宿研	同上		S	炉壁(スサ入り)		下条	
12	新開	福岡市大字今宿新開	同上		S				
13	十郷池	福岡市大字上原十郷	池の端		S				
14	ウソノ口	福岡市大字上原ウソノ	丘陵斜面		S				
15	若狭神社	福岡市大字下山田生え松	古砂丘	炉壁が露出				下条、深江、大湯	
16	治六町宮の前など	福岡市大字治六町宮の前	丘陵斜面	(已記述)		須恵器、土器 瓦、鐵器、銅鏡 火薬桶形 古墳初別	2		
17	大又浦	福岡市大字高崎1	(住居跡)		S	須恵器(二面) 須恵器 6C物	2		
18	かねや尾井	(志賀公民館前)	丘上	たたら	S				
19	このり池	福岡市捨八このり池	同上	たたら	S			東汀塗	
20	同上	同上	同上		S			中央東汀塗	
21	同上	同上	(復活塗)	たたら	S			西池の底	
22	折六町カ梅上原	福岡市折六町	同上	たたら?	S			今ナシ 並轟遺跡	
23	折六町カ梅道	同上	同上	たたら?	S			今ナシ 遺跡	
24	同上	同上	同上	たたら?	S			今ナシ 遺跡	
25	畠中台地(朝ケ山)	同上	同上	たたら?	S				
26	城の口池	福岡市大字治八六町の口	同上	たたら	S	須恵器破片 土器片	半井町?	三島路塗・今ナシ	
27	小松沼跡新泊(1号)	福岡市大字野方新泊西門	同上	たたら、鐵油場	S	須恵器 土器片 A.D. 197±14	C 14	市文化遺産 KUR I 0041	
28	葵松林	福岡市野方大字ナキ池東岸	同上	たたら	S	須恵器 土器片 須恵器 須恵器		同上	
29	有田13街区穴穴	福岡市大字有田	窓穴内	(鐵冶場?)	ナシ	土器片、須恵器 須恵器	B C	銀造の銀冶場か	
30	丁浜泊道	福岡市大字千紙干瀬池	池畔		S	須恵器		東原、肥山	
31	熊ノ池東岸	福岡市千紙熊ノ池東岸	丘陵斜面		S				
32	五ヶ村池北西岸汀綫	福岡市大字五ヶ村	同上	たたら	S	多量			
33	大谷古墳群(2585石室石碑)	福岡市大字高林大谷	同上	たたら?	S	10個以上	古墳 時代?	市文化遺産 2月25日~3月25日	
34	七隈古墳群第8号	福岡市大字七隈福岡大学 境内	古墳内にS 通道に黒色瓦片		S		古墳 時代?	市文化課、堀大調査	
35	宝合遺跡(B地区)	福岡市大字千紙良尼	丘陵斜面	ピットの破片が現 れ、種類は不明	ナシ	高合付皿 高合付皿	奈良?	4	
36	宝合遺跡(D地点)	福岡市大字千紙尼	同上	ピットや発掘が先頭 している	ナシ	須恵器	古墳時代	4	
37	宝塔池南側	福岡市大字上原居宇宝塔	池畔		S	須恵器	古墳 時代?	柳田、下条、折尾、堀里 三島、陸森	
38	後栗製鐵遺跡	福岡市大字栗子重束 (但馬内河跡)	丘陵斜面	大鐵冶 内径 5~5m 土器片、瓦器(II)	8 C	5			
39	大牟田古墳群 (7号墳跡下)	福岡市大字吉原大牟田	同上	たたら	ナシ	須恵器 土器片	7 C 初 古墳時代	6、7	
40	不跡ヶ浦第1遺跡	福岡市大字吉原不跡ヶ浦	池畔		ナシ	須恵器			
41	不跡ヶ浦第2遺跡	同上	門上		ナシ	S			
42	上白島遺跡(第1号遺跡)	福岡市大字和白島前	丘陵斜面		ナシ	土師器	奈良?	8	
43	上白島遺跡(第2号遺跡)	福岡市大字和白島宮前	同上	転化壁、壁穴、 窓(?)	有	須恵器 土器片	奈良?	8 KUR I 0029	

①「今元光復効率強化調査報告」福岡市元岡防災課委員会 1969年 ②「今宮バイパス某係保溝文化財調査報告」拾六町所の遺跡群 福岡県教委 1970年 ③「有田遺跡」福岡市有田古集落遺跡第2次調査報告書-福岡市教委 1968年 ④「宝合遺跡」日木住宅公団 1970年 ⑤「宝合遺跡」日木住宅公団 1970年 ⑥「古墳文化財遺跡名表2」(福岡市埋蔵調査報告書9)福岡市教委 1970年 ⑦「大島根」福岡市大字吉原の古墳群中の古代墓群 たたら研究会発表要旨(別刷人) 1970年 ⑧福岡市白島古跡群の古墳文化財調査報告書 福岡市教委 1971年

盛土下の炉址と、小松製鉄跡の2基の遺構である。前者は埴丘をのせる旧地表面の下位に、2基の炉が築造されている。同墳は出土須恵器により7世紀初の年代が考えられているので、2基の炉はそれ以前の構築で、傾斜面にそって築かれ、炉形は梢円形状を呈する（長さ70~80cm）。炉体は粘土、花崗岩マサ、磚を埴喰状にかためられ非常に硬い。2号には石数を伴う。土器の出土ではなく、少量の鉄滓を伴う。礫なし。たらと考える。小松は発掘直後で整理が完了していないが、大牟田と基本構造は変わらない梢円形の完好な炉と鍛冶場と考えられる遺構が既存して発見された。後者から多量の木炭が検出され、Carbon測定の結果、AD 577±14 KURI0041という測定値が得られている。^(註16)

弥生時代後末期における製鉄は、たとえ鍛冶場的な段階にあったにせよ、かなり普遍的に各地で生産が行なわれたと考えるが、古墳時代に移行すると、たらと鍛冶が分離することにより飛躍的に増加するのではないか。4~5世紀の資料を欠くが、上述大牟田、小松はその1例であろう。生産急増の証左の1つは広域に認められる。生産の際生ずる灰の広がりで、われわれはその中の一点を発掘したにすぎない。個々の遺跡の面積をはかったわけではないが、かなりの広がりを持つものがあることは確実である。

この時代の上昇は次の奈良時代に当然うけつがれている。即ち、節要、上和白、有田13街区、堅穴などがそれである。それぞれ報告書が刊行されているので再論しないが、延喜式に見える謫・庸に鉄、銅を出す国として美作・備中・備後・伯耆國とならんで、筑前國が見えるが、10世紀前葉のこの記事も、以上の背景をもって見るべきである。

福岡周辺の、古代製鉄に関する記事は絶無に近いが、延喜式以前にたとえ数語であっても、見のがせないのは、平安道文第1卷所収の67号文書の筑前國課案（A.D.832年）と、同194号文書の編世音寺資料帳（A.D.703年）^(註17)にみえる、「煎釜」「熱塩鉄釜」という製塩用の鉄製品名である。筑前、肥前の海浜は瀬戸内海地方となるが、古代製塩の盛んなところで、上文の気象条件を考慮すれば、本地方の製塩時期は、鉄のそれと同じく8月および10月が考えられる。このことから、同一集団による兼業生産でないことを、消極的に示唆するものと思う。この時代の製塩は、煎釜に鉄釜や石釜が使用される時期の生産であるが、これらの発見は興味ある問題を提起するが、まだなされていない。ちなみに、鉄釜のサイズが194号文書に出ているので、2例を追加して表示する（第10表）。それぞれ近似値であることが注目される。確証はないが鑄造であろう。

塩生産地は、前引の文書による限りでは、志摩郡であるが、同郡にはコモグラ、瓜尾、長浜などの製鉄遺跡が認められる（第11表、第119図）。残念ながら上記2遺跡の年代はわからないが、さらに、文献の遺存率を考慮に入れると、志摩郡以外にも博多湾沿岸で製塩が行なわれていたと推察できる。万葉集などその傍証である。さきの鉄釜などは、表示した製鉄址のいずれかで作製されたと考えられるが、井上辰雄助教授の論證されたごとく、志摩郡の大船肥公はこの地の塩生産について、人民の徵免、監督にあたっていた諸代郡司であるが、肥公をも含めて奈良朝中期から平安前期にいたるこの地域の郡司クラスは、該生産の集団をも併存し



第120図 砂鉄集め

砂鉄集め 海浜駆除は層をなしているので、砂の部分を除去して採取する。写真は砂の部分を除去しているところ。

（奈多海浜—1951年、原田種成氏）

という測定値が得られている。^(註18)

この時代の上昇は次の奈良時代に当然うけつがれている。即ち、節要、上和白、有田13街区、堅穴などがそれである。それぞれ報告書が刊行されているので再論しないが、延喜式に見える謫・庸に鉄、銅を出す国として美作・備中・備後・伯耆國とならんで、筑前國が見えるが、10世紀前葉のこの記事も、以上の背景をもって見るべきである。

この時代の上昇は次の奈良時代に当然うけつがれている。即ち、節要、上和白、有田13街区、堅穴などがそれである。それぞれ報告書が刊行されているので再論しないが、延喜式に見える謫・庸に鉄、銅を出す国として美作・備中・備後・伯耆國とならんで、筑前國が見えるが、10世紀前葉のこの記事も、以上の背景をもって見るべきである。

福岡周辺の、古代製鉄に関する記事は絶無に近いが、延喜式以前にたとえ数語であっても、見のがせないのは、平安道文第1卷所収の67号文書の筑前國課案（A.D.832年）と、同194号文書の編世音寺資料帳（A.D.703年）^(註17)にみえる、「煎釜」「熱塩鉄釜」という製塩用の鉄製品名である。筑前、肥前の海浜は瀬戸内海地方となるが、古代製塩の盛んなところで、上文の気象条件を考慮すれば、本地方の製塩時期は、鉄のそれと同じく8月および10月が考えられる。このことから、同一集団による兼業生産でないことを、消極的に示唆するものと思う。この時代の製塩は、煎釜に鉄釜や石釜が使用される時期の生産であるが、これらの発見は興味ある問題を提起するが、まだなされていない。ちなみに、鉄釜のサイズが194号文書に出ているので、2例を追加して表示する（第10表）。それぞれ近似値であることが注目される。確証はないが鑄造であろう。

塩生産地は、前引の文書による限りでは、志摩郡であるが、同郡にはコモグラ、瓜尾、長浜などの製鉄遺跡が認められる（第11表、第119図）。残念ながら上記2遺跡の年代はわからないが、さらに、文献の遺存率を考慮に入れると、志摩郡以外にも博多湾沿岸で製塩が行なわれていたと推察できる。万葉集などその傍証である。さきの鉄釜などは、表示した製鉄址のいずれかで作製されたと考えられるが、井上辰雄助教授の論證されたごとく、志摩郡の大船肥公はこの地の塩生産について、人民の徵免、監督にあたっていた諸代郡司であるが、肥公をも含めて奈良朝中期から平安前期にいたるこの地域の郡司クラスは、該生産の集団をも併存し

ていたのではあるまいかと、筆者は想定している。井上助教授は讃岐國「坂本臣」タイプで、塩、鉄の相関関係を想定されている。

(三島 格)

(註1) 銀山弘、井上辰雄、小田富士雄、坂田武彦、岡崎敬、原田種成、黒山正秀、井上直樹、下条、柳田、塩屋、折尾、島津、底平、田村氏らに教示を得、島津氏には付添作製の援助を受けた。

(註2) 中山平次郎「鉄滓を出す弥生式遺跡」歴史地理31-1 1918年 東京。

1. 筑前国糸島郡芦屋村大字新町
2. 筑前国糸島郡波多江大字潤字土筋
3. 筑前国糸島郡筑前大字泊字大坂
4. 筑前国糸島郡今津村大字今津(貝冢)
5. 筑前国早良郡柏村大字十六町與地
6. 筑前国早良郡壹岐村生根原
7. 筑前国早良郡壹岐村大字高木
8. 筑前国早良郡壹岐村大字野方
9. 筑前国早良郡壹岐村大字戸切
10. 筑前国早良郡壹岐村大字梅林
11. 筑前国筑紫郡住吉村大字平田
12. 筑前国筑紫郡水城村大字片野字裏の前
13. 筑前国筑紫郡春日村大字須灰字岡本
14. 筑前国筑紫郡筑紫村大字片野字裏の前
15. 筑前国筑紫郡山口村大字古賀
16. 筑前国筑紫郡筑紫村大字隈
17. 筑前国朝倉郡中津川村大字朝日
18. 筑前国朝倉郡中津川村大字隈
19. 筑後國三井が立石村大字吹上字キタソソノ
20. 筑後國三井が立石村大字大根井
21. 筑後國三井郡味坂大字元成
22. 筑後國三井郡大城村大字大城字延生
23. 筑後國三潴郡三瀬村大字高三瀬字東洲
24. 筑後國三瀬郡三瀬村大字高三瀬字駒崎西畠
25. 肥前國三ヶ原郡田代村大字抽字水田
26. 肥前國三ヶ原郡基里村大字抱根崎字前

(註3) アナゼ(現方言、西北風、筑紫姓氏による。)

(註4) 県立窓の操業シーズンを風向、風速などの気象条件を考慮し推定したものに『漆の谷窓跡群一八女古窓群調査報告1』(小出) 1969年 八女。

(註5・6) 原田種成「點い砂」地質ニュース146 1966年 東京。

(註6) 1)坂田武彦、岡崎敬「有田遺跡発見の球状液化鉄の冶金学的分析」「有田遺跡—福岡市有田古代聚落第二次調査報告」 1968年 福岡市教委 福岡。 2)註5原出書。

(註7) 「土地分類図」福岡県 地政企画室 1970年 東京。

(註9) 昭和28年9月30日 熊尾郡和白村糸多海浜金チタン鉱(No1497) TiO₂%23.61 Fe%25.20 地質調査所技術部化学課一分析成績報告(原出)

(註10) 濱井仁夫「宮の前遺跡E地点」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告—福岡市大字折六町所在の遺跡群」1所目 福岡県教委 1970年 福岡。

(註11) 1)川越省志「鉄および銅器生産の起源をめぐって」たたら研究14所収の註2による 1968年 広島。
2)藤田等、川越省志「弥生時代鉄器出土土地名表」「日本製鉄史稿」 1970年 広島。

(註12) 脇島邦弘「大又遺跡」註10書収。

(註13) 表4地名表の文献③④。

(註14) 福岡市教委文化課により1970年12月発掘。

(註15) 九州大学ラジオアイソotope実験室理学部高島良正助教授同工学部坂田武氏の在厚意を得た。

(註16) 「灰を主成分とし小量の炭素がカリウム、ナトリウムと混合した黒色層」表4地名表の文献④

(註17) 下記の理由で大鐵冶場と判断される。(主として大場憲郎氏による)

1. 火床であって炉底ではない。
2. 第1次鉄滓が見当らない。
3. 本炭に小枝焼が出土している。
4. 3-5cmのコロ鉄と見られる出土品が数点ある。
5. 火床にたまつた湯(酸化鉄)の冷却
6. 周囲が木炭粉を混じた粘土で固めてある。
7. 戻町ののみで小町が見当らない。

(註18・19) 井上辰雄「古代製錬の生産形態」「歴史論叢」原田敏明先生古稀記念、1965年 熊本による。

(註20) 猪方勉「讃岐原遺跡出土遺物」熊本史学37 1960年 熊本。

(註21) 板本純興「肥後上代の鉄」熊本史学4 1953年 熊本。

6. 上和白第2号遺構（製鉄址）・第4号遺構（住居址）の建築学的考察

(1) 住居址とピット群の関係

上和白遺跡には第1号遺構より第13号遺構までが確かめられる。住居址の柱穴（ピット）以外に多くのピット群が確認できた。住居址に關係する以外のこれら多く散在するピットはどのような平面をもつ遺構であるのかを明確にするのが課題であるのでこれからどのような考察を行ったのかを説明しよう。最初に行った試みは第6号遺構までのうちで最も良好な遺構である第4号遺構（住居址）の棟の方向が北北東に向っているので棟と平行に線を引くことによってピット群の法則を見つけようとしたことである。しかし散在するピット群は第4号遺構の棟との平行線上には並んでいない。同様に製鉄遺構といわれる第2号遺構の棟の方向南南東に平行線を引くことにより、散在するピット群の法則を見つける試みをしたのであるが、線上に乗らない同様の結果である。次に行なったのは柱穴の一つ一つの直径、深さを調べ、ほぼ同じ深さの柱穴を同類と推定して分類をしても、直径までもほぼ同じとするには到らず、又直径の同類の柱穴をつないでみても住居址の大きさも見当がつかない。柱穴の並びの状態から方向性を見つけ出すことを最初に行い、その方向性も柱穴が多く並んでいる方向に線を結ぶのではなく、第4号遺構（住居址）や第2号遺構（製鉄址）との關係で調べてみたのではあったが、散在する柱穴を解く鍵にはならなかったのである。線で結んだ方位性でも柱穴の分類でも散在する柱穴を遺構の平面を決める柱間にはなり得なかった。第2号遺構の柱間は2.4m（8尺）であり、第4号遺構（住居址）の一辺が約2.4mの生活面を持ってることから2.4mは上和白遺跡では重要な寸法である。2.4mを単位長さとして、散在するピット群のうちでも主要な柱穴を探し柱の間が2.4mになるのを選び出すことを始めた。柱間が2.4mになると同時に平面を示すには直角方向にも2.4mの柱間を持つことが必要になる。しかし単位寸法の2.4mに合うのも少ないし、更に直角方向にも2.4mの柱間寸法を持つピット群は無い。直角方向を重視して単位寸法2.4mにとらわれずに基盤目に線を引いても建築遺構の大きさを確かめることは出来ない。住居址にても製鉄遺構にても土間を生活面としていた建築なのであるから、散在するピット群を生活面とその他の面と分類出来るのは実に望ましいことであったし、発掘に於いても断えず注意を払って生活面を探していたのである。後の耕作土のために生活面がすでに失なわれてしまったのかもしれないが、生活面のない遺構で柱穴のみが存在するのは高床を持った建築遺構とも考えられることはある。しかし高床の建築遺構であった柱間寸法の狭く、太い柱を使用していかなければならない。なぜなら柱は屋根を支えることと同時に床をも支えなければならないからである。散在するピット群の実測から高床の遺構とするには無理であると思われる。それに何故に高床の建築が建てられなければならなかったかという理由にも乏しいからである。散在するピット群は遺構を示しているには違いないのではあるが、どのような遺構であるかを決める手堅りはなかったのである。

(2) 第4号遺構（住居址）

住居址の生活面は約2.4m（8尺）を一辺とする正方形で一辺の中央の外側にカマドを付加した平面である。この住居址で、特に注意したいことは中央に柱穴が存在していることである。普通私達は中柱といい、その構造を中柱構造といっている。中柱構造の住居址は縦文、弥生、古墳と遺跡をとどめていて、サス構造（梁の上に合掌を組む構造）以前の構法ではないかと推察されており、中柱構造の分布を知る点では重要な追跡といえる。住居の棟木を支えるのに、イ）柱がある。住居の両側に置かれた棟持柱、それに上和白第2号住居址の中柱に示す柱である。ロ）サス、桁の上に梁をのせ、その上に合掌を組む方法で、合掌を組んだ上に梁木をのせて支える方法である。普通合掌は柱上の梁にのせるのをいうのではあるが、地上から立ち上げられた樋が直接棟木を支える構法も考えられる。最近の例では宝台遺跡（弥生時代）の住居を復原した佐藤治氏のもう一つである⁽¹⁾

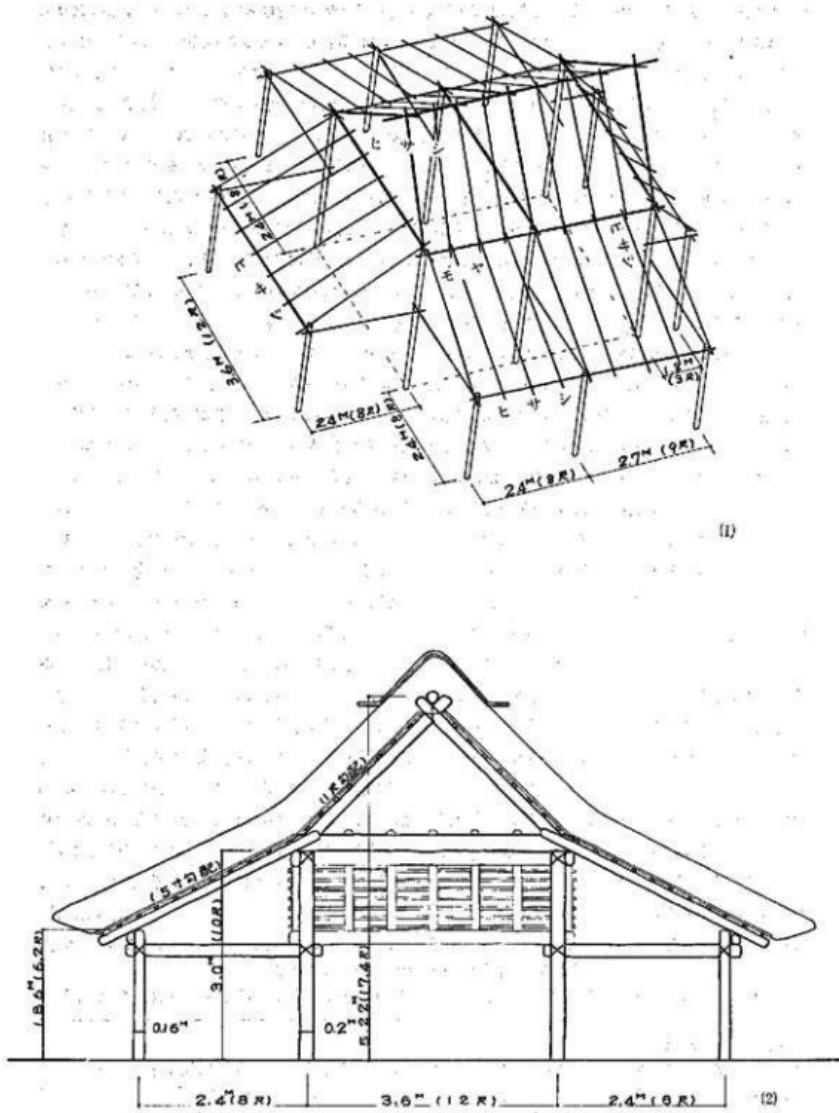
るし、針摺遺跡の古墳時代の住居を復原した宮原源氏のも地上から立ち上げられた檼が直接棟木を支えている。^(註5)二人とも推定復原には違いないけれども佐藤氏の場合は平西八角形の柱配置に棟木を何で支えるかということ、それを裏づける柱穴の確認からの論のすめであり、宮原氏の場合には焼失して炭化物となった檼配置から組み立てた論であるから、一概に主婦ともいえない根拠を認めなければならない。サス構造とは別に檼が地上から立ち上げられて棟木を支える構法も住居の復原には一考を必要とするものである。ハ) 東で棟木を支える方法がある。柱にのせられた梁の上に東が覆かれて棟木を支える方法である。棟木を支える方法はイ) ロ) ハ) の三通りであるが、檼が直接棟木を支える方法を加えると四通りになる。住居を復原する場合にまず最初に考えることは、棟木を柱、サス、東それに檼のうちどれで支えているかということとの決定である。住居にはすべて棟木があるのかと問われると棟木のない住居も存在するから一概にはいえぬが、棟木のないのは特殊であり数が少ないので住居には棟木が存在するといった方が論は進め易い。更に重要なことはその棟木の方向はどちらを向いているかということである。第2号住居ではカマドの存在と隣接する第2号遺構(製鉄址)の棟木の方向とから北北東に棟が向っている。この棟木を支えているのは先に述べた中柱であり、中柱の位置は生活面のほぼ中心(柱穴心はカマドを中心より7cm近づいている)で棟木を支えている。当然棟木には檼が懸けられ地上までおろされる。檼を支える梁は柱に結びつけられていたであろうし、その柱は生活面に立てられているはずなのであるが、カマドの残っていた良好な遺構であるにもかかわらず柱穴は柱以外に二つしかない。二つの柱穴とも復原住居の柱穴にはなり難い位似にある。通道は室外に出るはずであるし、隣接する第2号遺構から生活面は一辺約2.4mの正方形になる。中柱で棟木を支えるにしても墨けられた檼を柱に結びつけられた梁で支えなければならないのは当然である。発掘の結果見つけ出された柱穴だけでは不可能で、別に柱穴を想定しなくては復原住居にはなり難い。豊かな荷重を受けるのは中柱であり、合掌が組まれない限りにおいては柱にはそれ程の荷重はかかるないから中柱の深さのある柱穴を必要としないことはいえる。中柱を中心として四方の柱穴は浅いこともありうる。浅い柱穴かもしれないとして4本の柱が想定可能であっても論を進めるには資料不足といわねばならぬ。第4号遺構(住居址)においては中柱の存在と中柱が棟木を支えており、棟の方向は北北東になっていることがいえる住居であり、今後中柱構造の住居址の発掘を行って論を進めることが重要なことといえる。

(3) 第2号遺構(製鉄址)

発掘の結果の柱穴の並びは図に示しておる
ように横行の柱間は2.4mと2.7mの二種と異

柱間	計測値(cm)	各尺 現代 尺	
		(1尺=24cm)	(1尺=30.3cm)
1 P 1～P 2	360	15尺	12尺- 3cm
2 (P 1～P 24)	208	9尺- 6cm	7尺- 3cm
3. P 5～P 6	230	10尺- 10cm	8尺- 12cm
4 P 1～P 5	324	14尺	11尺- 9cm
5 P 2～P 6	362	15尺+ 2cm	12尺- 1cm
6 (P 24～P 6)	316	13尺+ 4cm	10尺+ 13cm
7 P 2～P 4	266	11尺+ 2cm	9尺- 6cm
8 (P 24～P 4)	316	13尺+ 4cm	10尺+ 13cm
9 P 6～K	290	12尺+ 2cm	10尺- 12cm
10 P 4～K	360	15尺	12尺- 3cm
11 P 1～P 4	528	22尺	17尺+ 13cm
12 P 5～K	522	22尺- 6cm	17尺+ 7cm
13 P 9～P 10	500	21尺- 4cm	17尺- 14cm
14 P 13～P 14	520	22尺- 6cm	17尺+ 6cm
15 P 15～P 16	330	14尺- 6cm	11尺- 3cm
16 P 3～P 7	384	16尺	13尺- 9cm
17 P 11～P 12	360	15尺	12尺- 3cm
18 P 1～P 9	224	9尺+ 8cm	7尺+ 12cm
19 P 4～P 10	240	10尺	8尺- 2cm
20 P 4～P 11	88	4尺- 6cm	3尺- 2cm
21 K～P 12	96	4尺	3尺+ 6cm
22 K～P 13	246	10尺+ 6cm	8尺+ 4cm
23 P 5～P 14	244	10尺+ 4cm	8尺+ 2cm
24 P 5～P 15	228	10尺	8尺- 14cm
25 P 1～P 16	186	8尺- 6cm	6尺+ 5cm

第12表 第2号遺構柱間計測表



第 121 図 第 2 号 造 構 (製 鉄 坊) 推 定 復 元 図 (1)骨組圖 (2)断面図

間の柱間3.6mの一間とがモヤになり（第121図参照）、四方にはヒサシが付けられた平面になる。棟木はサス（合掌）により支えられており、棟木の方向は南東に向っている。南のヒサシのみ出は0.9m（3尺）で、他の三方のヒサシの出は2.4m（8尺）になっている。南側の出が0.9mになっている理由の一つに隣接する第4号造構（住居址）との関係がある。ヒサシの出を2.4mにすると住居址の屋根の内に入ってしまう。広い地域に住居址と接近させてヒサシの出を0.9mにして、作業の場と寝食の場とを密接にしている。モヤの内には炉と鉄滓の捨場があり、天井は第二図の断面図に示す通り最も高い。その周囲にはヒサシがとりまいており、モヤヒサシの概念は古代の建築の空き構成を意味している。上和白の8世紀の建築にはすでに出現している。更に注目したいのは製鉄の作業の場に使われた建築に側柱が立ち壁のある点である。炉と鉄滓の捨てられた場との間に間柱が入れられた間柱の柱穴がうかがわれる。北側のヒサシの側柱にも間柱が入れられて仕切られた柱穴がうかがわれる。炉と鉄滓の捨てる場所はモヤの内に入れられ、その周囲にはヒサシの付けられた作業場は入側柱と側柱とから組立てられる。入側柱大木には3.9mの梁が三本渡され、梁の上にはサスが組まれて油木を支えている。横力に対しては柱間に軸が組みつけられることになる。軸が置かれた軸は他の柱間より0.3m多い2.7mになっているのも炉を中心とする作業場の広さの要求から生じた柱間寸法と思われる。側柱から入側柱には虹梁が渡され、側柱の柱間に渡された軸上には五寸勾配の軸が入側柱通りに掛けられることとなる。側柱の長さを1.86mとすると入側柱の長さは五寸勾配から1.2mを加えられて3.06mになる。しかし実際は側柱の上にせられた軸は入側柱では軸の上にせられるから6cm下るので入側柱の長さは3.0mになる。入側柱上に組まれたサスは1尺勾配で、1.8mと合掌の巾と棟木の半径を加えると棟木の高さは5.22mになる。瓦の出土を見ないことから屋根は茅葺であったと思われる。北側に面する部分は壁が設けられていたことであろうが、入口はどこで決められはしないが吹抜けか簡単な壁が残っており、多少自由に出入は出来たことであろう。推定復原作業場は図に示す通りである。先にも述べた通り、中心のモヤの四方にヒサシの付けられ、側柱の立てられた作業場の建築であることが重要なのである。製鉄造構と住居址とが隣接しながらも共に棟木の延長が交わる点は南の側柱通りからとカマドの突端からとほぼ同じ距離の1.4m離れた位置である。このことは製鉄造構と住居址との壁がりが解かり、計画の意図がうかがえる。住居址は中柱構造であり、製鉄造構はサス構造の建築である。8世紀の同時期に存在した両造構は構法の両立を意味しているだけでなく構法は遺構の規模とも関係することを示している。サス構造は中柱構造よりもより丈夫であり、荷重も多く受けられるから規模を大にするのも可能である。更に論を進めて寝食の場の堅穴住居と側柱が立ち壁のある建築が作業場に用いられ、同時期に存在することは労働と居住の空間の分離により、建築が違うことを示しており堅穴住居と同時に側柱の立てられた建築の共存の意味もうなづけるのである。発掘調査の調査にあたっては西日本工業大学助教授中村雄三氏、精華女子短期大学講師井上洋子氏、九州大学文部科学官佐藤浩氏と共に考え方を進めた。責任上私が執筆をし、まとめたのである。

（土田充義）

- （註1）・日本建築学会研究報告九州支部第19号2「宝台遺跡に見られる住居址の建築復原についての考察」
・宝台遺跡日本住宅公團 1970 「宝台住居址の建築復原について」
（註2）・日本建築学会研究報告九州支部第19号2「南バイパス9号地点・針摺遺跡の住居址について」

（P123からつづく）

- （註3）『今宿バイパス園原櫛塚文化財調査報告第1集』一高崎古墳群一 福岡県教育委員会 1970年
（註4）『福岡市金武古墳群発掘調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集）福岡市教育委員会 1971年
（註5）『目迷原古墳群調査報告』（佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9編）佐賀県教育委員会 1950年
（註6）『勇猛山古墳群』 佐賀県教育委員会 1965年
（註7）川添夏吉「熊本県玉名市人坊古墳調査報告」『熊本史学』50 1967年
（註8）田辺・原口他『石川山古墳群調査報告』（熊本県文化財調査報告9）熊本県教育委員会 1968年

7. 和白出土の青磁について

上和白包含地から出土した多くの青磁類は同安窯（福建省）、龍泉窯（浙江省）、越州窯（浙江省）等南宋諸窯のものがほとんどで、一部高麗茶碗のいわゆる井戸・二鳥と呼ばれるものもあり、いずれも大陸から舶載されたことをものがたる資料である。青磁の他に白磁に近いものもある。窯の不明なものもあるが、龍泉窯系のものが多く、同安窯がこれにつぐ。器形は碗がほとんどで、皿もある。南宋でも古い時期と考えられるものがあるが、北宋や元、明に比定されるものはないようである。

この中で、第7号遺構の同安窯珠光青磁碗は土師器皿、鉄刀とともに土灰墓に副葬されていた。同様な例として福岡市北区では珠光青磁碗3個が長方形土灰墓に副葬されていたと云う。^(註1) 第10号遺構の青磁碗は窯を明らかにしないが、南宋の時期のものであろう。遺構の状態を確認できなかったが、第7号遺構と同様な出土状態をしめすと考えることができる。第8号・第9号遺構の出土遺物は、土師器皿のみで、青磁類はみられなかつた。しかし、遺構の底辺近くまで削平されており、擾乱層の青磁片には同時期の完形に復元できる青磁碗が多く、これらが青磁碗が副葬された可能性も残されていると考えられる。

第7号遺構出土の珠光青磁碗の上限は鎌倉時代と考えられるが、その後村田珠光等によって茶器として愛戴されたことを考慮すれば、鎌倉時代以降世まで伝承されたものが副葬されたとみる考え方もできる。しかし、福岡縣油城跡、聖福寺^(註2)、山口県周防国御手^(註3)、広島県草戸千軒町^(註4)等の調査例では、いずれも中世と考えられている。和白に於いても中世以後の資料は極めて少なく、上和白丸山古墳北側の水田面から出土したと云う符符元年（西暦1008年）も青磁類とともに紹介されたことを知る手がかりとなる。また、土師器皿は福岡県浦城跡、宗崎遺跡^(註5)、山口県周防國御手等から多量に発掘され、中世に考えられているものである。これらを総合して、第7号～第10号遺構は中世の土灰墓と考えて差し支えないであろう。

一方、宮前3号墳の青磁碗は龍泉窯系のものである。尚見2号墳のものは蓮瓣のしのぎ装文が特徴的な龍泉窯の瓶で、見込みに花文を描く青磁碗も龍泉窯系のものである。ともに南宋の製品であり、包含地の青磁類との時間的隔たりはない。古墳から青磁が出土する例としては福岡県東郷6号墳、高崎2号墳、金武2号墳、佐賀県自達原占拠群春荷塚^(註6)、勇猛山古墳群第4号^(註7)、熊本県大坊古墳^(註8)、石川山古墳群第5号^(註9)等がある。いずれも南宋の同安窯、龍泉窯等和白出土の青磁類と同種のものであり、東洋6号墳では土師器皿が共存している。

このように上和白の調査では、同時期の青磁碗が二例の出土状態をしめす結果を得た。一つは包含地の土灰墓に副葬される例で、包含地は中世において墓地として利用されている。他は古墳出土のもので、宮前3号墳、高見2号墳とも丘陵斜面に占地しており、中世の墓地や居住地とは考えられない。古墳出土例は副葬品として埋葬されたとは考えられないから、盛土のある指標的な場所（古墳）に埋葬したと考える方が妥当であろう。即ち、中世における一種の宗教信仰の対象地に埋葬されたと考えることができる。

一方では土灰墓の副葬品とされ、他方では信仰の貢納品とされたことは、興味深いものがある。（柳田）

(註1) 昭和12年発掘、森貞次郎氏の教示による。

(註2) 「油城跡」（筑紫源太宰府町所在中世城跡の調査） 福岡県教育委員会 1970年

(註3) 関崎敬「福岡市（博多）聖福寺乳見の遺物について」一大陸船載の陶器と銀鏡—『九州文化史研究紀要』第13号 1968年

(註4) 小田富士雄「芦野の日衛」 防府市教育委員会 1967年

(註5) 村上正名「草戸千軒町遺跡」—遺跡編・遺物編一 福岡市教育委員会 1965年、1966年

(註6) 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」一宗崎遺跡一 福岡県教育委員会 1970年

(註7) 彼多野・春成『東洋遺跡研究』 日本文化公団 1967年

第5章 総括

(1) 調査の成果と今後の課題

下和白・上和白を通して多くの遺跡・遺物が発掘された。第3章ではもっぱら調査の事実を報告する事に力を注ぎ、第4章ではその中で特に問題となる事項について、若干の考察を試みたが、なお欠ける点も多い。ここでは考察編に含まれなかった部分に重点をおきながら、調査の全体を総括してまとめとする。

下和白三区から出土した石器はサスカイトを石材とし、三面に舟型の調整をほどこしたポイント（尖頭器）で旧石器時代後期に比定される。中央に核をつくり、三面に調整を施して整形され、断面三角形を呈するのが特徴で、佐賀県多久二年山、茶園原等の大形船形のポイントとは区別して考えるべきものであろう。同様なものに宮崎県吉原、福岡県四三島、直方、酒窓、長崎県諫早、熊本県森脇町、佐賀県唐津、多久、平沢良等の例があり、ナイフ型石器を共伴することが知られている。今後更に資料の増加が予想されるところからこのような特徴を持つポイントを三棱ポイントと呼び、今後の研究にそなえたい。今回の調査では、旧石器時代の遺物はこの一点だけであったが、福岡市奈多海岸（第122図1）からはナイフ形石器、部木からはナイフ形石器、ブレイド、マイクロ・コア等が表出されている。近年福岡周辺にも、徐々に旧石器資料が増えつつあり福岡市東部地域の同時代の研究を進める上で一つの手がかりと/or>することができよう。

縄文時代の遺跡・遺構としては、下和白・上和白から出土した石器と土塙墓については前述したとおり、伴生土器が得られなかった点は残念であるが、弥生時代の前段階について福岡市域、その周辺部は不明な点が多い。その中で上和白の石鏡と鏡片や小円鏡を伴う土塙墓は、福岡平野では貴重な調査例の一つとなった。福岡市五ヶ村池、野多日池、市立田舎や野方、大塚公園等のように丘陵先端部から発見されるという共通点を持ち、和白もその例にもれない。このような池の周辺及び低丘陵には、尚良好な遺物遺構の発見が予想され、今後に期待したい。

弥生時代の和白地域は遺跡・遺物ともに乏しい。僅かに下和白三区で流状遺跡と中期を中心とする弥生式土器が発見されたにすぎない。隣接地には弥生初期の有名な夜白貝塚（第122図2）があり、上和白城池の北側には板付式土器の包含層（第122図3）がある。平山では磨製石斧の他石戈（第122図4）が採集されているように、上和白の東から北へ続く台地上の遺跡（第122図5）へとつながり、小地域のまとまりをみせる。下和白の弥生式土器は中期を中心とし、しかも周囲の遺跡とは孤立した様相を示し、発展性に欠ける。伴出した石鏡から魚撃的な性格をもつ遺跡と考えられようが海岸に近く平野に続かない地域では次第に米作りへの生業へと移行する弥生時代に、大きな水田面をひかえた福岡平野に遺跡が集中するのとは対称的である。弥生時代の遺跡が卓越する福岡地域でもその企てが米作りを基盤としたとは考えられず、下和白では魚撃的な生活を基盤とする遺構の解釈に注意したが、舟状遺構の性格はわからなかった。土器が弥生時代中期を中心とするところから溝中の花粉分析を依頼し、当時の植栽相の在り方を知る手がかりとしたが、良好な結果は得られなかった。また、下和白三区A地点のピット状遺構も一つのまとまりを見せず、性格を決定するには至らなかった。しかしながら平野部に多い弥生時代の遺跡と対比する時、海岸に近い谷あいの弥生中期の小さな遺跡の在り方は魚撃的な性格とともに古代製塩との関連を想定させるものとして興味深い。奈多海岸には細片となった土器片が注意される。和白地域同様福岡平野の周辺部で博多湾を中に対峙する遺跡として砂丘上の今宿西松原土器片が注意される。



第122図 和白周辺遺跡分布図

7012.02.1

遺跡、横浜、今山石斧製造址、今津貝塚、長浜貝塚などがある。いずれも弥生前期に生活の基盤をもとめるが、今山を除けば中期以降の発展性に乏しい遺跡である。海に面し、水田面を有しない共通点を指摘でき、弥生時代の推移を究明する上で平野部の研究と合わせて注目したい地域である。

古墳時代になると弥生の遺跡が立地した丘陵の頂部に古墳があらわれる。下和白飛山2号墳は、小形の竪穴式石室であり、福岡周辺には今宿古墳群、持田ヶ宿古墳群、成屋形遺跡などに類例を見出すことができる。幾内型の割石小口積みの長大な竪穴式石室を柱型としたもので、五世紀代に盛行するものである。

飛山1号墳は竪穴式石室から横穴式石室への移行形態を示す好例である。古墳が立地する丘陵は標高56mの頂部にあたり、西には志賀の島、南には博多湾と福岡平野を一望できる。東には柏原郡新宮町から宗像郡に海岸線が続き、下和白から上和白へ連なる丘陵によって南北両地域の平野が面されていることがわかる。つまり福岡平野と宗像平野を区分する丘陵の海岸部に占地しているわけである。このような立地に飛山1号墳があらわれるのは遅くとも6世紀初期、早ければ5世紀中葉とも考えられるが、5世紀後半に位置づけるのが妥当であろう。須恵器の胎土は良質な粘土で焼成が固く、朝鮮のものに近い。博多湾を一望できる海岸に近い立地からしても大陸との関係を考慮しなければならない。いわゆる竪穴系横口式と呼ばれる石室からは各種の遺物が出土しているが、滑石製の口玉、有孔円板、劍は5世紀代の古墳に見られるものであり、直刀も古い様式の1つと考えられる。一方勾玉は崩御品中最も新しく考えられるものであるが、滑石及びその外部施設から追跡されたとは考えられない。このような状況から後期古墳への過渡期的な在り方を示すものと見られ、福岡平野の老司古墳につづく時潮に比定されるが、北九州から唐津平野の海岸に面する丘陵上に点在する類例の1つであろう。同時期の平野部の古墳に対して崩御品が乏しいのが通例で、老司古墳と飛山1号墳の場合にもこの原則をあてはめて考えることができる。

この時期に先行する4世紀後半代に書住ケ丘古墳（第122図7）が築造されている。粘土部を内部主体とする円墳で、輪郭の三角縁二神二獣鏡を出す古墳として著名である。福岡地域で舶載の三角縁獣鏡を出土する古墳として福岡平野の鈴人池、卯内尺古墳、老司古墳、糸島平野東端に占地する馬船寺若宮八幡古墳等がある。これに対し呑吐ケ丘古墳は福岡平野の東端に位置しており、和白地域を包括する首尾クラスの存在をものがたるものであろう。

上和白古墳群は横穴式石室を内部主体とする後期古墳で、全て両袖式の單室墳である。福岡平野における後期古墳の研究は緒についたばかりで、多くの問題点を残している。中でも古墳の年代は古葉跡の須恵器の編年とは異なり、困難な点が多い。上和白古墳群の中では、猿の原古墳から比較的良好な遺物の出土状態が得られたことを除けば、宮前古墳群、高見古墳群の遺物出土状態を知ることはできない。遺物は極めて乏しいが、從来の須恵器の編年を標準とすれば猿の原古墳の年代は6世紀後半、宮前古墳群、高見古墳群は6世紀末から7世紀代と考えることができよう。

6世紀代の日本は、朝鮮半島の経営が困難となり、562年任那が滅んで半島から後退する歴史上の一つの転換期にある。多くの層化人が浮説した墳でもある。一方、国内においては527年難井の反乱が起っており、いわば動的の世紀とみることができる。難井の反乱後、船屋に屯倉が置かれ（528年）、那津口には官家が建てられた（536年）と伝えられている。これを機会に半島に対する沿岸の守りとなすとともに、大和朝廷の九州統括はより強化されていったのである。このような動きの中で和白地域は、安曇一族の本拠地の一部に推定されることや屯倉が設置された柏原の外縁部に比定されること等から、これらの歴史上の要素を調査地域の考古学資料の中に求めたが、なお不明な点が多い。

上和白古墳群出土遺物の中では、特に馬具が削減される比率の高いことが指摘される。馬具の副葬は猿の原古墳が卓越するが、宮前古墳群・高見古墳群にもそれぞれみられ、上和白古墳群の一つの特徴とみることがで

きる。このような馬具出土率の高さを被葬者の軍事的性格をもののがたるものと想定できるならば、磐井の反乱後設置された柏原屯舎の外縁部にいた上和白古墳群の被葬者を、通常の生産力の高まりの中で自立した家父長集團としてではなく、何らかの軍事的性格をもった集團とみる考え方方でできるのではなかろうか。あたかも6世紀中葉を境にして、和白地域における後期古墳群の形成がはじまることは興味深い。香椎一平山・古賀を経ぶ古道に沿って密な分布をしめす後期古墳のあり方は、このような古代史の動きを反映するものとして注意されるが、それらの解明は今後の課題である。福岡市大牟田古墳群43基のうち馬具を副葬する例が極めて少ないとすることは、上和白古墳群との性格の相違を検討する資料となる。洽六町高崎古墳群出土の馬具には金銀製のものを含んでいるが、上和白古墳群の馬具には簡素で、より実用的とみることができる等の点から、福岡平野の古墳被葬者との性格のちがいの一端を求めることができよう。

古墳の施造上から注意される点は猿の塚古墳に流状造構がみられ、宮前3号墳、高見5号墳にも石室を半円形に取巻く渦状造構が認められたことである。猿の塚古墳の場合、通常の周溝とは区別されるべきもので、古墳構築時における技術的なものと考えられる。即ち、周溝には封土をきづく以前の墓域の決定のための概念的要素も半ば考えられる必要があろう。これに対し、宮前3号墳、高見5号墳では玄室を半円形に取巻くが渦状部から前部にはみられない。これは丘陵斜面の高い部分（玄室側）の土を削り、封土とする古墳の施造によってみられるものと考えられ、ここでは馬蹄状溝と呼ぶ。馬蹄状溝は古墳構築時の技術的所産によるもので、中期古墳に多くみられる周溝は技術的なもの以外に、意図的因素が含まれている点で区別して考えるべきであろう。後期古墳の中には馬蹄状溝を持たないものもあり、封土は一般に低く、高見1号墳ではほとんど認められなかった。猿の塚古墳はこのような馬蹄状溝とは多少異なり、墓域を決定する意図がうかがえること、談道部に前部にもつこと、丘陵頂部に構築される点等古墳築造上からも後期古墳の中における古い様相として指摘することができる。猿の塚古墳で注意されるのは須恵器Ⅲ期に共存する土師器である。従来この時期の資料は少なく、この地域での土師器編年上の一つの基準とすることができる。

上和白古墳群の中で宮前群（3基）、高見A群（4基）は古墳群の最小単位となるもので、これら単位群の集まりとして上和白古墳群がある。このような単位群・地域群（構成群）として群集墳をとらえる考え方方、他地域の群集墳にもあてはめて考えることができるであろう。和白周辺地域には第122図10～17・19～24にしめす通り後期古墳の存在をみると、現在はその大半が姿を消している。この中には京原古墳（第122図11）、丸山古墳（第122図14）のように一基のみのものと、ゴルフ場内古墳（第122図15～17）、平山古墳群（第122図20・21）二代古墳（第122図23）のように数基で単位群を形成するものがある。これらの後期古墳と上和白古墳群との比較、単位群・地域群としてどのように包括されるか、更に相互間の被葬者の問題と今後明確すべき問題を多く残している。後期古墳の出土遺物が少ないことから、それ以外の要素として石室構造、古墳の占地等の比較から古墳の年代決定の手がかりを得ようと試みたが、現段階では比較資料に乏しく、現状では資料の提供とせざるをえない。今後の比較資料の増加にそなえたい。近年、福岡平野では大牟田古墳群、七隈古墳群、小松ヶ丘古墳群、乙金古墳群、大谷古墳群等群集墳の調査が相次いで行なわれており、福岡平野の周辺部に位置する上和白古墳群との対比は興味深いものがあり、報告書の刊行を待ちたい。

古墳時代終末期から奈良時代にかけての鉄生産段階をしめす製鉄造構が発掘された。第1号造構は鉄生産段階に於ける精錬炉としての大鍛冶場と考えられ、第2号造構はその加工段階とみなされよう。スケール、砥石等の出土はその傍証とされる資料である。が、鋳滓の分析結果を得ていないので、その成果にもとづいて検討すべきであろう。製鉄造構に隣接して空穴住居址が認められる点は、ほぼ同時期の造構と考えられ、相互の関連を求める点で特筆すべきものであろう。鉄生産段階における造構とともに鉄生産にあたった工人の居住の場と考えられ、当時の生活を復元する手がかりとされる。また、第3号造構は空穴造構が小さく、住居址と

考ににくいが、壁面に石積みがみられ祭壇的な様相をしめしている。製鉄遺構には多く集石が認められることがあり、第13号遺構の集石は、第3号遺構同様製鉄遺構との関連をしめす見方もできよう。近牛福周辺地域におけるたたら研究は、従来の有出跡、垂架遺跡の例に加えて大牟田吉良郡第17号墳の下から製鉄遺構が発掘され、小松ヶ丘古墳群に於ても製鉄遺構の存在が知られており、今後の研究整備に待つべきものが多い。

第4号遺構はかまどを付設する堅穴住居と考えられたが、一箇をもうけて考察する紙枚がなかったので、ここで遺構とピット群の関係を整理して住居と復元への手がかりとしたい。第4号遺構とピット群の関係は当然としたまとまりを持つとはいえない。ピット群を整理して復元の手がかりを得るための試論の基礎となるのは、かまどを付設する構造上の特徴と、遺構の中心に位置するP1を主柱穴とする二点である（第38図、第4表参照）。復元には一応3つの考え方ができる。①周囲の方形をなすP5、P15、P26、P35を4支柱穴とする。②周囲と主柱穴とは等距離となるピットを放射状にむすびP18～P20、P24、P25、P27、P31、P36、P40を支柱穴とする。③はピットの形態、深さ主柱穴との距離が一定しないから除外し、①③に既定して考えてみよう。①と②の場合支柱穴をむすぶ柱間と遺構の壁は平行する。①の支柱穴をむすぶ柱間の長さは220～280cmとほぼ近い値を得る。②の場合、支柱穴の柱間の長さは443～456cmとなり、東、西、南の三辺の長さは一致する結果となり、主柱穴と支柱穴の距離は280～340cmの間にあり、誤差は少ない。③は堅穴住居の床面の4隅に位置する一般的なピットのあり方が、壁の北側にかまどを付設する構造上の制約から北側へずらして柱穴を掘り込んだと考えることができる。ピットの位置はかまどを意識しているとみられ、かまどは支柱間（P26～P35）の外側にはり出す。③の場合かまどは支柱穴の中に位置することになる。①の4支柱穴の深さはP5を除きほぼ近い数値となるが、②の支柱穴の深さは-13.0cm～-36.5cmと誤差が大きくなる。

以上を整理すれば次の通りである。①の場合支柱穴の柱間はほぼ近い距離となり、ピットの深さも誤差が少ない。かまどを支柱穴外にはり出す構造上の特徴を持つ。③の場合主柱穴と支柱穴の距離、支柱穴間の距離はほぼ一定し、規則的な配置にあるが、ピットの深さは一定しない。かまどは支柱穴の中に位置し、かまどの煙出しには特別な施設を必要とする。支柱穴間の面積は遺構の3倍となり、遺構に対する支柱穴間の空間が広くなりすぎる点に問題を含む。

一方、第4号遺構と同様な例は成形形遺跡1号・2号住居址にみられる。前述の通り出土遺物から同時期と考えられるものであり、遺構の状態も類似する点が多い。2号住居址は貯蔵穴を有し、住居外にピットを掘り込んだ点は上和白第4号遺構の第33図P26に相当し、①の考え方を有力視できる資料となる。また、既東に於けるこの時期の住居址を参考とすれば、堅穴住居の「辺とピット間の距離はほぼ近い計測値を得、①の考え方より妥当とすることができるよう」。

中世にいたると、大陸との盛んな交流をもつたる資料がある。上和白台地及び古墳上の青磁盤は南宋諸島のものがもたらされた結果を反映しているが、大陸への門戸として栄えた博多湾の北辺に位置する和白にもかなりの量の青磁類を見ることができる。中世の一時期、大宰府官人層の豪華が目立ち、武津から今津へ貿易港を移す時期があったことが知られているから、香道から和白の入り江にも宋船の出人があったのかも知れない。土埴窯に剥離される例、古墳に廻転する例の他に平山では、経済からの出土例（第122図27）があり、同安窯青白磁とともに、景德鎮窯青白磁合子がある。いずれの場合も舶載された青磁類が貴重品として大切な取扱いを受けていたことをしめており、中日往還土陶との結びつきを考慮しなければならないであろう。和白周辺には、牟田、上府、太郎丸、庄等中世在郷と廻転の深い地名が多い。一方縁輪陶器は「延喜式」によれば長門国の貢納物とされるもので、長門で生産されたと考えられるものであろう。近世窯業の基礎的な発展段階を解明する上で重要なとなる。南宋以外に高麗茶碗もみられ、近世の占伊万里焼、古唐津焼までの系譜をた

どることができ、中世から近世にいたる歴史及び周辺地域との交流を考える上で興味深いものがある。これまで中世及びそれ以前の資料が調査された例は少なく不明な点が多いが、現在太宰府政府の調査が継続されており、古代～中世を解明する鍵として期待するところが大きい。和白におけるこの時代の資料も太宰府調査報告の刊行をまって考察する点が多いが、政治的な中心とは別に、周辺地域研究の上で一つの成果として資料を提供するものである。

以上各時代の発掘資料を通史的に復元したが、和白地域が福岡平野と奈良平野を分ける丘陵一帯に位置していること、海に近い地域的な特色を持っていることが注目され、福岡平野の北の周辺地域における一つの地域研究の上で、基礎的な資料を提供できたことを歴史的大成績とみなしえよう。これらの中には今後調査資料の増加を持たなければならない点があり、本報告は実質的立場に重点を置いて、今後の研究にそなえたい。

限られた日数と少ない調査体制のもとで、できるだけ多くの事実を把握することに努めたが、造成の規模は、はるかに雄大で、調査はなお不十分な点が多い。上和白第5、第6号遺構の東側には更に同様な遺構が広がる可能性があり、古墳群の中には高見1号墳のように封土が失われ盛土をもたないものがあり、造成工事の進展にともない、更に古墳が確認される可能性を探している。強行な調査工程から次第に調査員を失なう結果となり、これ以上の成果を期待するのは困難であったが、これらについては、造成工事に併行して新たな体制のもとで調査する機会を持つことはない。

(2) 遺跡の保存

下和白、上和白の調査は多くの事実と新しい知見をもたらした。

その中で上和白包含地から鉄生産の過程をしめす遺構（第1号、第2号遺構）が確認され、同時に住居址は製鉄遺構との関連性が指摘された。調査者はこのように鉄生産の過程をしめす遺構が保存良好な状態で発掘される例は極めて少ないと主張した。埋蔵文化財の記録保存と合わせて、重要な遺跡の保存は担当課の使命であるとともに、課題である。各方面からも遺跡の重要性が指摘されるに及んで、製鉄遺構と住居址遺構の保存が問題とされた。住居供給公社の造成計画によれば、丘陵の土を包含地及び水田面に盛土して宅地化する計画で、大神社境内はそのまま残され、神社の東側丘陵頂部には緑地公園が予定されていた。宮前3号墳は石室の天井石を一部欠くのみで、上和白古墳群の中では最も保存良好な古墳で、周囲には馬蹄状溝も残されており、保存の対象とした。

現状道路に埋まっていた宮前3号墳は道路を西側に設計変更することにより古墳保存は可能であるが、製鉄遺構保存のためには埋立後の地表面から4m下に回廊地に残さずなく、排水処理等技術的に困難とされた。一方緑地公園を包含地まで拡大するには膨大な経費の投入が見込まれ、その費用は受益者にはねかれる結果となる。現実的には製鉄遺構と住居址の保存は不可能とされたが、宮前3号墳は保存されることになった。

一方大神社内の宮前1号、2号墳は神社総代の熱意で保存された。結局古墳群の一つの単位をなす宮前1号～3号墳は全て保存されることになったわけである。1号墳は石室を保存し、2号墳は封土を施した古墳構築時の姿に復元し、3号墳は石室全体を保存する計画である。1号墳はすでに石室の補強工事を終った。

3号墳は文化課の手で環境整備される予定で、1号・2号墳とともに古墳公園化されることになったことは、調査者として感慨深いものがある。大神社総代を含め、地元民の調査への深い関心と保存に対する強い要望があったことを記しておく。

（島津・治臣・柳田）

編集後記

報告書の刊行にいたるまでには多くの手を煩わした。

現地調査にあたっては、連日20人を越える作業員の協力を得た。上和白の古墳地の全面発掘は一日40数人を動員する壯觀さだった。下和白は一日平均10人、4～6月迄延べ約500人、上和白は1月平均500人、6月～10月迄延べ2,500人を越えた。11月～3月までの資料整理期間には一日5人の整理用員の地道な働きがあった。合せて約3,000人を越える人々の協力による報告書の完成と云ってもよい。調査員の報告書の刊行にいたらせる連日遅夜の徹夜作業は、これらの人々の支えを大きいとしなければならない。

本報告には鉄洋の分析値の結果、上和白古墳群出土須恵器のヘラ記号、和白周辺の遺跡・遺物等当初の予定項目を収録できなかった部分がある。追ってその欠を補う機会を持ちたい。

現地では調査の進行と合せて数回にわたり説明会を開いた。下和白の説明会は山道に列をなす姿が印象的であった。飛山古墳への傾斜面を杖に支がる古老的若々しい情熱が調査員の感動を満たした。

上和白には中学校、高校の歴史クラブの生徒の参加があったことも忘れられない。将来を期待したいグループである。

万葉の歌人にかしふの江と詠まれ、志賀の浦に漁火をあおいだ和白の地に、調査によって古代的一面をよみがえらせることに成功したと云えるかも知れない。その記録をここにとどめることができるのは、関係者の大きな喜びである。



下和白飛山古墳現地説明会（8月）

（三島・柳田）

図 版
PLATE

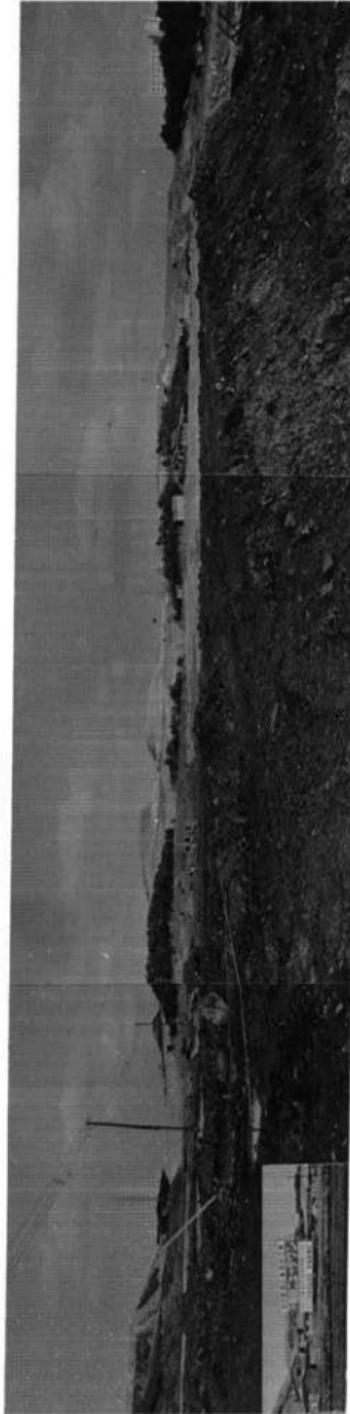


2012-7-61 0100
2012-5-60

下和白三区出土ポイント



(1) 下和白全景 (4月造成工事前) 西から見る

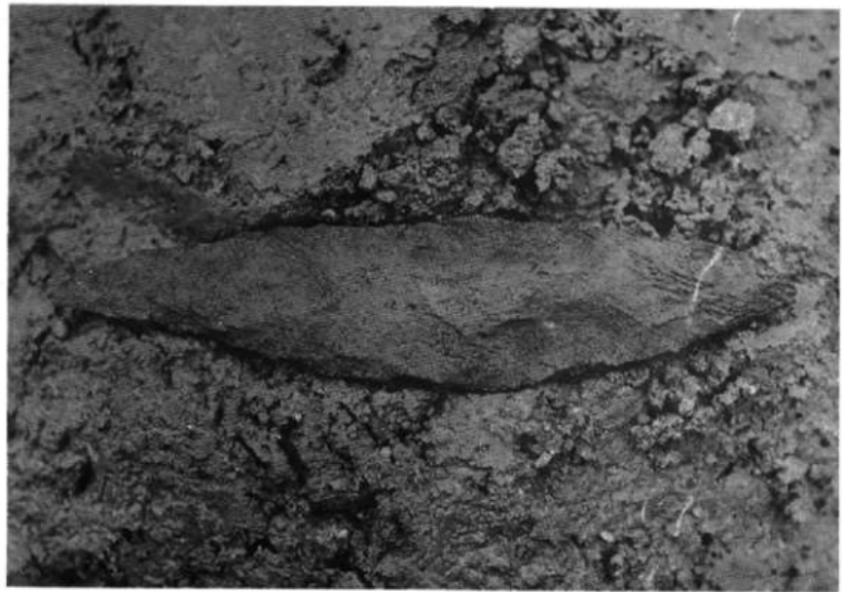


(2) 下和白全景 (10月造成工事中) 西から見る



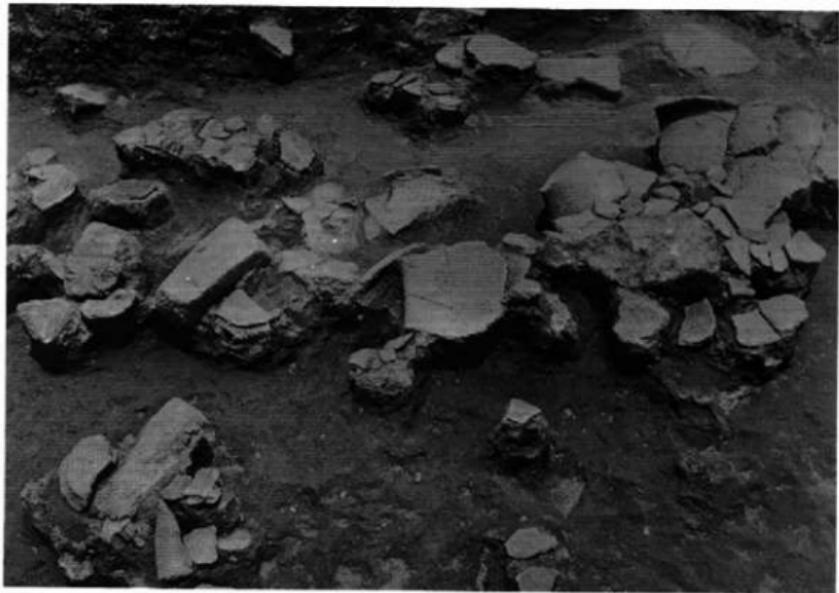
(1) 下和白田区全景（西から）

2012- 141



(2) 下和白田区 B 地点ポイント出土状態

2012- 143



(1) 下和白田区 a 地点弥生式土器出土状態

7613-81



(2) 下和白田区 c 地点近景 (西から)

7613-157



(1) 飛山古墳群遠景（東から）遠望は志賀の島

2-2-10

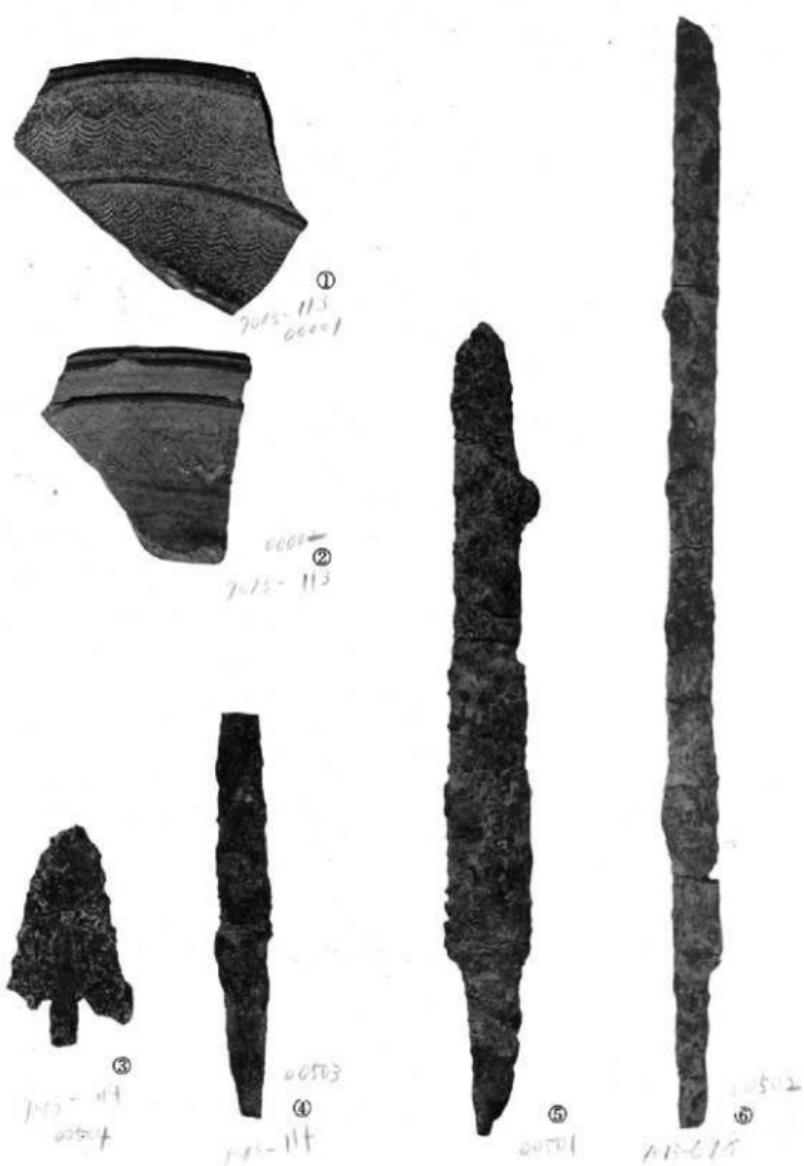


(2) 飛山 1号古墳近景（発掘前）（西から）

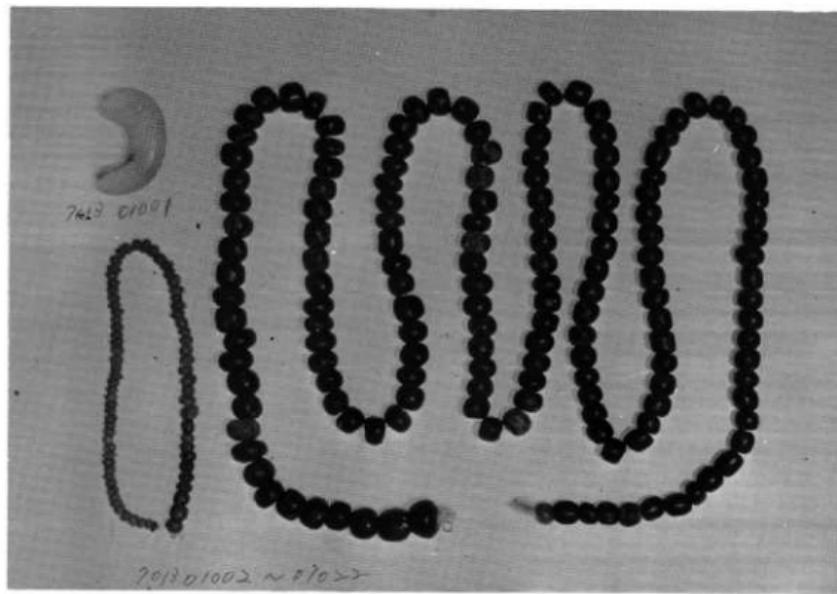
2-2-15



- ①②須恵器（1号墳出土）
③ 鉄 錆（2号墳 n ）
④ 刀 子（1号墳 n ）
⑤ 刺 （ n n ）
⑥ 直 刀（ n n ）

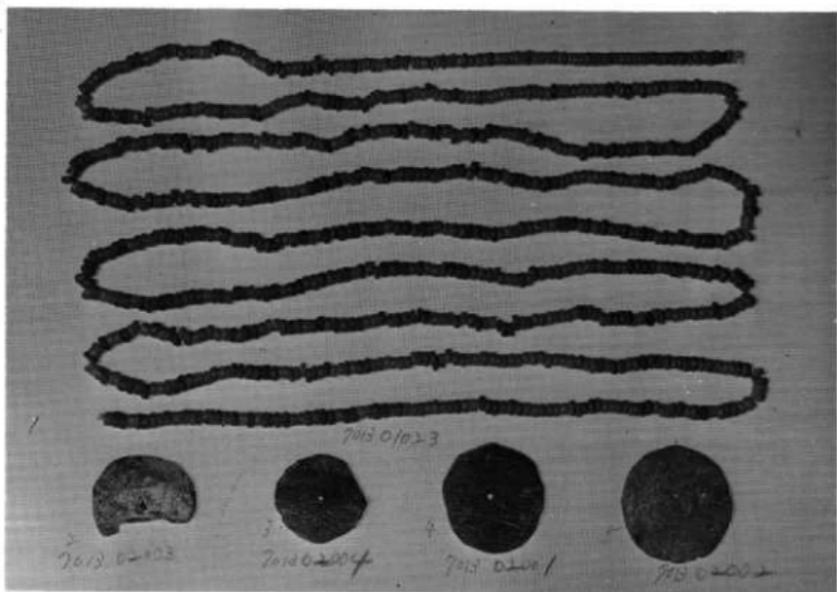


飛山 1 号墳・2 号墳出土遺物



(1) 飛山 1 号墳出土玉類

7013-116



(2) 飛山 1 号墳出土滑石製模造品

7013-115



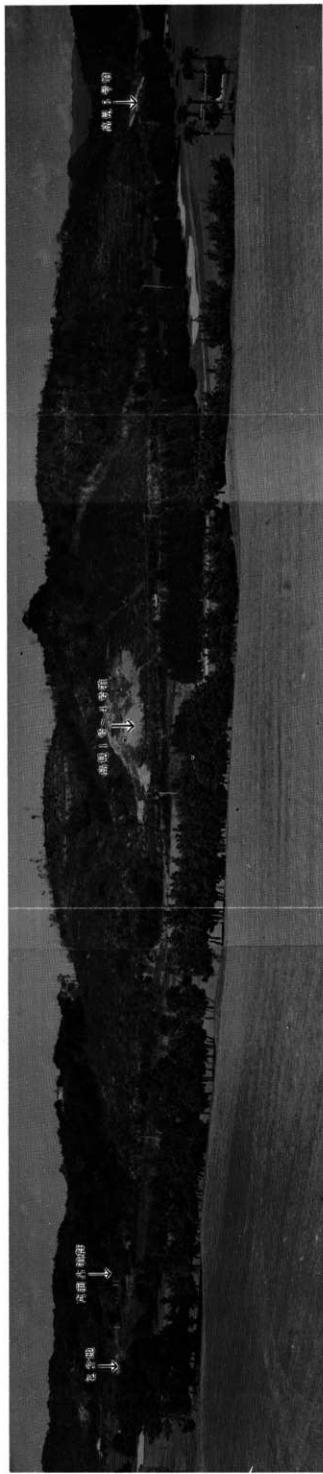
飛山 2 号墳石室（西から）

7013-66

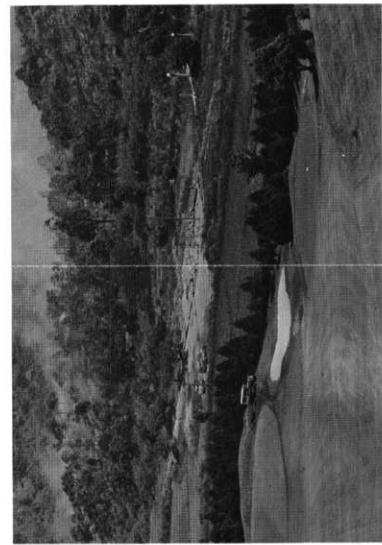


(2) 同上（南から）

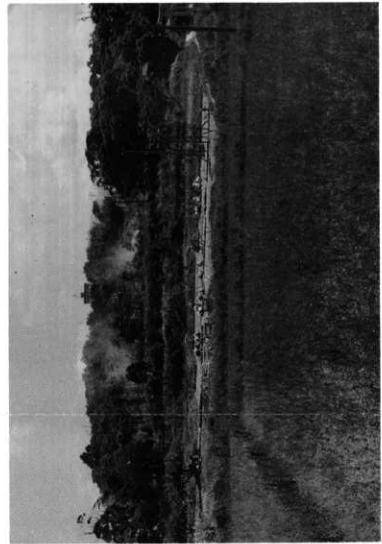
7013-68



(1) 上和白金懸 (南から)



(2) 黒川懸 (南から)



(3) 黒川懸 (西から)

7.16 - 26

道床斜面



(1) 包含地C地点発掘開始（7月・東から）

2014-10



(2) 包含地C地点発掘進行状態（8月・東から）

2014-82



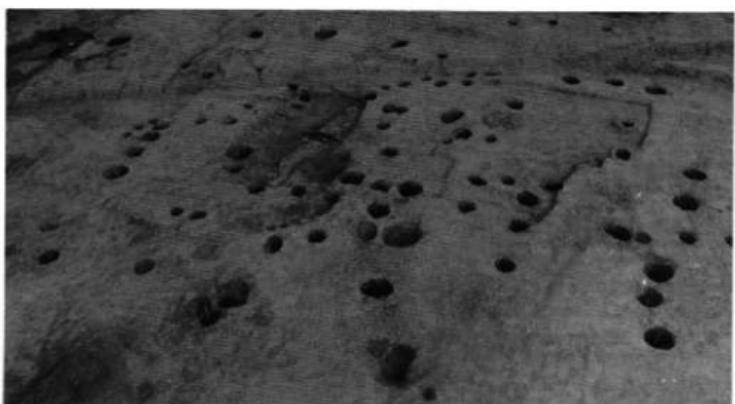
(1) 包含地C地点遺構全景（9月・北から）

2014-124

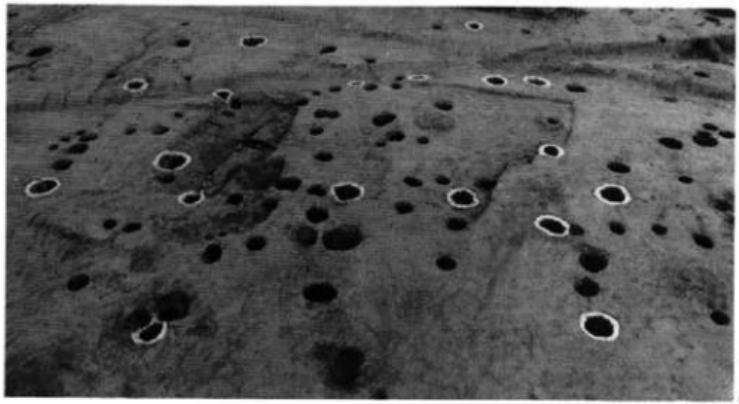


(2) 第1号遺構全景（北から）

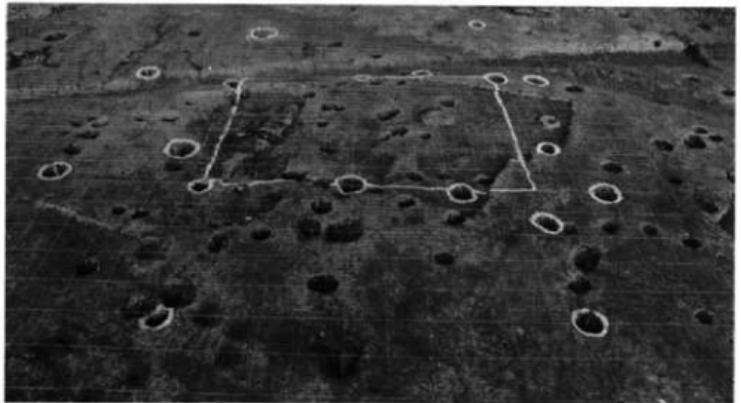
2014-196



(1)



(2)



(3)

第2号遺構（製鉄址）全景（西から）



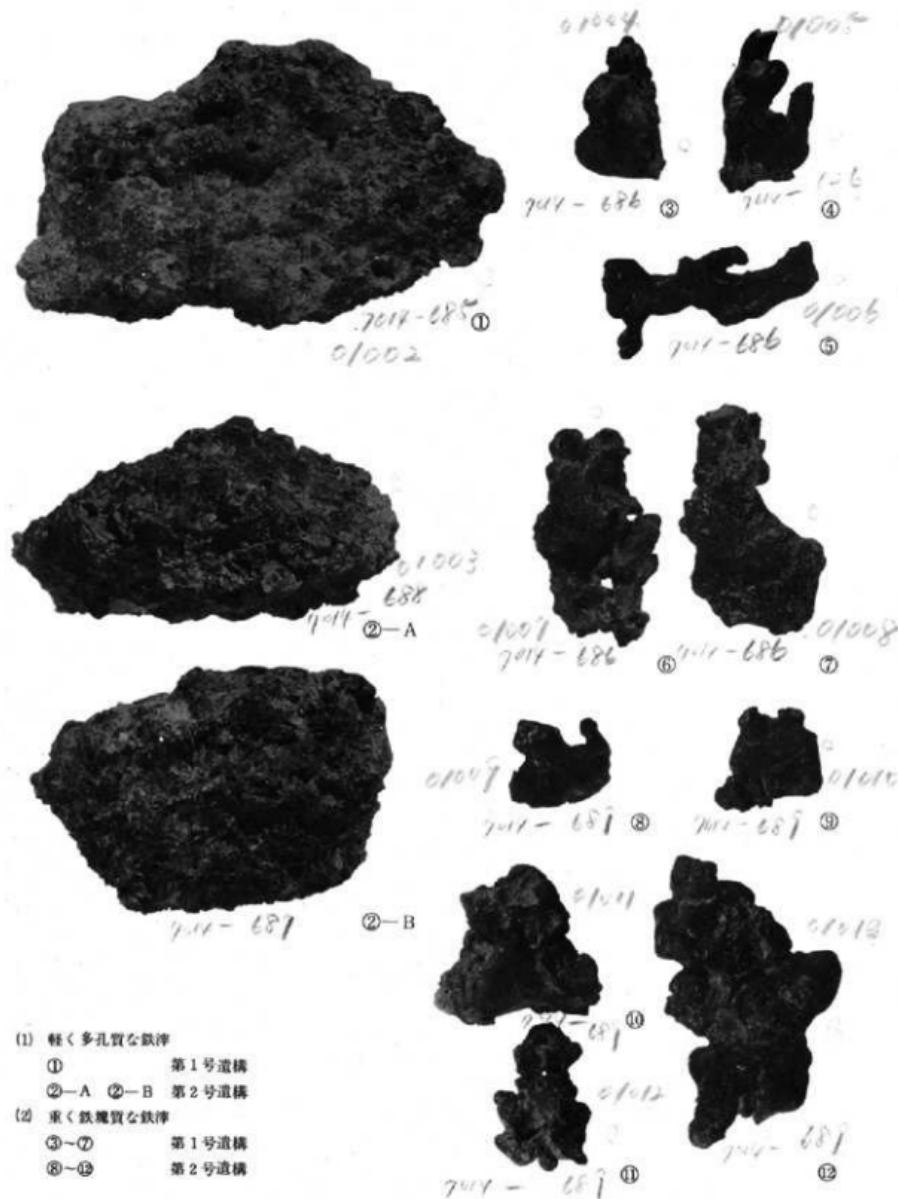
(1) 第2号遺構遺物出土状態

2-16-4

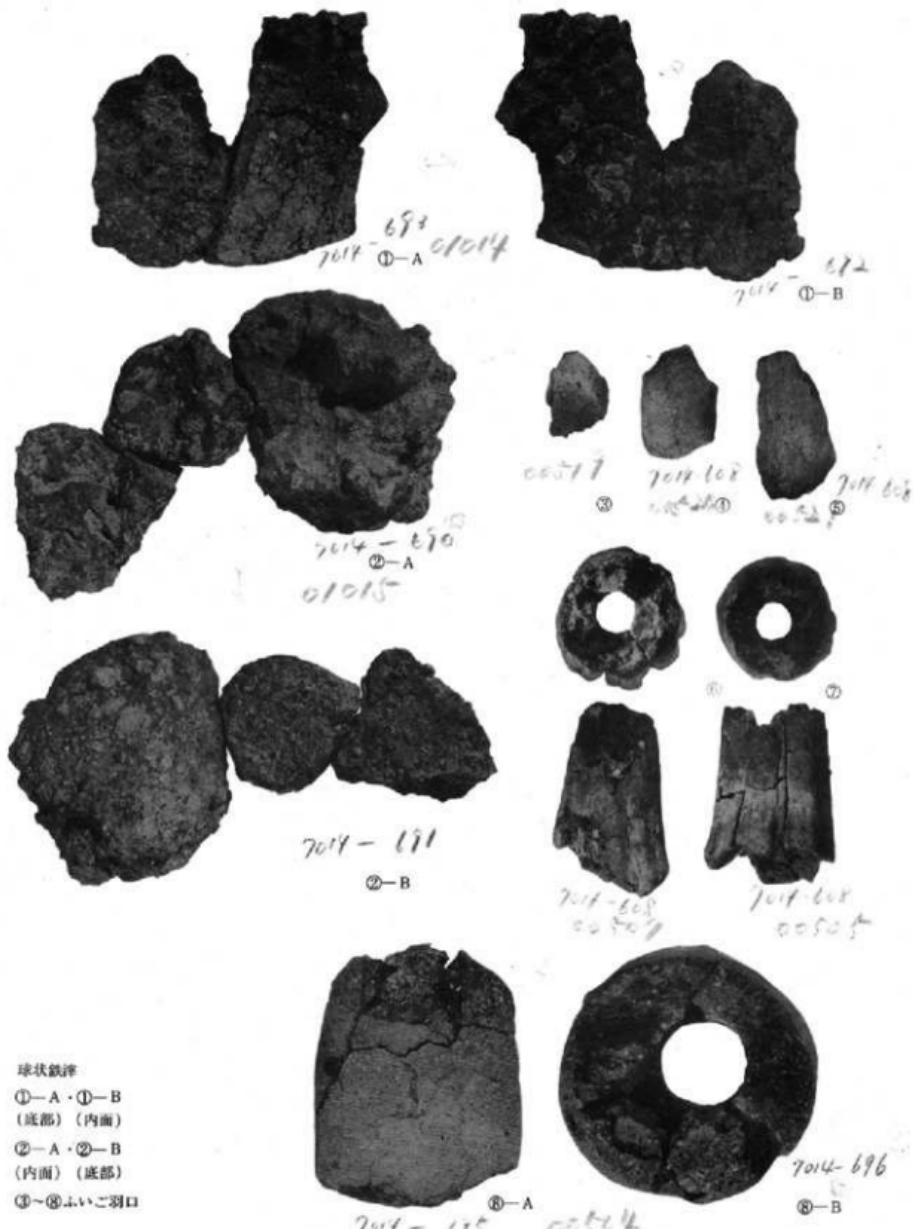


(2) 第3号遺構全景(南から)

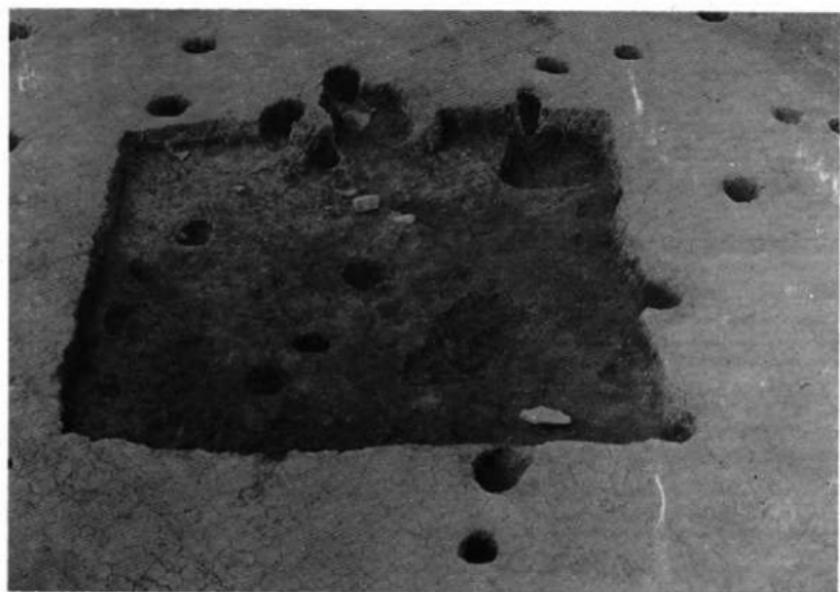
2-17-170



第1号・第2号遺構(製鐵址)出土鉄滓

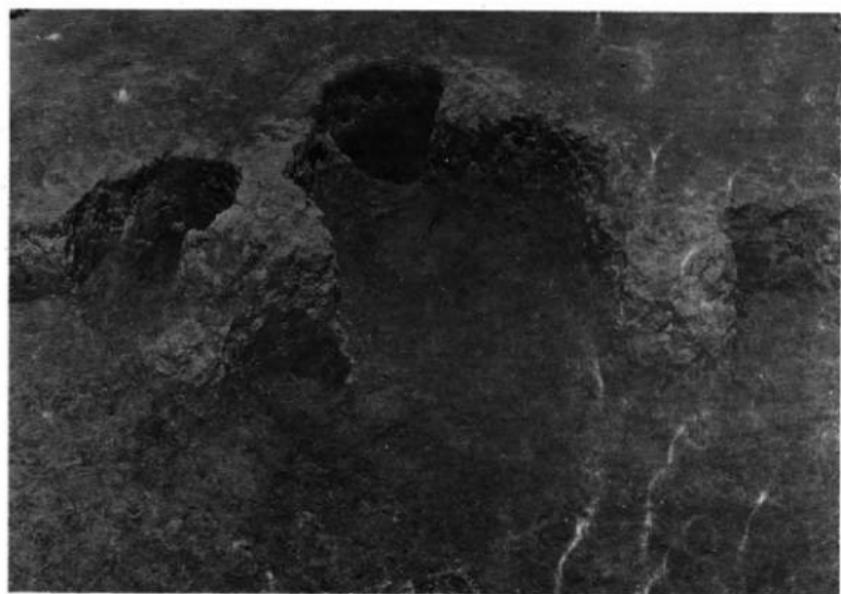


第2号造構（製鐵址）出土遺物



(1) 第4号遺構(住居址)全景(南から)

7614-114

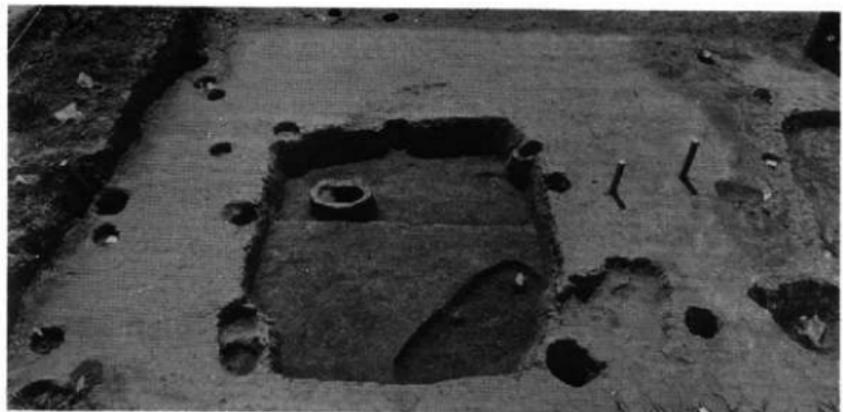


(2) 第4号遺構(住居址)かまど(南から)

7614- 71



(1) 第4号遺構(住居址)出土遺物②土師器③須恵器(①は第2号遺構出土須恵器)



(2) 第6号遺構全景(東から)

7617-142



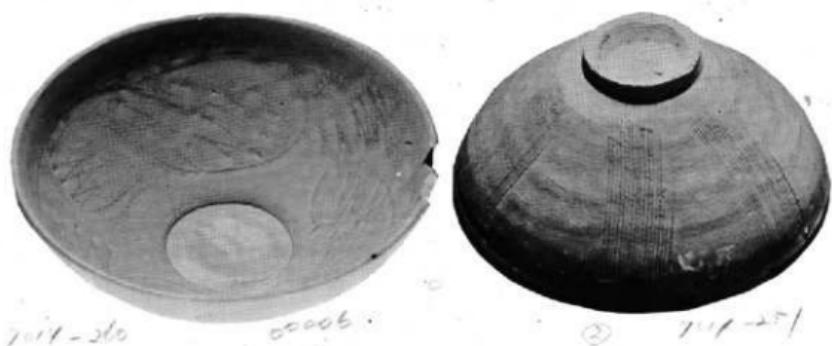
(1) 第7号遺構(土塙墓)全景(北から)

7014 - 52

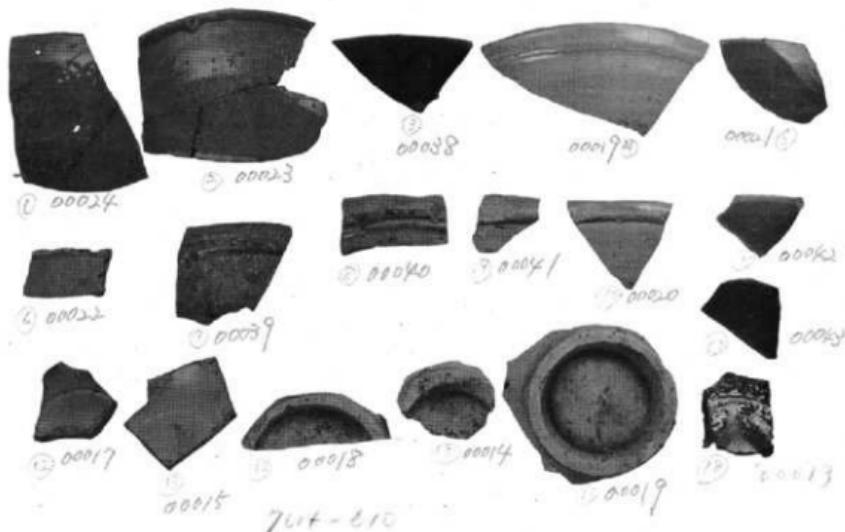


(2) 第7号遺構(土塙墓)遺物出土状態(西から)

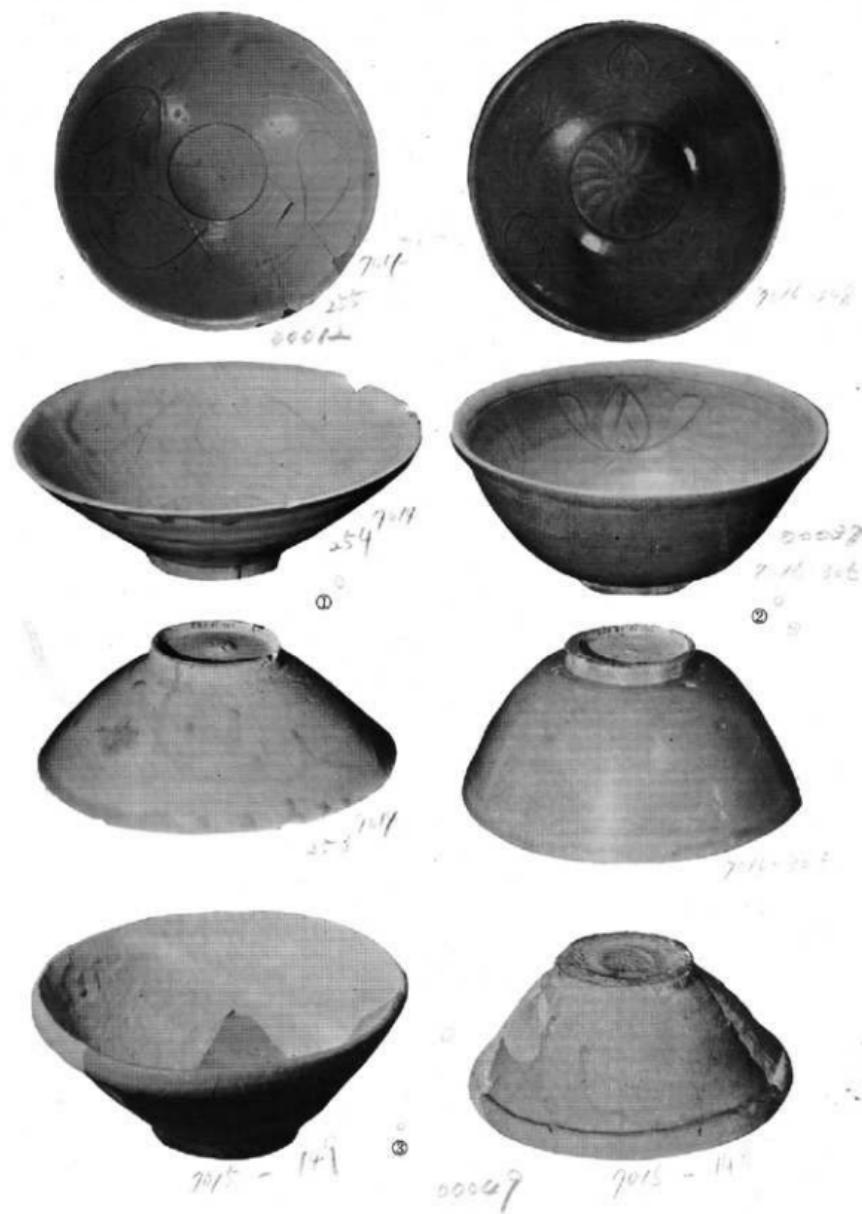
7014 - 53



(1) 第7号造構(土塁墓)出土珠光青磁碗



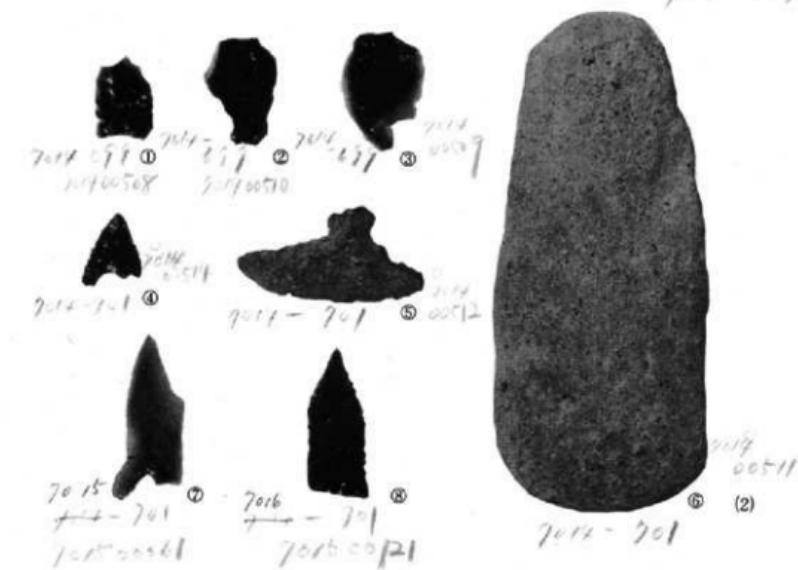
(2) 包含地出土青磁類(上段中央は高見2号填出土)



青磁碗 (第10号遺構出土 ②高見2号墳出土 ③宮前3号墳出土)



7018-174





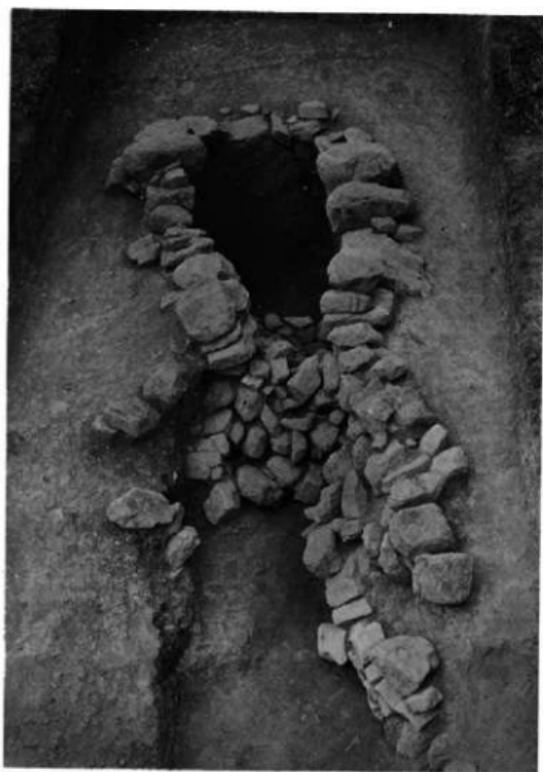
(1) 高見古墳群遠景 (0~4号墳) (南東から)

7616-126



(2) 高見1号墳近景 (西から)

7616-128



(1) 高見1号墳石室全景(南から)

7-16-67



(2) 高見1号墳須恵器出土状態(東袖石部)

7-16-84



(1) 高見 2号墳全景（南から）



(2) 高見 2号墳墓道遺物出土状態

70pl-228



(1) 高見 3 号墳石室残存状態(北から)

7016-253



(2) 高見 3 号墳封土断面(南から)

7016-15



(1) 高見 4号墳石室全景（北から）



(2) 高見 5号墳遠景(西から)

7086-122



(1) 高見 5号墳石室全景(東から)

7-18-281



(2) 高見 5号墳墓道遺物出土状態

7-18-281



(1) 猿の塚古墳遠景（西から）

7000-27



(2) 同近景（南西から）

7000-34



(1) 猪の塚古墳・盛土裾部遺物出土状態(東かづ)

7018-57



7018-58



7018-59



7018-60



7018-57

(2) 同出土状態 部分写真(①・③・④土師器高杯 ②壺)



(1) 猿の塚古墳 美道部(前室)遺物出土状態(東から)

7018-17



(2) 猿の塚古墳 東袖石下遺物出土状態(北から)

7018-17

(①金環 ②玉類 ③馬具 ④鉄錐)



猿の塚古墳 玄室内遺物出土状態



(1) 宮前 1 号墳全景(11月古墳保存工事完成後)南から

715-109

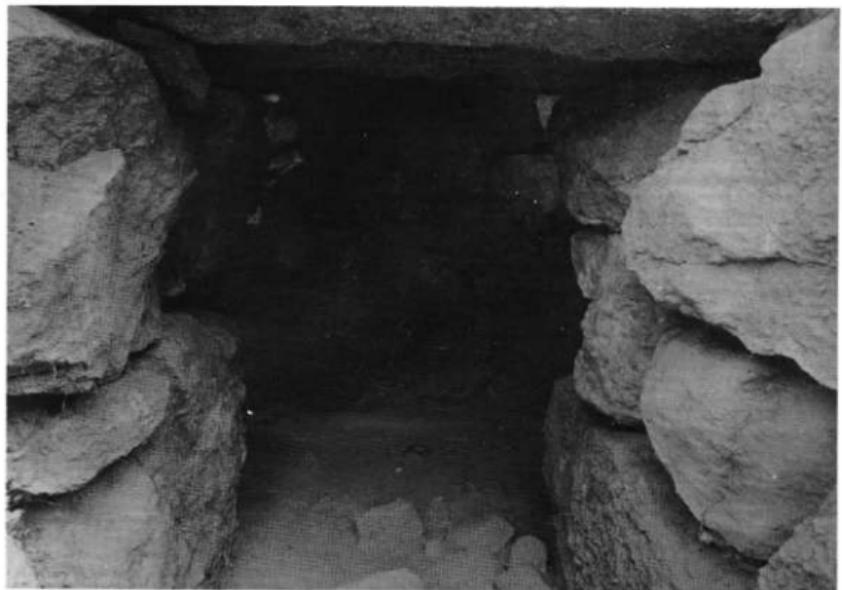


(2) 宮前 2 号墳葬道部遺物出土状態(東から)

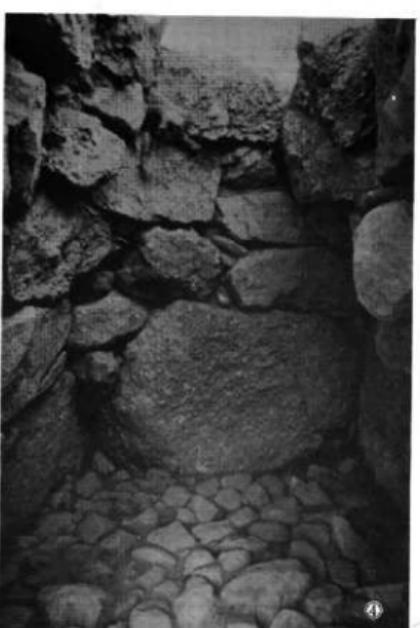
715-77



(1) 宮前3号墳全景(南から)



(2) 宮前3号墳石室近景(南から)



石室の構造 (1) 奥壁 (①高見2号墳②高見1号墳③高見5号墳④宮前1号墳⑤宮前3号墳)



閉塞石の石積み

(高見1号墳)

- ①-A (狭道部から)
- ①-B (玄室から)

側壁の石積み

- ②-A (高見1号墳西壁)
- ②-B (同 東壁)

- ③-A (高見2号墳西壁)
- ③-B (同 東壁)

- ④-A (高見4号墳西壁)
- ④-B (同 東壁)



石室の構造(2) 閉塞石と側壁

クルムアリヤ



天井石(①宮前3号墳) 封土(②高見2号墳) 矩床(③宮前1号墳 ④高見5号墳)
閉塞石(⑤高見5号墳 ⑥高見2号墳 ⑦宮前1号墳 ⑧-A・⑧-B高見4号墳)

⑨



石室の構造(4) 猿の塚古墳



① 7016-512
00001



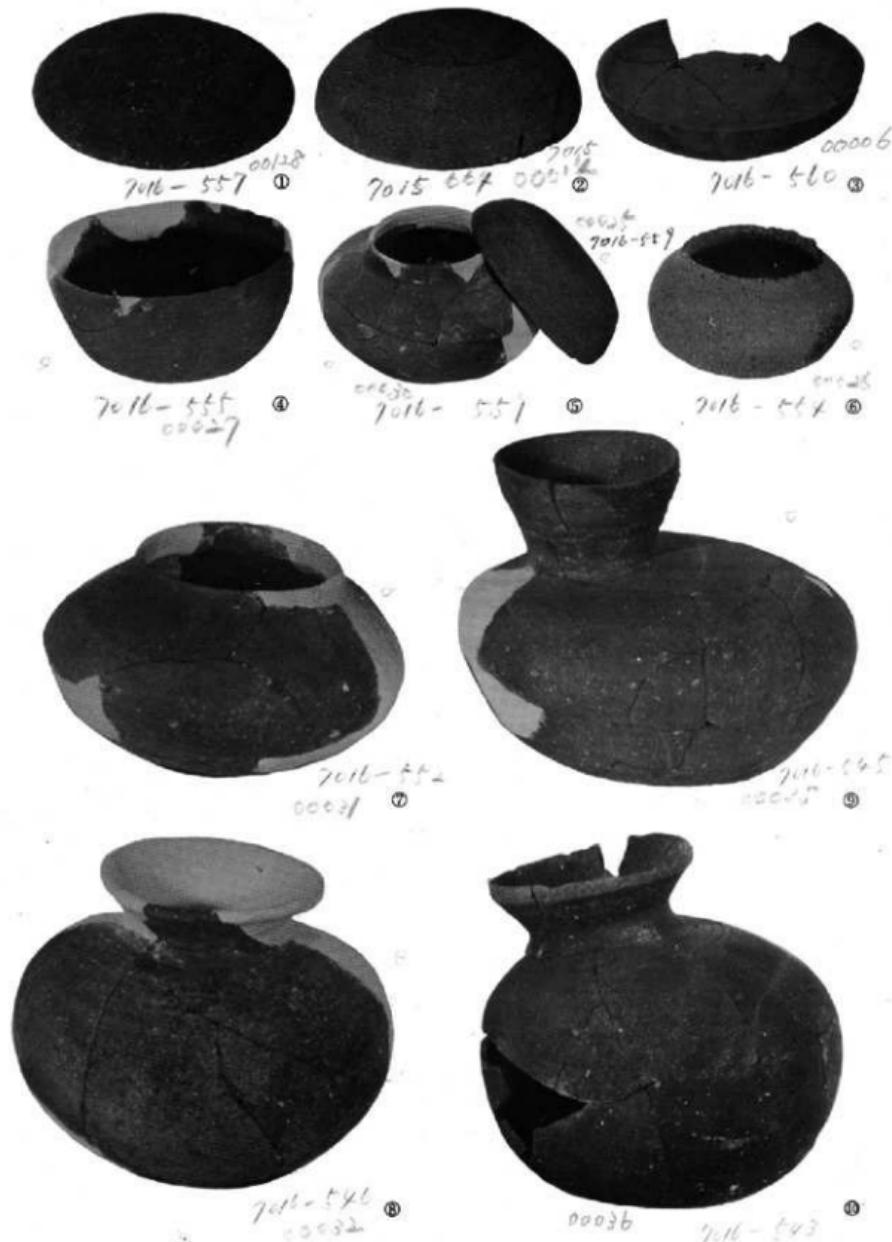
② 00002 7016-516



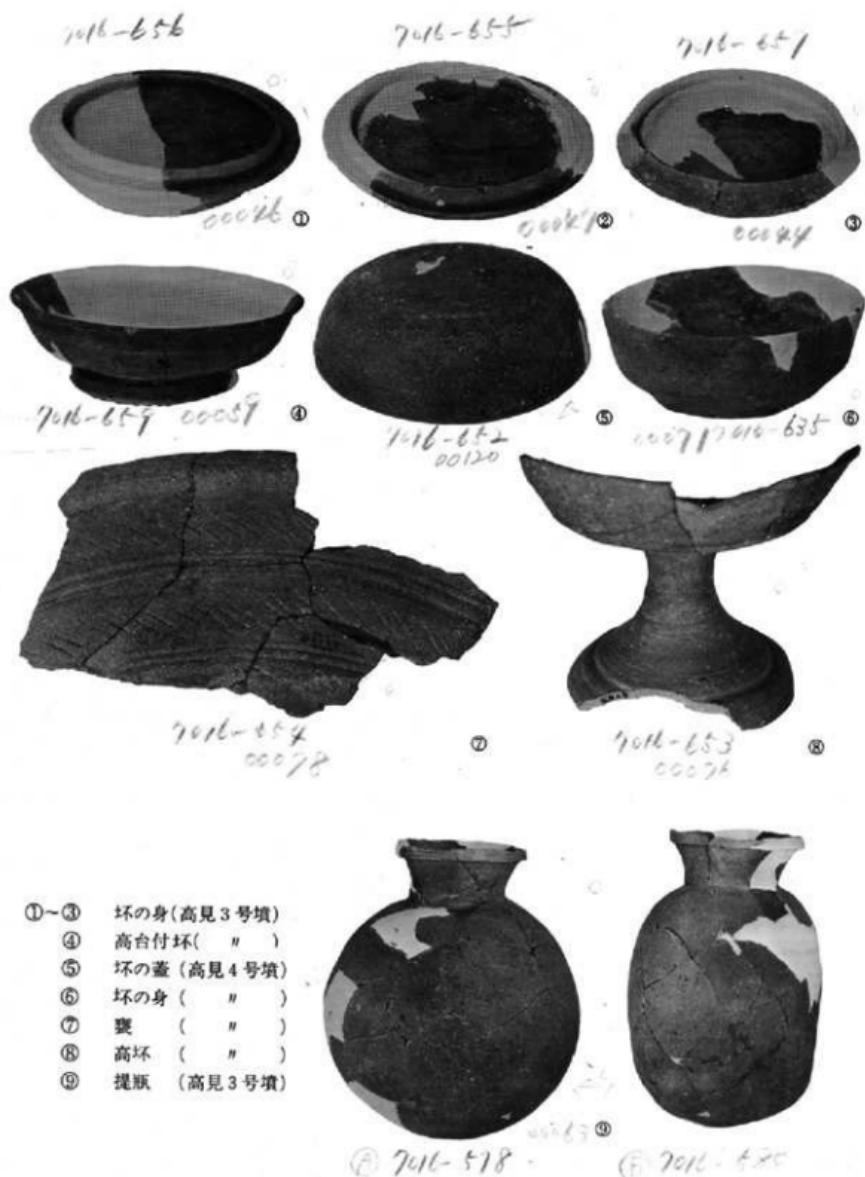
③ 00002 7016-517

① 平瓶 (1号墳出土) ② 脚台付子持壺 (2号墳出土) ③ 同拡大写真

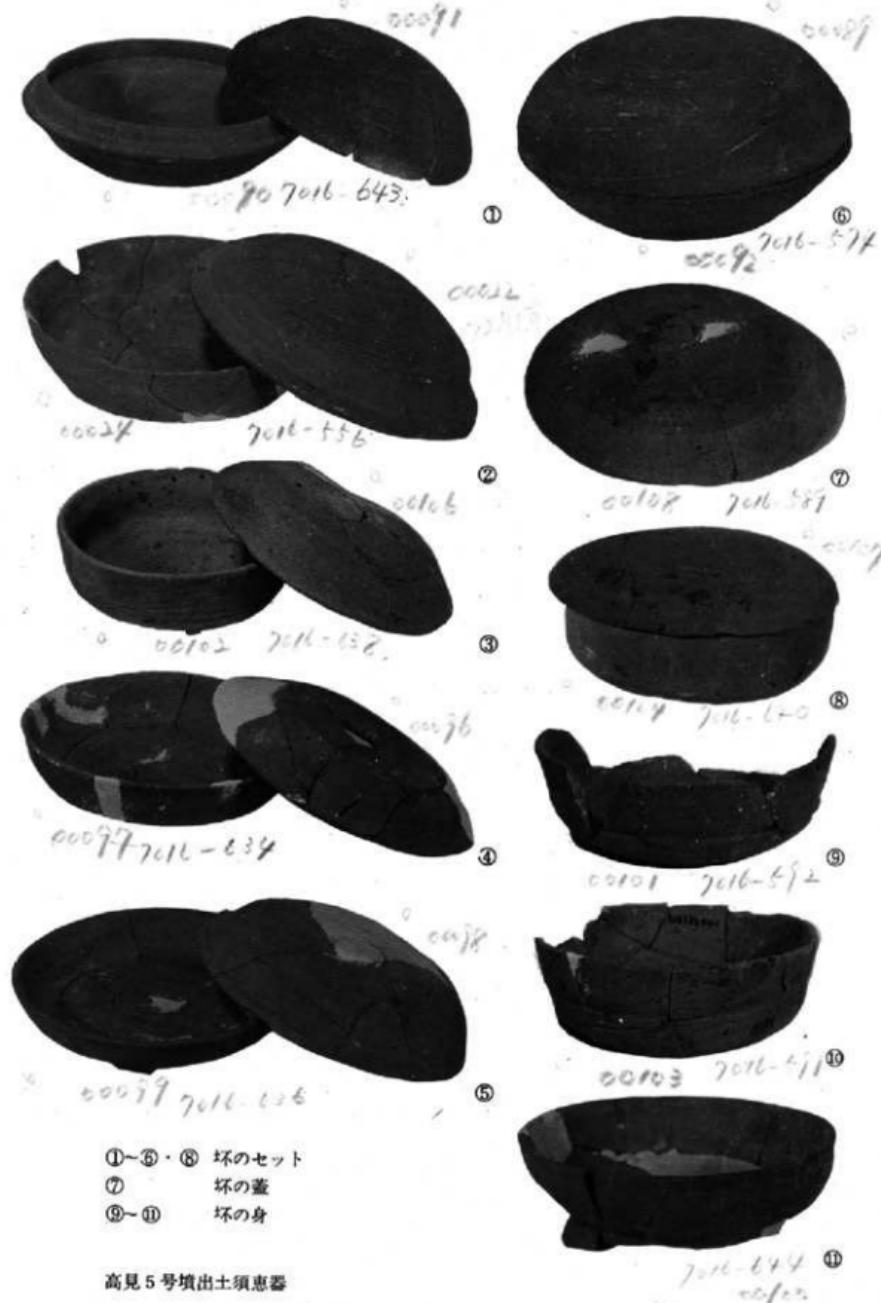
- ①～④壺（墓道出土）
⑤～⑦瓶頸壺（〃）
⑧ 細頸壺（〃）
⑨・⑩平瓶（〃）



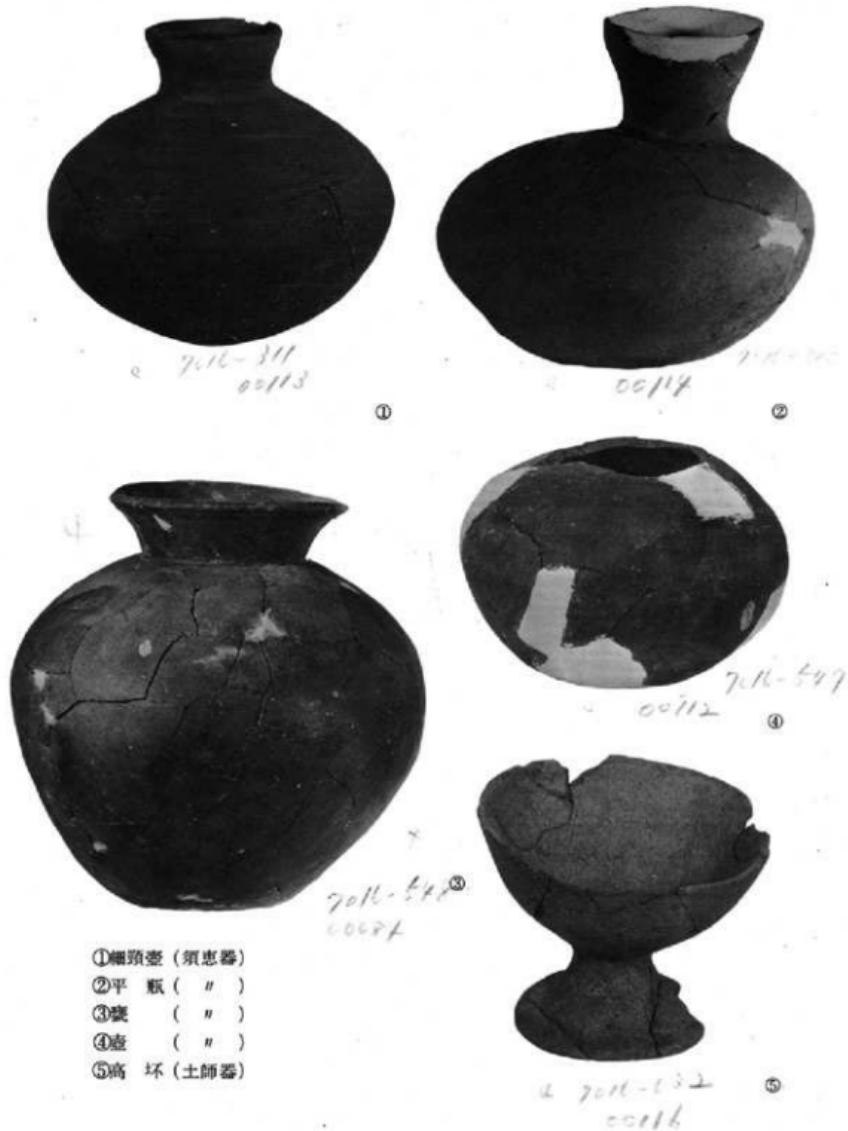
高見2号墳出土須恵器

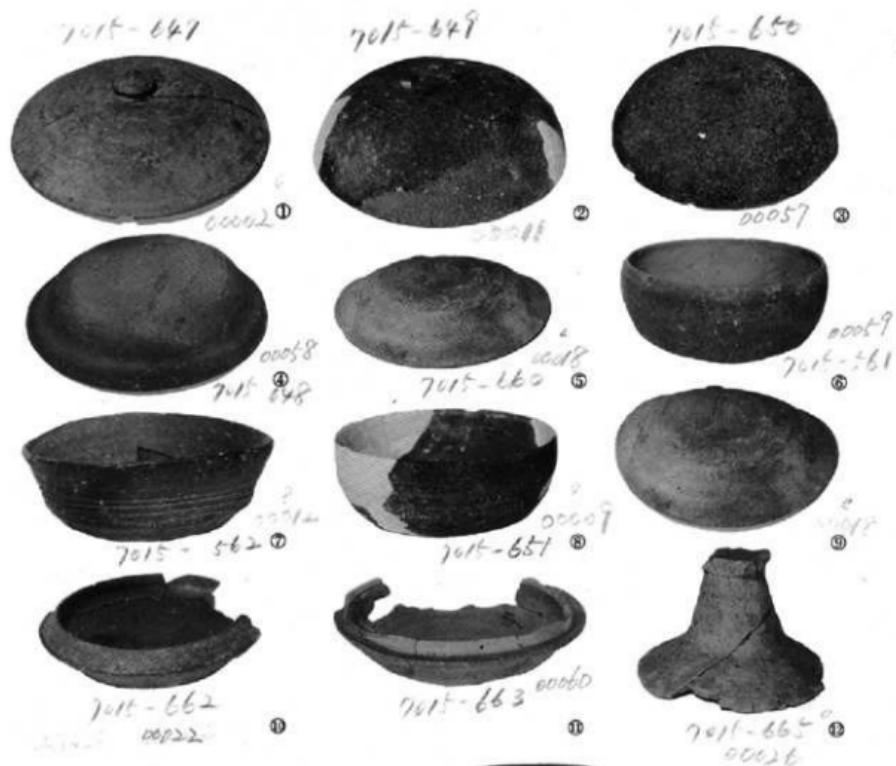


高見3号墳・4号墳出土須恵器



高見 5号墳出土須恵器

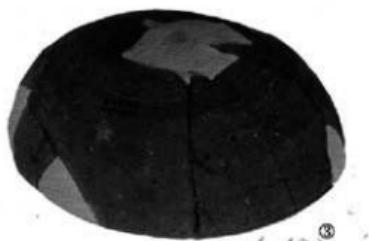
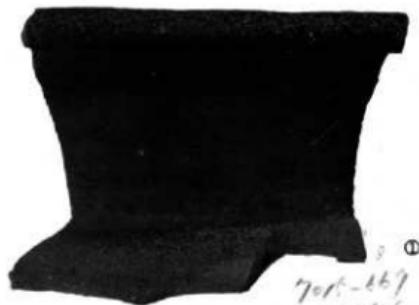




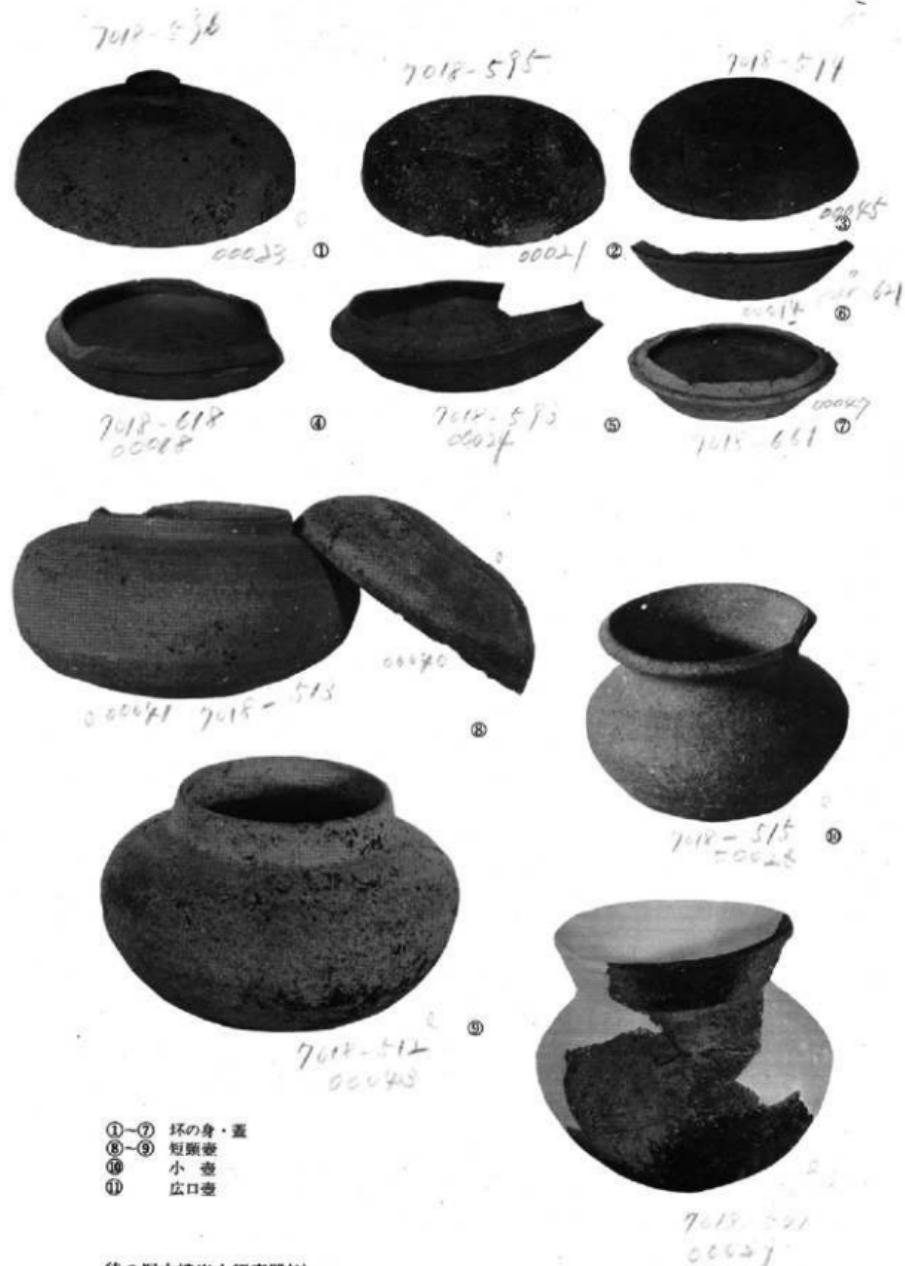
- ①～⑤ 壺の蓋（1号墳）
- ⑥～⑧ 壺の身（〃）
- ⑨ 壺の蓋（2号墳）
- ⑩～⑪ 壺の身（〃）
- ⑫ 土師器高壺
(1号墳)
- ⑬ 平瓶（〃）



宮前1号墳・2号墳出土土器



- ① 蓋
- ②~④ 壺の蓋
- ⑤~⑧ 壺の身
- ⑨ 高壺



①-⑦ 环の身・蓋

⑧-⑨ 短頸蓋

⑩ 小 蓋

⑪ 広口蓋



猿の塚古墳出土須恵器(2) (上: 直口壺, 下: 高坏)



猿の塚古墳出土須恵器(3)



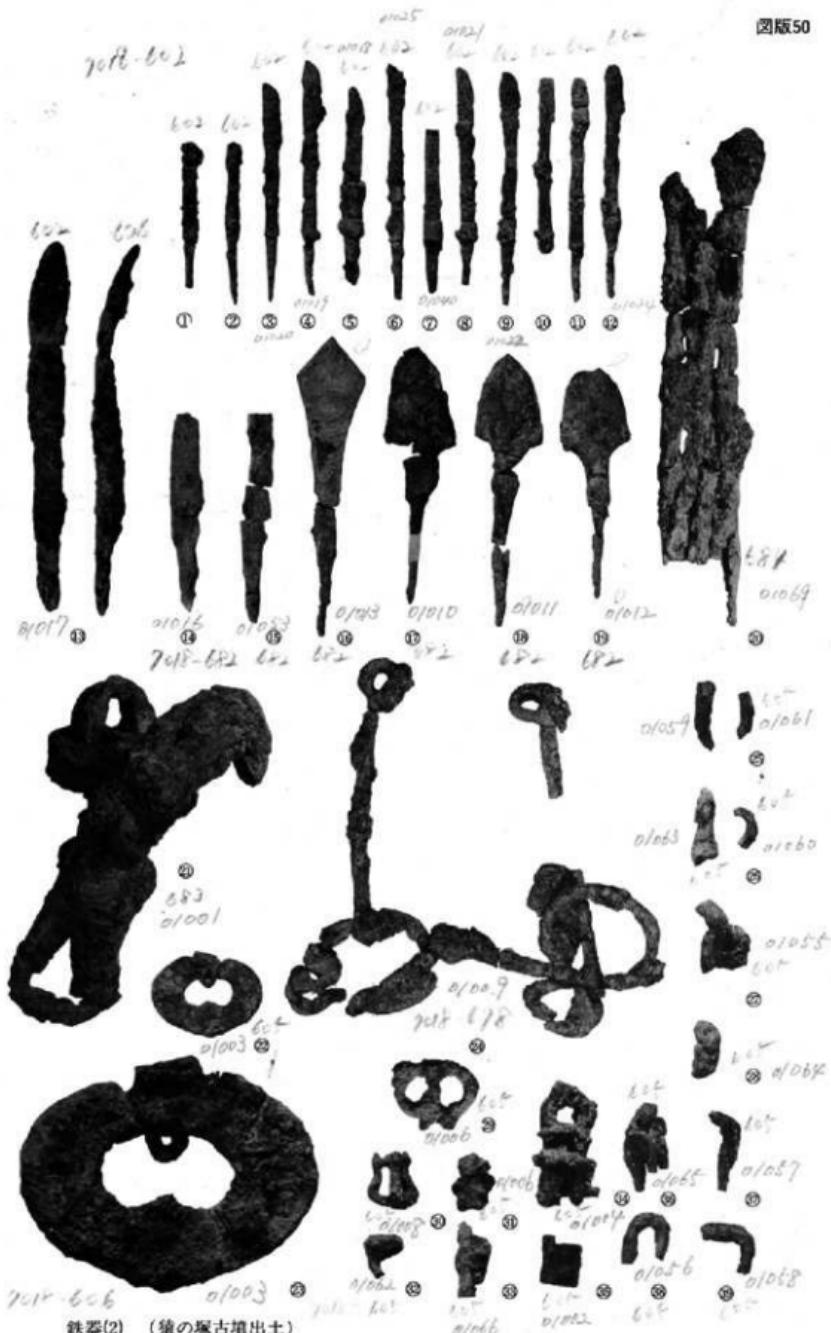
猿の塚古墳出土土師器

- ①～④ 馬具（高見1号墳出土）
⑤～⑧ 鉄鎌（　　〃　　）
⑨～⑪ 鉄鎌（高見2号墳出土）
⑫ 鉄斧（　　〃　　）
⑬～⑯ 馬具（　　〃　　）
⑭ 直刀（　　〃　　）
⑮ 鉄斧（宮前1号墳出土）
⑯ 留金具（　　〃　　）
⑰～⑲ 鉄鎌（　　〃　　）
⑳ 直刀（　　〃　　）



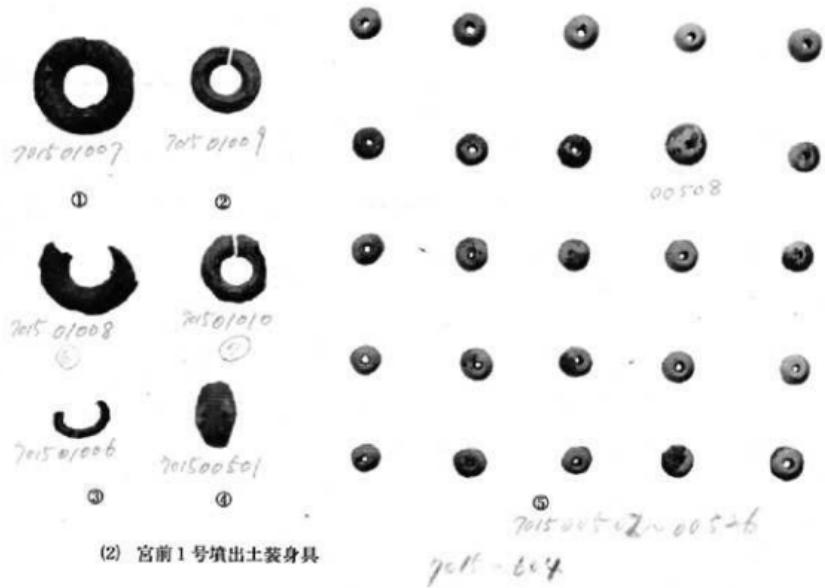
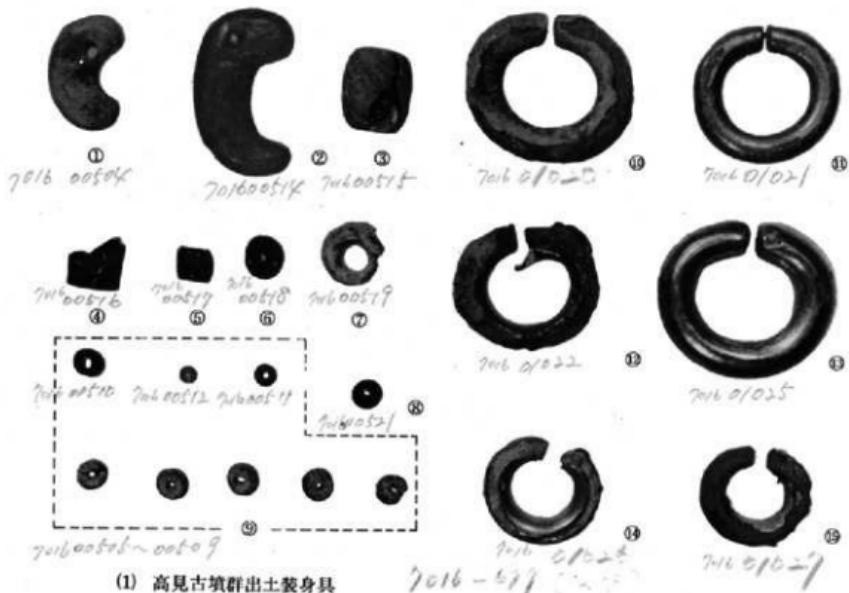
鉄器(1) (高見古墳群・宮前古墳群出土)
116

- ①~⑫, ⑬~⑯ 鉄鎌 (玄室内出土)
⑭ 銚 (")
⑯ 兵庫鎖 (前室内出土)
⑰ 杏葉 (玄室内 ")
⑱ 同上拡大写真
⑲ 帶 (玄室内出土)
⑳~㉑, ㉒~㉓ 馬具各種 (" ")
㉔ 鞍金具 (盛土裾部出土)

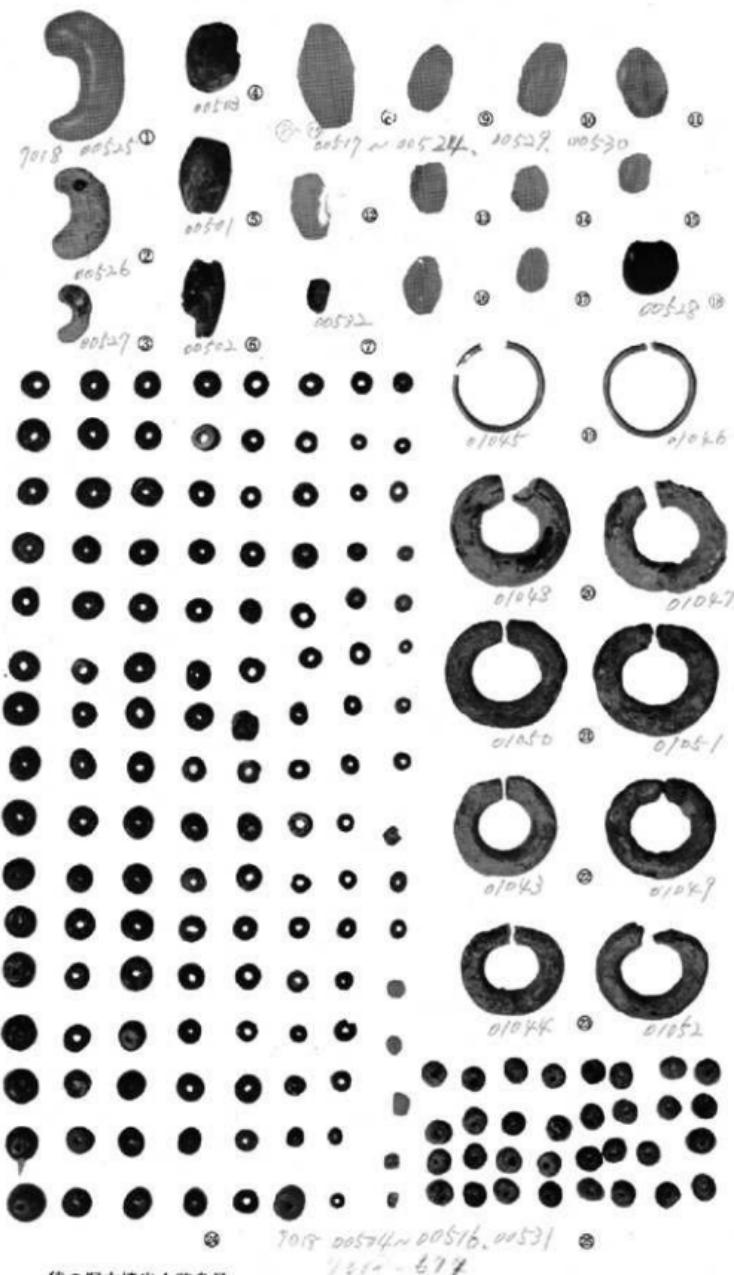


①	勾	玉	(高見 2 号墳出土)
②	勾	玉	(高見 5 号墳出土)
③	囊	玉 (")
④	管	玉 (")
⑤⑥	ガラス玉	()
⑦⑧	ガラス玉	(高見 4 号墳出土)	
⑨	ガラス玉	(高見 5 号墳出土)	
⑩	金	環	(高見 1 号墳出土)
⑪	金	環	(高見 3 号墳出土)
⑫	金	環	(高見 4 号墳出土)
⑬～⑯	金	環	(高見 5 号墳出土)

①～③ 金環
 ④ 切子玉
 ⑤ ガラス玉



- ①～③ 勾玉
④～⑦ 素玉
⑧～⑩ 切子玉
⑪ 算盤玉
⑫ 平玉
⑬～⑯ 金環
⑰ 銀環
⑱ ガラス玉
⑲ 練玉



猿の塚古墳出土装身具



(1) 斜跡全景（東から）(2)同横断面 (3)同縦断面

調査関係者

調査委託者

福岡市住宅供給公社 鈴原弥之助、長末 博、鶴原豊秋、村田惣市、佐伯秀雄、鷲田文夫、市丸 亨
中野秀臣、大石 範、三戸良一、長浜 雄

調査指導員

九州大学 文学部 鎌山 猛、西崎 敬、森 貞次郎、小田富士雄（考古学）
工学部 大田静六、土田光義、佐藤浩（建築学）山内豊勝、巻内勝彦（水工土木学）
板田武彦（冶金学）
理学部 稲子田定勝、中村真人、辻 和毅、北井常雄（岩石学）、菅藤次男、龜山徳彦（古生物学）、高島良正、松田英毅（放射化学）、細川隆英（生物学）
農学部 久村 武、岩田伸夫（青穀学）
医学部 永井昌文、佐野 一（解剖学）
佐賀大学 西田民雄、西田京子（地質学・生物学）
西日本工業大学 中村姓三（建築史）
精華女子大学 井上洋子（建築史）

調査協力者

穴沢義功、松村道博（駒沢大学考古学研究室）、佐田 茂、松本 勇、橋口達也、木村毅太郎、西健一郎、沢重臣（九州大学考古学研究室）、片上直樹、口高正志（九州産業大学考古学研究部）
鬼木和恵（南山大学考古学研究室）、山崎純男、二宮忠司、横山邦雄（別府大考古学研究室）
福岡高校考古学研究部 九州女学院高校歴史研究部、福岡市中学校社会科研究会（梅林中、尚取中、教育大付属中、箱崎中、和白中の各クラブ）、堀登美次、岸高志子

発掘資料整理員

木久守、桑田和義、井上説男、松浦重雄、川添百合枝、大山美智枝、桂木千子、近木せい子、土橋友子、鳥部杏子、並江久美子、西村桂子、藤村早智子、渡辺和子

地元協力者

砂川義男（下和白宿舎）、明覚寺（小金丸仁性、上和白宿舎）、和白公民館（白石三平、今林松美）
上和白1区町内会（会長・小林晴男）上和白唄人会（会長・花田雪子）、大神神社（地代・小林嘉造）
）、和白小学校（校長・波佐間ね、社会科担当元永慈英香）

調査主体

福岡市、福岡市教育委員会
阿部源藏、豊島延治、大蘇富貴、青木 崇、清水義彦、野上淳次、石橋 博、山口俊二、三宅安吉、
岩下拓二、黒田安雄、下条信行、折尾 学、田坂美代子、篠永照代

調査者

三島 格、板橋正彌、安達 新、国平健三、島津義昭、塙恒勝利、柳田純孝、高田一弘

福岡市

和白遺跡群発掘調査報告書

一 福岡市埋蔵文化財調査報告書18-

昭和46年3月31日発行

事業主 福岡市住宅供給公社

調査主 福岡市教育委員会

印刷 株式会社川島弘文社

